果樹園第一号　昭和三十一年一月二十日発行　布施市西堤町六〇七田中克己方　果樹園発行所　印刷所元市印刷株式会社　定価

果樹園

第一号

書簡から見た伊東静雄　小高根二郎
知られざる極地　浅野晃
小園歌　森亮
発刊の辞
ピエロ　小山正孝
雪の章　伊藤桂一
人生の道のまんなかで　たかはし・しげおみ
花　西垣脩
病床にて　福地邦樹
影　山根忠雄
修学院ほか　森房子
月に招かれた男　芳野清
郭先生のこと　田中克己
編輯後記（O・T・）

發刊の辞

われらは永い喪乱の時代を、生きぬいて来た。しかり、生きるだけは生きて来た。この間に斃れた友たちの詩魂が、南溟や北土から呼びかけもしたが、われらは詩とはなれた生き方をして来た。

われらの愛する国土が荒れたのだ、荒地に詩は生れるか。文学は育つか。われらは否とこたへ、それを実証するかの如く、多くの非詩、非文学が出版ジャーナリズムにのつて市場に氾濫した。われらは頑くなであり、愚かであつた、これらの荒地はみづからが拓くべきであつたのだ。

この間おのづからと、春の水のごとく融り通つて来たものがある。それは友情だ。期待もそこから湧いた。すでにわれらの園は耕やされ、培はれたのである。種子を蒔くのは誰か。われらは種子である。培ひびとではない。照りかける太陽でもない。それらの恵みのあるところ、われらは発芽し、花ひらき果実をつけるであらう。

われらは出来うるかぎり、うましい果実をつけたいと冀ふ。これは野望であるかもしれぬ。味はふのは他のひとだからである。しかし右を見、左を見て喜ばれようとする媚びはもたない。われらが先づ恃むは同志のおのづからなる共感と共鳴とである。この共感共鳴がしだいにひとびとにひろまるときをわれらは期待してゐる。

書簡から見た伊東静雄

小高根二郎

（一）

このところ思ふことがあつて伊東静雄の書簡を蒐集した。集つたのは三百六十余通で、伊東の四十六年の生涯に較べて決して多い数とは言へぬが、戦災と云ふ未曾有の障碍を思ひ合せると、少い数とも言へない。

その書簡は、彼が京都帝国大学文学部国文科の一年生であつた大正十五年の夏休から始つてゐる。

彼は休暇で京都から故郷諫早に向ふ途中、姫路に二日間立ち寄つてゐる。諫早出身の英文学者で、佐賀高等学校時代の恩師であつた酒井小太郎氏が、姫路高等学校にをられたからである。

「先生

おかあさま

ほんとうに色々お世話様に成りまして、嬉しふございました。京都の往き、かへりに、あんなにして載くことが、ほんとうに（原文ママ）殺風景な、ミゼラブルな私の学生生活に一脈の色彩を添へて呉れます。古い家庭に古い人々の間に育つて来、余裕のある考へ方

や、暮し方から遠ざかる様に余儀なくされてゐますいつもの私には、ほんとうにどれ位嬉しいことか、御想像以上のことゝ思ひます。父にも母にも弟にも妹にも、皆に話してきかせて喜び会つたりしました。」

この厚遇を深謝する書簡と一緒に、令嬢の安代さん百合子さんにも便りを出してゐる。酒井氏が高等学校の教授になるまでには、諫早高等女学校の先生をしてをり、住居も伊東の生家とつい眼と鼻の先にあつたから、もともと少年少女時代から顔馴染であつたわけだ

「姫路での二日間のことを考へ出しては微笑したり、私の様なものには似合はない様なゆつたりした気持になつたことを変な気持で思ひ出したりしてゐます。私は二日間あなた達に甘へすぎたと思つて、すまない様な気がします。」

と云ふ、二日間の楽しかつた姫路滯留の回想に、その書簡は始つてゐる。

筆はさらに姫路から郷里までの途中で、山口と佐賀で道草を食つてゐる事情を伝へてゐる。山口では大村中学での学友大塚格氏を高等学校にたづね、佐賀では半年前まで起居してゐた佐賀高等学校の不知火寮を訪れ学友伊藤政雄氏（現長崎市教育長）と懐旧の夢を二夜共にしてゐる。

「そこに二晩とまつて、三年間のことを思ひ出して、自分の只今の心のおとろへをなげきました。」

と、書いてあるが、この表現の裏には、弊衣破帽をダンディズムとした高校時代から脱出してゐる大人さ加減を、はにかみがちに誇つてゐるわけである。このはにかみがちな逆説は後年伊東の詩の素質となつたものだ。さらに、まだ高校に在学してゐる二人の学友が、学期末試験を控へ、或ひは試験中である由の記述もあるが、ひとり大学生となつて学期末試験なんぞの厄災を免れてゐる身分を誇つてゐるやうに受取れる。中学四年から高校に進み、落第もせずに大学に入つた伊東は、いはゆる最短コースを通つてゐるわけだから、恩師の美しい令嬢達に、彼の秀才ぶりを誇る価値があつたわけだ。いかにも青年らしい奢りである。

伊東は佐賀から諫早に皈る途中で、さらに田舎にある親戚にも立ち寄つてゐる。その親戚の家庭状況は、すでに姫路で令嬢達に語つて聞かせたらしく、「例のサンチマンタルな若いお嫁さんがゐる例の田舎の親せきに行きました。」と書き出してゐる。この親戚訪問のくだりが令嬢宛書簡中の白眉で、彼の人生観の片鱗と文学の萠芽が覗いてゐる。

「この前に行つた時より一そふ悲観して、私にいろんなことを打ちあけてきかせました。『ほんとうに子供が縁のかすがいですよ』と云つて膝の上の子供の頭をなでる時は気の毒に思ひました。……中略……又、暗い納戸で、あなたが次に来る時にはもう私は死んでゐますよ、など〻気味の悪いことまでも云ひました。私はその不幸な若いお嫁さんを気の毒におもつたり、その考へ方の低いのに憐を感じたりして、『物事の考へ方』についての私の意見を話したりしました。

百合子さん。安代さん。ほんとうに、そふ思ひますね。自分の境遇から、（それが楽しいものにせよ、苦しいものにせよ）新しい生命と力とを拾ひあげ得ない人は不幸な人ですね。あきらめよとは云はない、只その境遇に光をもたらす様に努力し得ない人は不幸です。」と述べ、「私が高等学校の二年生頃の情熱と真剣さがあつたなら、きつと人一人救ふんだと云つて、その人の味方をして、大変なことをしでかしたことだらふとも思います。」といかにも若者らしい正義感と情熱の片鱗を見せてゐる。

この親戚訪問による感慨を、伊東が詩を起用して結論としてゐるのは注目に価する。

「あんな田舎の百姓家にもあんな悲惨な事件が一つや二つはありますね。ほんとうに世の中にどんな不幸が、間誤ひが沢山ある

ことでせふ。ある詩人は

あゝ島が見える、
そこからひばりが立つてゐる
雲雀が立つのは畠（ハタケ）のある証拠だ
はたけのある所には人が住む
人の住む所には恋があるんだ

と云つてゐるのを読んだことがありますが私は又その後の所に、

そこには又必ず悲劇がある

とつけ加へたいと思ひます。」

この透徹した感慨は後日

（まつたく！いまは故郷に美しいものはない）
どうして（いまは）だらう！
美しい故郷は
それが彼らの実に空しい宿題であることを
無数な古来の詩の讃美が証明する

「帰郷者」昭和九年四月コギト

と、逆説的に美や楽しさと裏合せな人生の苦渋を衝く、伊東静雄の炯眼をうかがふことができる。因みに、この書簡の末尾は、「ゲーテの"Hermann"とDorothea"」と云ふ可憐な物語を面白く読んでゐます。」で結ばれてゐる。

（長崎県北高来郡諫早町より姫路市五軒邸九〇　酒井小太郎氏、安代、百合子さん宛封書）

知られざる極地

浅野　晃

氷の渕はふかく
明日の糧を背負つた一団が
ほとんど這ふやうにして渡つてゆく
そしてささやく――見ろ、あいつらは滑つてゐる
あんなに速く滑つていつてどうする気なんだ
滑走者らは帰つてくる
もう向ふまでいつて来たのだ
すれちがひざまながしめで――
あいつらはまだあんなところにゐる
いつたいどこまでくたばりにゆくつもりなんだ
日光の透明な河は
燃えながら、舞ひながら、ながれ
滑る者らはじつに身軽に
虹色の円環を描いては来る
這ふやうにして進む一団は
またも低い声でささやき合ふ――見ろ
やつらは何ひとつ見もしなければ聞かうともせぬ
ただああやつて肉体を甘やかしてゐる
あの穀潰しらは快い疲労がめあてなんだ
氷の渕ははてなく
はるかけぶる古生代山地のかげの青
生命の河はまぶしく音なく澄み
這ふ者と滑るものとが
なほも幾度となく出会ひながら――。

小園歌

――昭和二十五年――

森　亮

一

真昼の地べたに
草かげに
庭の燈籠（とうろ）の石屋根に
わたしが彼に近づくとき、
真空中の放電のやうに
蜥蜴（とかげ）は青い尾をふるはせて逃れる。
……
彼は自分で肩身を狭くしてゐる。

二

或る夏の夕方、末の男の子の守りをしてゐるうちにそれがわたしの背中で眠つてしまつたのをそのまゝ負ひつづけて、百日紅の花咲く下を歩いた。そのと

き歩きながらつくつた歌

わが背に眠る幼な子の
白き脳髄の夢やなに
さ庭のゆふべ負ひめぐる
そも汝が父の夢やなに

ピエロ

小山正孝

色どりのごみ
ぴよんぴよんはねる
しかし　いま　彼はお白粉を落す
しづかにシヤワーにかかつてゐる

たくましい腕を動かして
顔をぶるぶる洗ひ
彼はタオルにくるまつて
扇風機にかかる

雀色時がやつて来る
美しい大きい彼の黒目の中に
星が挨拶する

色どりのごみも
ねむりに入る
人間としての綱渡りを終つて

雪の章

伊藤桂一

私のなかで吹雪ながら
私を埋めてゆくものがある
なにもかも凍りつめたなかに
睫毛の濃いあのひとの眼だけが冴え

☆

失つたという事実のほかは
いまの私になにがあるだろう
あの日から吹雪くことの絶えない
みるかぎりの樹氷のはてにひとりいる

☆

私は真冬の樹木を愛する
雪の重みを耐え悩んでいる樹木を愛する
その樹木の蔭を背をくぐるめるようにして
吹雪の日も私から違のいてゆくひとを愛する

☆

まれに私の悲りは
吹雪のなかで私を結晶させようとする
私は雪まぶれの額を拭く
もう見失つている視野になおひとつの貌をも
とめながら

☆

私をとじこめる吹雪のなか
過去へ過去へと歩みながら
次第に吹雪の激しい圏内へ
自分を見失うために歩み入る

☆

あなたの掌のぬくみのほか
もう私の心を融かす何ものもこの世にはない
夜　耳に吹雪くものを聽き
そのくせなんと静かに私は哭いていることだろう

☆

どうすればいいのだろう？
世界はじき春になるというのに
ひとはみなひとの急ぎをもつているのに
あなたへ帰る途のこのような永劫の杜絶は。

人生の道のまんなかで

たかはし　しげおみ

今日　ひさしぶりに　空を見た
一片の雲もなく　太陽はキラキラと
僕の眼には　まぶしすぎた
一時すぎのことである
十月十三日　秋も半ばをすぎている
銀杏は黄金色に　すすきは銀色に
そして　あの木もこの木も　名前は知らない
が　紅葉し

みんな　この秋の太陽に　美しく輝いている
　ではないか
最後のかがやきに　最後のかがやきに？
そう　まもなく冬だ　そして草も木も
やがて　そのしかばねをさらすのだろう
そんな月なみの感傷の中に　ねそべつて　僕
　は
日だまりをたのしんでいた　この日だまりの
　こころよさよ
秋なのだ　秋なのだよ　柿が熟し　既に苅取
　られた稻がほされ
そして道端の雜草までが　小さな　実をむす
　んでいるというのに
僕には何にも出来ないで　冬を待とうとして
　いるのだ
まちがいなしに冬がくるというのにねえ
今年三十三　人生の道のまんなかで
僕は　秋の日に　やけながら　眼をとざした
はや　落葉の音がきこえた

花

西垣脩

草も生えぬ石みちを
白地の裙さばきゆるやかに
下りてくるのは
ことさらみごとだった
翔ぶというのは
無数の手に支えられて
泳いでいるにすぎぬと
さとった目に
燈台の沈むに似て
ドライアイスの
硬さのままに
めぐりあいの一切を
吹っきって
夢の外側を
しずかに渡ってゆくさま。

病床にて

福地邦樹

窓辺が暖かくなつてくると
母は小さな鉢に
庭を少しづつちぎつて来て並べた
それは間もなく赤い花が
咲き出る仕組になつてゐた
ねたつきりの私と
怠けものの牡猫とは
ますます親密になり
それから
気まぐれに飛んで来て
トタン廂をやけに歩き廻る鳩とも
ちつとは馴染になつたし
こんな風にして　だんだん私は
それら物言はぬ慎ましいものたちの
仲間入りをしてゆくらしかつた
そしてわれ知らず　ふと
ひとり笑む時を多く持つた

影

山根忠雄

僕は影が好きだ！
うしろから陽が射して
歩いて行く僕の前に
はつきり落ちる自分の影が——

あたらしい背広を着
髪を風になぶらせ
閑静な鋪道を行くとき
影と僕とは親しい会話を交はすよ
そして次第に僕の昇天……

修學院ほか

森　房子

連れざりし娘を惜しむ間も院の庭気韻清涼の
秋のしづもり
気溢るる宸筆のあと仰ぎ見て帝の齢を想ふ壽
月観の額（下の茶屋）
尼宮に下し給へる中の茶屋楽只軒とぞいふ名
かなしく
み修法に頼るほかなく護摩たきてくろずむ部
屋に病みし尼宮（中の茶屋）
帝王の想大きくて見晴かす連山なべて庭の景
のうち（上の茶屋）
雑事みな忘れてしばし来し旅にきのふけふ逢
ふは仏達のみ
舞扇帯にはさみてそそくさと出で来たまへる
高折夫人
宇治の宿鳳凰の間にまづ友が指して言ひたる
誰が袖屏風
ぬぎすてて黒き衣桁にふくらめる金絲重たき
誰が小袖そ
あなたよりいかに上なき佳き人のあらはれ出
でむ誰が袖屏風

月に招かれた男

芳野　清

一、墓

それは宿命と云つてよいのだらうか。自らの炎に焼き尽されてしまつた、それ故に限りなく悲しい、無名の詩人が此処、宇都宮市内宝蔵寺の高い杉木立に囲まれた一隅にひつそりと眠つてゐる。二つ並んでゐる石の大きいのは嘗つて彼をこよなく愛くしんだ父のものであり、その傍らに身を寄せて、何か語り合つてゐるかに見える小さな石は彼、大垣国司の墓である。落葉がその台石の上にも、赤茶色に萎れた菊の花の上にも夥だしく舞つて、蔭からはそれらの腐つてゆく濕つた匂ひが喪はれた過去の日のやうに、墓石の上に投げる初冬の日差しを一層、瞑想的なものにしてゐた。この墓石の方が現実なのか、先程から、思ひ出の中に急に生々と浮んで来た彼の方が現実なのか、私は戸惑つた。大戦を頂上として、大きく揺すぶられ、投出された、彼の、又私の青春。詩神に魅せられた彼の魂は師走の或る夜、月光を瞰め過ぎた人が憑かれると云ふ魂の病ひに罹り、つひに癒らなかつた。それからのヘルダーリンの晩年にも似た暗黒の日々、やがて襲ふ原因不明の悲惨な死。だが、私の思ひ出は私達のかがやかしい交友の始めに遡る。それは昭和十三年の一月だつた。大陸に重く戦雲が立こめ、幾分物惰い、圧迫感に似た暗さの中の、あの放逸な時代が私の心を熱つぽくしめつける。

墓石の上に置いた香煙が意味ありげにゆらめいて、昔の友の言葉をさゝやいた。

二、雪の日

「獣目」「獣目」「獣目よ」

私達は一斉に頭をその方に向けた。五度、六度、少女の声は続いて、少女は少年に本を取られまいと手を高く上げた。

学校の近くの青ペンキを塗つた粗末な喫茶店の中での出来事。

その時、片隅には大垣と細川と私がゐた。私達は何か先程から話し合つてゐたが、特別その少女が美くしいと思つてはゐなかつた。と云ふのは私達の話題が、その少女への関心のために少しも擾されたりしなかつた筈だから。大垣が急に私達の話題から離れて、ほのかな薄笑ひを浮べながら、少女の方に関心を向け始めたのは、十四、五の紺がすりの少年が入つて来て、何かどそ〳〵と少女と話し合つてからだつた。それから、少女は部屋の奥の暗い隅で少年を前にしてきれいな声で本を読み始めた。少年はそれを極めておとなしく

聞いてゐた。彼はその時、恐らくきゝ耳を立てゝ少女の澄んだ、幾分冷たい鉱物質を思はせる声をきゝ取らうとしてゐたのであらう。だが、その声は不思議とはつきりしなくて、何の話だかわからなかつた。少年が不意に手をさしのばして本を取らうとした。彼女が高い声を上げたのはその時だつた。

私達ははじめて少女を観察した。当時の流行と云ふか、前髪を支那風に垂らして長い髪を内側にカールした少女は、その白いつやゝかなうなじを思い切りそらして、本を取られまいと必死に抗つてゐた。桃色のガーデガンの下の驚く程、豊かな二つの隆起は、そのたびに左右にはげしく身悶えた。本を支へた左手の親指に巻かれた白い縫帯が痛い程の清純さで私の心に突き刺つた。

部屋の中にはだるまストーヴが赤く燃え、窓の外には雪が降つてゐたと記憶する。港町でも、波止場から対蹠的な場末のこの辺ではあの腹の底にしみるやうな哀感をゆする汽笛の音も届かない。

私達はそれからお互の学校の事、苦手の高数の試験の事、それに当面の最も重要な問題お互の下宿を出て一緒に山の手のアパートの一部屋でも借りて、文学の勉強に専心しようと云ふ計画について熱つぽい調子で話し出した。その間中も、彼は余り喋らず、夢想の世界に没入してゐる時に見せるあの不思議な薄笑ひを浮べて、口に泡を吹いて喋つてゐる細川に向つて時々、気のない返事をしてゐた。

外に出るともう暮れてゐた。弘明寺観音の屋根が白く杉木立の中に浮んでゐて、雪はまだかすかに降つてゐた。ガラスのやうな冷たさが熱した頬と手に気持ちよかつた。湘南線の弘明寺駅までの路々、大垣は少女の美しさを彼らしい調子で言葉少なく語つた。

彼は云つた。

「少女の中で最も少女らしいもの、少女が持つてゐる劇的なもの、いゝな」

油の浮いたやうな顔で、絶えず上唇を舐めては、猛烈な早口で語る細川は

「君はあの少女らしい美しさに満足出来るかね」と大人びた口調できゝ返した。

「僕は満足とか、不満だとか考へなかつたねそんな余地はなかつたよ、たゞ、いゝなあと美くしさに醉はされてゐたね、」

細川は云つた。

「僕も美しいと思ふ君の気持はわかるよ、しかし、満足は出来ないね、どんな時でも、リアルの眼を持つて見るから、——と云つてもこれがよいのか悪いのか自分でも分らないんだが」

大垣はそれまで默つてゐた私に一寸、謎めいた微笑を投げた。

「真野、君はどう思ふ？」

「僕かい？僕は雰囲気だと思ふんだが……、外には雪が降つてゐるし、ストーヴが赤く燃えてて、それに少女が本を読んでる。それを聞いてると、僕みたいな田舎者にはとても素晴らしい小説的なものに思へるんだな、『恐るべき子供達』のエリザベートを思ひ描いてさあの少年は少女の弟かもしれないね」

細川は口唇に軽蔑の表情を浮べて云つた。

「君のは又、いやに、メルヘン的なんだね、そんなんで、本当の詩なんか歌へるか。もつと、冷たい目と、苦悩がなくては！朔太郎の非情はロマンチシズムから出たものではないんだ。君のはロマンチシズムでもありやしない。センチメンタリズムだよ」

（未完）

郭先生のこと

田中克己

昭和十三年には私は今と同じく生れ故郷の大阪にゐて、中学校の教師をしてゐた。この年の日記を見ると一月一日には、記事がなくたゞ詩が一篇かきかけてある。「四川は古の蜀漢の国」ではじまり「一八九一年彼はこの地に生れたといふから今年は四十五才だらう」といふ一行も見える。彼は郭沫若と書いたの

を消して、書き直したのである。

この日記は私に色々なことを思ひ出させる必要以上に多く思ひ出させるので、却つて困るのだが、私にこの詩を書かせる気になつたのは、いふまでもなく、日支事変である。十二年十二月十七日南京陥落、杭州、済南陥落と引きつゞき、中国では蔣介石が漢口に大本営を設置した。私は日本人だから、日本を愛してはゐたが、この戦争だけは、一概には喜ぶ気になれなかつた。

この気持が、愛する妻子を置きすてて帰国した郭氏のことを歌ふ気持にさせたのだと思ふ。しかし詩が全部出来上つたのは、昭和十四年の正月に「いのち」といふ雑誌に書くことになつたからだつた。このころ、私は大阪の中学校をやめて上京、詩集西康省を出し妻子を抱へて職もなく、困り切りながら詩だけは作つてゐたのである。「いのち」の編集者にも小高根太郎君の紹介で会ひ、津田左右吉博士批判をかけといはれ、困つて詩にかへてもらつたものの、この右翼的な雑誌が受け入れてくれるかと危ぶみながら、武漢、広東の陥落後、重慶あたりにゐる筈の郭氏の安否を心もとなかる気持だけは書きくはへざるを得なかつた。

この詩は幸ひ編集会議をパスしたと見えて二月号にのり「大陸遠望」といふ私の第二詩集にのせ、またこの間、出した「楊貴妃とクレオパトラ」の新版にも再録した。郭さんの中共での健在を喜ぶとともに、栄枯位置をさかしまにした日中両国のすがたを思ひうかべさせる資料にと考へたのである。

ふと思ひついて、またこの詩を郭さんに読んでもらふやうにと荒木利夫君を介して中共から来た貿易代表団にたのんで、もつて帰つてもらつたが、六月、広東から郭先生に転交したとの便りが参つた。義理堅いものである。

しかし郭さんは読んでくれたらうか。よんでも何か感じてくれただらうか。まるで恋文を出した女学生のやうに、私ははかない期待で来日した郭さんと会ふ機会を待つた。京大の羽田教授に頼んでおいたら、十二月十日に人文科学研究所で会があり、郭先生が見えるとのことで、当日は休講にしてゆく。京阪三条からタクシーをとばして研究所にゆくと、時間が早すぎる位だつた。会は九時からの筈が九時半にのびたのだ。始まつても郭さんは見当らない。私は中国史の時代区分の討論をきき、考古発掘の報告を、不慣れな司会にいらいらしながら聞いてゐる中、十一時になつて郭先生来了!! 開口一番「私は歴史学者ではありません」とこの会に出ることの遅れたことを躊躇からと思はせるやうな巧みないひ方をして一笑された。「北伐」で想像してゐたやうな痩せた文人ではなく、肥りじしの元気なすがたである。その笑顔には男をも惚れぼれさせる魅力がある。さてあとに控えた会合への出席のためやむなく退席するとわびて、日本語で「ワルイデスネ」といつて、あかるく笑つたあと、郭さんは去らうとした。そこへつかつかと歩み寄つた紳士は東洋考古学界の泰斗梅原末治博士。名乗ると郭さんは握手し、ついでどちらからともなく抱擁しあつた私はそれを涙ぐんで見てゐた。

郭さんは私の詩をよんでくれなかつたな、と気がついたのは、そのあと郭さんの姿が見えなくなつてからのことだつた。

編輯後記

このところ旧情を暖める好機に多く恵まれた。十一月には宮崎に中村地平氏を訪れ、諫早では上村肇の案内で伊東静雄の墓に参つた中学同窓の森亮は学会の帰りに立ち寄つてくれた。十二月には森房子が夫君と来宇した。夫君久礼田氏は大学での恩師に当る。まさにこの旧情から我々の果樹園は発足する。(O)

「四季」「コギト」ともに廃刊を命じられたあと十年たつた。「コギト」はこの命令のあとも内緒で八頁のパンフレット型で四号出した。それが忘れられないので三、四号この形で出す。せいぜい愛してよんでやつていただきたい。投稿は歓迎する。読者であると否とを問はない。同人に参加したいといふ方には別に規定がある。問合せられたい。(T)

果樹園第二号　昭和三十一年二月二十五日発行　布施市西堤町六〇七田中克己方　果樹園発行所　印刷所元市印刷株式会社　定価十円　送料十円

果樹園

第二号

書簡から見た伊東静雄　小高根二郎
雲に寄す　上村肇
奔流の末に　浅野晃
ねそべり的詩論　小島信一
白いスェーター　山根忠雄
わたしひとりに……　斎田昭吉
月に招かれた男　芳野清
中国古詩私抄　森亮
小山正孝詩集「逃げ水」　田中克己
夜中、ふと……　山田新之輔
ボンペイ　小山正孝
招かれる季節　福地邦樹
雪の歌　岩崎昭弥

編輯後記　(O・T・)

書簡から見た伊東静雄(二)

小高根二郎

伊東は大学一年の夏休に帰省する途路、姫路の酒井家を訪れてゐたが、学期始めで上洛する途中にも、再び同家に立ち寄つてゐる。九月八日附の安代、百合子さん宛書簡に、その日の述懐がある。

「姫路は私の生活のオアシスの様です。皆様はきつと、私のこんな言葉にふき出されるかもしれませんけれど、私の様な過去、私の様な周囲を持つてゐますものにはそれが、はつきりそふ感ぜられます。」

と述べてゐる。

こゝに言ふ、「私の様な過去」「私の様な周囲」と云ふ言葉は、それ以上の解説がないので明瞭ではないが、多分に投機性があり浮沈の激しい糸商と云ふ生家のなりはひに比べて、高等学校教授と云ふ比較的安泰な安代、百合子さんの家庭に対する憧憬と羨望とが感ぜられる。もともと酒井家は諫早城下の医家であり、文学士の小太郎氏を養子に迎へたものであるが、子供心にも医家酒井家の安泰さが伊東に印象されてゐたに相違ない。

伊東と諫早小学校から大村中学四年まで同窓だつた人に、早大文学部教授の陣之内宣男氏がある。家は這松下と上馬場の二丁ほどの近距離で、小学時代は互ひに家を往き来したほどの仲良しだつたさうである。が、中学二三年の頃互ひに仲違ひをしたさうである。原因は伊東が突然……

「辯護士になつて金もうけをするんだ。」と言ひ出したからとのことである。伊東は家族と一緒に雲仙の麓の小浜に湯治に行つたがそこで中央大学の法科学生に出世主義を吹きこまれたらしい(「河」第二巻第三號所載陣之内宣男「友情ならぬ友情」)と言つてゐるが、私は逆に、舌先三寸で金もうけをする辯護士と云ふ稼業の存在を、十五、六の少年の身空で知らされた伊東は、すでに糸商が性格とする浮沈を現実に見、家運の没落を予感してゐたからではないかと空想する

「然し、皆様、私はとにかへ(原文ママ)近頃幸福です貧しくても飢をしのぐに足り、心にはつねに友人達が住んでをり、又皆様の御親切が私の魂をうるほしてゐます。こんな幸福はともするとあんな境遇によつてひねくれよふとします私の心を素直に、正しくそだてゝ呉れる様に思はれます。あんな学生達の社会運動などにも相当の魅力を私は感じますけれど、あんな運動には少なくとも根底に相争ふ二つの階級の各々に、『理解とそれから生ずる愛』が缺けてゐる様に思はれます。」(京都より姫路市五軒邸九〇酒井安代、百合子さん宛封書)

と、酒井家オアシス論から一歩進んで、時代に対して素直な正しい魂を維持し成育するた

めには、酒井家の存在がなくてはならぬものである事に触れてゐる。

因みに、当時は東大新人会に属してゐた浅野晃、水野成夫、志賀義雄氏が共産党に入り京大からは淡徳三郎氏等が出て、まさに学生運動の胎動期と言へる時代であつた。

この書簡に次いで十月二十四日には、伊東は初めて安代さんへ単独に手紙を書いてゐる

「美しい秋陽が、まばゆいほど室の内にさしこんで来ます。ぼんやりねそべつて、煙草をふいてゐますと、ほんとうに楽な気持です。昨夜、雨の音をきゝながら書きつけた日記をとり出して読んでみます。と、まるでひとごとがかいてある様な変な気持になりました。」

と云ふ前置の次に、日記に書きとめてあるらしい短歌三首が書き添へられてゐる。

物に寄り泣きたき心わびしくも我がうたたねは夜ふけにさめて。

ササヤヤに棕梠の細葉の震ひおり、そが我が祖父の手にてあはれ。

頬にあて、そのつめたさに驚けり、かくも冷へしか、いとほし我が手

（京都寺町より姫路市五軒邸九〇酒井安代さん宛封書）

いづれも稚純を免れないが、少年期をまだ完全に脱しきれぬ思春の日の、安寛しえない清純な孤独感がよくうかがへるし、第二首には家郷を離れてゐる若者の、祖父への純朴な回想と思慕が見られ、第三首目にはいかにも少年らしいナルシス的自己愛憐が溢れてゐる

しかも末尾にはローマ字で Konogoro ikaga okurashi desuka？と書き添へられてある。

この書簡に見る短歌への萠芽は、一月を経た十一月二十八日附の安代さん宛書簡で、少しく双葉の姿を整へてくる。

「今日は夕方から黒谷に行きました。吉田山の裏則（原文ママ）にあるなつかしい山中の霊場です法然とか、親鸞とか云ふ名がもう私からひきはなすことが出来ないなつかしいものになつてしまひました。敦盛や直実の墓もそこにあります。ロマンチックな気分になつて三層の山門を仰ぐと浄土真宗発初門と云ふ古い額がかゝつてゐます。そしてその山門のあたりで、子供が無心でおはじきをしてゐます。

黒谷の山門の蔭の石段で子供が二人おはじきをしてゐる。

夕まけて、誰もおとづれない御堂の中に端坐瞑想すると私の心もおちついて来ます。

僧ありて今そ御帳をとざすらし夕去りぬればさびし黒谷。

くらくなつた中をかへつて来ると、あゝあゝと大きなためいきが出ます。三年間のはげしい苦しみだつた。そふ思ふと、自分を自分でいとしい様な感傷がやつて来ます。」

（京都寺町より姫路市五軒邸九〇酒井安代さん宛封書）

雲に寄す

上村肇

街の上を一団の雲が流れている
葡萄色の色彩をしているから
多分　オランダあたりからきたのであろう。

雲よ　お前は知つているか
十年ばかり前に
この街の上空を
まぶた泣き腫らし
血を滴らせて
わたつて行つた一団の
大いなる雲のあつたことを。

雲よ　行き交う多くの雲に告げてくれ
灼熱の太陽に　赤い眼帯をかけ
蛆さえぼとぼと落して行つた
あの血に汚れた　あの日の
あの雲の流れは御免だと。

雲よ
立ちあがる雲よ
ぶどういろの雲よ
いつもきようの日のような
うつくしい雲であつてくれ。

奔流の末に

浅野晃

なかでも　あれは　水の歌だ
雪どけの　ふかい谷間から
塔を倒し　塔を倒し
矢よりも早く　くだつてゆく
無数の瞳に　見送られて

太陽の方へと
公園の枝々に新芽が向き直る時が来る
樹液は　にがい
夜の凍つた星が青く光り
巨いなる女体は孕んでゐる

とけても雪だ　春の雪だ
地の母の　匂ひたつ胸の
あとからあとから砕けた　乳房だ
河の肢体が破れた中で
石の心臓は　打たない

にがい樹液は
（日の出である）
めざとい獵犬のやうにかけ廻り母を呼ぶ
めをさませ　母よ巷に
黄金の悲しみの子は生まれてゐる

ねそべり的詩論 (1)

小島信一

夢が実現するという事はある。僕はそういう事を体験しただけでも、生き延びた意味があると思つた。人生は思慮分別を絶したものである。詩人の夢を笑う事はできない。ただ今生は何といつても狭い短かい不定なものでその中にバランスをもつ実現である事を承知していればいい。夢よりもはかない世の中で、小さな僕らの夢が開花する事もある。それだけのことが、どんなに僕を驚かせただろう。

絶望する事、それはあまりに彼の希望が純一で妥協を知らない所から起きるのであり、彼の性格の必然性なのである。一方、その日その日をよいかげんに暮し、待つている生き方も一つの生き方である。予感がある限り、それをどんなにでもして待つのが賢明だ。

絶望して自ら生命を絶とうとしたが、なぜか生きている事になつた。生きる術もないが死ぬ術もないという惨めな状態に置かれ、この事が僕を強固にしたと思われる。なぜ生きてきたかという意味を考えてはきたが、分らないままに、段々平穏な人並な生活を樹ててきた。或る日、箱根の芦ノ湖に行つた時、木の間がくれに湖面のきらめくのを見て、生きた事の意味が何だか分るような気がした。何かが自分の為に用意されていると感じた。その時思わず「いいもんだ。世の中というものは！」と呟やいたら、傍の連れが妙な顔をした。

僕はそういう体験に教えられたのか、その日〳〵をともかくも暮らすという事に生き方の智慧を認め、日々を前よりずつと安気に送り迎えするようになつた。希望をもち続けて待つ事に何か自信が出てきたのだ。その希望がいかに美し過ぎる希望でも、ともかくも待つ事だ。

人生に対してどういう観念を持つようになつたか。何を考え何を感じるのか——全く分らないで日々を重ねている。とかく自分の事をニヒリストとかロマンチストとか呼んで見るが、自分が自分を信じていない。たゞ何とも得体の知れない生き物として何となく日を過している。河の水のように歳が流れてゆく

こうした中にあつて、私にとつてたゞ一つ収獲と思はれる事は、詩を書く事の美しさを少しずつ体験してきた事である。詩を書くわけではない。読むわけではない。ただ日常の無気力と無意味さを知るにつけて、反射的に詩というものの「重み」と「美しさ」を分つ

てくるような気がする。同時に自分が詩というものに気難かしくなり、絶えず気にかかりながら詩が作れなくなるのである。昨年一年で四つか五つ作つたきり、他には何もしないで過ぎてしまつた。

詩は徹底して時をかけ、彫琢すべきであり散文は思うまゝを書き流すべきであると思うようになつた。だから散文は長ければ長い程よい。とめどなく次から次へと書くべきである。源氏物語はその典型だ。いわば散文の魂はとめどなく書きつくす所に現れるのではないか。五十何巻を読み進んで終りの宇治十帖にくると神々しくなる。あれは詩では出せない境地だ。

同じ意味で散文の魂を感じたのは和泉式部日記である。殆んど作為の跡を止めない。片言隻句散文的発想の極地だと思う。

詩の時代とか散文の時代とかいう区分けは無意味であり、詩は散文とは全く異つたものと考えるのがとも角混乱を免れる考え方だ。おかしな言い方だが、詩的発想から生れたものを詩とし、散文的発想から生まれたものを散文とすればいいのではないか。こまごまと書き記したものが後者であり、「書き記す」という事と相容れない或る衝動が実現した時それが前者であるという事もできる。

江戸時代の戯作者劇作家の中には徹底した散家文の好例が見いだされる。十返舎一九の「東海道膝栗毛」などは源氏とともに日本散文の金字塔といつて差支えない。為永春水や鶴屋南北もこういつたタチの作家である。西欧の事は知らないが、私の読んだ限りではセルヴァンテスの「ドン・キホーテ」、ボッカチオの「デカメロン」が散文芸術の双璧なのではないだろうか。ドン・キホーテは限りなく偉大な作品だと思う。本を読むのが遅い私は約一ヶ月つぶして古典的なヘンリー・モーレーの英訳で暇に任して読みふけつたがこの読書の思い出は忘れられない。いわば人間という人間の長所と弱点を叩きこんで無理無体にでつち上げた人物ドン・キホーテがいきいきと生きてゆく所は、まさに奇怪の感がある。奇怪といえば、小人にして無智のサンチョ・パンザがしまいには哲人みたいな事を呟やき出す。僕ら誰もが頭固に抱く人間についての諸観念を、みじんに叩き壊す作品である。

こうした文学の本質は何か詩的な魂とは異つたものだ。詩の魂に対して、これらの作品はいわば人生そのものが化けて出た、変化(ヘンゲ)ともいうべきものを本質としていると考へられないだろうか。芭蕉が弟子に向つて、文章の極意は変化(ヘンゲ)にあるという意味の事を言つていたのを読み、面白いと感じた事がある。

自分について言えば、散文というようなものについて考えるようになつたのは成長だと思う。人生体験らしいものに多少とも入つてきた。いわば前には全く見えなかつた何ものかが目に映るようになつてきたのかも知れない。年々同じに世の中の風をまともに受け、まともにしくじり続けて、その間ちつとも向上がない。何もかもがただ芸もない繰り返しに過ぎない。この反復の無意味さこそ人生のお化けかと思われる。

白いスェーター

山根忠雄

そいつはいいねえ……
おまへの着てゐる白い毛糸のスェーター
首すぢにうす緑のついてゐる
雪だ！
雪間の草だ！

おまへも知つてゐる……
あのロダンの彫刻みたいに
俺の頭をうづめてくれる
ありがたい程のおまへの胸だ！
おまへの胸の乳のあたりだ！

わたしひとり……

斎田昭吉

あの時
おもわず　立ち上って拍手したのは
　わたしひとりだった
　わたしは恥しさでいっぱいだった
みんななながい会議でくたびれたのか
なんだか　しらじらした空気だった
　どうしてだろう
あのひとが日雇労務のひとだから
　いゝや
ひどい吃りで　なまりがつよくて
そのうえ　いいたいことの半分も
　いえないで
まるで　選挙の応援のひとのように
　たのみます　おねがいします
と　さけんでいたのがおかしかったのか
わたしは　難しいことはわからないし
おまけにいたってセンチな質だ
けれども
あの大きな集会室のひとのなかで
拍手したのが
　わたしひとりだけで
みんな　くすぐったそうな顔で
　伏目がちになったり
笑ひをかみしめ　よそ／＼しかったのは
　どうしてだろう
その晩　わたしはへんな夢をみた
　くらい　くらい
蝙蝠のうよ／＼翔んでいそうな空洞で
わたしがひとり
大きな声でさけんでいる夢
わたしのかなしい声はふしぎによく透り
　そうして
それが　空しくこだまして
かえってばかりなのに
もうひとりのわたしが
　いかにも　冷たく
はっきりと　その声をきゝわけている
おかしな夢

ああ　あの時から
わたしの皮膚のどこかに
もえるような　かなしい羞恥が
ぽつん　と
のこされているのを誰がしっていてくれる
　だろう

月に招かれた男（二）

芳野清

それから、数日後、大垣から手紙が来た。それには細川の言を敷衍して、彼への抗議と見られるものが、彼らしい方法で書かれてあつた。その部分を書き抜いてみよう。

……
Hはかう云つてゐるのではないのでせうか
「おゝ、安つぽいロマンチシズム、あれは子供のほしがる玩具の色眼鏡さ、あんなものに心を惹かれるやうでは君もまだ子供だね」
……
リアリズム
「リアリズム」と書かれたカンテラと棒切れとを持つて下を見乍ら、歩いてゐる男。塵溜めでもその辺を棒切れで突つきながら、これは美か、いやいやと呟いてゐる。
ロマンチシズム
近眼の男。
その男が云ふ。「おゝ、あの遠くに霞んで見える森は何んて美くしいんだらう！」……
君はあの時、彼女を "Les enfants ter-

ribles, の héroïne そつくりだと云つてゐたね。そう云ふ見方は又、君らしくていゝと思ふ。悲しいジエラールの役は僕かも知れぬが……Hと別れてから、僕は浅田を訪ねて、雪の降つた海岸通りを歩いた。人通りの全く絶えた、官衙や外国商社の屋根に薄く雪が積つて、僕はうつかり北欧のアンデルセンの街でも歩いてゐて、ほのかな街灯の下に、「マツチ売りの少女」が立つてゐるやうな気がしたりした。僕はAにもあの喫茶店の少女の事を話した。彼はHどころぢやなくて、てんで話相手にもならなかつた。「女なんて、そんな天使みたいなもんぢやねえよ」Aは吐き出すやうに云つた。僕はAがカフエーの女給かなんかと同棲してゐるのを知つてゐる。だが、女をそんなふうに知ると云ふ事がどういふものかと思つたら、僕は悲しくなつた。それきり僕は默つてゐた。Aも今の生活を出たいと云つてゐる。何か女をめぐつてひどいトラブルの中に入つてしまひ、苦しんでゐるらしいAは勿論、単なるドンフアンで僕達と大分違ふし、文学を勉強してゆく気持もないが、僕達の共同生活に入るやうになるかも知れない。AもHも、君が知つてるやうに僕と同郷だし、学校も同じだ。君だけが学校も、故郷も違ふのでどうかと思つてゐる。高商生の僕達と工科の君との共同生活はどうだらう。これは経済的な面ばかりで云つてゐるのではないのだが、矢張り君にとつては真剣な問題だらう。又、Aをも含めてこの事などについて例の所で逢はう。そしてゆつくり話し合はう

手紙はそこで結んであつて、少し空白をあけて、一つの短い詩が達筆な書体で記されてあつた。H達と浅草のレヴュー小屋に行つた時の詩だと附け加へて。当時の佗しい踊子の生活がにじみ出てゐる詩だつた。

あさくさ

あさくさは哀しきかな
乙女らあまたつどひて
うたうたひをどりをどれども
そのすかあとは破れたり……

その後一月程経つて気附いたら、その喫茶店は閉まつてゐて、やがては何かほかの店に改装されてしまつたらしい。だが、その後、私は吉田橋の袂で少女に出逢つた。

彼女は徳利首のセーターの上に、短かいオーバーを着てゐた。私に気附くと、僅かにほほゑんで会釈した。だが私には話すべき何もなかつた。彼女は今何をしてゐるのだらう、漠然とした興味が後に残つたが、忙はしい多の巷にそれらは忽ち消えてしまひ、街の方からは一段と高く、その頃売り出した浜出身の流行歌手、渡辺はま子の甘いメロディーが流れてきた。（未完）

中国古詩私抄

森　亮

断章

——大招より——

春は青みて凋落の野山を繼げば、
真日しろくかがやきて
木の芽を、花を、春風は
もえよとばかり渡るなり。
み冬の氷解けそめていざりも行くを
な隠りそ、吾が魂。
還り来よ、吾が魂よ。

☆

田舎のことわざ

——四民月令より——

弥生のひぐれ
参星みなみ
あんず花咲き
桑の葉しろい

☆

田を被ふ者のことば

山田沼田も
やまほど取れて
五穀のみのり
家に満ち……

☆

枯魚の歎き

乾物の魚が河に来て
歎けどわが身は泳がれぬ。
くやしまぎれに言うたそな、
「ふなや、もろこや、皆の衆
腹をきめてから水を出よ」

註　大招は楚辞グループの一篇で、作者は屈原とも景差とも考へられてゐる。此処に紹介する断章は冒頭の八句に對して試みた自由訳である。「田舎のことわざ」以下三篇は古詩源から抜いた。初めの二篇は巻一、最後の一篇は巻三にある。作者はすべて詳かでない。「参星みなみ」といふ行はオリオンの三つ星が南中することを言つたものである

小山正孝詩集「逃げ水」

著者の詩歴についてはくはしいひとが別にあるだらう。しかし私もここ十數年、この人を見守つて来た。中国文學を專攻する学生としてが最初であつた。そのながいつきあひの間いつも靜かで、そのくせ情熱的であつた。今度の詩集でも書名が示さうとする如く、靜かにまやかしの幻影をうたつてゐるかと、読んでゆくうち、この人の情熱のはげしさに打たれた。恥かしさうにしながら、それゆゑ一層あらはに、著者は自分のいひたいだけをさらけ出してゐるやうに思ふ。これがたくらんだものだとしたら、何と上手な詩だらう。然え上るような烈しい熱情は、これよりほかにあらはしやうもないかのやうだ。かういへば、著者はたくらみぢやないと、抗議するだらうか。それともわが意を得たりといふ顔をするだらうか。盛んだつたといふ二月四日の東京での出版記念会に出られなかつたおかげで私にはその点だけが疑問である。（東京都新宿区上落合二の五四〇　書肆ユリイカ定価三〇〇円）

（田中克己）

夜中ふと……

山田　新之輔

夜中、ふと目がさめる、
何も見えないしもの音一つ聞えない
暗黒の闇の底で
突然、死の恐怖が私をおそふ。
いつか来るはずの死が
今、かうして私を訪れたのだ、
誰一人知らぬ間に
全く思ひがけずに。

悔ひと絶望が
最初の愕きにうちかつと、
やがて、しづかな孤独が
水のやうに私をつつむ。

一切との関係から
解き放たれ、悲しみにかくも遠く
虚ろなこの空間に
私は身を臥せてゐる。……

……
頬にかかるのは私の息吹き、
そつと両手を握りしめ
私は私の存在を確かめる。

どこか厨の方では
ああ、今宵もあの憎しい鼠たちの
騒ぐのが聞こえる、
利巧な目を闇に輝かせて。

ポンペイ

小山　正孝

衣ずれの音が天にきこえる
二つの目のまつ毛の色が
こちらをさそつてゐる
夕暮がもうすぐ夜に入れかはる

石の道に落されたものは
われらの心に落されたものは
一人の女を争ふことであつた
大きい口をひらいてわめくこともある女

しかし　お前はやさしさうだ
しづかに床の中で背を向けて
絶え入るやうにすすり泣く

期待を持つてわれらは
お前のために剣を抜く
いまは　誰も居なくなつた町

招かれる季節

福地邦樹

三月　陽ざしが白くなりはじめる
地表と樹木が安堵を取りもどす
まもなくどぶ川のふちにも花草が咲き
新緑はそのふさはしい大気を持つだらう
それはさうあるべきなのだ
彼等が　この季節をたぐり寄せたのだから

さうしたからくりを
俺達も知らぬわけではなかつた
しかも俺達が最初に招いたのは
きびしい不毛の季節
稀薄な空気とひからびた泉
炎暑の真昼と憩ひない夜の連なりと

恐らく俺達は正しかつたらう
俺達は知つてゐたのだから
何よりも先に犠牲と忍耐が必要であることを
智慧とは烈しい獲得の意であることを
陰の季節と光の季節の交替の秘密を
また　投ぜらるべき悲歎の深さを
意志の力や　魂の作用の事などを

さうして　遠い願ひに誘はれてやがて季節が
めぐる
俺達の汚辱の物語は遥かな道を静かにたどり
つき
つひにこの沙漠に雨を降らすことだらう
すると忍苦の種子らは　まぶしい無垢の花を
発き
思ひのふかい実りを持つだらう
そしてその時にこそ俺達は
季節の一循を了解するだらう

雪の歌

岩崎昭彌

そのかみ　天は真綿のごとく流れ
ときどき花瓣となつて　舞ひ降りた

もの憂い影のしのび寄る　気配
明りを點け硝子を透しみると
さらさら音のするのは　雪だつた

風　吹雪　それからの晴れた日々
樹氷を縫ひ　玉肌を風となつて渉り
高らかに　雪煙の歌を唄ひつづけた

あるひは　更ける夜の燃える火へ
冷たく疼く一握として　投げこまれ
かすかに音たてて溶けたのだ

今日——
冬の宴は　かなしい季節の絵となつた

編輯後記

米国大使館文化交換局から「アメリカーナ」と云ふ宣伝誌を時々送つてくる。最近號で西脇順三郎氏が言語学者E・ホーニグのエリオット病の警告文を紹介してゐたが面白かつた。同じく米国のエンジニヤ出身の批評家L・マムフオードが、線や点に終極して了つた抽象派病の危険を警告した論文を読んだことがある。機械主義の極限に達してゐる米国だから、かうした人間恢復の祈願や動きが續々と現れるのだらうか？　この国のエリオット病や抽象派病も終戰当時の廢墟と人心のニヒリズムにつけこんで猖獗すること久しかつた。

私は終戰以來宇治に山隠りしてゐたのでエリオット病にも抽象派病にも罹らなかつた。その終熄を見極めたわけでもないが今般大阪に進出した。

池田市野町一六八番地

以上はこの轉居通知の序である。　（O）

創刊號に寄せられた諸般の御好意に感謝する。毎日一件平均の仕事を福地君と二人で樂しみながらやつた。今度の號も締切には、ちやうどの原稿が集まつた。同人に参加したいといふ方もぼつぼつあるやうだが、お問ひ合せいただければ、くはしく申し上げる。次號は伊東靜雄の三回忌に当るので特集にする予定である。御期待と御協力とをお願ひする。昨日けふあたりからぼつぼつ春のけはひである。「春の期待」と題した伊東の詩を思ひ出す。　（T）

『夏花』の頃の伊東靜雄（栗山理一氏撮影）

果樹園

第三号

伊東靜雄追悼号

伊東靜雄初期作品抄

書簡から見た伊東靜雄　小高根二郎

テニスをする詩人　池沢茂
教室における伊東先生　西垣脩
ある夏の思ひ出　森亮
師　山根忠雄
恋愛論その他　田中克己
遍歴の歌から　浅野晃
最後の伊東先生　福地邦樹
伊東靜雄詩碑　上村肇

編輯後記　（O・T・）

伊東靜雄初期作品抄

野茨の花

お前の社交の時は
了つた
日光の正饗はもう
お前にずつと　遠い
夕影の茂みの傍を
今は傾聽で歩いてみたり
聖孤独の祈りを
したりすればいゝ　お前は

（昭和七年七月「呂」第二號）

秋

事物が　事物の素朴を失ふ日
夏は去らねばならない
そして澄み渡つたその空虚に
衆人の悔恨で
目に見えぬ伽藍は建ち始める

（昭和七年十月「呂」第五號）

動物園で

林澤の事を考へて、
静かに睡くなつて居ると
聲が
鷺鳥！　鷺鳥あるきをしてみろ
私ははつと起つて
不覚にもすぐ鷺鳥歩きを
始めた

（昭和八年「呂」三月號）

淡水の中で

私の皮膚に卵を生みつけて
行く
無邪気な魚の後から
私は一度は呼びかける
君　若藻とまちがへて

うつかり自分で食べぬ様にし給へ

（昭和八年「呂」四月號）

残された夫

私はまだ床の中にゐるうちに妻は出て行つた。

貧乏学校の子供らに不良な日曜を與へてはならぬ。

彼らは紙屑や襤褸の散らばつた臭いにほひのする広場に集められて

彼女の指圖でお遊戯やお相撲をしてゐることだらう。

大人だつてする事がないからぐるつと彼らを取巻いて、

寧ろ、燥いでゐる彼女をにや〳〵眺めてゐることだらう。

匿名の慈善家は今日もそれらの哀れな子供らに

彼女の手から食べ物の袋を配らせるだらうか。

（昭和八年「呂」七月號）

市中の或る一家

苦労をしてゐる兄さんを此処の植物園に遊ばせたい、と

農科大学にをる弟が書いて寄越した。

或る日訪ねて來た妻の友人と、妻は激しく議論をした。

私はその友人を慰めながらそつと停車場まで送つた。

妻は毎朝、こは高に野菜を賣りつけられる

母は老いて小さな箱に餘念なく二三艸の花をそだてた。

妹らは悪い風にあふとみんな目を病んだ。

白いガーゼをあてた彼女らを、

私は蝶々のやうにつれて病院に通ふ。

（昭和八年「呂」七月號）

註　伊東静雄の初期作品は故青木敬麿氏編輯の同人雑誌「呂」に五十四篇発表されてゐる。その中「コギト」にも併載されたのは四篇で、詩集に收録されてゐるのは七篇にすぎない。従つてその殆どは一般に知られてゐないわけである。ここに掲載した六篇も「呂」と共に埋もれてゐる作品である。

書簡から見た伊東静雄（三）

小高根　二郎

明けて昭和二年の正月は伊東は飯郷せずに姫路の酒井家で新春を迎へてゐる。その滞留後に出されたと想定される安代さん宛書簡がある。

「安代さん。ふだんでもあんなにお忙しいのに、一時のお客さんで安代さんがどんなにお疲れになつたことでせう。それに脳貧血におなりになつたとのことで、私はしみじみとした憂鬱にとらはれてしまひました…中略…然し、今朝目さめぎはに枕元においてあつたあのお葉書は、殊にあの美しい物語のことは、私を充分喜ばせました。」

にその書簡は始つてゐる。

「百合子さんはもう京都なんですね。私もひどく安心しました。その心配も、私を近頃は重苦しい気持にしてゐました。ほんとうによかつた。あんなに心を労しておられたのに。お手紙のついでがあつたら百合子さんによく言つておいて下さい。」

この百合子さんの上洛は同志社女專の英文科に入学するためであつた。彼女が両親を納

得さすのに心痛してゐた事実を、伊東は正月の滞留中に聞き知つてゐたわけだ。伊東は百合子さんの入学試験に関聯して、自分の学期末試験のことも述べてゐる。

「來月の二十三日から試験が初まるので、ぼつ〳〵教科書など出してみてゐます。缺席ばかりだつたので人一倍勉強せねばなりますまい。」

事実、伊東はあまり学校には出なかつたらしい。大学での学友である歌人、俳人の堀内薫氏等とグループであつた模様で、もつぱら遊学して自己の詩魂の形成に專念してゐたわけである。大学卒業後に伊東を推輓した穎原退蔵師も、伊東の存在を知つたのは卒業論文「子規の俳論」を審査する大学最後の日だつたのでも判る。

「今日の京都は、ほんとうにいいお天気ですよ。暖い陽が阿呆陀羅庵の障子にほつかり枇杷の木の影をうつしてゐます。

障子を
あくれば
枇杷の木
障子を
させば
枇杷の影

これで、少しは、私の近頃の心境がおわかりになるだらうか。この室を一ヶ月許り安代さんに貸して上げたいな。

大き牛の炭引牛よ白々と山の雪をばいただいて來る。

これはどうでせう。私のもののうちではすきなものです。

姫路五軒邸九〇　阿呆陀羅庵の正午

安代さん　伊東生」

（昭和二年一月京都より姫路市五軒邸九〇）
（酒井安代さん宛封書）

先の枇杷の詩は処女作と呼ぶにはあまりに素朴だが、一種の未発表処女作と言へぬこともない。障子を開けても閉めても投影する枇杷は、心を離れ得ない面影のはにかみがちな譬喩なのではあるまいか？　このはにかみがちな譬喩は、実に六年後に伊東の詩精神を形成するに至るのである。

「常々僕は詩が散文と分派する第一歩はこの譬喩的精神であると思つてゐる。…中略…古今集に同情しない人達が批難（原文ママ）の的にする修飾の定型といふことも、あれははにかみ屋の日本人にはさもあるべき方向で、又一向に致命的なものではない。はにかみ勝な譬喩的精神の表現はその証據に、独逸では美しいリードになつて育つた」

（昭和七年「呂」十一月号「談話のかはりに」）

又、伊東が自作中で好きな歌とした炭引牛の歌は、昭和十八年刊行した第三詩集『春のいそぎ』の題名に引いた伴林光平の「たが宿の春のいそぎかすみ賣の重荷に添へし梅の一枝」に似ている。誰が宿の春の支度であらう伊東の炭引牛は梅の一枝ではなく名残の雪をいたゞいてきたのである。が、恐らく伊東はまだ光平の歌を知らなかつたのであろう。

テニスをする詩人

池沢　茂

伊東さんは、ぼくが生徒だつた中学校に來られたころ、服装など、ずいぶんみじめにしていられました。髪も、ひとりだけ、とくにもじゃ〳〵と長くしていました。それに、やせぎすで小がらでしたから、よけい貧相に感じられます。顔も、そのころは額に深いしわがきざまれ、鼻のよこに大きないぼがあつたりしましたから、どこかたくましい感じがあつて、あまり上品には見えません。ぼくたち生徒は、さっそく「こじき」というあだ名をつけてしまいました。かげから、そっと『こじき、こじき』と、はやしたりもしました。

その伊東さんがテニスをしているのを見たときには、まったく思いがけない気がしまし

た。同僚の先生たちに、なんとか仲間入りしようとされたのかもしれません。ボールを打ちぞこなったりすると、ことさらに、とんきょうな、大きな声を出します。うまく打ちかえせたときには『どうです！』というように、仲間の先生たちに、にこ〳〵と、わらってみせます。でも、ゲームがすんで、つぎの番まで待っているあいだは、やはり、とても憂鬱そうでした。

そのころ――就転されてから一年ほどのあいだ――が、伊東さんには、いちばんやりきれない時代だったのではないでしょうか。詩人としてみとめられる、すこし前のことです家庭の悩みのことはあまり知りません。勤め先の学校では、わりに固い公立中学（いまの高校）で、先生もたいてい、高師出身の、教員かたぎ一本道の先生ばかりでしたから『ぼくは異端者みたいなものだ』『ぼくは野人ですよ』などと、のちに伊東さん自身、よく述懐しておられました。ぼくたち生徒を見るときも、ときゞ〳〵、もじゃ〳〵の長髪のあいだから、横目で、キラッと、射込むような視線を投げつけます。すごいほど、こわい感じでした。そばで見ると、茶色の、いかにも気よわな、澄んだ瞳でしたけれど、なにかにつけはげしい怒りや憎しみや悩みが、あふれ出たのでしょう。

もっとも、ぼくはもう上級生でしたから、そのころ下級生ばかり受けもっていた伊東さんには、教室で直接お目にかかったことは、いちどもありません。それでも、あまり様子が変っていられるので、下級生の友だちに『あの先生、こわいやろ』と、たずねたことがあります。すると、その下級生は「こわいことあれへん。ときゞ〳〵、おもしろいこと言うて、わらわせはります」と答えました。

ぼくも、その下級生も、伊東さんの心のうちなど、知っていたはずはありません。ゆがめられ傷だらけになりながら精いっぱいに歌った伊東さんの初期の詩が、ちょうどそのころ、しだいに形をとって、はげしく醸成されつゝあったのでしょう。伊東さんが詩人としてみとめられだしたのは、ぼくがその中学を卒業してから一年ほど、伊東さんが就転されてから二年ほどのちのことでした。

教室における伊東先生

西垣　脩

伊東先生が受験指導の権威であったというはなしは、僕にはむしろ意外でさえある。考えてみると、それはなにも不思議なはずはないのであるが、僕の住中在学当時はまだそんな様子をまるで見せてはおられなかった。かえつて、息づまるような受験気分にみちた校内に、先生の一種超然とした態度はすがすがしいほどであった。

僕は二年と三年のとき先生から国語を学び特に三年生では先生の担任クラスであった。四年になって受験組にすすむとき、先生は教壇の上から僕たちをはげまされて、「高校へ入学したときのよろこびは人生最大のものです。それはよめさんをもらったときよりももっとうれしい。」と厳粛な表情で言われた。それがいつにない訓示であったのと、語調が印象的であったのとで、ありありと記憶にのこっている。

教室での先生は、いつも物憂げであった。声をたてて笑われることもあったが、決して快活な笑いではなかった。窓ぎわに凭れたりこつこつと机の間をあるき廻ったりしながら、低い声で講義式の授業をつづけられた。ひょっと立ちどまって教科書のさきで生徒をつつくようにして当てられることがある。答がちがうと突然高い大きな声で「はァ、それはちがいます」と叫ばれる。長崎なまりの歌うような語調であった。思うような答がえられないと、めんどくさそうに顎のさきをちょっとつきだして次々に当ててゆかれる。それが最後にはきまってといってもよいくらい、うしろの方にいた僕の方にとんできた。油断の

ならぬ授業時間であった。ときに教卓のはしにのびあがって尻をのせられることもあったそんなときバンド代りに無雑作にむすんでおられる細い組紐がちらっとのぞいたりした。

理解力や判断力、つまり思考力というものを先生は特に重んじられたようである。辞書的説明を口うつしに答えることを忌みきらわれた。先生らしい独特の奥行ある解釈が生徒たちをとまどいさせたこともしばしばある。次の授業時間のはじめに前回の訂正をされることも珍らしくなかった。この効果は功罪相半ばするところがあったと思う。

詩人らしさというものを先生は教室ではつとめて排除しておられたと推察される。文学の話など教室内ではめったに口にされなかった。それでも先生の感化力は意外なほど強かったらしい。先生を敬慕心服する生徒がいつしか個人的なつながりを求めてつぎつぎ接近していった。教室外の先生については書くべきことはあまりに多い。先生は教師と詩人の立場を実にはっきり割りきっておられたようであった。これは昭和十年前後の事である。

ある夏の思ひ出

森　亮

その頃私は東京に住んでゐたが、昭和十四年の八月中旬のこと、コギト発行所から伊東さんの封書が回送されて来た。近刊の『抒情詩集』の扉にルバイヤットの第二十一、二歌の八行を引用させて欲しいといふ手紙であった。ルバイヤットとはその年のコギトの二月号から四月号まで連載された私の訳詩を指す伊東さんのこの『抒情詩集』は初め新ぐろりあ叢書に入る予定であったらしいが、実際は子文書房の文藝文化叢書に入って翌年の春出版された。書名も『夏花』となってゐた。

伊東書簡を受取ると、引用の件を承諾すると共に会見を申込んでおいて、私は枚方の近くの郷里の家に帰った。直ぐ伊東さんから返事がとどいた。二十四日の午後一時過ぎに心斎橋の不二屋の喫茶室に行くと伊東さんはもう来て待ってゐた。「私は右の眉の上にほくろがありますからすぐわかります」といふ親切な手紙の文句が役立つよりも早く、人を探す二人の眼がかち合った。話はルバイヤットの訳語のことから始り、「今夏花の新よそほひや」の夏花といふ言葉を使った詩人があるかとの問ひに対して、私は誰も思ひ当らないが、七高の寮歌に「春花かをる神州の」といふ句がある、その春花から思ひ付いて勝手にこさへたのだと答へた。後で分かったことだが、夏花の語は晶子の「みだれ髪」でも、伊良子清白の「孔雀船」でも使はれてゐる。清白と言へば、私が彼の詩の好きなことはその日伊東さんにも話した。それに対して伊東さんは意外なことを言った。「その清白は今堺に住んでゐますよ」と。彼が三重県に住んでゐるものと極め込んでゐた私はおやっと思ったが、それ以上深くは尋ねなかった。伊東さんの単なる思ひ違ひか、清白が短期間でも堺に住んだことがあるのか、今も解くことの出来ない疑問である。冷たい飲み物をすすりながら、私の母が諫早の生れであることを告げたが、伊東さんは自分の郷里でもあるその小さな城下町のことを余り話さうとはしなかった。私は丁度短歌の熟がさめて、詩を書き始めてゐた頃だったので、そのことを話すと、「言葉を知り過ぎてゐると、詩が書きにくいでせう」と同情するように伊東さんは言った雅語になづむな、熟語成句に頼り過ぎるな、といふ意味の警告を裏から言ったものと解して、私は今も作詩の際の戒めにしてゐる。その日は一時間足らずで別れたが、これが最初にして最後の会見になってしまった。

その後、私の『ルバイヤット』が新ぐろりあ叢書に入った際、一本を贈ったときの伊東さんからの礼状に『このごろは思うこと多いのに詩出来にくくあります』と書かれてゐた十六年六月三十日の日附のものである。

師よ

山根忠雄

白雪が嶺に光り
太陽は美しくかがやき
曠野にはまだ風が冷たかつた

ああこのやうな日であつた
師よ！
あなたが高らかに「死」を謳つたのは——

戀愛論その他

田中克己

僕は伊東とは戦後たつた四回しか会つてゐない。

馬來から帰つて昭和十八年の二月に会つた時から、わづか数年で大変動が出來し、伊東の居場所もわからぬまま、近畿詩人会の創立の会合とかで会つたのが、二十二年の四月十九日で、この時のことは略するが、「僕は今日はあんたに会ひに來た」といつただけで、そこそこに別れた。

次は二十三年の一月二十八日、朝起きがけに夫婦喧嘩をして、いやな気持で大和の桜井を出、近鉄で藤井寺の親類に寄り、そこの娘にけさ赤ん坊が出來たと聞いて出たが、時間はあるし、ぜひ話したいと思つて住吉中学へ寄つて見ると、伊東は「今日はあんたのお越しになることは知つてゐた、あとで聞きにゆく」といふ。そこで先に会場の大阪高校へ行く、僕が貧乏してゐるといふので、同窓が心配してくれて話をさしてくれるのである。話の題は「今後の詩について」でもあつたらうか。いつもの通り訥弁で今までの詩は時局便乗の詩だつたが、今後は詩本來の抒情にかへれ、抒情では恋情をうたふのが、一番純粋だなどと述べながら、会場の一番うしろを見ると伊東がゐる。もう話せない。あとは座談会ででもくはしく、といつて降壇した。

さて座談会でも名論卓説の出るはずがない。ホームグランドといひたいが、こと母校では抒情や恋愛とはちよつと縁遠い優等生であつた僕を、思ひ出がかへつて自由な話題から遠ざけるのである。伊東は聞きかねたといふ風に助け舟を出してくれた。「田中さん、あなたのいふ恋愛とは一体なんですか」。何とこの質問の手ごはかつたことよ。伊東から目をそらして、僕は学生たちに答へた。僕の恋愛とは、昔この学校へ來る途中、電車で同乗する女学生たちへ感じたほのかな好悪の情のごときたぐひだと。

伊東はまた聞きかねたといふ風に話し出した。「僕はちがふな。恋愛とは——あの、三十を越した女は下腹に肉がつくでせう。その三十女と……。」僕はたぶんびつくりして目を丸くしてゐたらう。これが詩になるかどうかは知らぬ。僕はいまでもこれを書けば散文にしかならないと思つてゐるのだが、すくなくともこのときの聰衆はみな伊東の説に賛成した様子だつた。

默つてしまつた僕をしりめに伊東はまた話し出した。堺の三国丘の家が焼けた時のことを。「僕は家主と喧嘩してゐたんです。そこへ焼夷弾が落ちて來たんですよ。僕は近くの松林へ行つて手を組んで見てゐました。そりや気持よかつたこと。あとで家主がなんと残念がるかと思うと、燃え上るのがうれしうてうれしうて」。僕も皆と一緒に笑ひながら、これこそ本当の詩人だと驚歎してゐた。

ただしこれがどうやら創作で、実際は、消火もする気になつて、やつては見たが、詩人の非力でだめだつたのらしいことは、御本人が死んでからわかつた。それにしても言ふことがみな創作なら、本当の詩人なのである。私はこの時もらつた講演料を、伊東が取るべきなんだがと、実に申しわけない気持で大和の国まで持つて帰つた。伊東の恋愛論はも一つあるがこれはまたの機会にゆづらう。

遍歴の歌から

浅野晃

伊東静雄君よ。君が迫切の調べを奏でつづけた琴の緒もいつしかやさしくゆるび、君が高貴の魂は知命をまたずに肉体を辞した。君は生前うたつた「ああ黙想の後の歌はあらじ　われこの魍魅の白き穂浪踏み……」と。君は海を渉つた。私はいまも生を偸んで兢兢としてゐる。

海はだまつて受け取つた
私が投げた小石を
あとからあとから私は
拾つては投げ拾つては投げしたが
海はそ知らぬ顔で
ただおだやかにひろがつてゐた

その海を私はその後
二度と見てゐない
外洋にむかつて開いた
單調な汀をもつた海であつた
岬の杜を乾いた赤い日が染め
おそらく鳥らも默してゐた

若かつた私の腕が
力にまかせて投げつけた石を
だまつて受け取つたあの海は
いまもあそこにたたへてゐるのか
あれらの小石もそこに
小蟹や小蝦とともにあるのか

二度と見ることのない水面が
思ひ出のなかに呼吸づいてゐる
海坂の末とほく
あぢまさの蔭をうかべた
古い古い妣の国かともなつかしく
わが生きる日のかぎり……。

最後の伊東先生

福地邦樹

私が自分の病気の小康をえて、一年半ぶりで先生をお見舞ひした時は、あとから考へるとお亡くなりになる二十日前と一週間前の二度であつた。最後にお会ひしたとき、「痳薬のため耳も遠くなり、もうくそも出んやうになつた」といはれ、左手で掛蒲団をもち上げ衰弱した身体をお見せになつた。毛布の下は肌着一つない全裸であつた（終り頃は恐らくさういふ療養の習慣であられたのであらう）。あばらの胸と腰骨とが目立つ奥に、立て膝した足がひからびて棒切れのやうに見えた。そして受難者のそれのやうに清潔になつてしまつた陰部。腹なんか無いみたいであつた。しかしそのお腹が昼夜をわかたず激痛をあたへつづけるのであつた。私はこの病気の患者を随分知つてゐたが、これほどすさまじい身体を見たのは初めてであつた。ほの白いミイラ。これはもうだめだと思つた。しかし不思議にお顔はあまり痩せてをられず、特にその眼だけが元気な頃のお姿をとどめてゐるのであつた。

あなたの事をなんにもしてあげられなかつたと言はれ、三好さんか桑原さんに紹介しておかうと言ひ出された。それに対し私が、いま先生以外の誰にも師事しようと思ひませんからと断ると、急に怒り出され、かすれた声をはずませながら、そんなつまらぬことを言つてはいかん、女に向つてあなたを一生愛しますなどと言ふのが間違ひなのと同じだ、ぼくはたゞ日本語を大切にしただけなのだ、あなたは変つていくだらうし、師弟などといふことは大体いへないのだ、桑原氏の所に行けといふのも、たゞ就職と同じなのだ。さういつた意味の事をあへぎあへぎおつしやつた。お身体の方の心配もあつて私はおろおろと聞いてゐた。そして「あなたはいゝものが書けますよ」といふなりハツとお泣きになつた。

苦しさうにしやくりあげられるのであつた。突然襲ふ痛みのためだらうか、いや長い闘病のための執念のやうに激烈な感情をそこに私は見たのであつた。だが直ぐ平静にかへられ「失礼しました」とおつしやつて、丁度もどつて來られた家族の人に頭をひやすように言ひつけ、私には「もう帰りますか？」と催促された。その夜私は異常な興奮のためまつすぐ家に帰れず、小雨の降るなかを傘もささずに新世界のあたりをほつつき歩いてゐた。

そして三月十二月、所用から帰った私は自分の腎臓炎が再発したのを知つた。不思議にもその同じ日、先生がお亡くなりになつたのであつた。

伊東静雄詩碑

上村肇

長崎県諫早を故郷とする、詩人伊東静雄の詩碑が、その故郷の、風望よき公園の中腹に建ったのは、昭和二十九年十一月であった。詩碑の発起をしたのは、私達二、三の、伊東氏を知る詩人関係の者だけであったが、全面的に運動を展開し、その実行に当ったのは、諫早文化協会の会員諸氏であった。趣意書の作製から発送、最後の絵葉書の発送に至るまで、会員全部が一丸となって、この仕事を達成せしめた。場所の選定は、昭和二十八年十一月に、伊東氏の墓参に來諫された、桑原武夫先生の指示を受けた。最初私達の考えでは、もっと人影を避けた処に、と内心考えていたが、矢張り建立されたあとになって見ると、桑原先生の御意見通りが一番良く、まさに絶好の場所であった。前面に雲仙を望み、左方に白く光る有明海の海面を伝って、国境いの多良の山容が眺められる。碑材の石は、約六屯の自然石で、諫早から四里ばかり離れた小長井村から運搬した。北原白秋の、柳河に建っている詩碑も、この小長井から出た穂崎石と云う石で、白秋の詩碑の感と矢張にている。石肌の感とでも云うのであろうか。碑銘もあれこれと皆で考えたり問合せをしたり各方面の御意見を聞いたりしたが、桑原先生に、最後は一任した形になって、三好達治氏を煩わした。三好氏は、自分より田中克己氏が友人としても近しいからと、一応辞退されてきたが、時日もないので無理にお願いしてしまった。

手にふるる野花は
それを摘み
花とみづからを
さゝへつつ
歩みをはこべ

伊東静雄

昨年の梅雨時に植えた碑前の芝が、今年は青々と芽をふいている。碑の説明もおかしいが、一応伊東氏の詩壇に与えた業績や、経歴と云ったものを、気品よく、説明した建札を今年は早急に作製したいと思っている。こんな仕事をしたり碑前を掃除したりしている私を、伊東氏は地下にあって苦笑されていられるであろう。全国的に御支援下さった多くの方々に諫早文化協会の一員としても厚く御礼を申上げる次第である。

編輯後記

伊東雄静は生前、詩人には解説者が必要だと口癖のやうに言つてゐた。その解説の役を買つて出て、福地君と資料の蒐集を始めたのは昨年の四月だつた。丁度一年になる。卒業論文「子規の俳論」もみつかつた。大学三年生の時に応募した御大礼記念少年少女向映畫脚本の一等当選の発表記事も大毎紙上に発見されたが、伊東はどんな傾向の童話を書いてゐたかだけ判らなかつた。このほど同志社大學生石井習君の紹介で知つた、伊東の親友宮本新治氏の御陰でその貴重な一篇が判明した。「山科の馬場」と云ふ五枚程の短篇であつた。これで伊東の全貌が明らかとなつた。私は解説者の契ひを果すことができると合掌する。もともと文学は契ひ以外の何物でもない。（O）

伊東の詩に「春の期待」といふのはない。これはその詩集の題の「春のいそぎ」と、私自身の詩で「期待者」といふのが、一つになつたのである。この私の詩は立原道造が再起不能を宣告されてから、見舞つた私に全快の暁の計畫を語るのを写したのだ。伊東も春のいそぎ（準備）を私が最後に会つた早春に語つて座にゐたたまらなくさせたのである。間違ひの理由はこのへんにある。ともあれ前号の編輯後記の訂正をここでしておく。（T）

果樹園
第四号

書簡から見た伊東静雄　小高根二郎
駿河台にて　西垣脩
花　服部三樹子
寢る楽しみ　池澤茂
生きなければ　たかはし・しげおみ
花の香　山根忠雄
春　岩崎昭弥
埴輪の若武者　浅野晃
月に招かれた男　芳野清
サキソフォン君　福地邦樹
日記抄　田中克己
中国古詩私抄　森亮
早春の風　太田浩
編輯後記（O・T・）

書簡から見た伊東静雄（四）

小高根二郎

二月四日にも安代さんに書簡が出されてゐる。

「安代さん。

世の中がひどく退くつになる様です。淋しさはどうやら退却しましたけど、一層悪い退くつと云ふ魔物が私の胸に這ひよつて來たらしふございます。青年らしい目のかがやきも自然と曇つて行くのが自分でもわかる様です。大変危険な思想の変転期に立つてゐるのですね。（こんなことは書いても何にもなりませんからやめます）。」との暗い表現で、この書簡は始つてゐる。が、この暗い書きだしが実は必要だつたのである。……と言ふのは、正月酒井家に滞留してゐた時に、安代さんの日記を盗み見たとか見なかつたと云ふトラブルが起つてゐたからである。多分、安代さんから手厳しい抗議があつたのであらう。

「安代さんは、私が、あなたの日記を見た様に思つておられる様ですが、それはあなたの誤解です。私は決して〳〵見てはゐません。明に誓ふことが出來ます。」と、いかにも潔癖な伊東らしく、むきになつて辯明をしてゐる。

又、伊東はこのトラブルを、姉弟のやうに親しすぎるために起つた紛争であると、文学的に分析してゐるところが面白い。

「西洋に留学してゐる人達は、出会ふとよく喧嘩をするそふです。非常に仲のいゝくせに喧嘩せずにはおられないのだそふです。それを、岡田三郎といふ小説家は一種のノスタルジヤだと云つてゐます。なるほどなるほどと私は一人うなづいてゐます。人生と云ふものはこんなものではないでせふか

火を吹けばたのしかりけり孤居（ヒトリヰ）のさびしさもしばし忘れ居しかな
もちも焼かむコーヒーも立てむと小さなるくわだてをもつ我となりにし
火桶得て近頃我はなまけおり膝にかこめばうれしきかもよ」

この書簡で特に興味あるのは、この日より五年後、即ち昭和七年六月に伊東と共に同人雑誌「呂」を創刊した青木敬麿氏が現れることである。つまり伊東が下宿してゐた寺町の阿呆陀羅庵は、青木のお母さんの家だつたのだ。

「私の隣にゐる哲学士も相変らず三畳に晋もたてずにともつてゐます。一つも話した

ことはありません。両方とも変な男と來てゐますから始末が悪ふございます。夜一時頃なると、ドシンドシンといはせて、床を展べます。そふすると、私も、雨戸を繰ってやすみます。こふいふ風な男ですよ。（よく似てゐます）」

と、蓬髪に眼鏡をかけ顎の尖った男の似顔が描き添へてある。その似顔絵を故青木氏の顔馴染である原野栄二氏に見て貰ったら、似てゐるさうである。これは伊東から見た青木だが、青木から見た伊東も面白い。

「きたない男だった。押込みのなかにねるなど云ふ話もきいた。ぼくらは長いことものを言はなかった。或時歌を見せた。…中略…二三の歌人の批評をした。」（昭和十一年一月号「コギト」青木敬麿「わがひとに與ふる哀歌」）

ところが原野氏の言によると、汚さにかけては青木も伊東も互ひにひけをとらなかったさうである。『呂』を出した当時、青木は大谷女専の倫理の教師をしてゐたが、或る日ワイシャツを着るのを忘れて、いきなり頸にネクタイを締めて登校したことがあったさうである。この風姿への放胆さから、後年両者は肝胆相照らすにいたったものかしれない。

因みに、青木氏は伊東が京大国文科に入学したのと入れ違ひに哲学科を卒業し、ノヴァーリス、ヘルデルリーン、ティーク等独逸浪漫派の信奉者であった。伊東のヘルデルリーンは或ひは青木の啓示によるのかもしれない。

尚この書簡には阿呆陀羅庵の見取圖も描き添へてある。上半分は硝子入障子で、枇杷であらう立樹が透けてゐる。部屋の真中には小机が安置されてゐる。机上には潤一郎喜劇集が開かれ、インク瓶とペンとが置いてある。机の右には紙屑箱。左には短歌に出てくる火桶。手前には毋の手織と註が附いた座蒲団が敷かれ、その傍に拡げられた新聞紙には、割当らしい炭とタドンが転がしてある。結びは

God be with you till we meet again.

「再た会ふ日まで神は君と共にゐます」になってゐる。（昭和二年二月四日京都寺町より姫路市五軒邸九〇　酒井安代さん宛封書）

この阿呆陀羅庵から伊東は、五年後青木と同人雑誌『呂』で結ばれる運命も気附かずに引越さうとしてゐることが三月後の書簡で判る。同居人の子供と雄鶏の鳴声に辟易したからだ。

「子供と鶏とであまり私の神経が弱るので宿を変へようと思ひまして、昨日午前中、雨の中を吉田中をあるきまはりましたけれど、私の気に入る所は一つもありませんでしたので、やっぱりこゝにおちつくことにしました。私をいじめる赤児は近頃ハシカにかゝってますますよく泣きます。然し、昨夜は泣かなかったと思って今朝顔を洗ふ時鶏籠をうかがってみますと、例の牡鶏は買はれてでも行ったのでせふか、どこにも見へませんでした。ゐなくなると、何だかあんなに水なんかぶっかけたのがかはいそうに思ひ出されて、仕方ありません。」

こんなに感じ易い五月のとある日に、伊東は同志社女専の学生になった百合子さんに、河原町丸太町でばったりと出会ってゐる。

「昨日、土曜日の午後、私は室におるのが何だかいやになりましたので洋傘をついて久し振りに三条の方に行ってみようかと思ひまして、河原町丸太町の停留所で電車を待ってゐました。ぼんやりと。すると、出町の方から來た電車が向ふの方でとまるとそこから美しい洋服を着た女学生の人が二人、愉快そふに、おりて來ました。私はいつでもそんな女学生の快活さを見ると、自分が妙にみじめに見へて仕方ない様な気分になるのが癖で、その時も何ともいへない憂愁を感じながら、それを見てゐました。するとどうでせふ。その女学生の一人がこちらを向くと、それは明に百合子さんではありませんか。私は何といってい〻かわかりませんでした。百合子さんも驚いてゐられました。

「どちらに」にときくと

「三条に」それだけ云って、百合子さんはお友達の人と鋪道をあるいて、向ふの方に行かれました。私は停留所に、自分の電車を待ってゐながらぢ―と見てゐますと百合子さんのきれいな洋装の垂れたバンドが風でゆれるのが見へました。」

颯爽とした百合子さんを呆然と見送ってゐる伊東が見えるやうである。角帽から喰み出た蓬髪。無精髭。洗ひざらしの小倉ガスリ。よれよれの袴。太い白鼻緒の朴歯……と云った高校時代の蛮風さながらのいでたちの伊東は、現代風に颯爽とした百合子さんに対比して、確かに惨めであったに相違ない。当時の伊東の文学的交友であった、同志社高商生だった宮本新治氏（現在再製樟脳株式會社専務）の伝へるところによると、百合子さんは色は浅黒かったが、まさしく夏林檎のやうな、堅い新鮮な処女性がぷん……と匂ってくるやうな乙女だったさうである。

この邂逅の夜はとりわけ伊東には孤独感が身に泌みたらしい。ひとり大学圖書舘で本を読むともなく過してゐる。

「土曜なので、いつもの様にたった私一人で、青いすへランプを前にして、本を読みながら、いろんなことを考へました。安代さんから、いつか、紙につゝんでお金をいただいたことや、よく思ひ出す、へちまのことや、靴下を沢山送って下すったことを又心の中に復習して、感謝と親愛とで一杯になりました。私は小説的構想や、詩の着想でも考へる様に、美しい気持で、そんなことを思ひ出すのはすきです。」

小太郎先生に似てふっくりとした水蜜桃のやうな安代さん。婦美夫人に似た夏林檎みたいな百合子さん。この美しい姉妹との交渉を伊東は感謝と親愛とで回想しながら、いかにも詩人らしく自由で気随意なロマンを構想してゐたのであらう。

翌日曜の午後は、今日の学生アルバイトの類であらうか、幼稚園の庭に花や石を飾るやうに頼まれてゐた様子だが、「行かふか、よそうかと思ってゐます。何だか、人の顔をみるのがいやですから、」で、印象深いこの五月の或る日の書簡は結ばれてゐる。

（昭和二年五月京都より姫路市五軒邸九〇）
（酒井安代さん宛封書）

駿河台にて

西垣　脩

大病院の多いこの高台の街では救急自動車のサイレンが毎日きかれる。大學院の八階で入學試験の採点をさせられている僕は、赤エンピツを削りながら、世離れた位置をふとめずらしく、またかなしく思うことがある。暮れはじめると雲はにぎやかになり、病院の窓々に螢光燈がつく。

見わたすと
病院全体のよるは
しずかにあかるく
生きている
外界のくらい噪音に
かこまれて
そこは一層
清冽にきらきらと
生きている
星座は
海や山の方に去り
時間にむきあった人々が
空間を点々と埋めて
そこにかがやいて
生きている
くるしいなんて
たのしいなんて
展望には
格闘も舞踏に見えるような
結局のきれいな
はかなさで
結晶しながら……。

花

服部三樹子

朝の空青きに咲ける諸枝のその下にゐてもの
言はずゐし
見上げゐてかそか揺れゐる一枝よりたわたわ
として諸枝のゆれ
かぎろひのもとなき人となりたまひ花咲く下
に追ふものもなし
夜の会けふのこころをしづめつつ眠りにさそ
ふそぞろ重たさ
ふと人の口にのぼりしそのおん名そこまでか
來し春もさびしに
思ふことみな言ひ出でて別るる時我が家は近
し君が帰り路
別れ來てこころほとほと疲れゐし少女のごと
き息の短かさ
鬼の追ふ黄泉比良坂越ゆるときたまひしみ手
は佛とぞ見し
かの易者孤独の星と言ひしとき肯ふとなくゐ
みしきさらぎ
なかなかに見よき象にならぬまに夢に入り來
し二月幽情
四国は遠き国かな言ひたしと思ふことすぐに
言へぬ遠さよ

寝る樂しみ

池澤　茂

ぼくは朝おきると、便所へゆき、歯をみがき顔を洗って、耳の人工鼓膜をいれかえる。それから御飯をたべて会社へゆく。帰ってくると、もう一度、口をゆすぎ、顔や首すじや手足など、ふききよめる。たゞの習慣だろうけれど、いろんなけがれや不安をとりさるような、つまり、ちょっと、みそぎをするような気持になるから妙だ。しかし、すぐに御飯をたべて、それから五分とたゝぬうちに、寝てしまう。そのあいだに、あわたゞしく、子をあやしたり、妻とあそんだり、するときがあるけれど、たいていは変らない。たまに変ったことがあった日や、一週間のうちで夜業の泊りの日と休日とを除くと、まいにち、ほとんどおんなじサラリーマンの生活をくりかえしている。そして、おそろしい早さで、日がたってゆく。

それをいちばん端的に知らせるものの一つは定期だ。ぼくは会社から、通勤用として、三カ月ごとに、省線と市電の定期が支給される。そのときぼくは、あたらしい定期を手にもって「これでまた、三カ月のあいだ、たゞで電車に乗れる。ありがたいことだな」と思う。それから、そのときが二月の末なら、さむがりで暑がりのぼくは『いまはさむくて、ちゞこまっているけれど、このつぎには、もう五月の末で、じきに夏だから、汗だらけになって、ふう〳〵いってるだろうな』と、ちょっと不思議な気持になる。

たしかに三カ月といえば、ずいぶんながい月日だ。一年という月日も、この定期の、たった四枚分でしかない。そして一年といえばそのあいだに、どのような天変地異や災害や戦争や革命や、境遇の変化がやってくるか、だれに予想できるだろう。まっくらな、目に見えない穴だらけの道を、ひとり、あてもなく、遠く、かぎりなく遠く、歩いてゆくようではないか。

ところが、ぼくは会社で仕事をしているとだれかが、一枚の小さな紙きれを渡してくれる。つぎの定期の申込票なのだ。住所や年齢や発着駅など書きこんで、庶務課へ返しておくと、十日ほどたったころ、あたらしい定期をとゞけてくれる。ぼくは、はっとなって「あゝ、もう、三カ月たってしまったのか……」と、しばらく、ぼんやりしてしまう。このまえ定期をもらったのは、つい、このあいだのような気しかしないのだ。それから、なんと

いうこともなしに、それこそ、なんの変りばえも手ごたえもなしに、三カ月という月日がずる〳〵といつのまにか、とけて、どこかへいってしまったのだ。

しかしこれは三カ月ごとに、めぐってくるにすぎない。もっとみじかい單位、つまり一日のあいだに、はっとして変な気持になるのは、寝ているあいだのことだ。ぼくは晩食をすませると、さきにも述べたとおり、たいていい、五分とたゝぬうちに、寝てしまう。朝も出勤にさしつかえない程度に、ぎり〳〵いっぱいまで、寝ている。だから、日によって、半月、一日二十四時間のうち十二時間も、寝床のなかで、暮している。休日の晩や、泊りの日のまえの晩などには、起きているあいだよりずっと長く、十四時間も、十五時間も、寝ていることがある。といっても、そんなに長いあいだ、いくらなんでも、ねむってばかりいるわけにいかない。それで、はらばいになって——ときには、あおむけになったり、よこむきになったりして——本を読んだり、いたずら書きをしたり、たばこをすったり、なにか、している。ちゃんと起きてテーブルにでもむかってするほうが、能率もあがるのだろうけれど、そうすると、疲れてしかたがない。勤めの関係もあるし、それに、なにか有意義なことをしようとしても、これ以上、世のなかの役に立ったり、人のためになったり、せめて自分を向上させたりすることができるとは、どうしても思えない。本を読むのでも、夢中で読みふけるほどのには、なかなか出会わない。せい〳〵教養をつけようとしても、まるきり記憶力にとぼしいから、じきに忘れてしまう。活字を目で追っているだけで、なにが書いてあるのか、全然わからないばあいも多い。それで、ぼくは、寝床にもぐりこんだまゝ、じっさいは、なんにもしないで、たいていい、たゞ、ぼんやりと、目をつぶっている。すると、いろんなことが、どうしても、あたまに浮かんでくる。その日のできごと、むかしのこと、だれかれの人のこと、妻や子のこと、読んだ小説の場面など、きれ〳〵に、そのとき〳〵で、なにが出てくるかわからない。ねむたくて半分うつら〳〵しているから、憎しみもよろこびも、悔恨も希望も、情景そのものも、たいていい、ふるびた幻灯の動かぬ絵のように、うすく、ぼやけている。それから、たわいのない甘い空想を、なにかと思い浮かべる。たとえば、その一つは家のことだ。

ぼくはたゞなにかしら恐ろしいものに追いかけられているようで、その日その日が、なんとか無事に暮せたら、それでいゝと思っている。家なども、あまり大きなのは、かえって迷惑する。日あたりのいゝ庭がすこしあって、雨風がふせげて生活に不便さえなかつた

生きなければ

たかはし・しげおみ

コンクリート・ミキサアが胸をしめつけ
コンベイア・システムが
　無限の傾斜をはこび
ハンマアが　百方から
たえず脳みそをたたいてゆく
この騒音と震動の中で
僕は嘔きたくなるほど目まいし
すべての感覚を喪失し
不安な記憶にもまれ
奇妙な錯覚にさまよい
苦行僧のように突立って叫ぶ
狂ってやしない！
生きなければ！
はてないばかりの空に僕はことづける
ここからが僕の人生だ　と。

ら、どんな小さなバラックでもかまわない。しかし空想となると、どうも、それではいかぬらしい。ぼくはあちこちと歩きまわって、まず土地を選定する。すこし高みにして石の階段をつけ、塀のまわりに、ばらの生垣をめぐらす。玄関、廊下、お勝手、食堂、応接室こどもの遊戯室や勉強室、居間、寢室、予備の部屋、便所、納屋、など〳〵の間取りは、どうしたらいゝか。災害をさけるため、なるべく鉄筋コンクリートにせねばならない。庭には、池や小川を掘り、いろ〳〵な果樹や草花を植える。圖書室をこしらえて、多くの本をあつめる。やがて、圖書館を開設する。庭は、動物園やスポーツランドなどもこしらえて、こどもの遊園地にする。そうすると、勤めになどでかけなくても、じゅうぶん暮せるようになるのではないか……。

ぼくはたのしく、幸福そのものの気がするすると、そのうちに、ぼくのあたまのなかにさっと血が満ちてくるような、逆に血がいっぺんに引いてゆくような、ある感じが、おとずれてくる。暗い穴の底へ引きこまれてゆくように、意識がすう一っと、うすれてゆく。あゝ眠りがやってきたのだな、とぼくは思う生と死とのさかい目もこんなものだろうか、このまゝ無の世界へおちていって生きかえらないとしたら死ぬのもいゝな、などとも思うそして、いつのまにか、ほんとうに、ねむってしまう。また、かえってあたまがさえてきて、もう一度、空想をくりかえすこともあるときによると、おなじ町内で飼われている鶏のなきごえがしきりにおこって、やがて、窓のカーテンがしら〴〵とあかるんでいるときもある。しかも、そのあいだが、じつに、みじかいのだ。せい〴〵十分か二十分ぐらいの気しかしていないのに、一時間も、二時間もたっているときがある。ほんのしばらく、なにか空想におぼれていると、もう、なん時間もがすぎているのだ。

ぼくはいまのところ、めったに病気にならない。勤めのほうも、どうやら、ぶじに果しているらしい。してみると、なん時間ものあいだ目をさまして、なにやかや、なんの役にもたゝぬことを想い浮かべて、ひとり楽しんでいるらしいのも、じっさいは、その半分、あるいは三分の二くらいは、ぐっすりねむっているのかもしれない。

花の香

山根忠雄

夜の途すがら
ふといづこゆか
暗中に
流れ來りし木犀の香……

川岸に咲ける野薔薇の
しらじらと朝靄に包まれて
その姿は見えず
ああただその花の香のみ漂ふ……

春

岩崎昭彌

気温を肌一ぱいにうけとめる女
夕ぐれになると霞がしのび寄り
想ひは天女となつて舞ひあがる
外はきつとおぼろ月なのだらう
たまゆらの明りが障子に映り
誰かがさゝやき続けてゐる
今宵あたり希ふやうな嗚咽となり
花は際限もなく散るのだらう

埴輪の若者

浅野晃

埴輪の若者が
短い劍をさして
立つてゐる
乾漆の観音像の襞の下からは
まるまると肥えた両の足が
のぞけてゐる
がらんとした座敷
すとーぶだけがかつかと燃え
廊下を行つて台所の口を
のぞいたが
ここにも人のけはひはなく
採り立てのきやべつが山のやうに
積まさり
どれもこれも氷の片々に
かがやいてゐる
時計が十二を
打つた
雪はまだ降りつづけてゐるらしい。

山根忠雄詩集　磁石
茨木市戸伏住宅著者自家版　（非売品）

月に招かれた男（三）

芳野清

三、期待と失望

青春とは費ひはたすべき唯一の宝ではないかとばかりにネオンの森に快楽の影を追ふ金廻りのよい、派手な学生群とは別に、遠く故郷を離れて、貧しく、つゝましく、日々の学業の中に未來の希望の燈を燃やしてゐる一群もあつた。さう云つた仲間が何時のまにか私の家に集まつてくるやうになつた。私の部屋はその名にふさはしくないのだが、まあ端的に呼べば一種のサロンの観を呈してゐた。

その夜も私の住んでゐたD住宅の二階からは彼等の喚聲に似た奇聲が湧き上つた。その中には二、三の女聲の大袈裟な嬌聲も交つてゐた。建築の千葉が得意の話術で皆を恐怖のどん底に陥しいれた瞬間だつた。盲の琵琶法師の芳一が今しも見えざる平家一門の亡霊に呼ばれて幽鬼のやうにふらふらと立上る場面で、彼は出來るだけ無気味な聲を出して「芳一、芳一」と亡霊の呼び聲を真似た。郁子は隣りの鈴木にはしたなく縋りついた。鈴木は急に自分の膝に乗りかゝつてきたこの柔かい匂ふやうな女体にむせたのか、奇妙な聲を上げて照れ臭ささうにその肩を抱きとめた。

「始終ラグビーのボールを扱つてゐるにしちや摑へ方が下手だな」

そんな半帳を入れたのは航空の山田だつたそれには少しばかりの嫉妬が交つてゐたのかも知れない。

「山田さん、ひどいわ、郁子ボールみたいに扱はれたらたまらないわ、ねえ、鈴木さん」郁子は鈴木の部厚い胸に抱かれたまゝ、露はな媚をこめて鈴木の真赧に上気した顔を見上げた。

「郁子なんか、ボールなみぢやないのか」と山田も負けてゐなかつた。

「云つたわね、山田さん、蒔田のおきぬさんに云ひつけてやるわよ」

郁子が柳眉を逆立てた。

「郁ちやん、やめなさいな、山田さんもおかしいわよ」

姉の悦子が落ち着いた聲で制した。悦子はこのサロンの姐御だつた。悦子の言葉には從はねばならぬ不文律が何時の間にか出来上つてゐた。

「山田のつくる飛行機なんか危くて乗れやしねえよ」

千葉がぼそつと云つた。

「千葉さん、そのあとやつてえ」

今まで默つておとなしく控へてゐた環江までが座の空気に染まつて大胆になつたのか、それと気附かぬ流眄を千葉にくれ乍ら、甘へた声を出した。

「千葉周作、しからば大和撫子の懇望もだし難く……」

彼はおどけた調子で再び「耳なし芳一」の続きを話しだした。

「ぢや、私、バイ切つてくるわね」

姉の悦子がそのすきに立上つた。座はその声で又無邪気に湧き立つた。

私は古ぼけた柱に身を凭せて、懐手のまゝ千葉の話を聞くともなく、又別な想ひにとらはれてゐた。「怪談」を書いた、ラフカディオ・ハーンのあのうつむいたまぎれない異邦人の横顔と、着てゐる和服との間の奇妙な異和感。日本に来て始めて幸福を得たと云ふ彼はほたして本当に幸福だつたのか、彼は平家の墓の前で壇の浦の悲劇を奏でる琵琶法師の心に托して己れの救ひ難い孤独を表白したのかも知れない……。

「真野、何故默つてるんだ、君の好きな綾ちやんが来ないからか」

さう云ふ親切な鈴木の言葉さへが私にはうとましかつた。こゝに集まつてゐる青年達が悪がつた口をきいてゐるものの、何れも明るい勤勉な青年であることを私は知つてゐた。何れも故郷の選ばれた秀才であり、その頃、軍閥が露骨に唱へ出した亜細亜制覇の一翼を荷ふべき技術者の卵であり、大陸に南方に彼等の夢の結実の場所は至る所に双手を上げて彼等を待つてゐる筈だつた。私は彼等の限度をわきまへた学生らしい明るい行動が好きであつた。自分もその一人のやうに錯覚出来るからであつた。彼等はもう直ぐ姉の出したバイを食べて九時にならぬうちに帰へるにきまつてゐる。そして部厚い工学書や、製圖机の前で遅くまで勉強する筈だ。彼等の灯の傍には目に見えぬ希望の鳩が羽搏いてゐるのだ。だが、この俺はどうだ、彼等がゐる間は確かに俺も幸福だ、彼等の夢がそつくり俺に乗り移る、そして姉が彼等をよぶ理由もこゝにあるのだ。俺が学校のノートやら本を展げてゐれば勝気な姉は至極満足してゐる、田舎の教師をしてゐた姉が転を辞めて、死んだ父の学生友達であつたこの港町の市長に頼んで市役所に入つたのは何の為だつたのだらう、平凡な田舎教師の生活に厭気がさしたと云ふばかりでなく、肺を悪くして文学書ばかり読んでゐる俺を保護監督する為でもあつたのか、俺が詩集やら、小説を買ふと、姉はきまつて「そんなもの読んで何になるの、建築の勉強はどうなの、この間の略設計もあんた、千葉さんに手伝つて貰つたつて云ふぢやないの、今年一年で卒業よ、山田さんなんか勉強しない、しないつて云つてるけれど毎晩寝るのが二時だつて……」、姉の言葉は正に俺の弱点をついてゐる、さう云はれた俺は、そんな干渉する権利があるのかと思ひ乍らも、気弱く詩集を本棚の一番下に隠してしまふ。俺は姉と同居生活を始めてから何を書いたらう。俺の机の中は俺のゐない間にひそかに検閲され、一行の書き捨てた文句さへも、姉の攻撃の皮肉な一矢となつて俺に突き刺つてくるのだ。そのくせ、心弱い反抗を抱き乍らも、かう云う生活は案外俺には住み心地よいものになつて行くのも事実だ、俺が一人で暮してゐた一年前の厳しい文学への傾倒と焦燥に比べたら今の生活の方がどんなによいか、次第に俺はこんな風に慣れて行くのだらう。そして文学に耽溺した一時期のあつたことを平穏なサラリーマンの食卓で、俺を厳しく鞭撻し、励ましてくれた一人の詩人の友の顔とともに懐しく思ひ出すのであらう。私は自然と浮ぶ寂しい微笑を噛み乍ら、去年の春卒業して神戸の造船所に赴任し、最近東京勤めになつて本郷にゐる大垣の事を思つた。

大垣がゐなくなつたら途端に俺はこのざま

だ。近々に俺を訪ねると書いてよこした彼はひよつとすると、土曜日の今晩あたり来るかもしれないな、私はそんな事を思つてゐた。

やがて、千葉の話が嬌声と拍手の渦の中で終ると、次にトランプが持ち出された。土曜日の晩と云ふのでこの近くに住んでゐる彼等は落ち着いてゐるつもりだな、私は明らかに不機嫌になつた姉の片頬を眺めてゐた。姉はかう思つてゐるに違ひない、弟の勉強の時間だからもうそろ〳〵引上げて貰はなくては。

その時、下の玄関の戸が開いて、そのまゝ階段を上つてくる足音がした。この住宅は一階と二階と別戸になつてゐて、各戸別の玄関を持つてゐた。障子が開いて顔を出したのは和服姿の大垣と、もう一人見知らぬ長身長髪の青年だつた。長身の青年は鴨居の下で身を跼めた。それ程、丈が高かつた。青年達はトランプの手をやめて、案内も乞はずに入つてきたこの二人の青年を胡散臭さうに見上げた。彼等の目は私に返つて、一様に詰つてゐた。お前の友達か、この着流しの明らかに自分の種族に属してゐないこの青年は？と、

「おう」

私は立上つてゐた。長い間見なかつた友に会つた感激は隠すことが出来なかつた。

「あら、大垣さん」

姉の悦子は如才のない声で彼を迎へたが、彼女の素振りにこの友の来訪を喜ばないものが含まれてゐるのを敏感に知つたのは私だけであつたらう。座の空気は白けて、彼等の瞳は見知らぬ長身の青年の方に多く注がれてゐるやうだつた。眉目の秀でた青年はこれらの探るやうな瞳には全く無関心で長い指に煙草をはさんで物惰さうに煙をはいた。

芸術家、それも画学生風な長髪は彼等には馴染めないものだつた。そして尚一層彼等の腹の虫にさはるのは、その青年の物怖じせぬ大様な身振りと、無関心さであつた。しかし行儀よい彼等は立上つて私の姉に叮嚀に礼を云ひ明るく出て行つた。姉の転場の事務員である、郁子も環江も若い娘らしくこの二人の青年に挨拶して座を立つた。

大垣は疊の上に並べられたトランプを見て軽蔑の表情を浮べた。彼は神戸からの再三の便りにも返事をくれなかつた理由をそこに見出した。彼はきつと私を随分腑甲斐のない奴と思つたであらう。私は急いでトランプを片附けて、それを忘れて行つた郁子の名を呼んだ。大垣は何の気もなささうにその少女を見送つてゐたが、やがて私に傍らの青年を紹介した。

「細川の兄さんで美校へ行つてるまこちやんつての君知つてるだらう。大塩君ばまこちやんと同級なんだ。君は知らないかも知れないが、君がK画塾でデッサンやつてた頃、君の事知つてるさうだよ、大塩君もあの頃、K画熟にゐたのださうだ」

私はあの画塾の寒々としたアトリエを思ひ出した。木炭消し用のパンの一片を入口で買つてかじかんだ掌の中でこね廻したわびしい感触が蘇へつた。

「あゝ、あそこにゐたの、それぢやあ」

私は呟くやうに云つた。煤ぼけた天窓から射すほの暗い北光線に包まれて、純白の冷たい反射光を投げてゐる石膏像群、それに向ひあつて乱雑に立てられた画架とカルトン、其処にも息づいてゐるひたむきな青春の貌があつた。外套の襟を立てゝ默々と木炭を走らせてゐるアトリエの中には芸術を志すものの青臭い衒気と白々とした敵意だけが漂つてゐた。彼等は自分より少しでも上手な絵に対して嫉妬と烈しい闘志を燃やした。長い髪を垂らした女性や、もう三十を超したと思はれる何年も試験に失敗して少し自棄気味になつてゐる画学生などがゐたが、彼等はお互に何の交渉も持たうとはしなかつた。美校の予備校の感のあるこの画塾では何れは試験場で争はねばならぬ隣人は心の許せぬ敵であつた。彼

等は烏のやうに何処からともなくこの屋根の下に集まつて、書きかけのヴイナスやカラカラや、モリエールなどと目に見えぬ悪戦苦闘を始める。ヴイナスの下顎のほんの微かなふくらみさへも彼等の目には美と云ふより、彼女の嘲笑とさへ映るのだ。だが、彼等の中でもずば抜けて巧みな連中はゐた。彼等が木炭を握つてゐるとまだ初心らしい者達が何時の間にか取囲んでゐた。選ばれた青年は羨望と嫉妬の眸を背に受けて余裕綽々と描いてゐた思へば大塩もその一人だつた。彼は木炭紙の余白に自分の名を大きく記してゐた。大塩麟太郎、私はそこに誇らしげな青年の客気を見た。彼は青い背広をきちんと着て、今のやうに沈鬱でなく自分の周囲に出来てゐる一つのボヘミアン風な画学生のグループの中でも、特別機智のある言葉で皆を笑はせてゐた。それ程目立つ存在であつた彼が少しも画塾の空気に馴染まず黙々と石膏と取組んで時間が来ると、さつさと帰つてしまふ私をどうして知つてゐたのだらう。それは彼の言によると、私の短期間の間のデッサン力の進歩の為だつたと云ふ。母の反対を押し切つて画家を志してゐた私は確かに当時真剣だつた。とりすましたヴイナスやローマ婦人の石膏像は夜になると、私の夢の中に胸乳露はな悪女となつて嘲弄し、挑発さへした。だが、今はその情熱も何も色褪せてしまつた。たゞ青白い炎の跡の燻のやうな思ひ出だけがほろ苦く私の心を満してゐるのをどうしよう。

その夜の大垣は明るく話題に満ちてゐた。とぼけた機智と魅力ある話で私の姉はその度に陽気な笑声を立てた。彼はそのうち「桜の園」を一緒に見に行きませうなどと云つて悦子を喜ばせたりした。

二人を送つて外に出ると、九月の夜空に星が鏤めてゐた。

「姉の干渉がうるさくてね、一つの詩も書けない」

私は辯解がましく云つた。

「いや、いゝ姉さんだよ、君は矢張り保護する人が傍にゐた方がいゝんだ。体も壊してゐるし、何も僕達と同じ道を進まなくてもいゝのだ」

それから、彼は最近の新らしい詩壇の動きについて話した。四季、コギト、私には耳新らしい言葉だつた。一年程前に夭折した詩人立原道造の詩の一節は全く私の今まで抱いてゐた観念を一変させる程新鮮なものに思へた。彼は神戸にゐる頃、その詩人を悼む手紙が機縁となつて知遇を得たコギト同人の一人の尊敬すべき詩人の名を云つた。西蔵と境してヒマラヤ山脈に続く大陸の峻介な高地の名を冠した詩集のある事を知つたのもこの時だつた。清冽な泉の存在を私は感じた。すると急に自分が見せようと懐中にしてきた詩の断片が古くさく、陳腐なものに思へて、私はそれをひそかに丸めて闇の中に捨てゝしまつた。しかし、その詩の稚い文句だけが未練がましく私の心の中で繰り返へされてゐた。

(1) 波止場で

春の夜
白い船、絵皿のやうに浮んでゐる、
長い描き眉毛は薔薇の匂つてゐる少女

(2) 孤独

七月
ダリヤの倦怠が帰つてきた
黒い蝶もゐない
花芯に支へられた宇宙、耻恥よ、
おののいてゐる喉元は愛の坩堝
醜い鋳型を埋めては
草いきれの中に空よりも深まる、
孤独、

「詩・現実」風のモダニズム詩はもはや新らしい時代の詩ではなかつた。その寂しさが私の心を重くした。詩が感覚の夢に浸つてゐる時代は過ぎたのだと私はその時はつきり知つ

た。友と別れてからも私の心には新らしい詩への渇きで炎えてゐた。伊東静雄、立原道造それらの名は今、夜空に大きく廻転する星辰よりも匂ひやかに魅力に満ちたものに思はれた。

家に帰ると私の姉は云つた、

「大垣さんて本当に面白いひとね」

私はそれに気のない返事をした。ひどい自己嫌悪が暗い花のやうに私の心の中に拡がつて私は眠れぬまゝにいつまでも床の中で輾転とした。その頃、大垣は下宿の寂しい灯の下で私に宛てて手紙を書いてゐたのであろう。

美くしいものを期待してゐた私に失望と疲れだけを見出した彼の筆は重かつたに違ひない。真野も俗物のサラリーマンになるだけだ詩に対する情熱なんて皆自分が描いた幻に過ぎなかつたのだ、どだい、俺はひとの心に自分と同じものを見ようとし過ぎるのだ、それが手酷い失望と反逆で戻つてくるとも知らずに、彼はその心を書き綴つた。

真野君、
詩人の不幸は宿命的に孤独を愛すると云ふことです。そしてあまりにも内気な君、いつか書いてくれたやうに
そして美くしい宇宙へとかける
いついつまでも、までも
誰も追つて来ない遠い空、
逃避……

サキソフォン君

福地邦樹

彼女も変な女だつた
遠くで見てゐると　さうも感じなかつた
が
近くで　しかも話し合つてゐると
彼女は雨傘のやうに
本当にうまいぐあひに痩せてゐた
笑ふと頬がこけて
もつと痩せて見えた
声は彼女の喉頸(のど)みたいに
細く　弱々しく　美しく
彼女自身がサキソフォンといふ
可愛い楽器であるかのやうだつた
何によらず
僕も彼女も負けてゐようとはせず
いつも　なにかしら
ひどいことを言つてやりたくなるのだつ
た
僕も案外
クラリネットぐらゐの声かもしれなかつ
た

君は僕に何時も背を見せてゐます。僕は君を把へる為めに駆ける、君が逃げる、全速力で君は余りにも正直です。君は僕のやうに仮面をかぶる事は出来ない、僕はそれ故に君を愛します。

——僕の場合は、

僕は孤独が大嫌ひです。駆けます。でも僕の駆足は遅いんですね。直ぐにこの孤独の虜になつてしまひます。かうなると僕の道化仮面も泣き面です。

あの日、何時の間にか大きな鉛が僕の心臓に位置を占めてしまひました。何時の間にか……。僕は言葉と一緒に吐き出してしまふ為にいろいろ喋りました。でも駄目でした。君はやはり箱の中に閉ぢ籠つてゐるべきでせう（この事は君の場合云へると思ひます）僕の場合は駄目です。僕はあのおどけたお面をかぶつて踊りませう。そして何が報ひられるかもよく知つてゐます。でも仕方ありません。

きみよ
秋の夜道はさびしい
虫の声で一ぱいだ
私は今も一人見送つてきた
友は遠く　濡れた硝子の中で
手を振つた
それは私に

永久にさよならを意味してゐる
雨の中を坂道に來た
この裸電燈は青い光で私をつゝむ
今、私と共にゐる　私の影法師
それも　何時かは私を見捨てるだら
うきみよ
秋の夜道はさびしい
虫の声で一ぱいだ

この手紙を受取つたら直ぐ返事を下さい。何も書くことがなかつたら白紙でも結構です。ペンは止んだ……。

私はその手紙を明るい西日の射す部屋に横わつて見てゐた。机の秋の花が映るばかりの白いシーツに執拗な微熱にほてつた頬から熱い涙がとめどもなく滴り落ちた。病に馴れ合ひになつてしまつた懶惰な日々が悲しかつた。詩にひたむきに進んでゐるのは彼自身ではないか。そして私だけが絶えざる妄想に苛まれ乍ら、云ひ知れぬ不安と空白に取残されてゐる。何もかも不途半端なディレッタントとして。私はふと呟いた。

一日は他の一日と同じやうに悲しかつた……。

大垣から教つたばかりの立原道造の詩句であつた。（未完）

日記抄 ―昭和二十一年

田中克己

私は二〇年三月一八日入隊、ただちに華北に派遣され、一〇月末現地で除隊、北京・天津にゐたあと、この年二月二〇日に佐世保着、三月六日に帰宅した。

三月六日　六時五〇分東京着。家に帰り、一休みしたのち、隣組に挨拶。（註――当時杉並区天沼三丁目七八八に住まふ）

三月七日　雨。家居。荷物を整理す。書籍みな在り、靴二足のみ売られし。（註――妻子はわが入隊後、京都、大垣に疎開、留守に一家族入りをり帰宅後も去らず、同居生活をしてゐた）

三月八日　寒し。煙草と米の配給手続すませしのち、恩師和田清博士邸まで徒歩、途中川久保悌郎君★邸守宅へ立ち寄りしに消息なしと。先生は御在宅、Kのことなど話さる。竜野四郎君来会し、我にも外務省調査部の仕事として「歴史上より見たる中国文化と東亜及び日本文化との関係」、「同じく思想」の課題与へらる。「君ならなんでもすぐ書けるからね」とのお言葉なり。三、四〇枚乃至七、八〇枚にて期日五月一一日。（註――終戦時満洲にて学術調査中だつた）

三月九日　寒し。夜、町会長を訪ね、華北・満洲の情況話す二息その地に在るがためなり

三月一〇日　朝、近所の警防団員★に挨拶し、丸三郎君を訪ね、岡山幸伯母を訪ぬ。午後、弟建来る。大垣国司をまして話す。父にと外套を弟に託す。この日、佐伯好郎「マルコ・ポーロ（二円）」「亜細亜ロシヤ民族誌（一八円）」購ふ。雪降る。「中国文学復刊一号」★★来る。（註――★私は応召の時、警防団員であつた。★★もと竹内好編輯、その未帰還中に復刊された）

三月一一日　朝、長男史★憲疹治療のため南博士にゆく。西川英夫君と父より来信。（★昭和二一年小學三年で長野県に集団疎開し、このお土産をもらつて来た）

三月一二日　終日家居。父、羽田明君、時代社、中国文学研究会へハガキ。夜、雪積る。

三月一三日　終日家居。小高根太郎、松本善海の二友へ帰還の旨ハガキ書く。

三月一四日　午前中、荻窪局へ妻の保険とりにゆく、一〇年一円づつ掛けて一二四円となり、ただちに封鎖貯金となる。父よりハガキ★全田忠造叔父六日死すと。（★註―叔母の夫大阪高校教授）

三月一五日　午後、徒歩して目黒の白鳥清★先生を訪ぬ。千葉へ行かれて御不在。竹内好の家を訪ねしに、未帰還、母上は浦和なる令妹

の嫁ぎ先にをらると。あとに那須辰造氏入りをり。（★註――応召前の勤め先亜細亜文化研究所長）

三月一六日　終日家居。夕方弟建来る。明日切符買ひ福井県三方湖にて実習の後、帰洛と

三月一七日　昨日雪降る。家居。夕方、義弟陽生来る。

中国古詩私抄

森　亮

むかしのひとに

行きずりにふと君が袖
吾が手にとるとも
そのかみの慣らはしなれば
いとひ給ふな。

行きずりにふと君が御手
吾が手にとるとも
そのかみのよしみなればぞ
にくみ給ふな。

★

さはにゐぐさの

澤に蘭ぐさの青々と
風にかたむくその水際、
日の暮れがたに女びと
あゆむ姿ぞ見え來たる。

澤のゆふべの水かげに
はちすのつぼみ白く浮く、
みぎはにひとりかのひとの
たたずみ、夜とはなれるかな。

その夜ひと夜わが床に
われ寝ねがたく臥すままに
風に揺らるる蘭ぐさとも
なよかにひとの見えきたる。

小暗き夜の水かげに
はちすの白きつぼみとも
眼をつぶるわが前に
あらはれわたる白き頬。

註　今回は詩經を取扱つてみた。「むかしのひとに」は八一番（鄭風、第七歌）をアーサー・ウェーリーの解釈に従つて和訳したもの。「さはにゐぐさの」は一四五番（陳風、第十歌）をヘレン・ウオデルの翻案に近い英訳に拠つて和訳したが、意識して英訳と言葉を違へたところもある。この二篇が（殊に後者は）原詩から離れたものであることは訳者も承知してゐるが、かうした訳詩の面白さ（藝術的姿態と言ひ換へてもよい）をねらふ試みも無駄ではないと思つて敢て発表することにした。

三月一八日　家居。大道妙子★氏、次弟大より便あり。（★註――天津での知人の夫人。わが帰国の時、消息を頼まれた）

三月一九日　雨。家居。手塚隆義、中野清見の二友、佐藤誠氏の邸守宅、内田勉君の邸守宅、在隊当日の上官大塚幸太郎、小林俊文二君にハガキ出す。

三月二〇日　家居。無為。

三月二一日　家居。父よりハガキ。加藤繁博士★六日御逝去とお宅より。宇田川部隊の深井兵長より別府に運動具屋しゐると。（★註――わが大學の恩師、中国経済史の泰斗）

三月二二日　久しぶりに晴天。朝、北京より岡田志紀★一家帰着、二月一二日に天津貨物廠に入りしと。午後、これまた久しぶりに入浴。深井兵長、大道夫人、弟大にハガキ。豊島区千早町一ノ一八伊福部隆氏よりパンフレット（★註――義弟の嫁の実家、除隊後一ケ月間、北京の新華門内の同家に寄宿した）

三月二三日　家居。和田先生より二六日一三時丸ノ内ホテルへ来よと。三〇日一三時半大学にて原田淑人先生御停年の記念談話会と。夕方K★嬢来る。（★註――大垣国司君の恋人）

三月二四日　快晴。町会長来宅、引揚者用外套賜ふと。煙草の自由販売に並ぶ。小高根太郎、手塚隆義二君よりハガキ、帰還を祝すと

三月二五日　教へ子亀井昇よりハガキ、華中より帰還せしと。午後、大学へゆきしに和田先生は教授会と。松本善海君は殆ど出勤せざるらし。助手護雅夫君にきけば、明日の外務省の会は三〇日に延期の様子。山本書店にゆきてきけば、岩村忍氏は内閣にて今次戦争のこと書くと。

三月二六日　帰還の挨拶状を三好達治、杉浦正一郎、前田直典、保田与重郎当守宅、桑原武夫、野田又夫、薄井敏夫、本庄実、本位田昇、服部正巳、伊東静雄の諸先輩諸友人に書く。夜、南博士を訪れ、閑談すれば、われ去年一月敗戦確実を語りゐしと。

三月二七日　快晴、暖し。外務省、和田先生父より来信。「文藝世紀」来る、山川弘志君★戦死と。（★註――詩人、歌人、台湾にて戦死）

三月二八日　無為。

三月二九日　無為。散髪す、三円四〇銭。

三月三〇日　外務省の会とて一二時丸ノ内ホテルへゆく。和田先生お見えにならず、鈴木俊、野原四郎、竜野四郎、市古宙三の諸氏来会。平野義太郎先生より帰還を賀する旨、御挨拶あり。「こやつよくも帰つて来たな」の顔せし二三人ありし。

三月三一日　家居。白鳥清先生、父、弟大より来信。夜、停電、寒し。

四月一日　家居。前田直典君、大道妙子夫人竹内好令妹より来信。

四月二日　三好達治氏より帰還を祝すと。保田与重郎君当守宅より、同君は天津貨物廠にありと。午後、永福町の妹宅へ芋もちゆく。

四月三日（神武天皇祭）　妹一家肉をもち来る。小高根太郎・二郎兄弟そろつて来訪、二郎君は華中より帰りしなり。昼食をともにせしのち阿佐ヶ谷にゆき、堀辰雄氏宅を訪ねしに、五日まで滞京と。夜再訪、「四季」を角川書店より再刊する、ぜひ詩を書けといはる。

早春の風

太田　浩

三日つづいた曇り日のあと
今日は朝から烈風が吹きあれている
小さい平野の鱗のような家々を叩きまくって
長い間であった
おれはいま感動してそのどよめきを聽いている

四月四日　無為。

四月五日　無為。妻、体悪しといふに不快。

四月六日　雨。一四時半、青磁社の小山君来る、堀さんより伺つたとなり。大塚伍長よりハガキ。伊東静雄君へのハガキ返送、堺市三国丘は戦災に会ひしと。

四月七日　選挙場入場票を受領。けふ夫婦はじめて五百円生活の内容かたりあひ慄然。妻岐阜県にて十二指腸虫病に罹り来しらしも、医師の検診にて未だ明らかならず。

北支那のなつめ林にわがいのち棄つべかりしを帰り来しはや

四月八日　長女依子入学式とて一〇時、杉並第九小学校へゆく、一年三組、担任志田先生帰りて和田先生をお訪ねす。途中、永福町を通り妹宅に寄る。先生御在宅にて就職のこと考慮せんと仰せあり、土曜一〇時に元太平洋協会へ来れと。加藤繁先生御幼時の画作見せたまふ。二四日に同先生の追悼会と。一六時小高根太郎君を訪ね、夕食賜はり、「国訳漢文大成杜子美詩集」四冊を借りて帰る。桑原武夫氏より来信。

四月九日　在宅。天津の友なる山内四郎君より、三月三〇日帰国、九日頃上京すと来信。

四月一〇日　選挙とて学校会社休業。一二時杉並第五小学校の投票場にゆき、田辺忠男、小林元、佐々木俊雄の三氏に投票。佐々木氏は町会長の推薦なり、他の二人は学者なれど

みな識らず。

四月一一日　小林俊文より来信、岡谷に在り会ひたし来よと。我も会ひたしと返事書く。常会に出席、あひかはらず女のみ、つまらず天津より国分夫人帰京と。

四月一二日　弟大より五月二、三日頃上京と室なしと返事す。国分節子、丸ビルの花屋に就職と。わが投票せし三人、みな落選らし。

四月一三日　一〇時半、栄ビルへ行く。平野義太郎先生お越し。鈴木朝英・平田某二君マライの話をす。山内四郎の兄秀三君、インド独立軍を指導し、その裏切の責任を負うて割腹自殺と、鈴木君より聞き、四郎の仮寓へ伴ひ行きしも不在。帰りて入浴すれば、四郎来りしゆゑ、わが聞きしままを話す。彼自らは東京にて就職すと、夫人九月分娩と。

四月一四日　小山正孝君、長男史にと絵本もちて来訪。一三時まで話し、阿佐ヶ谷へ送りゆく。加藤繁博士「始皇帝その他」買ふ、一円五〇銭。

四月一五日　家居。天津より松井盛君帰り来る。わが厄介となりゐし東海林歯科医院の当守を預りし青年なり。妻また体悪しといふに不快。

四月一六日　東洋史談話会より二四日加藤繁先生の追悼会と。妻の体悪きため、われ夕食の炊事をす。「聊斎志異」訳し始む。うさ晴らしなり。

四月一七日　炊事を行ふこと前日に同じ。小高根二郎君よりハガキ、宇治へ赴任と。

四月一八日　昼まで炊事。一四時頃東大の東洋文化研究所へゆく。松本善海君と話せしのち、鈴木俊、仁井田陞二氏の作らんとする会に出席。ただし御両人欠席、三上次男、山本達郎、前田直典氏ら出席。われと華中帰還の某氏と鈴木朝英氏と話す。鈴木氏の話おもしろかりし。ウイルキンソンの「マレー語辞典」を鈴木氏に貸し、前田君に「島夷志略」返す。同君われに十二指腸虫病の特効薬やらんといひしをことはりし。その理由われとわからず（けさ九時、前田博士来診、妻の検便の結果虫ありと、ただちに入院を依頼せしも返答曖昧、来診料三〇円、葡萄糖注射料二〇円薬代五円）。

四月一九日　国分夫人麟家へ来り、わが家へも挨拶に寄る。国分氏は接収未了のため天津貨物廠に残されしと。小林俊文君より来信、同盟通信社の同志に委細をきけと。午後買物ハブ茶三円五〇銭、卵三ヶ一〇円五〇銭、納豆二袋八円。前田医師来診せず。炊事巧みとなる。本日配給米一四キロ二七円三〇銭、野菜（カブ、白菜）二円一五銭、鰤六きれ六円三〇銭隣家河田夫人よりほうれん草たまふ。

四月二〇日　午前中に三度前田医師を訪ひ、二、三日中に空室出来すれば入院さすと聞く★二女と散歩、飴買ひやる、一〇円。阿佐ヶ谷にゆき古本屋和堂探せしも見当らず。富山房より来信、「東洋史辞典」中止せしと。服部正巳君より来信、去年九月一二日復員せしと（★註――のち入院してわかつたことだが空室はいくらもあり、入院を容易い許可されなかつたのは、新円拂底の折柄支拂ひ可能や否を疑はれたからであつた）

四月二一日　弓子をつれて丸三郎君★を訪ひ、追放の可能性ありやと問へば「大いにあり」と。ともに高円寺を散歩。帰りて炊事。当守中、叔母宅より妻の見舞に卵一〇ヶと米一升もち来りしと。渡辺上等兵より来信、伊勢崎に在りと、初年兵、特にわれに深切なる上等兵なりし。二一時山内四郎君来り、泊めてくれと、二日前アメリカ軍の自動車運転手となり、月給五〇〇円の約束と。（★註――当時東京地裁検事）

四月二二日　午すぎ妻不快を訴へしゆゑ、前田博士に赴きしに即刻入院せよと。近所の石原本家にてリヤカー借、弟と押しゆく。この日われも看護とて病院に宿泊。

四月二三日　朝より輸血すべしとのことに、妻の従弟経男にたのみにゆく。一二時ごろす

み、病人★寒気ののちやゝ元気となる。夕方、先刻礼にと与へし四〇円を経男返却に来る。伯母に叱られしとなり。この夜また病院にて宿泊。

（★註――妻は血液型O型なることとてわれは輸血者たり得ず）

四月二四日　昨日の輸血わづか一〇〇瓦ゆゑ本日再び行ふと。姑と同道、経男にまた頼む隣家の西田夫人、姉にわが就職あり、行かぬかといひしと、中学教師らし。一二時再輸血一〇〇瓦。次女弓子、検便の結果虫卵発見、けふよりまた入院す。

四月二五日　朝、弓子再検便、十二指腸虫の存在まちがひなしと。雨の中を長男長女の飯運び来るが哀れなり。夜妹千草来る。小山正孝氏よりハガキ。夜、妻下剤をかく。

四月二六日　小雨。けふよりわれ炊事を家に帰りて行ふこととす。日塔聰君来り、某書店わが「杜甫伝」欲しとなり。妻けふ虫下る。長男濕疹のため休校。

四月二七日　小雨。長男濕疹甚しとて阿佐ヶ谷の井上医院へゆく。船越耐にたのみ、紹介されゆく。夫章君よりのハガキ来あり、仏領インドシナに昭和一八年放送業務にて行きありしなり。次女本日下剤三回目、ややに衰弱するものの如し。本庄実先生、小林俊文君よりハガキ。「聊斎志異」訳す。

四月二八日　昨日の長男の濕疹手当料一四円と。次女また下剤をかけらる。絶食さすといやがる薬飲ますとに大苦心。赤川草夫氏来訪高円寺三丁目にあり、肥下恒夫君に会ひしとけふ丸三郎君に会ひわが帰りしを知りしと。昆布の佃煮賜ふ。隣組より妻へ見舞金二七円五〇銭を賜ふ。「聊斎志異」つづけて訳す。

四月二九日（天長節）　国民学校にては君ヶ代斉唱のみ。国旗かかげし家寥々。木村女史見舞に来り、二〇円賜ひしと。夜、大垣国司君来る。病人、食欲出づ。

四月三〇日　妻また輸血の必要ありと。岡田家一同、人形もちて見舞に来る。薄井敏夫君来る、わが応召知らず、帰還の挨拶に驚きしと。父よりハガキ、金尾文淵堂に話しやらんと。天津の知人入来院秀麿、松崎誠両氏より来信。

五月一日　妻、夕方下剤をかけらる。伯母見舞に来り、魚、卵を賜ふ。

五月二日　昨日と今日と配給のパン少々盗まる。同居Mの子供の所業か、不快。父より手紙、金尾文淵堂五〇〇円、俊三郎叔父一〇〇〇円用立てくれしゆゑ、長弟持参と。ただし文淵堂は「杜甫伝」欲しと。妻、次女ともに病状良好らし。

編輯後記

この間小野十三郎氏の若さには感歎した。大毎紙上で類りに「時代のずれ」と云ふ新語を振廻してゐたからである小野氏の云ふ時代とは十年なのか百年なのかそれはしらない。もつとも彼の詩は風景ばかりで、ビケでも張つたやうに人間を遮断してゐるから、老に超然として一人若くをれるのかもしれない。このほど清水文雄氏が――と云ふより三島由紀夫の先生、伊東静雄の畏友と言つた方が一般には通りが早いが――岩波文庫で和泉式部歌集を出した。帯封に「和泉式部が詩人として正当な評價を得る迄には略千年を要した」と書いてある。この千年なぞ小野氏にはまさに有史前に当るであらう。（O）

どうんの通り今号より頁は倍になつた。当分これでやるつもりなので、同人諸氏のものはもとより共鳴する方々の原稿もある程度はのせられると思ふ。太田浩君の詩はその最初のものである。定価は倍以上の三〇圓になつたが、郵税はとらないこととしたのでおゆるし願ひたい。大阪商人の血が反對に働いて、文學などでなんの金儲、丸損で結構だと思つてゐる。もつともかやうな劣等感は大阪人の私だけで、小高根君は秋田産、福地君は佐賀の葉隠れである。（T）

果樹園　第四号（毎月一回一日発行）
昭和三十一年五月一日
布施市西堤町六〇七
編輯兼発行人　田中克己
大阪市東住吉区桑津町三丁目十一
印刷所　元市印刷株式会社
布施市西堤町六〇七田中克己方
発行所　果樹園発行所
定価　三十円

果樹園

第五号

書簡から見た伊東静雄　小高根二郎
石炭　浅野晃
人生風景　上村肇
兄に　岩崎昭弥
死の数年まえの記録　山岸外史
花　服部三樹子
中国古詩私抄　森亮
蘇鉄の歌　福地邦樹
松のみどり　池澤茂
びつこの天使　齋田昭吉
灰のふる都　小村京子
金尾文淵堂年譜稿　田中克己
Say it with flowers　たかはし・しげおみ
夜雨　芳野清
嵐　森房子
編輯後記（O・T・）

伊東静雄の描いた時計台

書簡から見た伊東静雄（五）

小高根二郎

伊東は百合子さんにゆくりなく街頭で出会つてから間なしに、青木のお母さんの家であつた寺町の下宿から、吉田の下宿に引越した模様である。いつもは京都より……と簡單に発信地がしるされてゐるのに、特に、京都吉田より……と書かれた、五月中旬か下旬と推定される書簡が二通ある。

「安代さん。先日来隨心（ママ）が乱れて立つても居てもおられない様な気がしてすごしましたけれど、一昨日あたりからやうやくおちつきがやつて来て、この夕方などには、こうして安代さんにお手紙でも書いてみようかといふ様な気分になりました。只今丁度吉田山を越へて神楽岡まで風呂に行つて来た所です。単調な生活ばかりしてゐますと何か少しでも変つて暮してみたいといふ心がおこつて来ます。何でもないことですけれど、いつも行く近所の風呂にはゆかないでわざわざ四五丁もある神楽岡まで行つて満ち足りた様な気持で手拭を下げて、かへ

つて来ました。…中略…

私がこの手紙を書いてゐる机の上には久し振りに花瓶なぞおいてあつて、それにミルク色のバラがいけてあります。花瓶といつてもインキのビンをよく洗つて、文学部の裏庭にはへてゐた野生のバラを一枝折つて来てさしておいたのです。たつたこれだけのかざりですけど、何とも云へない平安を私の心に与へてくれます。もう柏餅も店になくなつた頃ですし、今から、あの餅を買ふかはりに花屋から花でも買つて来てさす習慣をつけようと思ひますよ。安代さんのお内の食卓には今頃何が咲いてゐるでせふか。あの香が室一杯にひろがる様な花の名は何といつたんでしたかね。すぐわすれてしまひます。日記もくわしくつける様になりました。原稿用紙を買つて来て、それに歌を書いたり、一寸した文章を書いてみたりする心にもなりました。こんな日が毎日つづいたならばと思ひます。…中略…

昨日は雨がしとしとふる中を傘をさして仁和寺から嵯峨野をとほつて嵐山に行きました。嵯峨野にある日本最古の池広沢の池は沼に似た沢で、私はその岸の児神社といふ小さいほこらのそばにある樟の木の下にかゞみながら晩春の雨雲が、雨をふらしながらその沼を過ぎるのを見ました。

（昭和二年五月―推定―京都吉田より五軒邸九〇酒井安代さん宛封書　姫路）

いつもは感激、ないし、昂奮にまかせて書いた……と云つたフラグメント風な文章であるが、この書簡は珍らしく文脈が整ひ、沈静さをひそめてゐる。孤独な青春のやりどのない倦怠と、家庭の団欒の食卓に寄せる郷愁とがむせぶばかりに溢れてゐる。

この書簡の末尾に、広沢の池で伊東は雨雲が晩春の雨を降らしながら過ぎるのを見送つてゐるが、藤原定家の長男為家も同じやうに昔晩春の雨を見送つてゐる。「広沢の池の堤の柳かげ緑も深く春雨ぞふる」（風雅和歌集）又、伊東が蹲つた児神社と云ふのは、すぐ近くにある遍照寺の開祖寛朝が入滅した時、その後を慕つて投身自殺をした稚児の霊を祀つたものださうである。

さう言へば、伊東の姿勢はまやま型であつた。心持ち猫背であり、痩腹で内股の彼にとつては、脛を二本立て、その膝頭に上半身をもたせかけて蹲る姿勢は、最も安定したスタイルであつたに相違ない。後年の、とある夏の日、南大阪の歓楽街「新世界」を彷徨してゐた彼は、ふと目まひを感じると、そんなスタイルでエッフエル塔まがひの通天閣の空洞に、蹲つて了つたことがある。そこらに散乱してゐる南京豆の三角袋や、夜は其処を伏所とする乞食達のムシロの切れ端や、さてはアイス・キャンデーの箸棒を凝視めて死の幻覚と戦ひながら、その塵埃の中から詩を拾つてゐる。

八月の石にすがりて
さち多き蝶ぞ、いま、息たゆる。
わが運命を知りしのち、
たれかよくこの烈しき
夏の陽光のなかに生きむ。

第二詩集『夏花』――八月の石にすがりて――

言はばこの特異な伊東の蹲るスタイルは、忍苦の姿勢であつたと言へぬこともない。この忍苦の姿勢から、やがて伊東は祈りを見つけてゐる。

「毎朝、人の起きない内に、上大路の屋敷町をぬけ、椎の木の暗い吉田山を越へて、真如堂（註・鈴声山）とか黒谷（註・法然の初道場黒谷光明寺）とかの静かなお寺まで散歩する様になりました。

朝の吉田山を越へながらの黙想や祈念は私の生活にいちぢるしい緊張を与へて呉れます。

私の今日一日小さな感情にとらはれません様に、

私が今日一日中樞で動いたり考へたり出来ます様に、

そんなことを口の中でつぶやくこともあります。」

この祈りも伊東の終生変るところがなかつたものである。伊東は日頃、「敵意を感じぬやうな友情は真の友情ではない！」と断言してはゞからなかつたが、愛情を持てば持つほど、その裏合せの憎悪も激しかつたに相違ない。さうした自分の激情の性格を知りすぎるだけ知つてゐただけに、「小さな感情に捕はれず、中樞で考へる」と云ふ自戒を、祈りとしたものであらう。

「安代さん。この手紙も、丁度その散歩をおへて静かに机によつて書いたものです。いつもよく来て騒ぐこの辺の子供達も未だねむつてゐるのでせふ。然し、もうすぐ、窓の下の街路で聲をあげて、かけまるでせふ。それまでにと思つてこの手紙を書いてゐます。

安代さんは相変らずお忙しいことだらうと思ひます。五軒邸のことを想ひ出し、あのピアノのことを想ひ出してみると、やつぱり行つてみたい気持になります。

近頃、私の歌も大分変つて来る様でございます。

君が汲みしお茶をしばらく前に置きほゝづきに似し月の出を見る
何処より集る児等ならむ夕影のこゝの小路に聲あげ騒ぐ

やうやく一道の光を見出しかけた様に思はれます。

百合子さんにはお手紙を上げては悪いだらうと思つて遠慮してゐます。あなたからよろしく申して下さい。」とある。

この書簡で面白いのは二伸である。

「時計がこはれてしまひましたので、時間を知りたいと思ふ時には大学の時計台を仰ぎに行きます。何度も何度もそうしてゐる内に、時計台に対して、生き者に対する様な親味な心持を感ずる様になりました。そして、夕方とねる前には、大概時間の見当はついてゐてもわざわざ時計台の下まで行つてみます。そうしないでは済まない気持がするのです。私は暇の多い自分の妙な興味をおかしく思つて苦笑することもあります。」

（昭和二年五月――推定――京都吉田より姫路市五軒邸九〇酒井安代さん宛封書）

尚、この二つの書簡にはアルバイトに頼まれた幼稚園の助教のことが見えてゐる。先の書簡には

「幼稚園にもこの頃は一つも行きません。どうしても未だ子供達と一緒に心安く遊べそふにもありません。私一人の身体や心をもてあましてゐる様な近頃の私ですから。」

とあり、後の書簡には

「二三日前、友達と二人で幼稚園に行きました。その男は子供達の前で童話をしたり踊つたりしました。私はその様子をくすぐつたい心持でながめ、先生／／と云つて、私共に甘へかゝつて来る子供達に当あくしてしまひました。もうあんな所には行くまいと思ひました。まだまだ私にはそんな資格はないらしふございます。」とある。

若さに似合はず渋い顔をした蓬髪の伊東が「センセ！」「センセ！」と園児達に甘へかかられて、僻易してゐる照れた微苦笑が見えるやうである。もつとも、伊東が幼稚園の助教に頼まれたのは、恐らく彼がすでに童話を手掛けてゐたからであり、創作童話でも話させるつもりだつたのであらう。伊東の茶褐の瞳孔の焦点の鋭さに人見知りもせず、園児達がしなだれかゝつたのは、彼の瞳孔の底に滲へられてゐる無心の純粋さに、共感を覚えたからに相違ない。

伊東は学期休の飯省の途路には、必ず姫路の酒井家に立ち寄つてゐたが、どうしたこと

石炭

浅野晃

炉にいぶる生木よ
とめどなくしみ出るわが涙よ
音たてて赤々と燃えすすむ
それの焔の色とりどりの無言よ
まるめて棄てられた紙すらが
夏の夜の花火よりもやさしく
いづれむかしの愛憎の
あまりにも遅すぎた葬りの火だ
すれば石炭の祝祭の日の
あのやうな花やかさを怪しむな
昇華しつくした生のはてに灼熱の
死のこのやうにみごとな結晶
年輪といふもおろかな大年輪の
よくも堪へた暗黒の日の光沢よ
生きたその日に燃えつづけ
死んでのいままた燃えあがる
傲岸な鉄の塊を氷河と融かし
いかにはるかな哀歓の記憶を語らうか

この手紙が安代さんの所に行く前に、私はもう姫路をとほりすぎてゐることだらふと思ふと、変に徒然ない（註・とぜんない―佐賀地方の方言。所在の意）様な気持になります。山口に寄つて、近所にある湯田といふ温泉で十日ばかり遊んでから家にかへらふと思つてゐます。身体が衰弱してゐますので、保養が第一と思はれますから。……」とある。

この文面から見ると、身体の衰弱の保養で姫路に寄らず湯田行を急いだことになる。

「安代さん。

相変らずお忙しいでせふ。然し忙しいのがいゝのですね。私ももう少し忙しかつたらと思ふことがあります。二三日風でねてゐました。去年の秋にあなたから送つていただいた、うがひ薬や風薬を、今度も机のひき出しからとり出して、なつかしい気持で用ひました。安代さんはおぼへてゐますかあのうがひ薬の入れてある状袋の表にはこう書いてありますよ。

クロール酸カリウム
ウガイ用

一袋を、大コップ一杯位にといて用ひます。はじめ熱湯少し入れてとき後、微温湯にします。

私がわざわざ、こんなことを思ひ出してか大学二年の夏休には立ち寄つてゐない。もつとも、その年の正月は飯省せずに酒井家で新春を迎へてゐたので、いくぶん遠慮があつたものか、それとも諫早の両親や弟妹に一年も顔を合せてゐなかつたので、飯心矢のやうなものがあつたのかもしれない。それにしても休暇前の酒井家の食卓に寄せる濃厚な思慕を思ひ合せると、少し妙である。しかも真ッ真ぐ飯省せずに、途中山口に九日間も滞留してゐるからである。

「安代さん。三日夜一時前。

もうおやすみでせふ。私は明日の夕方の汽車で京都を立たふと思つて、この夜更に小さな荷を一人でこしらへてゐます。こうして、出立の用意をしてゐますと、心が一人でにしみじみして来ます。妹に浴衣を買つて土産に持つて行きます。さぞ喜ぶだらふと想像しますと、微笑が浮んで来ますよ。大丸から今夜求めました（少々、気まりが悪ふございました）。

書く心持を安代さんはおわかりですか？
暇人だとお笑ひ下さいますな…中略…

妖のごと遼天はるかに湧く雲に
駆け入る鳥は何の鳥ぞも
病熱ゆえにうつそみに湧くほとの汗をぬぐひて我は淋しかりけり

百合子さんにもよろしく。あれから又一度もあひません。

山口に行つたら、大塚に山口の風影を写生させてお送りしませふ。大塚も毎日毎日侍ちくらしてゐるそふです。私もゆつくり泊つて行かれるのがたのしみです。…以下略

（昭和二年六月三日京都より姫路市五軒邸九〇酒井安代さん宛封書）

伊東は安代さんから沢山靴下を貰つたり、紙に包んで小遣を貰つてゐたことは、先の五月の書簡に見えてゐた。その上風邪薬まで送つて貰つてゐたわけである。痒い所に手の届くやうな母性型の安代さんの温情に対して、「わざわざ、こんなことを思ひ出して書く心持をおわかりですか？」と云ふ伊東の言分はいささか謝情の押売である。伊東の詩句に

われ縦令王者にえらばるるとも
格別不思議に思はざるべし

第二詩集「夏花」――夏の嘆き――

があつたが、この詩人的な一種の独善は、ここにも萠芽を見せてゐるわけである。それにしても、二首目の陰部の汗を歌つた短歌を、適齢の処女に書き送るなぞとは、いささか傍若無人である。が、先の独善、この傍若無人を敢てなし得る者のみが、真の詩人となる資質であるかもしれない。

「安代さん。今夜は山口に来てから四日目の晩ですよ。母屋の方から小さい机を借りて来て、むかひ合せになつて勉強してゐます。大塚は土曜日に光学の試験があるんだと云つて丸や三角の沢山書いてあるノートを読んでゐます。私は万葉の書写です。大塚は凪の弓術の稽古で疲れるらしく、机によりかゝつてよくうとうとします。そしてひよつと目さめてあゝと云ひながら、二人で顔見合はせて笑ひます。頭張れ〳〵十時がなつたらうどん食ひに行かふなどとはげまし合ひます。私共がゐるこの家は森の中の旧家の離れで、一面は沼に添ふてゐます勉強につかれると、その岸に腰をおろしに行きます。赤い菱が一杯ういてゐますよ。大塚は八時からこのがけの下の方にある高等学校に出かけて行つて夕方にかへります それから、つれ立つて湯田行きです。湯田といふと、私共の家から十五分ばかりで行ける小さい湯の町です。湯には入る人はいつも少ないもので、私共はいつも二人きりで、その古めかしい、むしろ朽ちかけた風呂のふちに頭をもたせて、ぼんやりしてゐると、大変心がしみじみして来ます。そんな時、いろんなことを噂します。安代さん達の話もよく出ます。手拭をさげて、かへりかけると、もうまつくらです。田の中の道を歌ひながらあるいて来ると鴻南寮の窓の灯が二列にならんで見へます。心も身体もしみじみとおちついて来ます。私はうれしくてなりません。

窓の下には紫色の、鈴蘭によく似た花が咲いてゐます。朝などはこの家にとりまいてゐる森に鶯さへ来てなきます。私と大塚は朝の床の中にゐて、一緒に耳をすましてその声をきゝます。

大塚が今、安代さんに送つてあげる絵を書いてゐます。まずいからどうも、と何辺も云ひ云ひして書いてゐますよ。…中略…

同封してあるのが大塚の絵です。うまいでせふ。（昭和二年六月十日山口町糸米兼安方より姫路五軒邸九〇酒井安代さん宛封書）

この文面から見ると、伊東は保養を要するほど肉体も精神も衰弱してゐないやうである。否、むしろ学期末試験の勉強と弓の猛練習でへたへたと疲労してゐる友を、「頭張れ！」

「頑張れ！」と激励し得るほど元気旺盛である。元気旺盛とはゆかないまでも、まだ余力を持つてゐる。或ひは一週間の温泉浴で都塵にしなびた細胞を賦活し得たのだらうか？それとも、どうともあしらひかねた得体の摑めぬ倦怠と、どうやりどもない底なしの思慕とを洗ひざらひ友に語ることによつて救はれたのであらうか？　兎に角、伊東は何か精神的な転機を意圖したやうにうけとれる。

同封してある大塚氏の絵は稚拙だが気分が出てゐる。遠景にいただきの円い山が二つ重なつてゐる。その麓には書割のやうな森が左右に延びてゐる。その森には、「時々狐がギヤギヤと鳴く」「ふくろうの鳴く森」と伊東が註を附けてゐる。中景として糸米家の主屋と藁葺の離れが描いてある。離れの窓に、胸から上を覗かせた着物と学生服の男が土偶のやうにならんでゐる。右は伊東、左は大塚、と註がある。近景は不分明だが、家に沿つた道路のこちらは、菱の浮いた沢のつもりらしい。「もう蜻が飛ぶ」と説明してある。この絵の末端には、勉強時間を割いて、見も知らぬ安代さんのために絵を描いてくれた大塚への伊東の謝辞――「ようかけたのまいし、さんきう」が書き添へられてゐる。まことに「さんきう」であつたわけだ。

人生風景

上村　筆

泉水の石の上に
いっぴきの小さな亀がいる
亀と気付くのに少し時間がかかったのは
亀の色と
あたりの石の色とが
まったく同じだったからだ。
見定めると
亀は、はっきりとした
亀の姿をしていて
亀以外の何ものでもないのだが。
首を出し　頭を上げ
やがて　しずかに手足を動かし
あやまって　ぽとんと水に落ちた。
私はそこで始めて安心した。

五月の鯉

ひさしぶりに五月の風にのっている
かぜはおれの臓物を吹き流し
正一位稲荷大明神の
汚れた日本の旗のところで鳴っている。
おれを空につるし上げた若いおやじは
おれの眼のとどかぬ
あの山の向う
ほこりだらけの競輪場に朝からでかけ
おれの眼の約六〇米斜右下の畑で
金属性の鍬をふり上げているのは
六十五になる祖父と若い妻女だ。
飲むことばかりの好きな連中が
節句のよるをあつまり騒ぎ
死んだ筈だよお富さんと
どら聲上げて立上る
俺は今夜　煤けたたんすの上から
おりたたまれた体で眺めるのだ。
向きを変えた俺のあぎとの下は
いま光る川をへだてた一面の麦畠
その麦畠の中を
置物のように走っている列車
その列車の窓による
単純素朴な
最初の色彩だけの思考よ
君の姿もやがて
山かげに消えて見えなくなる。

兄に

岩崎昭彌

お前の墓が出来た
十二年後になつたが許してくれ
祖国がお前達の死んだビルマへ
遺骨収集に出掛けたのも此の春だ
無論捨はれては来なかつたけど
家にはちやんと遺髪が残つてゐる
門出に言つた感激の言葉
萬歳　萬歳　天皇陛下萬歳！
入営して一ヶ月目に
雨期のインパールへ送られたのだ
死亡公報にかう書いてある
　昭和十九年八月十五日
　テイデム北方約十粁に於て
　頭部腹部貫通銃創により
　壮烈なる戦死を遂ぐ
親切な嘘が今になつて分つた
飢餓とマラリヤと赤痢に悩まされ
戦闘は一度もせずに退却して
戦友と一緒にのたれ死んだのだ
僕は生存者の一人に昨日会つて来た
痩せ衰へた二人の兵隊があふ向けて
土人の小屋で寝ころんでゐる
投げ出された跣足の蹠は変形し
泥と血にまみれて妙に青白い
「眠るなよ　眠るなよ」
「眠らないが眠い」
「眠つたいかん眠つたら」
「眠らないが眠い」
「我慢しようもうじき誰かやつて来る」
日暮の風が佛のやうな二人の顔を撫でる
思ひ出したやうに懶い語調が続く
「俺は志摩半島の波切ぢや　帰つたら
　うまい魚を喰はせるから来いよ」
「俺は近江だよ　美しい湖があつて
　美味い米がとれる処だ」
「あゝ　白米が喰いたいなあ」
「喰いたいなあ」
「みんなはどうした？」
「先に後退したよ」
「馬鹿いへ　しかし
　眠いのを我慢しとりや誰か来る」
「眠いなあ　眠い……なあ」
「眠うても眠るな　眠る……なよ」
遠くで忘れたやうに砲聲が響く
日暮と共に深い深い睡りに
落ち込んでいつたのだ
中隊長戦死　中隊長代理戦病死
小隊長病死　小隊長代理戦病死
生存者は中隊中たつた四人だつた
帰つて来い　帰つて来い
インパールの西方一五八哩附近
テイデム北方約十粁の山小屋に
何時までも眠つてゐずに帰つてこい
あの美しかつた　二十才の肉体は
もう白骨となつてゐるといふのか
それでもよい。悲しみはしないから
ゆふべの夢を母が今朝話してくれた
骨だけの手で裏口の戸を開けて
只今といふお前の姿をみたと
今夜はその夢を僕が見るだらう
お前よ　あの日見送つてくれた
町の人々や親しい友達にだけでも
もれなく帰還の挨拶をしてほしいのだ
お前の墓が出来た
十二年後になつたが許してくれ

死の数年まえの記録

山岸外史

ぼくは何処かで(死)ななければならないのです。詩人は、いつか、自分の運命を豫知しているらしいと思っています。近頃、墓地の夢ばかりみつづけました。いつもだとそんなことくらい全く平気な男なのですが、近頃の墓地の夢は(恐い)と思いました。生理に新しい感情がおこっているのです。むろん、いまぼくは、この男としては、じつにめずらしい(レントゲン写真)の病気を一年半まえからやっており、たいしたことは全くないのですがその太陽の黒点の作用で、ときどき、息を切らしながら町を歩いています。まる一年も寢て、半ケ年くらい起きたり寢たりしているのです。昨年末、(働くひとたち)のある文学々校の、ある小さな組の(忘年会)で、つい、盃を手にしてしまい、大酒しました。きっと、忘れたいものが沢山あったのにちがいないのですが、そのあと、暮れの三十一日、二百三十円だして買った襖紙の張りかえがききました。女房といっしょに寢たこともきいたとみえて、腰の骨を痛めてしまい、なかなか、つらい思いをしました。二十年の大酒も、ついに、そのきゝめをあらわしてきたのでしょう三百メートルのところにある銭湯からかえってくるのに、二回も、路傍に蹲って喘いだりしました。じつに(生きていること)がよくわかりました。むかしから知ってはいたのですが。女房が心配して買ってくれた薬アリナミンというのが利いて、二十日間かかって癒りましたが(もっとも、中途、もう一回、女房と寢ているのですが)全く恢復力がおそいのに年令を感じました。ついに、ぼくも、年令を感ずるようになったのです。もうイケナイという感情が六十パーセントくらいあります七十パーセントです。むかしは、原始動物のように、三日で癒りました。どんな病気でも三日で癒ったのに、今日では、二十日間もかかるのです。その上、まだ、すこし、3/100くらい、尾をひいています。しみじみとするのです。この新しい体質のなかで、(文学)の新い芽を感じています。戦後、十年で、ようやく(鉄壁)の城の壁にさわりました。じつに頑丈な鉄の壁に。入口をさがしました。この壁だけは破れるものではないことがわかったからです。(自然児)ぼくも、ついに、(人工)と(科学)のまえに屈しました。(科学)をとり入れてゆくことにしたのです。スナオになった訳です。まだ、ホントのスナオではありません。カナシイコトには、ホントのスナオさのない体質です。ムロン、ホントの(抵抗)が

花

服部三樹子

綿菓子の花ふふくごと舞ひ出れば我に少女
の日のありにけり
ちちのみの父の系譜に連なりて気位高く花
の下びに
身のうちを流るるものの熱ければ涙としら
ずきのふまで来し
たとふれば枕詞のごとくにも思ひし言葉
いまうちに燃ゆ
君によるかなしみならぬ涙をも切なきは
みな君に流しつ
清からずと思ひし言葉まざまざとほかの
言葉は持たず言ひ初む
眠られぬまだ夜と思ふに暗き中鐘の音聞
ゆ鐘撞く人あり
瑠璃の地と人の歌ひし思ふとき我が貧し
きもかがやきて落つ

はじまっていて、規則的に勉強をはじめています。去年の正月から、エンゲルスの(自然辯証法)からのやり直しをはじめ、じつに、二十年来の勉強をやりました。ようやく、ロシヤ文学が、モノスゴク面白くなって、ゴーリキイ、ショーロフなど熱読しました。チモフェーエフの文学理論、アスムス、ニコラエバ、イワノフ、むろん、マルクス・レーニンの文学論、ことに、ゴーリキイによって、改めて、文学が、じつによくわかってきました(文学)はオモシロイです。やたらにオモシロイ。(宝庫)のなかにいるような気がします。入覚してから八年たっています。ようやく(肉迫)がおこってきているのです。それに、この軀でしょう。(条件)はそろっているのです。じつは、もう十年はやく眼ざめるべきだったと考えて、菲才を嘆きました。シカシ(前進)です。ぼくの(合理性)がムキだしになりはじめました。(骨)だけで生きているのです。そして、人間は、きっと、どこかで死ぬものなのです。今日まで、(永遠)というコトバの幻想があったのではないのでしょうか。(青春)というものは、カナシイものです。

ところで(果樹園)を送っていただき、とても、気に入りました。いい仲間たちです。信頼できると思いました。安心もできると思いました。もっとよく読んでみますが(魂)があります。すくなくとも、これらの(抒情)はぼくにとっても(故里)なのです。

夢の話に戻るのですが、墓の夢をしきりに

中国古詩私抄

森亮

もぐさうごかし

藻ぐさうごかしいかい魚
蒲のみどりの蔭をゆく、
都に王の坐す日ごろ。

藻ぐさのしたにいかい魚、
ちまたに移るひるのとき、
王の宴はたけなはに。

藻ぐさのしたに魚ひそみ、
蜻蛉ねぶたき日の暑さ、
王は酔ひしれ給ふなり。

★

空を仰ぐ

天の河たかくかかれど
道くらく吾が足なやむ。
いつくしきひかりはなてど
牽牛は吾が荷を牽かず。

みんなみにきらめく箕星
世のさまのよしあしを篩にかけず。
大いなる北斗のひしやく
汝がためになにをか汲まむ。

あかときにぬる織姫ら
ゆふされば また起きいでて、
しろがねの梭をし走すれど
人の世の織物を織るとも見えず。

註　二篇とも詩経を訳したもの。「もぐさうごかし」は二〇三番(小雅、大東)で「空を仰ぐ」は二〇二番(小雅、魚藻)であるが、いづれもヘレン・ウオデルの自由訳にもとづく。大東のウオデル訳は七聯から成る原詩の第五聯後半以下を極めて自由に訳したものである。その英訳の冒頭は「私は天空にミルキー・ウエーを見る、しかし此処地上にはもつとごつごつした(けはしい)道がある」となつてゐる。ラフ(ごつごつした)の比較級ラフアーが「道」に冠してあるが、ミルキーと對照させた鋭い洒落である。洒落は訳せないので、拙訳は星月夜に行き惱むことに代へておいた。

正誤　第四号「さはにゐぐさの」の第九行の「その夜ひと夜」は「その夜をひと夜」が正しい。

みた前後に、自分の(墓)の夢もみました。ちょうど、追分みたいな丁字路のところに立っていました。よくお地蔵さんなんかがたっているところです。身長くらいの太い普通の墓でした。ぼくの墓なのですが、大きく二字刻んでありました。いま、上の字が、どうしても思いだせませんが、下の字は(烏)でした。カラスです。上の字は(歴)でしたか、そのときは、よく読んでおぼえたのですが、いまはアヤシイのです。とにかく、意味はとれませんでしたが、下の字は(烏)でした。中国風の感覚がありました。オオ、ソウカ、と思いました。それをよくみながら、その前を五六間七八メートルすぎて眼がさめました。

一九五六年、われ、わが墓のまえをすぎぬと翌朝、考えました。それを、一九五六年、われ、わが墓を発見すと、ノートに書いてみました。すると、このモチーフからファンタジイが、ぐんぐん湧きはじめました。一九二〇年ごろから反省してみると、一九二五年、われ、蟻を発見す、だとか、一九二五年、われ、天才を発見すだとか、一九三三年、われ足の裏を発見すだとか、いろいろ出てきました。これは、(敵)は足の裏からもくることがあるからです。足の裏から突いてきます。宮本武蔵もこれには困るだろうと思いました。女を発見したのは、一九五五年です。ズイブン晩稲です。これは、いま、整理しています文学学校のこともあって、作文なんか読まなければならず、なかなか、忙しいのですが、一年くらいかゝれば(発見の年譜)ができると思うのです。むかし、こういうことを話すと太宰は、みんなもっていってしまったものです。彼は(発想)の才能は、あまり、ありませんでした。彼の才能は(表現)だけでした。(生理)はよかったですが。そして、じつに(正直)だったということです。(発想)は、ぼくの方がぐんとありました。これから(表現)の(才能)もやりたいと思っています。いいところにきていると思っています。

(墓)をすぎてゆくところは(故里)でした。自分の足が自分の(墓)のまえを七八メートルすぎたとき、その足のむいている(方向)は、あきらかに(故里)の方向だったのです。つまり、(抒情)の野山です。もう一度、抒情の野山で彷徨したいものだと考えました。これはぼくのカナシキ生理であり、そして、(時代)なのです。(時代)なのでした。人間は、(歴史)をこえることはできないことを確信できます。知性は、地上の歴史に敗北するものです。(彼)は、いつも、時代より先にいってしまうからです。そして、それは、(空想)とさえよばれてしまうからです。ぼくは、仮りの名(共産党員)で、実質は、(空想社会主義者)なのです。そういった方が、科学的にいって正確です。しかし、それが、日本の生理と社会科学の歴史だと思っています。(魂)の歴史だと思っています。その(空想社会主義者)がようやく、まぎれもない(現実)の鉄壁のまえにきて、いまや、(現実)の入口にさしかかっているのです。(現実)なんてすこしもオモシロイものではなかったけれど、そして、オモシロクなろうとしているのですが、(そしてぼくのヒューマニズム——抒情としてのヒューマニズムの生理が、この(当為)のまえに、厳格な首をもちあげるのですが)ついに、その鉄壁の入口のところで、フト、ふるさとを思ったのでした。だから(墓)は追分の丁字路のところに立っていたのです。しかし、こうハツキリしていくると、(ふるさとへの回帰線)ではなく、アッチの道へ、なおも、前進すべきかも知れません。さらに新しく、(リアリズム)の道へ。(汝、何処にゆくか)とペテロは、ローマでいわれたのでした。

(果樹園)の人たちには、こんな(言い方)はわかってもらえることが確信できるのです。日本におけるロマンをもっている人たち。良質の、そして、高いインテリゲンチヤたち。

ぼくはよびかけているのではありません。テルモピレの嶮崖の扼路のところで、スパルタ王レオニダスは、さいどの奮戦をしているのです。ただ、(祖国)をまもろうとしているのです。それは、ヒューマニズムでもなく、徹底しているエゴイズム、(情熱)なのです。ぼくは、日本を愛しています。

まず、一回分として、こんなことを書いてみました。(死)の何年かまえの準備的記録なのです。(死)の骸骨と(対決)しながら、僕は叫ぶのです。(もっと生きるんだ。暗闇は厭だ。)と。

蘇鉄の歌

福地邦樹

恒に色あざやかな真昼と精霊めく夜とは
いつの時から嘆きでけがされたことだらう
また　美々しい憂愁と
無益な夢ばかりが　いかに飽かず
むなしい空に向つて投げうたれたといふのだらう

大地のめぐまれぬ日
おののきつ咆吼する獣のやうに
あてもなくうつたへ
やぶれた思ひで僕らが偏執したものは
はたして何であつたらう

多くの忍辱ののちに
僕たちはしかし　傷つくことを
もはや曾てのやうには信じない
また　僕らの愛にしてもが
それほど美しかつたとは信ずることが出来ぬ
傷痕をもつて證され続けたものが
いかに真実に満ち
その憔悴にいかに聖的なかげが伴なはうとも
それは　すでに
亡びゆくものの眼差しではなかつたか

しかして
最後に僕らの心の内に残るものを
今こそ見るであらう
限りない不毛の出発のためのささやかな強靱
と
その祈念の清らかさとを

そして僕はいま想起する
かの年古りた樹木の伝説を——
蘇鉄は胸ぬち深く射込まれたものを耐へ
枯渇の樹液に吸収し
鋼のたましひに蘇ると

松のみどり

池澤茂

ぼくはそのとき、はじめての山みちをあるいていた。

一方はほそながい谷間だった。段々になった小さな田んぼが、末すぼみの形に、ずっと高いところまで、つくってある。去年の稲のきりかぶが、また、そのまゝ、残っている。そのうえに、雑草が、さゞなみのように、みどりの濃淡をひろげていた。もう一方は、すぐ山になって、松がしげっていた。あたりには、ぼくのほかに、人かげは、ひとつもない小鳥のさえずりさえ、ふしぎに、とだえている。たゞようやく春めいてきた日ざしが、みちの行手に、しろっぽく、ふりそゝいでいた。ぼくはそのとき、ふと、ひとつの感動に打たれた。あまりに、やすらかで、おだやかで、しあわせだったからだ。その意識はいたいほど、ぼくのこゝろに、しみとおった。ぼくはおもわず、なみだぐみそうになった。

それにしても、なぜ、こんなに、やすらかで、おだやかで、しあわせな気がするのか。なぜこんなに感動しているのか。それを考えていると、こんどは、ふいに、かなしくなっ

びつこの天使

齋田昭吉

きみは天使をみたことがあるか
ぼくのみた天使はびつこをひいてゐた
翼もない　竪琴もなかつたよ
はじめにみた時　それは蝙蝠のやうに
街燈の灯の影に　ふわつと消えた
もう一度
夜半過ぎの路地を　一羽の家鴨が
びつこをひきひき　不思議な丹念さで
いつたり　きたりするのをみた
ひとりの少年が松葉杖に重心をかけて
まるでコムパスのやうに正確な足どりで
ゆつくりと小さな宇宙をつくりあげる
歩くことがどれほど大切なことか
きみは知つてゐるか
きみは天使をみたことがあるか
ぼくのみた天使はびつこの少年だ

た。なにかによって、ぼくは知らぬまに、ひどく傷つけられ、見すてられているのだ。しかし、ぼくはじきに、あたまをふって、考えるのをやめた。めんどうなことや、なんにもならないことは、できるだけ考えないことにしているからだ。それよりも、せっかく与えられた平安や幸福なら、すこしでも多く享受するのがいい。よろこびの感動だけが、夾雑物などなく、純粋に停止して、その一瞬が永遠になればいい。そのために石になったとしても、かまわない。このあたりの松かげに、ひそかに満ちたりた心のまま、こけむして、そっとうずくまっている、まるい、小さな墓石、そんな自分をぼくは想いうかべた。

路はだん／＼急なのぼり坂になり、カーブして、行く手の山かげに、かくれている。はじめての路だから、どこへゆくのか、わからない。末すぼみの段々の田んぼは、やがて、がけに突きあたって切れてしまい、両側とも松のしげみになる。日のひかりがさえぎられて、山の気がにわかに、ふかまってくる。ぼくはいくらでも歩いてゆきたい気がした。山をこえ、谷をわたって、どこまでも歩きつゞけてゆく自分が、しきりに、想像される。せつなく、そして、さわやかな気持だ。しかしぼくは立ちどまった。坂がだん／＼急になり、脚が疲れて、歩きにくくなったからだ。ぼくはためいきをついた。それから、思いついてしばらく、深呼吸をつゞけた。みどりいろのすきとおった、つめたいジュースのような山の空気が、胸から、腹の底のほうまでしみこんでゆく。『やはり、生きているほうがいいな。石になるより……』と、ぼくは思った。しかし、いったん腰をおろしてしまうと、立ちあがるのが、もう、めんどうになる。足もとのほうにはさっき通ってきた段々の田んぼが、むこうほど低くなりながら、あちらの山なみのすそまで、つゞいている。ほそい谷あいで日光にめぐまれないせいか、麦は作ってない。不規則な形の小さな田んぼだ。石垣をきずき、土手をかためて、ようやく作ったわずかな土地に、去年の稲のきりかぶが、そのまゝ黒く、点々と、残っている。いつごろかこの山のなかへ逃げかくれて住みついた人々の、あるいは、その子孫の人たちの、だれかが、こんなせまい、けわしい地形にまで田畑をもとめて、きりひらいたのだろう。生活のいとなみのかなしさを苦しいほどに物語っている景色だ。

ぼくは目をそらして、空のほうを見上げた松のしげみのみどりが、山のかたちに波打って、ぎざ／＼に、くっきりと、空を突きさしている。そして、ずっと高いところに、トビが一羽、ゆっくりと、大きな輪をえがきながら、ながれている。ずいぶん高いところだ。何千年まえ、何万年まえにも、あのトビの先祖のどれかが、やはり、あのようにして、と

んでいたのだろう。人類のひとりとして、ただ生きてゆくだけなら、あのトビと、どちらが、かなしみや苦しみがすくなく、しあわせでいられるだろうか。文明が進んだといっても、ぼくたちには、大きな目的や希望など、持とうとしても持てない。いゝかげんなその日ぐらしで、その生活の本質は、衣食住や本能の満足だけに追われていて、どうせ原始的なものにすぎないのではないか……。ぼくはまた、頭をふって舌打ちした。つまらないことだ。だれもが考えてきて、しかも、どうにもならないことだったのだ。

松のみどりと、高い空の青と、たゞよっている雲の二きれ三きれと、トビの黒い点とが目にいたいほど、あざやかだった。ぼくは坂の中途に腰をおろしたまま、いつまでともなく、すわりつゞけていた。　（つゞく）

灰のふる都

小村京子

夢なく眠る
東洋の
灰のふる都に
杖をひけば
旅人をしばしうるほす
泉水は深くひそんで
かげもなく　今は
ガソリンスタンドの立つ
広場から百方に
白い道路がほとばしる
聖杯は行方不明だし
アラヂンの不思議の
ラムプはこはれて
消えた
人々は石と金属の
怒号の中に
祖先の言葉を忘れ去った
ただ詩人のみ頭髪の中で
不死鳥を孵すといふが
すこやかに育てる
緑を何処に求めよう
灰のふる
永遠の都
ここでは太陽が拝めない
恋人よ　火星へ行かう

地球

Bom-bom-bomb
誰がおれのこの分厚い胸を
たたくのか
そこには懺悔の言葉は播かれても
生れるものは武装した男たちだけだ

秋の歌　一

秋風が　窓ガラスに
さびしい日
五線紙を買った
描かれたのは　あなたの
目

秋の歌　二

眠れぬ夜
庭を橙がおちてころがる
暗黒の壁をはふ
情念の舌
女の髪　冷い

金尾文淵堂年譜稿

田中克己

このあひだ野田宇太郎氏が来阪のとき、文淵堂金尾種次郎翁のことを知りたいとの仰せだつた。私はたまたま「日記抄」(第四号)に記した如く父を通じて翁を識り、もし翁があとしばらく在世なら、その出版目錄に、私の「杜甫傳」も加へてもらへるはずだつたので、父にきき、自らもしらべて、ここに年譜をしるす。ただし倉卒のことなので、敢へて稿の字を附して、他日の完成を期する。

○明治一二年　四月二一日大阪市東区南本町四丁目三六番屋敷(心齋橋筋東北角)にて誕生。早く両親に死別(父に十歳、母に二十歳にて死別)。令妹一人は戦後夫君の郷里(北陸)にて死去。

○明治三二年　生家にて出版書肆を開業。月刊文学雜誌「ふた葉」を一月発刊。薄田泣菫「暮笛集」を一一月刊行。(八月?)文淵会を創立「ふた葉」をその会誌とし、図書雜誌閲覧室を店内に置く。

○明治三三年　三木天遊編「長春譜」、角田浩々歌客(勤一郎)「詩国小観」、高安月郊刊、賛助会員として小波、鏡花、蘇峰、眉山鉄幹、月郊、逍遙、綱島梁川、内藤湖南、天外、宙外、幽芳、抱月、須藤南翠の名を掲ぐ青木月斗等編　月刊俳諧雜誌「車百合」を発刊(?)このころ俳号を思西と称す。

○明治三四年　泣菫「ゆく春」、天遊「心の山川」、中村春雨「無花果」、川上音二郎・川上貞奴「欧米漫遊記」、浩々歌客「出門一笑」、ならびに「読書案内」、「漫遊旅行案内」を刊行。月刊絵入新体詩集「春くさ」を発刊(?)。

○明治三五年　湯浅半月「半月集」、菊地幽芳「よつちやん」、尾崎紅葉「藝者」、米光関月「薄墨の松」、月郊「重盛」、水谷不倒「菅公実伝」、梅沢和軒「菅公論」を刊行。

○明治三六年　「大阪名勝図絵」、月郊「春雪集」を刊行。

○明治三七年　大阪市中央公会堂に開催の恤兵音楽会に売店を開く。東京市神田区西今川町二番地に転居。児玉花外「花外詩集」を刊行。

○明治三八年　泣菫「白玉姫」を刊行。

○明治三九年　東京市京橋区五郎兵衛町二二番地に転居。泣菫「白羊宮」、岩野泡鳴「海堡技師」、野口米次郎訳ミラー「剣と戀の日本」、鳥居きみ子「上総のやどり」、河井酔

Say it with flowers

たかはし　しげおみ

田舎の町角に
花屋が出来て
「セイ イット ウィズ フラワーズ」
中学生が続んで通る
つられて僕も
「Say it with flowers
　Say it with flowers……」
通りすがりの
知らない花に
「ナナ!」と呼んでみる
そして　それが　忘れていたひとの
名前だったとは
奇妙な記憶発掘だ
偶然と忘却ばかりの僕の人生には
もはや花屋に立寄る餘裕もなく
口さきばかりで　もう一度
Say it with flowers

「金字塔」(同人「夜清集」はこの年の自家出版)を刊行。一〇月より浩々歌客、平尾不孤、泣菫編輯の月刊文芸社会雜誌「小天地」を発

夜雨

芳野清

目ざめて雨が降つてる
しと〳〵と私の心にひゞいてくる
過去は寂しい谷につらなり
未来だつて険はしい岩ばかり
鬱じみた壁にうなされその声で目がさめる
きまつてお化けの夢なのだ
生業に疲れた青ざめた男が見ると云ふ…
傷ましい浮世の河で私の舟はぐる〳〵廻り
ローレライの唄は聞えてこないか
長い髪の魔女だつていい
私は舟を捨てて水底にいつてしまひたい
(だが、そんなものもありやしない、この現世では)
私の頼りない心も知らず
すこやかな寝息を立ててゐる妻や子よ
私は目ざめて暗い囁き聲をきいてゐる
私の生命の滴りがつぶやいてゐる
その単調な繰り返へしを

茗「塔影」、與謝野晶子「夢の華」、中村春雨「密航婦」、菊地幽芳「妙な男」、大倉桃郎「琵琶歌」、柳川春葉「緑の糸」、須藤南翠「間一髪」、佐野天聲「露の曲」、山路愛山「社会主義管見」、綱島梁川「病間錄」、ならびに春雨の「通俗新約物語」、「通俗舊約物語」、「画解基督物語」、正岡子規遺筆「俳人芭蕉」等を刊行。「明治三十八年度白馬会記念画集」、「同太平洋画会画集」を刊行。鉄幹「むらさき」、晶子「みだれ髪」、同「小扇」、晶子・登美子・雅子「戀衣」、木下尚江「火の柱」、同「良人の自白」の重版を刊行。尾上新兵衛・鏑木清方主幹月刊「お伽世界」を発刊。

○明治四〇年　横瀬夜雨「二十八宿」、大倉桃郎「舊山河」、綱島梁川「日光錄」、清沢満之「懺悔錄」、海老名彈正「霊海新潮」、浩々洞々人「沈思錄」、同「欧心錄」ならびに「蕪村真蹟俳諧三十六歌仙」を刊行。

○明治四一年　長谷川二葉亭「うき草」を刊行。

○明治四四年　東京市麹町区平河町五丁目五番地に居住。晶子「春泥集」、同「一隅より」須藤光暉「愚禿親鸞」、同「法然上人・空海」を刊行。「畿内見物京都の巻」、「同大和の巻」を編して刊行、浅井忠・月郊・泣菫・晶子・中澤弘光の画と文とを載す。

○明治四五年　須藤光暉「蓮如上人」を刊行「畿内見物大阪の巻」を編して刊行。

○大正三年　北原白秋「印度更紗」、同「白金の獨楽」、晶子訳「源氏物語」、同「栄華物語」、同著「夏より秋へ」、寛・晶子合著「巴里より」、子規「獺祭書屋俳話」を刊行

○大正七年　平河町五丁目二番地に転居(?)晶子「明星抄」上・下二巻を刊行。

○大正八年　晶子訳「紫式部日記」、渋川玄耳「新訳平家物語」、白秋「真珠抄」、河東碧梧桐「三千里」、子規「子規随筆」、「続子規随筆」、「子規言行錄」、柳川春葉「生さぬ仲」、同「女一代」、同「母」、同「富と愛」、同「花売娘」、エフ・スタール「山陽行脚」、同「御札行脚」、水島爾保布著並びに画「東海道五十三次附瀬戸内海」を刊行。「畿内行脚」を編して刊行。薫花「死の蔭に」(大正六年初版)の重版を刊行。

○大正九年　上田敏訳詩集「牧羊神」を刊行

○大正一〇年　日本橋区大傳馬塩町一番地に転居。薫花「日本から日本へ(東の巻・西の巻)」、晶子「火の鳥」を刊行。九月春江夫人と結婚、時に四三歳。

○大正一二年　九月関東大震災に遭ひて帰阪大阪市外岸の里(いま西成区千本通一丁目一

六番地）に居住。長女静子生誕。
○昭和三年　賀川豊彦「傾ける天地」、中沢弘光「西国三十三所巡礼画巻」、望月信亨「浄土教研究」を刊行。
○昭和一三年　晶子「新々訳源氏物語」を発刊（翌年完了）。
○昭和一八年　寛「采歌集」、酔茗「真賢木」伊達俊光「大大阪と文化」、赤松麟作「麟作素描集」、上田令吉「根付の研究」、水原堯栄「真如親王御傳」を刊行。
○昭和二〇年　三月戦災に遭ひ、京都市中京区西ノ京円町一番地に疏開。
○昭和二一年　山田宗囲「茶を語る」、高島米峰「心の糧」、伊達俊光「トルストイ戦争と平和」、山田玉田「信心銘夜話」を刊行。
○昭和二二年　一月二八日狭心症にて逝去。享年六九歳。法名は誓誉高才文洞聖道居士。三月、赤松麟作「大阪三十六景」成つて刊行

（追記）薄田泣菫は一時、文洞堂に寄寓したが、結婚とともに京都市下長者町に家をもつたと、父の話である。明治三三、四年のことか。

思西と号したのは佛教信者だつたからである。四天王寺、住吉神社にはよく詣つた。また蘆花洋行のとき、門司までわざわざ同船して、そのおかげで蘆花の本を出版し得たと、これも父の話である。

嵐

森　房子

春今しもそこに噴き上る気配にて頃日われの苦し胸もと
用持てる人もなかなか眠たくて街あたたかにバスゆれ走る
木の芽らの点のやうにも小さきがいくらかづゝか日々にふくらみ
薔薇ひとつ咲きたる八重を突風がきのふ一日来て散らしたる
ひともとのさくらの大木満身に花咲かせゐて長き夕ぐれ
甲ひゐる何なき今を抱かれゐてなべて透明となりゆく刹那
精魂の吸ひとられゆく感じにて抱き絞られてゐたるしばらく
波浪の中揉みに揉まれてゐるわれの意識をしかと冴えしめて居り
よそゆきの言葉つらねて駘蕩と風吹いてゆく柳の青さ
哄笑にとばされてゆく一枚の紙あり紙に書かれし聖句

編輯後記

過日、野田宇太郎氏が来阪した。近代文学案内を書くためださうだ。遺跡や墓をあちこち尋ね廻つたらしいが、温故の精神が地を拂つた現代を痛歎してゐた。鬼貫の夕陽ケ丘の墓なぞ、住感さへその所在を知らなかつたさうだ。

山岸外史氏から、「果樹園」には魂が感じられると云つて寄稿があつた。

魂が感じられると言へば、角川小説新書として今度出た中河與一氏の「青衣の女人」である。「青衣の女人」と「求道女」の二篇が收録されてゐる。共に憔悴の痛さで魂が洗はれる思ひがする。ここには確かに人間恢復の祈願がある当今の世紀末的な頽廢文藝とは違ふのである。（O）

頁を拡大した二号めに、早くも原稿に困る経験をした。そこへちやうど森亮さんの推薦で小村京子氏の作品が来たどれもいい詩のやうに思つたが、相談して四篇をえらんでのせた。そのあとまだ不足なのに氣がつき困りぬいてゐるところへ、森房子氏の歌が着いた。時候はづれの寒い五月身心ともに疲労をきはめてゐるが、「果樹園」の編輯だけは一心にやつてゐる。御高庇を賜はりたい。東京から久しぶりに帰省された西垣脩氏の話ではなかなか評判がいいさうである。（T）

果樹園　第五号（毎月一回一日発行）
昭和三十一年六月一日発行
布施市西堤町六〇七
編輯兼発行人　田中克己
大阪市東住吉区桑津町三丁目十一
印刷所　元市印刷株式会社
布施市西堤町六〇七田中克己方
発行所　果樹園発行所
定価　三十円

果樹園　第六号　五月
泉翅陳掌
服部三樹子　池澤茂　浅野晃　田中克己　福地邦樹
リルケ傳説　たかはし・しげおみ
月に招かれた男　芳野清
昭和十九年三月二十五日　岩崎昭彌
編輯後記（O・T・）

書簡から見た伊東静雄　小高根二郎　森亮
ポムペイ　小山正孝
春雷　山根忠雄
金尾文淵堂のこと　壽岳文章

書簡から見た伊東静雄（六）

小高根二郎

伊東が大学時代もつとも昵懇につきあつた男友達は、京大生ではなく、同志社高商生であつた宮本新治氏であつた。宮本氏は伊東と同郷の同志社高商生市川一郎氏と下宿が同じであつたところから、市川氏を通し伊東を知つたものである。

当時、宮本氏は同志社高商の文藝部員をしてゐたほどの文学青年であつた。伊東は好個の文学的交友を得たと近附いたが、とりわけ宮本氏の重厚寛裕な人柄が、好き嫌ひの強かつた伊東に、胸襟を開かせたものであつたらしい。宮本氏はまた伊東の俊英さと性情の純一さに傾倒した。宮本氏は伊東を「いい男」と題し同志社高商学友会誌（第昭和三年十二月号六号）に詩で歌つてゐるほどである。

宮本氏は歌ができると伊東に批評を求めてゐる。伊東もまた詩や童話や短歌ができると先づ宮本氏に披露してゐる。

「宮本さん。…中略…只今、ひめじ、からかえつたばかりのところです。（早く試けん済め！　すめ！　すんだらすぐおいで　）「鼻の頭」の歌はすきです。「グリード」と「パヒニー」の歌は不可解。「人は皆」「秋の日」はいまだしい所がある様に思ひました。姫路に行つてなんにもなつた。只歌が二首出来たばかりです。やゝ自信があります。

播磨国原
穐つゞく山脈彼方の空あかりやがてひそかにきゆるなりけり
草原
赤はだの小山の上の人二人手に取るごとく？（話し聲きこゆ）

（昭和二年十月十七日聖ご院西町一元岡方より市内寺町今出川上ル二丁目西入ル川合方宮本新二氏宛はがき）

伊東は清爽な秋晴れの日に、団欒の食卓にふと郷愁を感じたものか、姫路に酒井家を訪れてゐる。文中「姫路に行つてなんにもなつた」は「なんにもならなかつた」の誤記であらう。この失望を、さらに如実に物語る葉書が、二日後にも宮本氏に出されてゐる。

「冠省。第一首。移らふ日。第二首。一時うれし。第四首。君ならぬおとづれ等今一考下さればいいな――と思ひました。「見えければ」の歌不可解。「見ずとこそ」の下の句や、名詞どめ強すぎて、作者の気分が通じにくい。「かはらざる」の歌が一番すぐれてゐると思ひました。妄言多謝〳〵

…中略…

おちやま　くるる
はりまぬ　かげる
いのる子は　たれの子

どんな女も女は冷めたいものをもつてゐるんですね。ある男にはその冷たさが女に対する恋情をあふり、ある男には恋なぞといふことにうんざりさせる。」

（昭和二年十月十九日聖、西町、一番地元岡内より市内上京区寺町今出川上ル二丁目西入北横丁川合内宮本剣治氏宛はがき）

この葉書に見る白秋調の唄は、先の葉書に見える播磨国原の歌を再構成したものである「祈る子は誰の子」で唄を結んでゐるが、それは伊東自身であることは、宮本氏には判りすぎるぐらゐ判つたに相違ない。それにしても末尾の女性の本性に対する反省は、呻吟するかのやうに沈痛である。かつて、お金を貰ひ、靴下を恵まれ、風邪薬まで送つてもらつて、感謝と親愛とで思慕した安代さんに対する反省批判であるとは受けとれぬ。

それらの微妙な事情を物語る、一ヶ月後に出された安代さん宛の書簡がある。

「安代様机下。…中略…

今日、学校が休みだつたので、ルソーの懺悔録を金にかへて博物館に信実註・画家、歌人定家の甥の三十六歌仙を見に行きました。皆大変感心した様にしてゐましたが、私は、有態に云ひますと一つもわかりませんでした。仕方がないので、女子専門学校のあたりから阿弥陀峰の方をあるいて来ました。その頂に豊太公の墓があるのです。恐ろしく高い石段が、のしかかる様にしてゐる老松の間をとほつて、上に登つて行きます。田舎から来たらしいおばあさんの群がはしやいでのぼつて行きます。そばにゐる男にきくと五百五十段あると云ひます。私は煙草をふいて悠然として見上げました。上ることはよしてかへりました。かへりかけると、女専の生徒らしい女達が、じろじろみて、意識してやつてゐる様な軽はくな笑ひ聲を立てました。人の心をひく笑ひ聲です。私はいやになつて、いそいでかへりました。うしろで又一しきり笑ひました。私はいまいましくさへなりました。」

この述懐の底に閃めいてゐるのは、先の宮本氏宛葉書の末尾に見える、女性の本性に対する反省、ないし批判が、まだ尾を曳いてゐるか？　と考へられる。「どんな女も女は冷めたいものを持つてゐる」。その女性の冷たい本性も、時に擬態、或ひは変態として、きやツきや……と気を引く嬌声を撒き散らすのである。伊東は忌々しげに厚い下唇を血の滲むほど噛むと、呆けた秋空の何処かで締りなく戸をばたん！　ばたん！　言はせてゐる、あの虚無の門の所在を、ま探つたに相違ない。

「近頃私は出家になつた様な心持で万葉の筆写をしてゐます。昔の聖が、経文をうつす心持と同じだらふと思ひます。誦してもあきません。

安之比奇能　夜麻治古延牟等　須流　君
乎　許許呂爾毛知弖　家須家久母奈之

下宿の主婦が二三日旅行してゐて、私一人がこの家の主になつてゐます。訪ふ人は勿論、便一つ来ません。都の中にすむ有髪の僧そのままです。然し、心はともすると乱れよふとします。若い者は澄してゐるつもりでもやはり駄目です。すぐ思索の土合がくずれて、ささいな感情にとらはれ勝です。末梢神経ばかりが鋭敏になりすぎて、中枢が思ひどほりに、はたらいてくれません。」

前掲の万葉の歌は狭野の茅上娘子の歌である。彼女は齋宮寮の蔵司に仕へた女官だつた。調度や宝物の出納の役でもしたのだらう。齋宮寮は禁男であつた。然るに彼女には恋人ができた。中臣朝臣宅守である。掟によつて処罰された。宅守は越前の国に流されることになつた。再たと会ひがたいその別れに際して慟哭の惜別歌四首を作つた。その冒頭の歌がこの「足引の山路越えむとする君を……」である。あつても立つてもをれぬ哀傷が湧きでるやうである。二首目はさらに切なく、「君が行く路の長手を手操り寄せて焼き払ふ天の火でもあればいゝ」と断腸の思ひに身を揺つてゐる。恋人を流罪にした勅掟をさへ不条理とする情火である。恋人を止めるためには、天災地変さへも敢て祈念する条理を越えた女心である。

この茅上娘子の歌に対する、越前に下る道すがらに詠んだ宅守の四首の歌は、流罪を素直に背つた男心であるところがさらに切ない「塵泥の数にもあらぬ我ゆゑにおもひわぶらむ妹がかなしさ」と冒頭の歌で、この破局を招いたのはみんな自分の浅はかさのせゐであるとし、流される自身の悲傷さよりも、茅上

舊詩帖から

森　亮

野菜サラダを食べたあとで

――詩を書きはじめた頃の習作一篇――

下宿先きのさびしいサラダです。
縦に真ふたつに截られた卵は日本画の朧月。
馬鈴薯に斑らにまじつた薄桃色のソーセージ
その細切りの一片を取り出して嘗めると
気の抜けた甘い味がする。
たまたま噛み當てた卵の殻を
まゝよと噛みくだく、
これがわたくしの夕暮れの勇気です。

（昭和十四年）

犬

――春の彼岸の終つた頃、二階の窓から――

ハチよ、影と光のなかでお前は寝そべつてゐる
お前のうへでは青木の実が今年も赤くなつた
青木の葉はお前の白いお腹に楓のやうな影を
　投げる
黒つぽい庭土にもう赤い実が落ちて散らばつ
　てゐる
ハチよ、この一年でお前はどれだけ老いたか

（昭和十七年）

夜

吾子生れてよりならはし
ちひさきランプつけて寝る
さ夜にまぶしき眼を細め
かはりたる夜をおどろけり

（昭和十六年）

笛

軒端に　菖蒲あげ
ひとびと　祝ふ今日
ふる里ゆ　上り来ましゝ
祖母の　をしへたまへば
生れてまだ　一年たゝぬ
吾が子いま　鳩笛を吹く
笛吹けど　歌はぬ
そのかの父を　如何にせむ

（昭和十六年）

枕上口吟

ひだり手を　ははとるらむか
右の手を　ちちとりてみる
さ夜にねる　わが子
おひいでて　まるふたとせの
誕生日　あすはむかふる
さ夜にねる　わが子　さちあれ

（昭和十七年）

娘子を憂悶に陥れた不甲斐なさを悲しんでゐるのである。さらに切ないのは末尾の歌である。「流罪の身を恐懼して道すがら茅上娘子の恋しい名を呼ぶことさへはばかつてきたが越路の峠に立つに及んで、つひ堪へかねていとしいその名を呼んでしまつた。」と云ふ歌意の慟哭歌である。宅守は都の方位の空に向つて、その名を呼び、二声目にはわッ！　と聲立てて男鳴きに泣いたことであらう。

伊東はこの中臣朝臣宅守と狭野茅上娘子との贈答歌の、冒頭の一首を写してゐるわけである。伊東が万葉の書写をしてゐることは、すでに六月十日の安代さん宛書簡――山口で大塚氏と隣合せで勉強している条に見えてゐた。が、この足引の歌は、万葉第十五巻、通巻にして第三七二三番、の歌である。一日一首を書写したとしたら十年の歳月をかけねば辿りつけぬ勘定となる。従つて、伊東がこゝに引用してゐるについては、引用するだけの譬喩が潜在すると見ねばならぬ。これは私の個人的な空想だが、伊東は宅守の沈痛な男心を回想し、それを自が胸底に刻りつゝ、茅上娘子の足引の歌をその因縁とはかゝはりなく山を越えて遠国に旅立たねばならぬひとへの惜別の抒情に利用したのであらう。即ち、すでに適齢期にあつた安代さんの結婚話が決つたのだ……と私は見るのである。感じ易い青少年期には、血の通つた実姉の嫁入にさへ淡い哀愁や嫉妬を感じるものだ。安代さんに対する詩人の卵であつた伊東の心情は、当然であると言はねばならない。宮本氏宛の葉書の末尾に見えた、冷たいものを持つものとしての女性に対する反省と批判は、他家に嫁ぐと云ふ彼女の決心が、伊東には急によそよそしげに見えたからに相違ない。

「近頃は、家のことも、大塚…中略…のことともめつたに思ひ出しません。どこにもこゝにも無沙汰ばかりです。日記もしばらくやめてゐます。睡眠時間も一つも定めないでねむたい時にね、起きたい時に起ると云ふ風です。自然に参入すること、ただそれだけが私ののぞみです。雲の動き方。雨だれの音。冬の虫の声。電車の雑音。八手の微動。消ゆる烟。自分の髪が夜風に吹かれる音。そんなものに耳を立てたり。じつとみつめたり、それが私の仕事です。ともすると私を責めさいなみ勝な獣慾や、情慾が一寸の間でも、じーとしづまるのを感ずるのは、ほんとうに安い心持になります。重荷が去つて、自由になれた様な気になります。三ヶ年半私はもがいてもがきぬいて来ました。然し、もがくことは決局人間を浮び上げてくれません。今になつて法然や、親鸞の他力の教をありがたく、身にしみておぼへます。歎異抄などを、古い箱の底から取り出して読む気持にもなります。高等学校に居た頃、調先生の家に参禅してからこれで丁度二年になります。そしてやつと他力の曙光をみる様な気持になりました。只このまゝの姿で救はれること、このことが、自分の力のあまり少ない私にとつては一ばん有難い教です。こんな心が、私を子規に親しませ、良寛を尊敬させる様になりました。

もうしばらくするとこのあたりもくらくなります。そして、きまつた様に建礼門の上に一つ大きな星が出ます。

宵を浅み建礼門の上に出し明星いまだ光放たず

二三日前、御所をあるいてゐて、そんな歌を読みました。」

こゝに若き日の悩みを超克しようとする懸命な伊東の姿が如実に浮び上つてゐる。彌陀の本願は罪悪深長、煩悩熾盛の衆生をこそたすけんための願である……と喝破した親鸞の歎異鈔に、煩悩熾盛なまゝの姿で伊東は救ひ取られたいと願つたのであらう。その救ひを願ふ気持が天衣無縫な愚庵を慕はしめ、より理論的に自然への参入を意圖した子規に飯依せしめたものである。伊東は卒業論文の主題に子規の俳論を選んでゐるが、その選擇の意思はすでにこゝに結縁してゐるとみるべきであらう。

私にとつて興味あるのは、悶悩の真底に沈んでゐる伊東が宵の明星を歌つてゐることである。昼と夜とのすずろかな交替のあはひに点る星。その未だ光を放たざる狀態。太陽光と相譲らず調和を保つ数刻こそ、伊東の熱禱の時刻であつたやうである。伊東にこの時刻の宵の明星を歌ふことが多かつたのもそのためだらう。

いちばん早い星が　空にかがやき出す刹那
　は　どんなふうだらう
それを　誰れが　どこで　見てゐたのだらう

（第二詩集「夏花」―夜の華―）

ひとり金星が　樹々の影絵のはるかうへに
ゆらゆらと光りながら　わたしを時間のうちへと目覚めさす

（第四詩集「反響」―金星―）

尚、この書簡で興味あるのは、高等学校時代の歌とその当時の歌とを比較してゐることである。若者らしい苦悩の真最中に佐賀高等学校の不知火寮で詠んだと云ふ歌と、飯省中に若き日の感傷で口ずさんだと云ふ歌とが二首見えてゐる。

近頃の淋しき人は皆来れ一つ火かこみて
語りあかさん

日に一足御舘の山に祈るとそ二十の我の
日課にてありき

ポムペイ

小山正孝

Ⅰ

私は　迷つた者のやうに
草むらの中に身をかがめた
音がする
折れた柱のあひだから　空が青く

私は　立ち上つて
道を進む
地圖をたよりにして
遠くの山の名前をおぼえる

糸杉の梢が　かすかに
風にゆれてゐる
お前のことを考へる

不意に　笑ひながら
出て来て　日本語で
私をよびもどすお前のことを

Ⅱ

その一人の人でありたい
道に死にはてて　うつむいて
鼻高く　地を見つめる
その一人の人でありたい

片足のなく
着るものは朽ちてゐても
彼は　昔の　美しい空を
見上げたことがあるにちがひない

私の知らない女を見
私の知らない酒をのみ　笑ひ
彼は立つて　しかも歩いてゐたのだ

堂々と　自己を主張し
見つめ得るだけのものを見つめて
彼は　最後に　倒れた者なのだ

この旧作に対し、心も歌も変つてると自称する近作がならんでゐる。

雨やむと滴もやがてけどうなりそをかぞへつゝせんすべもなし

サウサウと木の葉しづくの音みだし門の老木に風すぐるらし

この家の主となりて二日目の夜は雨なりき人恋ひており

この新旧の自作の対比から、伊東は心と苦悩の成長ぶりを物語りたかつたのであらう。

「末梢神経をたかぶらすことのみがほんとうの苦悩でない。中枢に沈せんして、それでゐて、はなれられない人間としての悩ばかりが尊い。世紀末的の放縦はきらひです。」

と、自分にでも言ひ聞かせるやうに書いてゐる。その後は例のごとくフラグメントで、何もかも吐き出すと言つたあんばいに書きならべてある。

「荻原井泉水『遍路となりて』は一読をおすすめします。

二十七日から帝展が京都でもひらかれます。おいでになりませんか。

百合子さんや、安代さんはどうしておくらしでせふ。何でもかまひませんから、ことまごまと書いて送つて下さい。それが何よりも、私を喜ばすことでせふ。

先生やおかあ様によろしく。

御からだ大事になさい。

（特にゆりこさんにはお手紙を下さる様にたのんで下さい。）

京都の下宿で
二十三日、電燈のつく頃し
たたむ　静雄。

姫路五軒邸の
あの小さい書斉で
安代様机下

百合子さんに手紙を書くやうに頼んだのは始めてである。百合子さんに河原町丸太町で出会つた後の安代さん宛書簡でも、「百合子さんにはお手紙を上げては悪いだらうと思つて遠慮してゐます。」であつた。この事実も前述した安代さんの結婚話が決つたと云ふ私の空想を成り立たすのである。この長い書簡にはまだ二伸が附いてゐる。

「今日は金のあまりで、モナカを買つてたべました。おかげで風呂銭がなくなりました。日隈君（佐賀高校同窓で京大法科學生）に今夜は風呂をおごつてもらふことにしました。もうだいぶふろにもはいりませんでしたから。髪が大分伸びましたよ。今度の冬休にお目にかかる時はどの位になつてゐるだらふと、それたのしみにしてゐます。まあ二十日ばかりもしましたら、又御面会できますね。」

（昭和二年十一月二十三日京都より姫路市五軒邸九〇酒井安代さん宛封書）

まさしく故青木敬麿氏が評したやうに汚い男だ。二枚目としての条件を自ら捨てゝゐるやうなものである。

春雷

鳴り傳ふ春いかづちの音さへや
心燃えたたむおとにあらずも　茂吉

山根忠雄

買物をする
妻と歩きながら
ふと妙な淋しさに襲はれる

自己嫌悪！
自己否定！
ああ厚顔よ去れ！

あたらしく
動いてゐる自分を豫感する
透明な生活——

自分は
昨夜野天をとどろかした
爽快な春雷を想起した

金尾文淵堂のこと

壽岳文章

前号に田中さんが書かれた文淵堂年譜は、かねがねそれを心待ちしてゐた私をいたく喜ばせた。「敢へて稿の字を附して、他日の完成を期する」とあるので、何かの参考にもと私の知る種次郎翁の思ひ出を少し書きつけてみたい。

私は書物の造形に対して異常な関心を持つ者であるが、生来のその傾向に決定的な一打を與へたのが、大正三年に文淵堂が出した白秋の「印度更紗」と「白金之獨樂」であつた当時私は中学の二年生であつたが、私の周圍を見廻しても、この二冊の詩集から強烈な影響を受けて、白秋まがひの詩を作り出した者が少くない。しかし、私のやうに、あの詩集の造型的な方面に心ひかれて、それを造本工藝への出発点とした者はさう多くはあるまい書物としてのあの詩集の美しさと缺点とを、私はいまでもはつきり指摘することが出来る。それほどまでに、私には忘れられない書物なのである。

しかし、「大大阪と文化」の出版記念會に著者伊達俊光氏が是非金尾に會つてくれと私に言つてくるまで、私は金尾と話す機會を持たなかつた。それから後は急速に交遊がひらけ、戦時体制は日日に苛烈を加へたにも拘らず、彼はよく向日町の私の家へ来た。家財を預つたこともある。物資は極度の不足を告げてゐたが、いつでも彼は、竹の皮包みに何か食べ物を入れてもつてきてくれた。

新村出先生が題箋と序文を書かれ、私が後記とカヴーの圖案を担当した真鍋由郎著「先賢群像」は、かうした環境のもとに、昭和十八年の秋、出版された。カヴーに私は倉の繪をかき、それに金尾文淵堂の文字を入れたところ、金尾は口をもぐもぐさせて喜んだ。「もう一ぺん倉をたててみます」と意気ごんだその顔がいまありありと私の眼にうかぶ。

奥付を見ると、大阪市西成區松原通一丁目三六番地、東京都麴町區五番町一二番地の、二つのアドレスが書かれてゐる。

田中さんの追記にもある通り、彼は熱心な佛教信者で、晩年には、年譜に出てゐるほかにも、中川善教著「般若心経茶道辨」とか、同じく「父母恩重経を讃ふ」とか、「聖徳太子御傳叢書」とか佛教関係の書物を随分数多く出してゐる。大日本佛教全書や大正新脩大

五月

服部三樹子

ふと四時に覚めて起き見し暁の空われにいくばくの徳を給へり

抜き捨つる庭の雑草につきてゐしでんでん虫を放つ夕ぐれ

うしろでを白きものゆく気配して夏蝶遠くすぐるむなしさ

水色の五月夕ぞら濃くなりて会ひし一日も終りなりけり

四柱推命学び初めしがかなしきに遇ひし日よりと人に知らゆな

四柱推命命式の上に現はれて見しより人はゆゆしかりけり

かくさびしき占術に興味持つ日ともなりしこころをさびしみて寝ぬ

我が四柱命式に師が註されし夫を尅すは誰が上のこと

ゆくりなく書読みゐれば明け近くたまゆらにして百合開くにあふ

どくだみの白き花びら三つひらき飽くなき今日のもの忘れせり

蔵経の再刷も考へてゐたが死ぬまで、熱心に企劃してゐたのは慈雲尊者の「梵学津梁」の出版であつた。私の家を屢々訪れたのも、主としてその相談のためであつた。

彼が私に語つた身の上話で、是非ここに書きつけておきたいのは、大正十年に春江夫人と結婚したのは、それが「日本から日本へ」の出版に際し、蘆花からの有無を言はさぬ交換条件だつたことである。あの書物の出版に一切を賭した彼の気持がわかる。この出版が無かつたら、恐らく彼は一生獨身で終つたかも知れない、そしてよく知られてゐるやうに、彼はあの出版の失敗によつて、もののみごとに破産した。債鬼に追ひ立てられてゐた時代の彼の思ひ出話には、彼の人がらがよく出てゐて、私を喜ばせた。

一粒だねの静子さんは健在だが、戦後のくらしにくい世相に困つてゐる。良縁がないかと、私も随分骨を折つてみたが、これだけは思ふにまかせぬのである。

泉（『松のみどり』のつづき）

池澤　茂

日はいつのまにか、西がわの山かげに、かくれていた。こちらの山は、七合目から上のあたりだけが、ひときわ、雨にあらわれた新緑のように、かがやいている。まえのほうの谷間の田んぼは、山のきれ目のむこうだけがまだ日中そのまゝに、あか〳〵している。むこうの山々も、全面に、まぶしいほど、日の光をあびている。ぼくはこのあかるさだけを見ていたにちがいない。ぼくのまわりは、ぼくの知らぬまに、うすぐらくなってしまっていた。すぐ近くの西がわの山と、かたわらの松林とのかげになって、ひえ〴〵とした夕やみが、ふいに、ぼくをとりかこんでいたのだ。そして、ぼくはこのとき、とつぜん、たまらないほど、さびしさを感じた。

ぼくは山路に腰をおろして、ひとり、だれにもわずらわされずに、しずかな、やすらかな、たのしい気持に、ひたっていた。それがふいに、つきさゝってくるような、さびしさに変ったのだ。人はやはり、ひとりきりでいると、いつか、もう、たえられなくなるのかもしれない。多くのけだものや鳥や虫がそうであるように、人間も、もと〳〵、それ〴〵の環境で、集団的にしか生活できないように生れついているのにちがいない。ぼくはしかし、また、暗い気持になった。さびしさにたまらなくなり、愛情や幸福をもとめて、人間の仲間へ、かえってゆく。すると、じきにまた。孤独のほうへ突きもどされる。かえっていっては突きもどされ、突きもどされては、かえってゆく。いつまでたっても、どうにもならないことの、おなじ繰返しではないのかといって、それなら、いったい、どうしたらいゝのか……。やはり、じっとたえしのぶより、いゝ方法はないのだろうか……。ぼくはいつのまにか、うつむき、肩をすくめ、体をちゞこめていた。まだ春さきだから、かげになると、山の寒気も、しだいに急に、しみいってくる。しかしぼくは、立ちあがって行動をおこすのが、めんどうでならなかった。さびしさをかみしめるようにしながら、そして自分に「はやく帰らないと、日が暮れてしまうぞ」と、しきりに言いきかせるようにしながら、ぼくはそのまゝ、ぼんやりと、うずくまっていた。

と、ぼくはそのとき、ふいに、人間の聲を聞いた。もう長いあいだ、どれほどかわからないほど長いあいだ、たえて聞かなかった気のする人間の声だ。空気をビリ〳〵ふるわせるような、かんだかい、こどもの、さけびごえであった。そして、坂路のしたのほうの、平坦になってゆくあたりの森かげから、こどもがふたり、ばた〳〵と、とびだしてきた。このへんの農家のこどもにちがいない。山地

翅

浅野　晃

赤土の路をよこぎつて
泥くさい水へと墮ちる
喪神の蝶
大きすぎる翅をもつた
あの貌は
たしかに見た貌だ
一つの声が追ひすがる
車の上から
罪のふかいものよと
も一つのやさしい声は
そのとき
ただまなざしの中にあつた
私は第二の声を信ずる
（眠つたものはきつと醒めます
醒めずにおくものですか）
雷が鳴り
雨が車軸を流し
きれいに雲を拂つたあと
月に濡れ
ながい橋掛りから
出てくる
やさしい聲が花と咲いてゐる
牧へと
ああ夜の花びら　記憶よ
迷路でもあり広場でもある遊行の世界よ
狼も
蛇も
山猫さへも
めぐる頭上にたかく祀つた
ふしぎな智慧が
どうして君の大きすぎた翅を
鷲や白鳥のあひだに
描き出さない
わけがあらう
それから蝎の眼の赤い火で
焼かれても
おそくない
そのとき
マイトレーヤは出で
みんなやさしいひとみとなつて
時を見る
何万光年の時を——。

だけれど、下のほうには、かなり広い谷間があって、水のゆたかな、日あたりのいゝ田畑が、ひらけている。ちかごろの農村のゆたかさを示して、ふたりとも、あたゝかそうな、そろいのジャケツをきている。兄弟にちがいない。学齢まえらしく、愛らしい幼児型のズボンをはいている。日やけした頬はむっちりした肉づきで、いかにも元気そうだ。声をそろえて「うーまい水、のんだ！　うーまい水のんだ！」と歌っている。そして、あいの手に、きゃっきゃっと、うれしそうに、おかしそうに、わらいごえを立てる。それから、もつれるように、ふざけあいながら、ぴょんぴょんと、田んぼのあぜみちへとびおり、まえの山の木立のかげへ、ころがりこんでいった。

なんだか、夢を見たようだった。目ざめぎわの、あざやかな、しかも、みじかく、ふいに断ちきれた夢だ。ぼくはおもわず立ちあがったまゝ、しばらく、呆然としていた。なにかしら、はげしい感動に似たものが、しきりに波立っている。ぼくはやがて、ひかれるように、こどもたちが出てきたほうへ、坂路をおりていった。すると、ちょっとした森の切れめに、下草がふみしだかれて、路らしいものが、ほそ〴〵と通じている。その奥のほうをのぞいて見ると、山肌のがけで行きどまり

になって、そのしたに、泉がある。こゝらの部落の人たちが、のら仕事や山仕事で、のどがかわいたときなど、こゝまで、水をのみにくるのにちがいない。石で四角にかこって、そのうえに、茶わんが一つ、まっしろく、おかれてある。さっきのこどもたちも、のどがかわいたので、わざ〳〵こゝまで、水をのみにきたのだろう。ぼくはまた、あらたな感動に打たれた。『うーまい水、のんだ！ うーまい水、のんだ！』と歌いはしゃいでいたこどもたちの声が、はげしく、浮きあがってくる。なんという、うれしそうな、たのしそうな、かれらの姿だったのだろう。なんという無心なよろこびよう、けがれのない生命の躍動だったろう。かれらには、ピチ〳〵した現在だけがある。生活はほとんど「あそび」で成り立っている。おとぎばなしそのまゝの、夢にあふれた現実なのだ。そして未来のかゞやきがある。「しかし、かれらはこのありがたさを、すこしも知っていない」そう思うとぼくはとんどはやりきれない気がした。かれらは雨と太陽にめぐまれて、新芽がもえだしつや〳〵しい若葉をつけ、日に日に、そだってゆく。しかしやがて、知らぬまに、たいていは、虫にくわれて、ぼろ〳〵に、穴だらけになってゆく。三十年、四十年は、またゝくまに、すぎさってしまう。世俗にまみれて傷つけられ、みずからのおろかな過去にむしばまれ、おもくるしい、つめたい現在と、暗いさびしい未来とが、やってくる。

ぼくはなにか、大きな声で、さけびたい気がした。なにかにむかって、しきりに、訴えたい気がした。しかし、なにをさけび、なにを訴えようというのか。むかしから、多くの人たちが、たいてい、そうだったのではないのか。そして、みんな、そのまゝ、死んでいったのではないのか……。

なにかしら、せつないメロディだけが、胸の底のほうから、わきたってくる。ぼくはおもわず口ずさみ、あるきながら、みずから夢中で耳をかたむけていた。それから、やがてうつろな疲労がきた。ぼくはまた、そのあたりに体をなげだし、いつまでも横たわって、そのまゝ、どこかへ消えてしまいたい気がした。ぼくという人間がふいに無くなって、この世がすべて存在しなくなるなら、それが一番いゝのだと、暗い穴の底へ落ちてゆくようなむなしい気が、しきりにした。が、ぼくははっとなって、われにかえった。

ぼくは路のカーブにそって、しぜんと、山すそをまわっていた。そこは西のほうの山がきれていたから、西日がまだ、あか〳〵と、照りつけている。まぶしさに打たれて、ふと見上げると、ふもとに近い山の中腹に、一角が地ならしされて、母屋や、土蔵や、はなれや、納屋など持った、かなり大きな農家が、どっしりと、建てられてある。まえは高台のような庭になっている。そしてそこで、さっきのふたりのこどもが、カルタをさかんに、地面に打ちつけあって、あそんでいたのだ。相手のを裏返したら勝で、そのカルタがとれる。ふたりとも夢中で、あっちへ行ったり、こっちへまわったりして、とき〳〵かんだかい声をたてながら、力いっぱい、カルタを打ちおろす。その背後には、母屋の玄関のまえに、母親らしい女が、このふたりのこどもを見守るように、出ていた。いままで仕事をしていたらしく、紺がすりのうえから黒いモンペをはき、手ぬぐいで、あねさんかぶりをしている。血色のいゝ頬をして、いかにも健康な働きものらしい、ゆたかな体格の女だ。晩御飯の支度ができたので、こどもたちを呼びに、出てきたのかもしれない。そこは高台だから、夕日は、いっそう強くさす。こどもも母親も、松のおひしげった山と、どっしりした家とを背景に、高みになった台地のうえで満身に夕日をあびて、みがいた金のいろに、かゞやいている。

陳夫人 (一)

田中克己

僕の眼はもう前方を見ないのだ。昔のことばかり思ひ出す。賢い眼をして、もつと新しいことをと、未来ばかりまちのぞむ人のそしりは十分承知の上で一つ書いて見よう。

昭和十七年、僕はシンガポールにゐた。そこへ行くまでの船中の不愉快や、この市での不愉快は一切すつとばして、ともかく僕はこの市にもゐられなくなつてしまつた。パレンバンへの転出命令といふのをもらつてしまつたのだ。この命令の出た理由は、これもはぶく。ともかくインテリの僕は、さつそくパレンバンのことを本でしらべて、うんざりしてしまつた。河の洲の上に発達した市で、暑くて濕気が多くつて云々と書いてある。僕は久しぶりにまた死ぬ覚悟をした。

死ぬ覚悟をしたらどうなるか。ご存じない人にはまあ教へておく必要があるだらう。気前がよくなるのだ。僕はもつてゐた金を全部つかつた。その頃はまだシンガポールの物価もさうたかくなく、僕は月俸四百円あまりを給せられてゐたのだ。貰つたばかりの月俸を全部つかつてまはつた。このころになつて、雨後のたけのこのやうに建ちならんだカフエにゆきつづけてゐる中、フィリッピン人とスペイン人とのあいのこで皆からねらはれてゐる女の子を見つけた。どうしたかつて。どうもしやしないが、なるべく人の沢山ゐる時間にその店へ行つて、その女の子をそばへ引きつけておくことにした。死ぬ気だものこはいことなんかありやしないやね。

その中にみるみる日がたつて、もう二三日で便船が出ることになつた。僕の月俸もほとんど無くなつたので、頃はよしと、僕は甚だロマンチックな別れを告げた。「今日かぎり僕はこの店に来ない。お前が僕を忘れないために、記念にこれを」。さういつて僕はおもむろに右手にはめてゐた女持の時計をはずして、彼女にわたした。右手はおかしいつて、いかにもさうだが、左手には僕は男持の時計をしてゐたのだ。もともとこの時計は内地のかかあどのへと買つたのだが、送りやうもなかつたし、死ぬ時、女持の時計をもつてゐたら恥かしいやね。ともかく彼女は感激した。一生忘れないといつたが、本当かどうか。

そのあと宿舎にとじこもつてゐるつもりだが、そんなわけには行かない。暑くてたまらない上、隣室には野蛮人どもがゐて、日が暮れ出すとさはぐのだ。キンキン声で大東亜共栄圏の理念を議論し、最後はその障害をぶつた斬れとわめくのだから、聞いてゐていやになる。お前は斬られる人間の中に数へられなかつたのかつて。罪が軽いので、斬るかはりに、瘴煙の地バレンバンへ流罪といふことになつたのだよ。

そこで僕はあと四十八時間といふ出発までの時間をまた人力車にのつて、市中へ出かけた。今度は方面をかへて、なるべく刀をもつた人間のゐない方面へ出かけて行つた。人力

掌

福地邦樹

風邪を口実に
初夏の明るい昼間を楽々と寝る
かうやつて天井を眺めるのも久し振りだ
細い腕をその方にさしのばしてみる
うすい掌
じつと見てゐると
川や山が織りこまれた地圖のやうだ
いつか女が手相をみてくれた事があつた
綺麗な奥さんをもらひなさると言つた
その女は眼鏡をかけてゐて
あまり美しい顔ではなかつた

車夫には日本語も英語もマレー語も通じやしないから、いい加減の方向へ走らせて、暗くもなく明るくもない町へ来ると、足ぶみをする。うしろを向いたところで、いいかげんの金を拂つて下り、歩き出すと、まだ何かいひながらついて来る。まだ足りない、といふのか、とこはい顔をしてふりむいたら、さうでもないやうだつた。大体はじめにいつた通り僕は死ぬ覚悟以来、けちなことなぞしたおぼえはないのだ。福建語か広東語か、車夫のいふことばは一向わからないが、手まねだけはわかる。にやにや笑いながら小指を立ててゐるのだ。ふと僕はこの男の媒介に乗る気になつた。「さうだ」とうなづくと、彼はも一度車に乗れ、といひ、今度は別の方角へ、飛ぶやうに走り出した。

さて五分も走つたらうか、彼は「ここだ」といふ風にうなづいて、車の柄をおろし、それから前の家の扉を叩いた。中で女の声ででも返事があつたのだらう、しばらく問答があつたあと、彼は「入れ」という合圖をし、同時に天竺葵やベゴニヤを飾つた窓のよこの扉があいた。僕はまた大枚の金をこの仲人にわたして、おもむろに入つて行つた。パンパンを買つたのを、なんて大層ないひ方するのだと思はれるかもしれないが、当時、マレー派遣軍の軍規は極めて厳正で、帝国軍人としてあるまじいことと、見つかれば処罰されるし見つからなくつたつて、あまり気持のいいことではないやね。僕はたつた一人で、丸腰でこの方角もわからない町の一軒の家へ入つてゆくのだし、鰯一匹分の皮が、なめした上で三十円といふ市で、懐中にはまだ三四十円もつてゐるのだからね。

しかし入つて行つた室には子供がゐた。おさげのかはいい少女で南方の子供の例にもれず、ひよわい感じなので、五つ六つに見えた僕が英語で「今晩は」と挨拶すると、彼女は僕の予想通り英語で答へられた。次に僕は「マレー語話せるか」ときいて見た。彼女は「シキ　シキ　サジヤ」と答へた「ほんの少し」との答へである。次に「中国語は」と問ふと、これもほんの少しと答へる。その中に衣ずれの音がして女性が現はれた。子供の母親であることは、すぐ知れた。

彼女はその子より、なほ少しマレー語がわかるだけだつたが、通訳には子供がなつた。僕はかうして、北京官話、英語、マレー語の三ヶ国語の助けを借りて、十分この家のことを探り得た。

彼女はほつそりした体に、細い声をしてゐた。これはことわつておくが、僕の好きな型なのだ。髪は？眼は？もう忘れた。ともかく甚だしく日本人くさい顔をしてゐた。たぶん南支出身の華僑か、それとマレー人とのあいの子かに相違ない。陳（チン）といふ姓がまたそれを證明してゐた。私は子供の名をきき、年齢をきき、彼女の名をききした。妙貞（ペナン）との答へを得たが、彼女の年はつひに聞き得なかつた。失礼だと思つたのである。僕の甚だしく紳士的であつたことを察してもらひたい。

ただし紳士はまた嘘をつく。僕はこの家に夕やみの後、突然おとづれたことを鄭重にわびたあと、自分は日本軍の軍属だが、先祖は福建泉州府の安平の出で、本姓は洪、いまは日本名を仮に大川と称する。もとをただせば貴姉と同じ血統の中国人だといつはつたのである。彼女の顔はみるみるかはつた。さうして問はずがたりに語り出すのをきけば、彼女の夫は、華僑でも中流以上の生活をしてゐたのが、日本軍が迫るときいて義勇軍に投じ、そのまま還つて来ないうへ、噂にきけば、シンガポール陥落後、日本軍の手にかかつて殺された。あとにはこの子が残り、財産も全部戦争でなくなつて、と涙声でいふ。それで操をお賣りになることになられたのか、ときかうとして僕はやめた。第一、僕の中国語は、大学で習つたのだから、「操を売る」なんて

熟語は習ひはしなかつたのだし、子供に通訳させるわけにはゆかないだらうが——。僕は手持ぶさたにまはりを見廻し、蘭の花鉢のよこに置いてある本を一冊とりあげた。ルバイヤットの英訳だつたのだ。

僕は偶然に開いたページを朗誦してから、睡さうな顔をしてゐる少女の頭をなで「記念のために」この本をくれといひ、代金といふやうな形で十円札を少女に握らせた。（未完）

リルケ伝説

たかはし　しげおみ

「奇蹟だの予感だのに対する趣味——それについてリルケは少しばかり押しつけがましくはなかつたですかね？」と、ヴァレリイが言つたそうである。僕はどきりとした。実際リルケの伝記や逸話をしらべてみると、そういう趣味にあふれている。ちよつと「マルテの手記」をひらいてみても、マルテ＝リルケの病的な予感に全く惑わされてしまいそうになる。奇蹟だの、予感だのを信ずる、何だか魔的な性格から生み出された作品は、例えば誰が、たとえ私が叫んだとて、天使らの系列のうちからそれを聴いてくれよう？という起句が、突然、神の声のように聞え、「何だろう？何が生まれてくるのだろう？」と、いぶかりながら、その詩句をノオトに書きとることに始まつて、奇蹟的に完成された『ドゥイノの悲歌』、「馬は征く、馬は征く」という句をほとんど無意識につぶやいて、それから酔つたように書き始めて……翌朝出来上つていた『旗手』、冬の長い夜、C・W伯の亡霊と向いあつて、煖炉のほとりで口授されたという「C・W伯の遺稿から」、それらばかりではない。実際、彼が、例えば「最近のある朝、思わず知らず、予期もしないのに生まれてきたものです、しかも、これが、どういう風にして生まれてきましたか、自分にもわかりません」とすら言つている作品がある。彼の言葉、彼の話しぶり、彼の性格に、如何に「魔的な要素」が多かつたかは、多くの「回想記」が如実に伝えている通りである。

リルケは詩作のための仕事場に苦労した。一例をあげれば、晩年に、ドゥイノをはなれてから、イルヒェル、エトワ等と遍歴して、やつとミュゾットに落ち着いたわけだが、その館というのは、真奈の乙女をおもわせる美女の悲劇的伝説につつまれた十三世紀からの古い館で、小さな礼拝堂や、バラの花が咲きみだれる庭があつたりしたということである。

凝りに凝つた舞台装置と、魔術的詩人を組み合せ、「手を洗うときさえ詩人であつた」といわれるリルケを思いうかべるとき、僕はリルケが、なんだか空恐しい奇術師ではなかつたか、と、ぞっとしてくる。完成した『ソネット』を朗読し終って、無言のまま見つめあつたが、やがてリルケは、ひざまづきながら、マリイ伯夫人の手に接吻し、夫人がまるですばらしい息子に接吻するように、彼の額に接吻をかえした、という大芝居めいた光景を思い浮べてみたりすると、僕はまるで二人の名優の演技につりこまれている観客のような錯覚をおこしてしまう。そして、彼をめぐる伝説のすべてが、神がかり的な詩人の演出した素晴らしい大芝居の名残ではなかろうかと、ふと思って、慄然とするのである。

月に招かれた男（四）

芳野　清

四、パノンの会

大垣国司が詩人としての自覚の上に自らを置かうと決意したのは昭和十四年秋の当時、パノンの会と呼ばれて詩人萩原朔太郎を中心とした若い詩人の集りの会場であつた。彼は

その日の事を私に宛てた手紙で次のやうに述べてゐる。

……久しく逢はないが体はどうですか。秋の雨が東京にも降つて私は君のあまり丈夫でない体を気遣ひます。学校も試験や就職の事でうるさいのではないですか。思つてもぞつとする丸の内で働いてゐる。下宿は細川の兄さんと一緒です。兵役の事もう書いたかしら私は第一乙入営か召集です。この事やはり私を焦燥させます。細川も同じく第一乙、神戸を立つ時わびしく共に酒を酌みました。それは夏の夜。最近四季の会があり萩原朔太郎氏始めいろんな詩人に会ふ事が出来ました。萩原氏は詩と同じ風格の人です。私はこの人を見てゐて決意しました。詩人になると。才の拙い事は承知の上です。しかしそれにしても何と云ふわびしい日々でせう。昨日帰郷して見たものは悲しい人情でした。駅まで送つて来た父の姿を思つてゐます。美をと云ふ何と云ふ哀しい響でせう。もう止めます。手紙を下さい。本年中に一度会ひたいと思ひます。哀歌を一つ。

堪へよとや
たゞこのまゝに
堪へよとや
きみはかくも気まゝに
わがいのち
果つるは　いつの日ぞ
かの夏雲の消えゆかむほどに
物狂ほし
堪へよとや
あゝ　されど　今ははや……

見よ　病葉に寄れる蓑虫さへ
ちゝよ　と呼ぶにはあらずや

この手紙の中で四季の会と書かれてゐるがこれはパンの会と呼ばれたもので、この席上で彼は敬慕してゐる幾多の詩人に会ひ、その感激が彼の中に詩に徹せんとする何物かを植ゑつけた事が察せられる。この会を知らずつひに詩人萩原朔太郎の謦咳に接し得なかつた私の愚かな空想がその日の情景を何時か一つの挿話に作り上げてしまつた。それが私の心の中の実在であるならばと、僞りの譏りを覚悟で書いてみよう。

……その日、大垣と大塩の二人はお茶の水駅に降りると秋の陽のまぶしい聖橋に出た。欄干の影がくつきりとコンクリートの上に明暗を描き出してゐて、線路の走つてゐる暗い谷間に擁壁を曲がつて玩具のやうに電車が入つてくるのが見えた。大塩は欄干に凭れて煙草に火をつけた。彼はこゝから眺められる風景の都会的な繊細な構成が好きであつた。

「こんな時代になつて、萩原さんのやうな詩人はどういふふうに生きてゆくんだらうね萩原さんを護つてゐる今の若い詩人だつてどん〳〵戦場へ行つてしまふしね。でもこんな日になつても萩原さんの会がある事は不思議な位美しいことと思はないか。僕達の今の生き方はいつもこれでお終ひになるんぢやないか、と云ふ不安にだけ支へられてゐるのだ。長い間戦野で暮して來た君から見れば僕の考へなど甘いと思ふかも知れないけど、僕は何か近頃はそんな感傷ばかりで生きてゐるみたいなんだ。僕は君とは入れ違ひみたいに今年の暮には入営する筈だが、恐らく僕位兵隊に縁の遠い人間もないと思ふ。僕は戦争も兵隊も嫌ひだ。僕達の若さだけが戦争につきまとふ別離や終末感に堪へられるのだと思ふだけだ。」

大垣はさう云つて、欄干越しに短くなつた煙草を投げた。暗い蔭の中に赤い弧が鮮やかだつた。大塩はその言葉に默つて耳を傾けてゐた。彼の心には長の間陣旅に明け暮れた大陸の曠野が浮んでゐた。硝煙と汗に塗れた戎衣の匂ひや、睫毛も凍る寒さが昨日のやうに蘇へつた。それ程近い過去だつたのだ。だが今、此処から見えるのは曠野に暮れる血のや

昭和十九年三月二十五日

岩崎昭彌

午前七時三十五分
東海道本線彦根駅を
宇品行軍用列車が通過する
その駅はづれの踏切に近く
わが家があるといふのに
告げられなかつた兵隊だ
早くから俺はデツキに立つてゐる
湖が見え城が見え　そして
記憶が家並と共に後へ疾走し
一月前のホームに砂埃があがる
母の顔　兄弟の顔　また母の顔
この時　なつかしい藁屋根をみた
門には誰も立つてゐない
庭の彼岸桜が満開だ
　ビルマへ行くんだぞ
　ビルマへ行くんだぞ
叫んでゐるのは俺だけか
再び帰れぬと思ふからだ
家並絶え城が遠ざかる
列車は近江盆地を疾駆した

――インパール――

うな陽ではなく、都会の空に散らばつてゐる華やいだ陽の色であつた。彼はあまり戦場や兵隊の事を思ひ出したくなかつた。しかし、大垣の心の焦燥が判ると、黙つてゐるわけにもいかなかつた。

「戦争の経験つてとても異常なものなのでね、経験といふのは一寸おかしいんだが、何時でも戦場は自分にとつて最初のものとして立向はなければならないと云ふ意味では経験と云ふやうな生ぬるい言葉では云ひ表はせない。それは生命の問題だからだらう。でもね戦争といふものが人間の魂の故郷と云ふ奥底のものと結びついてゐる点では詩と似てゐると云つてもいゝ。例へば、若い戦友が腹部貫通銃創などで苦しみながら死の間際まで呼びつゞけるのは、お母さんといふ言葉なのだ」

生れ落ちると直ぐ父母と訣れて祖母の手で育ち、その訣れた父母は他郷で夭折し、全くの天涯孤独の身の大塩の心の傷がその言葉の中に大きな口を開けてゐた。それは末子で父母に甘へ切つて育つた大垣の知らぬものであつた。彼は大塩の悲しみを慰める言葉を無益に心の中に探し続けた。大塩自身にしてみれば自分が何物にも束縛されてゐない自由の中に居るのだと思ふと、再び戻つてきた学生服さへ身にそぐはない自嘲を感じるのだつた。

「僕だつて帰つては来たけれど、卒業するまでこのまゝでゐられるとは思つてゐない。また引つぱり出されるに決まつてるさ」

彼は学窓に戻つたものゝ画学生の放漫な生活は見るだけでうんざりした。長い軍隊生活は厭でも彼に厳しい軍律と整頓を強ひた。彼が下宿の部屋を塵一つ止めぬ程整然としたものにして置かなければ気がすまなかつたのもそのせいだつた。彼の部屋を訪れた者は壁に立てかけられた二三の画布を見ない限り画学生の部屋だと気附かぬに違ひない。

秋の陽は痛い程まぶしかつた。二人はそれからぶらぶらと駿河台の方へ歩き出した。坂を上りつめた所に会場のH学園があつた。大垣は会場に入ると真先に始めてお会ひする筈の「西康省」の詩人の姿を探し求めた。現代詩集の巻頭写真でそのプロフイルは見知つてゐたが、今、開き襟の颯爽とした風姿は際立つてゐて、彼が近寄つて無器用に口どもつてゐると、それと気附いてか「大垣君ですか」と詩人の方から気軽に声をかけられた。かねて文通してゐたものの始めてその涼しい目差に会ふと彼は小学生のやうに固くなつた。彼の緊張を解きほぐすやうに詩人は云つた。

「まだ萩原先生はお見えにならないんでね、誰かお迎へに行かうかと云つてるとこですよ

兎角時間や約束に縛られることの人一倍嫌ひな先生の事だから……」

それから大垣は名を知つた若い詩人達に紹介された。彼はその高揚した雰囲気の中で次第に自分の魂が上昇して酔つたやうになつてゆくのを抑へることが出来なかつた。かねて知り合つてゐた四季の若い詩人前田氏が画家の堀田氏と連れ立つて彼の傍に來た。堀田氏は美校で暫らく大塩と一緒だつたので彼の顔を見ると

「今日は前田君のお伴をして詩人拝顔に来ましたのさ」と嘯いた。

「そう云へばスケッチブックは持つてるね」

「と云つて不思議がる君はどうなんだ。絵描きなんだらう、君は?」

二人は早速小声で毒舌のやりとりを始めた。

「ふふふ、どうでもいゝよ、詩人の会にスケッチブック持参と云ふ程、僕は職業意識を持つてないんでね。それに今日は少くとも僕は詩人の話を拝聽に來たつもりだからね。描くのなら僕はルノアールの『浴みの後』のやうな絢爛たるパレットが欲しいな」

真実、彼は戦野の褐一色にはうんざりしてゐた。その反動か、今では色彩の饗宴とも云ふべきルノアールの絵に深く魅かれてゐた。

「ハハハ…憂愁の画家、大塩麟太郎らしくもないね。君の描いた中野の刑務所の壁なんか随分陰惨なものぢやなかつたか。それはさうと、僕はね、今、詩人朔太郎の像をモチーフにして一つの絵を考へてゐるのだが……。それはね、北極の薄明の空の下、無限に連らなる奇怪な形の氷島の上に立つ疲れた詩人像、しかも空には詩人のイマージュの象徴である不思議な七彩の幕、オーロラが重く中空に垂れてゐると云つた構成なんだ。どうだい?うまくいつたらJ展に出すつもりさ」

「ふうーん、着想はいゝけど、絵になるかな」

「ちえつ、馬鹿にしてやがる、懐疑派で絵が描けるか」

堀田氏は都会育ちの青年らしい鉄火な啖呵を切つた。前田氏は長身の腰を折つて二人の話を聞いてゐたが、別に口をはさまうとはしなかつた。大垣は彼の傍に寄つてそつと話しかけた。

「この前『四季』で見た君の旅情をうたつた詩、とてもいゝね、」

その言葉に始めて前田氏は考へ深さうな目を彼に向けた。周囲の人々の話題は専らまだ現はれない主賓の詩人についてであつた。そのいくつかが彼等の耳に入つてきた。(未完)

(註) パノンの會は昭和十四年、萩原先生の申し出で「四季」の会員たちを集めて開かれた。第一回はこの小説とちがつて東日の向ひのパノンスといふ喫茶店で開かれ、これまた先生の發議でパノンの會といふ名になつた。「ス」なぞいらないやね、といふのが先生のお言葉だつた (田中)

編輯後記

月末の編輯會議は西堤の田中氏宅で、次号の編輯打合會は月初に石橋の私の家で開くと云つた具合に、月二回往来を重ねてゐるうちに早六号となつた。号を追ふにつれ内容が充実してきたことは何より反響が物語る。誰か読者が落したらしい果樹園をたまさかに拾ひ読んで、共鳴を感じた……と言つてよこした珍妙な反響もあつた。十六頁では收録できぬ日も恐らく遠くはあるまい。 (O)

今年はハイネが死んでから百年目だといふことを、最近になつて気づいた。この詩人にはずゐ分悪い影響を受けた皮肉でいふより悪口をずばずばいつてのける方がいい時代まで生きて、特にその感が深い。彼の死んだのは二月十七日で、遅まきだが一言。前号の金尾文淵堂については、壽岳先生の玉稿のほか、金沢大学の藤田福夫氏からも教示を賜つた。その中、追加訂正させていただく。 (T)

果樹園 第六号 (毎月一回一日発行)
昭和三十一年七月一日発行
編輯兼発行人 布施市西堤町六〇七 田中克己
印刷所 大阪市東住吉区桑津町五丁目八 元市印刷株式会社
発行所 布施市西堤町六〇七田中克己方 果樹園発行所
定価 三十円

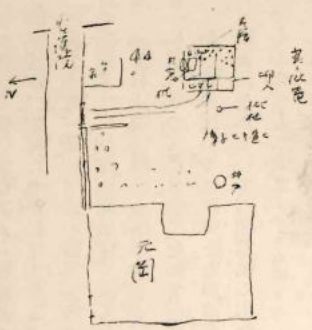
果樹園

第七号

書簡から見た伊東静雄 小高根二郎
初化粧 福地邦樹
無精な趣味 池澤茂
舊詩帖から 森亮
こぼれる花の 萩原朔太郎の詩碑をたづねて 小山正孝
森房子
蝶 上村肇
宇品にて 岩崎昭彌
「受胎告知」から 薬師寺衞
陳夫人 田中克己
踊子 浅野晃
編輯後記 (O・T・)

書簡から見た伊東静雄 (七)

小高根二郎



解批庵図宮一新治氏図本

中樞に沈潜して一切感情には捕はれまい。かうした伊東の懸命な悶えと超克のための祈願は、先の書簡に生々しいほど克明であつたが、やがて伊東はある程度その境地に到達し得た模様である。十二月初旬と推定される安代さん宛書簡は、よくその心境を傳へてゐる。

「安代さん。お手紙有難う。久し振りのお手紙で、大変嬉しふございました。それに緑草心理(註・尾上柴舟円前田夕暮散文集)、小包が面倒だつたでせふ。済みませんでした。近頃詩に沒頭してゐます。こんな時にこんないい本が手に入つて、私は大変愉快です。

安代さん。明日から又四日休がつゞきます。このいゝ天気に、この休、どう暮したらいゝでせふ。土曜から膳所といふ所に行きます。(琵琶湖のほとりです。古城下です)いつかお話した幼稚園の先生に招侍されたものですから。その人のおかあさんが(いつか一度会つたのです)私を大変好いてゐるのだそうです。そして、私をずつと早くから招侍してゐたのですが、そんな気持にもなれないので断つてゐましたが、そうそう断はり切れませんので行くことにしました。そこの娘さんが近い内にお嫁に行くのだそうで(こゝで安代さんや江口さんのことを思ひ出した)その人が行かない内に一緒に遊ばうといふ考らしいんです。私はこの人達の好意に微笑しながら行くことにきめました。」

伊東が短歌から詩に意向しだしてゐる機子がこの書簡で判る。

伊東を琵琶湖に招待した幼稚園の先生は、遠藤さんと云ふ保母である。そのお母さんに伊東は好かれたとあるから、或ひは遠藤さんさんの結婚対象として伊東は考へられたのかもしれない。文面だけではしかとはしないが嫁にゆくそこの娘とは、遠藤さんの姉か妹に相違ない。その嫁にゆく娘から、安代さんと江口さんを思ひ出した……とあるから、先に

私が推定した、安代さんの結婚話が決つたと云ふ説は、事実だつたわけである。江口さんと云ふのは、安代さんの諫早高等女学校時代の同窓生で、伊東の家のすぐ近くの人である

「毎日近頃は庵どもりです。平安朝の古謡に読み耽つてゐます。そして、時々庵の窓から首を出しては秋空をながめたり、夕方は吉田をあるいて、如意嶽の山色をなつかしんだりしてゐます。…中略…

夜は夜で歌を作つて一人であそんでゐます。そのかはりどこにもこゝにも御無沙汰ばかりです。

うつそみの蜂はたまたますがりつゝつひにわぶしき枇杷の花なり

窓の外に一本の枇杷の木があつて、目をとめてみると、それに実にわびしさうな花が一杯ついてゐるんです。それに今迄きづきませんでしたが、今日窓をあけてみると蜂が羽音をたゝて来てゐるので、きづけてみましたらあの花です。いかにも秋にふさはしい花ですね。私は、この庭にまでやつて来た晩秋を感じて、しんみりした心もちで障子をとざしました。」

伊東が読み耽つた平安朝の古謡とは梁塵秘抄であらう。

こゝに伊東の庵の模様が見えるが、宮本氏によると、寒枇庵と呼び、自ら寒枇庵主人と号してゐたさうである。それは聖護院西町の元岡家の隠居所に建てられた三畳の離れで、北に丸窓があり、その窓のもとに伊東は小机を据ゑてゐたらしい。東と北の壁際には雑然と書籍は山をなしてゐたさうである。出入口である西側は引き障子になつてゐて、雨よけに庇が突き出てゐたのである。その出入口近くに枇杷の立樹があつたのだ。

さう言へば、寺町の阿呆陀羅庵にも枇杷の立樹があつたことを思ひ出す。「障子をあくれば、枇杷の木。障子をさせば、枇杷の影。」と云ふ詩が、そこで生れてゐた。そのはにかみがちな憧憬の思ひにくらべて、前掲の咲くともなく咲いてゐる枇杷の花にすがる蜂の歌は、どことなく諦念に似た思ひが感じられる蜂がいかにすがつても、枇杷は人知れず咲かねばならぬ運命のまゝに、媚びることなく咲き続けるであらう。そして、人知れず甘い実を結ぶであらう。このかそけく花開き堅実な実を結ぶ花運はまた、伊東が最も好尚したところのものであらう。

「私は自由をこの上なく喜ぶ。私は友情でも恋情でも、私の自由を束ばくするなら用捨なく投げすてゝしまひたい。それに、丁度今その自由を一番感じることが出来て、愉快です。淋しくなるまで、こうしてしばらくは隠居してゐませう。

「父と子」を先日から読んでかなり感激しました。ニヒリストといふ言葉はあの主人公から初つた言葉だそふですね。今の私の心持に、あの主人公の心持はかなり合致しますが、それでもあの主人公のニヒリズムは今一つ徹底が足りないと思ひました。」

こゝで伊東は何者にも束縛されない自由を宣言し、ニヒリストであることを自認してゐるやうである。自らをツルゲーネフの「父と子」(1862)の主人公、六十年前のニヒリストである医者バザーロフに近似を認めてゐる。

既存の一切の権威——法制は勿論、哲学も宗教も、芸術も、いや、当時澎湃として起りつゝあつた農奴解放をすら、へヘン……と軽く鼻先でせせら嗤つたバザーロフ。それでゐて、叡智に溢れた未亡人アンナ・セルゲエヴナを知るに及んで、解剖台に乗せたいぐらいな豊満な肉体だ……と割切れたつもりでゐてずるずるその蠱惑に魅されていつた若いバザーロフ。しかも、親友の父の若い内妻フエーニチカの唇を、彼女の愛児を診断してやつたのが機縁で、薔薇畑で気軽な蜂のやうにつまみ喰ひを忘れなかつた色事師。この浮気がきつかけとなり、親友の伯父から決闘を挑まれるが、臆する色もなく冷静に立ち向つたニヒリスト。生命すら彼にとつては虚無に他ならなかつた。

この徹底したニヒリスト・バザーロフに対して、伊東が不徹底を感じたのは、恐らく彼の臨終に於る未練にあるのだらう。膿血症に罹つたバザーロフは、医者らしく自分の死期を豫感すると、初恋の人アンナ・セルゲエヴナに、「バザーロフからよろしく……」と傳言させてゐる。あまつさへ、駆けつけてきた彼女に向つて、バザーロフは「貴方を愛してゐました」と告白するにいたつてゐる。

これはニヒリストの信条に背反する未練だ。未練とは絶対自由の精神に対する一種の拘束だ。伊東にとつては、先の文章の如く、友情でも恋情でも、自由を束縛するなら、用捨なく投げ棄てゝ了はねばならなかつたのである。死期に及んで何の未練ぞ……と云ふわけである。が、この批判は、中枢に沈潜したいと願つた伊東が、自らに言ひきかせた言葉でもあつたのだらう。

それは兎に角、ツルゲーネフの「父と子」の主人公バザーロフは、若い伊東の精神の一角を陣取つたのは事実である。伊東はこの日より二年後、再び「父と子」を独逸語訳で読み直さうとしてゐることで、それと判る。

「私は…中略…フエター・ウント・ゾーネ(父等と子等と)にかゝりたいと思います。」と昭和四年十二月二十一日附の宮本新治氏宛の書簡に見えてゐる。

初化粧

福地邦樹

少女は初めて化粧をしたとき
蝶になる
ひらひら飛びまはるやうにして
にぎやかにおしやべりをはじめる
それは　いつもとは違つて
ひとを戸惑はせるやうに
まぶしいものがある
唇をほんのりと染めただけで
胸には明りがともつたのだ

いさかひ

疲れて家族は　時たまいさかひをした
やがて　めいめいとりつくしまもなく
ちぐはぐにおそい夕飯をしたためた
それでも母は　夜更けまで
おしだまつたまゝ針仕事をした
夜じゆう雨がごんごんと降りつづけた

盛夏の病院

烈日のもとで炎は色を失ふやうに
寛容のない日には　だれかの魂が
憤ろしい一片の無色の炎と燃えて　消えた

そして夜
死亡室に明りがともる

翌日　裏木戸に
緑の弔柱と赤い花束が立てかけられる
すると　通りすがりの女や子供が
お布施でも貰ふやうに争つて花を受けとり

死亡室に入つてゆく
身寄りのない亡骸を
最後の華やかさで埋めてやるために

ニヒリストを気取つた伊東は、この頃アララギの歌会に出席したりしてゐる。

「先日黒谷瑞泉院で催されたアララギの歌会に出席して、自他共に許されてゐる歌人達の頭の悪さかげんに一驚を喫しました。私の歌はかなりほめてくれる人がゐましたが、こんな男にほめられてもはじまらないと思つたので、途中でかへりました。私はやつと私のあゆむべき歌の道がわかつて来た様です。自信にあふれてゐます。」

（昭和二年十二月初旬――推定――京都より姫路市五軒邸九〇酒井安代さん宛封書）

伊東は歌の道には虚無を感じなかつたやうである。いや、光明をさへみつけたやうである。

無精な趣味

池澤　茂

一、二度とぎれたときもあつたけれど、ぼくはもう十年ちかく、金魚を飼つている。親の家の二階で暮していたときと違つて小さいながら庭があるから、一坪ほどの前庭の、応接間の窓のすぐ下のところに、金魚をいれた水槽がすえてある。雨の日でも、いつでも、室内から水面が見おろせる位置だ。そのかわり、そこは、そとからでも手がとゞくので、それまで飼つていた金魚が、どこかの子供に、一ぴきだけ残して、すつかり盗まれてしまつたのだ。ぶじにそろつていたあいだは、大して気にとめていなかつたのに、さて、盗まれてしまうと、なにかしら、ひどく、ものたりない。一ぴきだけ残つたのが、ひつそりと水の底にしずんで、ときゞ〳〵思いだしたように、ふら〳〵およぎだすのも、なんだか、さびしそうに見えてしかたがない。

『金魚屋が来たら、知らせてくれよ』と、すこし耳の遠いぼくは、なんべんも、妻に念をおした。

そしてぼくは、帰りが夜おそくなるかわりに、ひるから出勤する日が多かつたから、出勤まぎわまで、そわ〳〵して、おちつかなかつた。たいていひるじぶんにまわつてくる金魚売りが、いまにも来はしないかと、待ちかまえるからだ。

いつも来る金魚売りは、あたまのきれいに禿げた、はちきれそうに元気な、まるい、小づくりなじいさんだつた。ぼくの家はちょうど長い坂をのぼりきつたところにあるから、じいさんは、ぼくの家のまえあたりまで来ると、天びん棒にさげた荷の重みにあえいで、顔をまつかにし、あたまから、ひたいから、汗をだら〳〵ながしている。そして、そのへんに荷をおろし、しばらく息をいれてから、手ぶらで、ちかくの路地や辻をまわつて「きんぎょエー」と呼んでゐるく。

妻が知らせてくれたとき、ぼくはあわてて、自分の財布をとりに立つた。ぼくの月給はやつと食つてゆける程度だつたので、妻はわずかな小づかいでも、出ししぶつたからだ。「そんなら、しばらく、たばこをやめるよ。たばこ銭のなかから買えば、いいだろう」と、ぼくはあらかじめ、妥協しておいたのだ。

妻はいれものの洗面器を持つて出て『うちの主人は、金魚を飼うのが好きで……』と、ひどく気まりがわるそうに、弁解している。すると、じいさんは『それは結構でんなあ。小鳥やなんかと違うて、世話がいりまへん。一週間や十日放つといても、藻やら水あかやらたべて、平気で生きてますさかいな。無精者には、もつてこいの趣味でんなあ』と、とくに「無精者」に力をいれて言つた。もつとも、そういうふうに聞こえたのは、ぼくの耳のせいかもしれない。そして、ちょつと変な顔をしたのかもしれない。じいさんは「しまつた」というような顔になつて、ぼくに背中をむけ、たらいの金魚のうえに、かゞみこんだ。

いま水槽には、ヒゴイの子と金魚とあわせて、十三びきほどいる。みな、このじいさんから買つたものだ。一ぴきおまけに付けてもらつた和金も、見違えるほど、大きくなつたリュウキンは、一ぴき二十円で、指一本ほどしかなかつたのが、いつのまにか、三倍から四倍、こどものにぎりこぶしほどに、育つている。いつか金魚屋で見たら、おなじぐらいな大きさのに対して、一ぴき三百円の定価がつけてあつた。もう四年以上も生きているのだ。

水槽があるのは北側だから、ことに冬には、すつかり日かげになつて、たび〳〵、あつい氷で、おゝわれてしまう。それでも、よわりも、死にもしない。四年のあいだには、ぼくは失転して、やつとのことで大阪にあらたな転を見つけ、いろ〳〵つらい目にあつて、金魚など二ヵ月も三ヵ月も放つたからしておいた時期があつたけれど、やはり、なんともなかつた。ふつうのときでも、一週間や十日はしば〳〵忘れている。むろんそれぐらいの期間は、すこしも差支えがない。

もつとも、容器は戦時中に使われたコンクリート製の防火用水槽だから、かなり大きい。一石ぐらいの水は十分にはいる。その底に、土をいつぱい入れた半箱をしずめ、藻が植えてある。その藻がうつそうとしげり、アオミ

舊詩帖から

森　亮

みなづき

――み軍のサイパンに苦闘するを聞く頃――

雲雀、雲雀　畑より揚がり
ひ・ひら・ひら　畑におりくる
雨降らず　田植ゑおくれむ
今日もわが　青くもの　空だのめ
かわける土に　鍬を打つ
くやしき時は　脣をかみ

★

アンフィアラオス

青毛、白毛の馬が引く
いくさぐるまの小輕さは
さぶらふ御者の一鞭に
里わの坂をさと越えむ
いくさぐるまのとともひて
鞭おと風を切るときは
死ぬるさだめを知りながら
ゆくますらをは矛を振る
その日の晴れのよそほひに
蠱の首輪を手に懸けて
かどに送ると立つ妻は
せまるさだめをつゆ知らず
くしくさかしき蛇の性
占なひびとはうづくまり
見送るまみの冷たさや
左手の杖をつちにつく
死ぬるさだめを知りながら
ゆくますらをは矛を振り
青毛、白毛の馬が引く
いくさぐるまは輕くゆく

註　己が死すべき運命を知りながら出陣するアンフィアラオス、何事も知らずに彼を見送る家族達。彼の妻は手にその呪の首輪を下げてゐるし、右端には占者が悲しげに蹲つてゐる。

――村田數之亮著「ギリシャの瓶繪」

ドロが繁殖して、水はあお〳〵している。自然の池の状態に、かなり近いわけだ。それにそばにバラの生垣があるから、その葉かげから、羽虫などが、しきりに、水面に落ちる。蚊がボウフラをうみつける。そんなことで、しばらくのあいだエサをやらなくても、たべるものは、なにやかや、あるのだろう。水の世話なども、ほとんどいらない。容器が庭にあるから、長雨や大雨のあとでは、しぜんと、きれいな水になっている。たまに死んでも、つまみだして、バラの根もとにでも埋めて、ちょっと、おがんでおけばいゝ。金魚売りのじいさんが言ったとおり、いくら無精でも、なんにも面倒なことはない。すこしぐらい費乏でも、費用がかゝらないから、べつに苦にならない。それに、ぼくがなにかで、つらがったり、かなしんだりしていても、かれらは、なんにも、せんさくしたりしない。よろこんでいるときでも、意地悪い文句をいったりしない。恩にきせたり、きせられたりすることが、全然ない。

ひまなときや公休日など、ぼくはとき〴〵思いたって、ミミズを掘ったり、ハエをたゝいたりして、窓から水面に、おとしてやる。そして妻も、ちかごろでは、ごはんつぶの残りなど、そっと、やっているらしい。エサがおちてくると、ヒゴイの子は、サッと全身をきらめかせ、リュウキンは、まるい腹をゆさぶり、ながい尾びれをゆら〳〵ゆらめかせて、藻のかげなどから、いそ〳〵と、おどりだしてくる。それから、もつれあい、おしのけあいながら、パクパクと、できるだけ大きな口をあけ、目の色をかえて、エサに、とびかゝってゆく。朝や晩の、日のひかりが水面におちているときなど、列をつくってのんびり泳ぎまわっていたり、はげしく追いかけっこをしたり、水面を打っておどりあがったり、する。限られた水槽のなかだけだけれど、ひとつの完全な世界になっているのらしい。そして、かれらは、あたえられたその小さな世界のなかで、なんにも言わずに、かれら自身の生活をいとなんでいる。

こぼれる花の

小山正孝

こぼれる花のにほひを　私は忘れなかった
アカシアの葉のそよぎも
黒い塀の上から　藤の花がやがて垂れることも
私は忘れなかった　私はそして少女と歩いた

お前は不思議さうに　道に立ち止った
汗をかいてゐたお前のひたひ　私の目が
お前の目を見つめ
（きっと　これも　思ひ出になるのだろう……）
道はばの廣いことが　同じやうな気持にした

遠ざかる　かっこうの声
（きっと　これも　思ひ出になるのだろう……）
（あなたは　その人を裏切ったのね）

お前はかっこうのやうだ　花のやうだ
アカシアのやうだ
とがめるやうなするどい目をして
少女は言った　（あなたは　その人を裏切ったのね）

萩原朔太郎の詩碑をたづねて

森房子

先生が亡くなられてから、去年はその十三年忌であった。終戦後、確か、昭和廿三年頃かと思ふが、一度墓参を申上げたいと思って前橋迄出かけた事があった。やっと戦ひが終って、まだ〳〵世の中は敗戦の憂き目で、尚収拾もつかぬ頃のことであった。さういふところを切り抜けてゆくのに、精神の支柱を、身近にはやはり、先生に置いてゐるやうなところが私にはあった。先生にお会ひした最後は、晩年、亡くなられる半年乃至一年位前の事で、その後は御病気と伺って、御見舞の花を持っておたづね申上げた事はあっても、面会謝絶とのことで、極く〳〵親しい一、二の方々以外には、御会ひにならぬ御様子で、私は門を入ってから脇の方にある井戸端のところで、働いてゐた顔なじみの女中さんに、花を渡して帰った来た事であった。先生はそれでも、その事に対して、病床で書かれたらしい御葉がきを下すった。

御見舞重ねてありがたうございます。病気もまだ全快に至りませんが、気候あたゝかにもならば、追々起床できそうです。いつも芳情うれしく。

はかなしや病ひ医えざる枕べに七日咲きたる白百合の花。

私が歌を作ってゐるので、先生には珍しい歌を作り添へて結び、そんな事以來御目にかかったことがないまゝ、全快なさるものと信じてゐた。御病気の様子もよく判る由がなかった。それから亡くなった事をきいた。御年もまだ若かったので、予期してゐなかった。お通夜に焼香させて戴いた。惜んで余りある方であった。もう滅多に泣かなくなってゐた私が、まして人前でなどを、こみ上げてくるのをとめやうもなく、霊前で泣いた。

翌日告別式に、人の列に交って、御送り申上げたのが最後だ。その告別式の折、御嬢さんと思へる方の顔を、横からたゞ一度ちらっと見た。横から見た顔は先生とよく似た、大きい目と、立派な鼻すぢの通った、髪の毛のくろ〴〵と、房々した背の高い方だった。前後十年間程、先生の御宅に伺っても、家人の方々とは御目にかゝることがなかったので、いらっしゃるとはきいてゐたが、そんな大きな御子様を、私はおどろき気味に眺めた。

きたない汽車にゆられて、前橋に着き、その夜は旅館に一泊して翌日、墓参をした。菩提寺は、街の真中にあり、墓地も混雑してゐて、余り鳴りのよくない三味線の音などが、墓地のすぐ側からきこえたりしてゐた。花を捧げて、礼拝をし、戦争を知らず逝かれた先生は、先生にとっては、却ってよかったと思った。上海陥落の頃は、まだ御在世で詩を朝日新聞に発表され、誰かそれを作曲しないかな、などと仰言るのを、私はぢかに先生から聞いたりもしてゐた。けれどあんな凄じい戦争に、先生が耐へられるとは思へなかった。よし若し、耐へられたとしても、傷々しく私には思へた。前橋公園にゆき、波宜亭のあとや、利根川の流れの見下せる公園の中の土堤を歩いた。雲雀の詩を思ひ出し、胸をいたくしたりした。広瀬川の流れのほとりを歩き、広瀬川の詩を思った。

われのライフを釣らんとして
過去の日川辺に絲をたれしが
ああかの幸福は遠きにすぎさり
ちひさき魚は眼にもとまらず。

その詩を御自分で誦された日の事を、思ひ出した。その日の、その先生の様子が目に浮び、それは当時より十何年も前のことだったのに、実に鮮明に蘇った。是非晩年あれ程愛された、あの広瀬川の詩を、何処か適当な場

蝶

上村肇

買物籠を下げたお母あさんと僕の足もと
に
さき程から白い蝶がまつわりついて離れ
ない。
蝶は僕のように
お母あさんに何か買ってもらうつもりで
いるらしい。
お母あさんは　ちよっと立ちどまり
なにか忘れ物らしいふうだったが
急に僕の手を邪慳にひっぱって
さっさと市場の方に歩き出す

服地

女の乳房と云うものは
胸部も上の方にあるものと思っていたら
案外、下の方にあるのには落胆した。

ロマンチズムとリアリズム

僕もこの頃少し迷いはじめる
女があれこれ手にとり上げて
夏の服地を店で迷うように。

所に、碑として刻んで建てたく思ひ、建てるべきだと思つた。津久井医院（先生の生家跡実妹が嫁がれてゐる）へ御寄りして、その時はまだ、御在世だつた御母堂に御会ひした。御雛様のやうな感じの母堂は、世田ヶ谷で御会ひした時と餘り変りなく、代田の御家が焼け、行李に詰つた、先生の澤山の原稿が焼けたのも、その時はじめて伺つた。音樂室と言つてゐる先生のお若い頃、仲々その部屋から出ず、食事をそこに運ぶこともあつたといふ木造の洋室もそのまゝだつた。母堂に御目にかゝつたとき、また私の涙が滲んだ。老いて子を先立たせた悲しみの通念が、母堂より先きに私をおそつて来たからのやうであつた。近親の方々は、もつと生々しい悲嘆にさんざゆすられ、古び固つた頃を、私には長く尾をひいて惻々とし、死の実感に薄かつたためのゆすりが、その時やつて來たのだらう。その足で直ぐ私は東京に帰つた。

そんな日からまた、六七年は経ち、去年のことだつた。外出から帰つて来ると、夫が、「さつきラジオのスキッチを入れたら、丁度録音ニュースで、萩原さんの詩碑の除幕式をやつてゐた」と言ふ事であつた。

さう言へば、それは五月十一日で、最早や逝去後、十三年もの年月が過ぎ去つてゐる。感無量であつた。国宝的存在と言はれてゐた先生の碑が、建たぬ筈もなかつた。見届けるべきものを、見届けたやうな気持で、私はほつとした。それにしても偶然に入れたスキッチが、丁度その光景の録音であつたといふやうな事も、不思議な気がした。私はラジオといふものが、余り好きでないから、自分からスキッチを入れる事が殆どない。私だけだつたらそのまゝ知らずにすぎただらうのに、夫が偶然にきゝとめたのも、何かの御縁のやうな気がした。その少し以前、夫は前橋へ行つて墓参も申上げてゐた。私の歌に多少でも筋金があれば、それは先生のお蔭と私は思つてゐる。先生から一二度詩を見て戴いた事はあつても、一度も歌の指導をして頂いた訳のものではない。しかし詩人としての先生の人柄から、宝石のやうに稀れな、苦悩の立派さと真剣な態度の美しさを、御交際の中から度々見もし、知りもして、私は感動した。まことに国宝と言つて恥ぢない、見事な思想の裏付けを持つた、詩心の貫きと、その行動であつた。そして長く私は、先生を仰ぎながら作歌をつゞけて来た。

そして丁度去年の、その五月の末には、私の二冊目の歌集「瀧」を刊行した。私の処世歌集「炎道」も、先生は見ていらつしやらず今度の歌集とて、先生の目には触れない。けれども若い頃から御仲間と思ひつゞけて来た先生の周辺の方々から、「炎道」以後、晴れて御挨拶を賜はることは、私が当然しなければならないで来たことを、漸く果して、この戦争の大動乱を経ても、尚且、結ばれるものは結ばれてゆく、神の摂理や、人間の意志の確かさを、改めて身に覚え知つたよろこびに、私を浸らせてくれた。その上今度一層私を驚かしたことは、先生の遺児、かつて、先生の告別式場で、ただ一と目ちらと見て過ぎた、萩原葉子さんが全く思ひがけず「瀧」の出版記念会に現はれて下すつた事だつた。言はずと全部を最初から御存知であつたやうな、憂限の保田与重郎氏の賜つた「瀧」への序文は、二十年間も絶えてゐた交誼に不拘、作品一つに依つて、余すなく私を読みとつて居られ、私はそれにも感謝を禁じ得なかつた。その保田氏を通じて、葉子氏を私の記念会席上に見た時、人間同志の不思議な牽引力のやうなものを感じた。立派に成人された遺児の葉子氏は、先生の遺業のひろまるに連れて、一人の肩にそれを背負ひ、忙しい日々を送つてゐられる。

今年の五月十一、二、三日と前橋では、先生の命日を中心にして、先生の写真展が開かれたり、詩の講演会も催され、講師に草野心平、福田清人、伊藤信吉、壺井繁治の諸氏が東京から馳せ参じた。一度詩碑を拝見したいと兼々思つてゐた事とて、葉子氏のお誘ひに応じて、私も参加させて戴いた。前橋は私がこの前、ひそかに出かけた時と違つて、全くその相貌を改めてゐた。道路は拡がり、街は街燈を連ねて賑かとなり、家並みも明るく東京風に変り、バスが走つてゐた。講演会の場所は貿易会館の講堂だつたが、この建物は市中で最も近代的の由であつた。講師の面々が起つて講演の始まるにつれ、聽衆は増す一方で、椅子も足りず、立つたまゝでゐる人達

宇品にて

岩崎昭彌

朝靄に鈍色の輸送船が数隻浮んでゐた
戦争でひときは活動するらしいこの港
今日までに幾萬の兵を送り出したのか

出動命令下つたその夜
鈴鹿山麓の千種兵舎を発ち
四日市　名古屋　米原を経て
きのふ朝彦根の我家の前を通過した
別れの手紙を汽車から投げたが
果して届いてゐるかどうか

港（聯部隊）の営門の傍で
面会人らしい何処かの家族達を見た
ある期待が
俺を広島駅まで歩かせてしまつたが
当然のごとく徒労だつたのだ
萬葉集を知らないけれど
防人も父母や恋人はあつたのだらう

インパール作戦に加はるといふ
否マレー半島の警備だといふ
戦陣は何処だつて同じことなのだ
通信は一切禁止されてゐる
そして明日は乗船してしまふのだ

――インパール――

も大勢だつた。道がに聽衆は若い学生が大部のやうであつた。都会と異つて、質朴な田舎風の人達だつた。草野心平氏は朔太郎を、福田清人氏は風土と人の関係を、また壺井氏は萩原恭次郎を中心に語つた。中でも草野氏の朗読した朔太郎の詩「大渡橋」はよかつた。そしてたつた一つ残つてゐる、朔太郎の自作詩の朗読レコードが、最後にかけられた。少くとも先生の晩年は、当時時代的にも詩が衰へ、〃韻律の薄暮〃と先生独特の詩的表現を以て謂はれた上、詩の身辺に友をも、人をも失はれ勝ちになられて、寂しかつた先生が、様々に御自身の死を早める、落胆や失望の原因を抱へながら亡くなられたと思はれるその死の後、益々時代の推移に甚しく人心も変つた。その中で純粋に変らぬ人のつながりが、目のあたり、幽明、時空を超えて交歓し合つたひとゝきのやうに、先生のレコードの声は在りし日を再現して、私共の胸にじんと泌み渡つてきこえた。今では故郷の朔太郎は、日本の朔太郎であり、日本文芸史上不朽の名を大きくとゞめた巨峰である。誠に価こそ死後に於いて決せられ、真価は益々その後に輝くのだらう。

先年参つた御墓所へ、今度は葉子氏達近親の方々五人の同勢で、お詣りをした。墓所は街の様子と違つて、改造されたり拡張されたりする筈もないから、先年と同じであつた。却つて住宅難のせいか、前には無かつた小屋のやうなもの迄、所狭く墓地にはみ出し、接近したりして、先生には御気の毒に思はれたお墓を浄め、香華を供へ礼拝するのにも、先年の時と違ひ、同勢で賑かであつた。

しかしそれから翌日、先生の詩碑のある、敷島公園に赴いて、詩碑を拝すると、亭々とした松原の中に、公園とは言つても清澄な空気の中で、松の静かさが塵を払つて、ひろびろとし、やゝ私はほつとした。先年来た時はまだその土地が公園になつてゐず、急ぎの事故、あるとも知る事なく帰つた場所であつた。講師の方々や新聞社の方々、写真の方等大勢が二つの自動車から降り、公園に入ると、折から広場で小学校の運動会らしきものがあり、子供達が大勢さゞめいてゐた。公園に入ると直ぐ池があり、池のほとりつゞきに、形のよい松の並んだ松原があり、芝草が生え、この辺は人も稀に静かであつた。三三五五、私達は前日から続いてゐた行程の忙しさを、漸くこゝに治めて、芝生を踏みながらゆつくり詩碑に近づいて行つた。

詩碑はひとり私達の正面に、此方を向いて鎮つてゐた。大きい白花崗岩の厚みある四角を、尚両側から厚くさゝえた形に、あたたかさと、やはらかさのある彫りであつた。中央に黒く色紙型のブロンズがはめ込んであるのは、そこに刻まれた先生の詩の一節のあることを示してゐた。先生の唯一人の、まだ小さいお孫さんの朔美君が、一人先きに詩碑に向つて馳け出して行つた。はじめて私は、すでに年月の遠く行き去つた事を感じた。詩魂は此処に眠り、私共はおそらく、先生も予期せられなかつたであらう、戦禍の経験を経て、漸く夫々の環境に、いくらかの息吹きを恢復しかけてはゐても、遂に戦争の彼方と此方とそれはさながら、悪夢の迷路を漂ふ程にもかけはなれ、そのかつての精神の命脈も、果して私共の世代以後、確かに何処に受けつがれてゆくのかおぼろである。

寞とした、虚脱のごとき虚しい瞬間が私に流れた。切々と生き、切々と啓蒙のドラを叩いて、日本の文化を叱咤した思想の詩人——寂しい徳の詩人。そして私はあの「桃李の道——老子の幻想から——」を思ひ起した。

聖人よ　あなたの道を教へてくれ
繁華な村落はまだ遠く
鶏や犢の声さへも霞の中にきこえる。
聖人よ　あなたの真理をきかせてくれ。

杏の花のどんよりした季節のころに
ああ　私は家を出で　なにの学問を学んで
　きたか
むなしく青春はうしなはれて
恋も　名誉も　空想も　みんな楊柳の臍に
　涸れてしまつた。
聖人よ
日は田舎の野路にまだ高く
村村の娘が唱ふ機歌の声も遠くきこえる。
聖人よ　どうして道を語らないか
あなたは默し　さうして桃や李やの咲いて
　る夢幻の郷で
ことばの解き得ぬ認識の玄義を追ふか。

薬師寺衛君は本名倉田敬之助、大正二年京都市で父君丹三、母君イト氏の間に生れ、府立医大を昭和十五年卒業。十七年三月、軍医としてフイリツピンに出征した。学生時代から詩を好み、「コギト」、「四季」にもたびたび投稿掲載された。その作品の特徴は知的で、はげしい皮肉味をもちながら、うちに深い大きい愛情をひめてゐた。これは私より深い交友関係をもつた人たちが、あかしづけることと思ふ。私は萩原さんの「パノンの会」で会つたきりだつたが、多くの書信をとりかはした。昭和十九年にはレイチ島にあり、米軍の上陸を迎へて、二十年二月十一日まで応戦し、頭部貫通銃創で戦死した。詩人として医師としての天分努力から考へて誠に残念といふより外ない。そのうへ作品は出征のとき託した先で戦災に会ひ、いま残るのは母君の手許にある「受胎告知」一冊だけで、これは「一九三八年四月九日根なほす」との奥書があり、二十六七歳以前の作なることを証明する。今次戦争の戦死者中「コギト」は同人中島柴次郎氏をも同じくフイリツピンのルソン島で失つた。あはせて南海に哀禱をさゝげる　（田中克己）

ああ　この道徳の人を知らない
昼頃になつて村に行き
あなたは農家の庖厨に坐るでせう。
さびしい路上の聖人よ
わたしは別れ　もはや遠くあなたの齊音を
　聽かないだらう。
悲しみしのびがたい時でさへも
ああ　師よ！　私はまだ死なないでせう。
余韻長く嫋々と名鐘も響けと思はれた。
近寄つた詩碑には浮き彫りで先生の文字に
依る〃帰郷〃の詩の一節が誌まれた。

わが故郷に帰れる日
汽車は烈風の中を突き行けり。
ひとり車窓に目醒むれば
汽笛は闇に吠え叫び
火焔は平野を明るくせり。
まだ上州の山は見えずや。

せめて来るものは静かに、また烈々と、あの驀進する汽笛の何かをきくものであつてほしいとねがつた。

公園に近く大利根の上には、鉄骨の大渡橋がかかり、自然は人の命よりも悠久であり、広瀬川の水も満々として流れ早く、昔も今も一切人を見返らぬ様子であつた。

「受胎告知」から

薬師寺　衛

はるのへび

ひるねに
しろくなり
すきとほるやうになり
ひそかに
とこをぬけ
まぶしいみちをゆくのを
ひとびとよ

どうぞ
みないでほしい
あたらしいからだは
まだ
やはらかに
ぬれてゐて
いたって
きづつきやすいから。

花

やさしいひとよ
どうぞ
はながさくまでは
ゆかずにゐてください
さうして　それが
はなであること
あひかはらず
うつくしいこと
あなたにも
さうみえることを
やはらかく
しかし
くりかへしくりかへし
おをしへください

わたしは
もう　はるは
こないのかとおもつたのです。

蛇

みんな　さだめを
おはされてゐるのだから
きがつくと
さびしくなるのだ
それで
へびのやうに　つめたく
かたくなに
絶望するのだが
いきてゆかねばならない
あれは
身をさくやうなおもひで
木にからむのだから
いたはつておやり。

えんぴつをけづる日

けふ
じぶんには
もはや
ともはなく
するどく
えんぴつをけづり
なににする
なにといふ
あてはなく
ひたすらに
えんぴつをけづれば
そとは
あめあがり
すずめ
けはしく
なきしたたり。

あらべすく

あいする　にほんごよ
おまへが　ぼくに
すげなくすると
ぼくだって
あてつけに
ノオトの　うへに
やはらかい　えんぴつで
かぎりなく
うつくしい　あらべすくを　かくよ。

陳夫人（二）

田中克己

外へ出ると街路の大王椰子の梢の向ふで火花が散つた。この間から路面電車が動いてゐるのでその火花だらう。その方向へ歩き出してすぐ大通りに出ると方角もわかつた。なに宿舎からさう遠くはないのだ。僕はしつこく附きまとふ人力車をふりきつて歩いて帰つた。宿舎について見ると、僕のあれほどきらつた隣りの宴会は今晩はもう終つてしまつたのか、ひつそりと物音もしない。いやそんな筈もない。場所をかへようといふので、どこかへ連れ立つて出かけたのだらう。かうなると却つて、物足りない。僕はまた表へ出て見た。道の向う側の判任官宿舎に燈がついてゐる。行つて見ると將棋をさしてゐる。観戦してゐる中に、僕はさう〳〵と思ひついて、町角の酒屋にゆき、ビールをもつて来さし、会計係の下士官に、勝負のすんだところを見はからつて、これを贈り、

「明日給与通報を下さいよ」

といつた。給与通報って何だって、軍隊用語で、俸給関係の文書のことだ。下士官は

「はあ」

と答へ、

「大川さん、いよいよお別れですね」

といつた。

これで用もすんだので、僕はまた自分の宿舎にもどり、シャワーにかかつたあとベッドに横になり、この室とも、もうお別れだなといくらか感慨をこめて見まはした。寝室は四畳ほどのひろさで、南むき。洋服箪笥がそなへつけてあり、机と椅子二脚とで、全くせまいのだが、いつぱい置いてあつた本を片付けたので、いくらか広い目になつた。本はシンガポール到着以来買ひ集めたもののほか、砲彈でこはれた住宅から拾ひあつめたものもまじつてゐる。転出命令が出るとこの本が惜しいので、トランクに詰め、死んだら内地の研究所へ送つてくれるやう友だちにも頼んである。語学と民族学の本ばかりだ。今晩もらつてきたルバイヤットは、スマトラへもつて行かう。

ここまで考へると僕はダッチワイフを抱いて眠ることとした。ダッチワイフといふのは熱帯で用ひる睡眠時の抱き枕で、体温を吸収してくれる。僕のは店から買つて来たバンヤの入つた袋だつた。これも明日は誰かにやることにしなければなるまい。それにしても軍人軍属でダッチワイフをもつてゐるのはさうあるまい。こんなことがまた……一派から睨まれた理由なんだな、とこのころになつて僕も気がついてゐた。

大体、僕がシンガポールへ来て驚いたことは、僕の属する機関のだらしないことだつたそのうちに、このだらしなさは、僕の機関に限らないことがわかつた。僕の機関の長はいい人だつたが、毎晩接収したスコッチ・ウイスキーを飲んでゐる中に中風になつた。軍政の最高顧問は、僕が会ふと、軍人に憎まれると大変だから何もしないでゐるといつた。シンガポールの市長に任命された高官は、僕が訪ねてゆくと、抱負は何も語らず、阿媽に漬けさした茄子の浅漬を自慢した。実際それはシンガポールで僕がたべた一番の御馳走だつた。軍司令官は、何をしているかわからない。多分もとの総督官邸にゐるのだらうが、天長節の訓示が新聞にのつて、その中で馬来の永久に日本領たることをのべてゐたが、内地から叱られたといふ話だつた。名高い某軍参謀は戦友の血であがなつた土地を汚すなと訓示したあと、転任になつたといふ話だつた。

兵は？もうあの勇しかつたあとをとどめず日朝点呼、日夕点呼で叱られつゞけで、おどおどして街を歩いてゐた。衛外酒保の前に列

をなして一人一箱と割当の煙草「バイレート」を買つてゐたが、そのよこには華僑の少年たちが並び、十銭で買つたのをその場で一円五十銭で買ひとつてゐた。この一円五十銭は、慰安所と称せらる軍の施設のショートタイムの値段だつたのだ。

海軍の兵隊は、金を澤山もつてゐたが、海峡ドルの軍票にかへてもらへないので、商店街をまど〳〵してゐた。そして何とかして手に入れた軍票で、内地では手に入らない純綿純毛の反物や衣類を買取ると、また軍艦へいそいそと戻つて行つた。軍艦はかうして内地への衣料運搬に使はれる筈だつたが、今から想へば途中で命令が出て、また南太平洋へ行つたのではなからうか。そしてツラギの夜戦タラワ・マキンの戦闘でこれらの衣料はどうなつたか。なにもともと印刷費用だけの軍票で買つたものだ。そんなことは軍の知つたことではない。僕らも責任は負ふべきでなからう。

実際、僕はこれらの様子を見、聞きしながら、途方もない考へ方をしてゐた。これらのだらしない軍と軍政とにも拘らず、太陽は輝き、果実はみのり、コーヒーはふんだんにのめる。この生活を与へられたことを先づ僕が感謝すべきだ。現地人は？現地人も感謝すべきだ、少くともみな殺しにされなかつたのだから。

そして最後にかかるだらしなさにも拘はらず、びくともしない軍は、それゆゑにこそ一層世界無比と誇るべきだ。皮肉ではなく、本気で僕はさう考へてゐたのだから、どうかしてゐたんだね。しかし僕だけぢやあるまい。一生懸命へたな英語の助けをかりて、馬来少年に日本語を教へてゐた某、某、馬来中の激戦の跡をスケッチしまはつてゐた某画伯、撮影してまはつてゐた某技師、みな同じ程度の呆け方だつたにちがひない。

ただこの夜、寝つくまへに、僕は陳妙貞のことを思ひ出して、へんに今までの安心感のゆらぐのを覚えた。それとともに死の覚悟も怪しくなつた。

馬来の華僑は戦争前、反日で有名であつたそして戦争とともに英軍と協力して日本軍に抵抗した。日本軍の全面的馬来占領の後、彼等はまた英軍とともに降伏した。しかしいま半裸で市内で作業させられてゐる英軍とちがつて、彼等は降伏したにも拘らず殺された。殺し方は？銃弾の消耗をきらつて——海に漬けて殺した。さう僕は聞いてゐる。しかし僕はその場面を見なかつたし、そのうへ呆けてもゐたので、それがいかに非道なことであるかについて、あまり考へても見なかつた。いま陳夫人とその子とを見て、やつとこれに対して直ちに感ずべきだつた感情の数十分の一が生じて来たのである。

僕はここへ来るまで東京の市内に住み、妻と平和なつつましい生活を送つてゐた一インテリであつた。その平和なつつましい生活がどこかへ行つてしまふと同時に、勝利者、征服者の驕慢は否み得ず身についた。僕ひとりだけだらうか。これはここ馬来の何万の軍人軍属に共通のものではなからうか。いな外地に在る数百万の軍人軍属に共通のものなのではなからうか。——僕はこれを考へてゐる中に眠つてしまつた。

東側の窓から当る陽で目がさめた。僕はすぐ顔を洗つて、路の向ふの食堂へ行つた。いつもの通りの味噌汁と飯である。味噌は乾燥して内地から送つて来たものなので、うまくない。早々にすまして、ただ一人同席した少尉とちよつと話して、自分の室へ引き上げた引き上げるとき、隣を見ると表札がかゝつてゐる。おやと目をとめてみると、照子と富代とある。さてはわかつた、この自称愛国者ども、大東亜共栄圏の理念の中心どもは、昨夜僕ら非国民たちの追放の祝盃をあげに、近ど

ろ出来上つた藝者家へ行つて、そこの部屋札をぶんどつて来たのだ。稚気といふにはいやらしすぎる、僕はちよつと顔をしかめてから部屋に帰り、服装をとゝのへ、機関へゆくバスを待つことにした。何のため、申告にゆくためなのだ。申告とは軍隊用語で着任、離任進級などの挨拶みたいなものだ。中風になつた機関長の代理の若い大尉は、僕の申告をきくと、何だか気の毒さうな顔をして

「お体を大切にして元気でやつて下さい」

といつた。はなはだ軍隊的でない挨拶なので僕もありがたく受け取つてから、会計に行くと、僕がビールを贈つた下士官はゐたが、給与通報は今は出ないといふ。明日は、ときくと、それもわからない、といふ。理由はと聞くまでもなく、僕が

「それぢや月給の前借をさして下さい。向うへ行つて困りますからね」

といふと、これは簡単に聞き届けられた。これで僕は甚だ満足して

「それぢや給与通報はあとでなるべく早い便でとゞけて下さい」

といふと、これも早速ききとゞけてくれた。たゞしこの通報は僕のスマトラ在任中つひにとゞかなかつたのだが、武士に二言はないといつた武士と軍人のちがひはこれでもわからあね。なに、武士と軍人とは全然べつだつてその通り、ともかく僕は意気揚々と月俸を抱へこんで、もう二度と来ない心構へで、機関の建物を引き上げた。ブーゲンヴイレアといふ赤い花の咲く公園に近い粗末な建物だつた。

次は、また思ひつきで、あまり遠くない新聞社へ行つて見る。ふしぎなことで、僕は軍命令で転属となつたのに、その転属部隊は海の向ふで、そこへゆく便船、その他の便宜はどうしたらよいのか一向に指示もない。そこで一緒に転属する上等兵にたのむと、引き受けてくれる。彼はもと新聞記者で——なに今も腹の中は新聞記者なのだか——旧同僚にたのみにゆき、さつそく便船がわかつた。民間

踊子

原爆の日のために

浅野晃

白き蛾は青き闇より浮かび出で
いとしわが踊子は
爪立ちてかろやかに踊り出づ
いづれはおなじ天と地の間にして
楽の音のまにただ動く
かよはき四肢のやさしさ
巷にはくらき河ゆき
岸に虫なけど
人天餓鬼らここにうち集ひ
色めくゆゑの寂寥に
穹窿はしだいに尖りゆき
クルスは光りゆらめけり
瞑目すればすべてこれ修羅道に
月が影さす流転因果の棹歌なるか
楽師もいまはいたく疲れたる容子にて
ひときは鋭どくヴィオロンの弦のきしれば
人天餓鬼らかしこに落ち沈み
ことに色めくゆゑの寂寥に
蛾の虫は赤き涙し
老いたる史家は時をかぞへておのののきぬ
げに見よ　めぐりしこの子
いましその爪先を軸に承け
獨楽よりはやく廻転し廻転せむとす
不気味なかの一瞬の雷音こそ
汝が待つものか　子よ
そのときくれなゐの業火は來たり
いたまし　純白のこの一輪を
虚空に不朽の散華となしてたたしめる。

の切符にあたる碇泊所司令部の許可といふのもとれて、それを僕は胴巻に入れてゐる。その礼をいはうといふのが一つ、もう一つの用件は内地の新聞が飛行便でここへ来てゐる、それを読むのである。支局長に礼をいつたあと、僕は応接室に腰をおろして新聞を読みはじめた。……四月十八日の空襲は少数機で大久保辺をやつたらしい。あの辺にあつた僕のもとの勤め先にはおちなかつたらうか。おちたらあの白髪の老理事長は？おや、と僕はつまらない連想を中絶して、もう一つのニュースに目をとめた。「詩人萩原朔太郎死去。」

僕は居たたまれなくなつて、席を立つた。海の見える東側の窓ぎはに出て、港をとりまく小島をながめながら、僕はひとりごとをいつた

「可哀想に、朔太郎は死んだ」

ふしぎに思ふかもしれないが、可哀想といふのが実感だつた。突然はげしい嗚咽がおそつて来て、僕はそれを止めるのに苦心した。発作はまもなくすんだ。僕はそしらぬ顔をして、その室に来合せた副支局長と挨拶し、それから思ひついてたづねて見た。

「鬱印の軍票に交換をしていたゞけますか」

副支局長はたづねた

「いくら位です」

「なに三百円ほどで結構です」

「会計にきいて見ませう」

かうして僕は死ぬ覚悟をしながら、どんどん出発の用意が出来て行つた。萩原さんはかうしたことも出来ない人だつた。僕は若いせいばかりでなく、俗務が出来ねばならないと教へられたので、それを止めようと思ひながら、今だに止められない。もつと詩人らしくしたいなあ。僕は心中呟きながら辞去した。

自分の室にもう一度帰つて来たが、仕事もない。僕はまた出かけて、昼飯をたべようとし、シンガポールの最後の昼飯に誰を陪席さすべきか考へて見た。誰もない。これは悲しいことだつた。別れを告げるべき人間には皆もう別れを告げてしまつたのである。僕はまたひとりで街に出てゆき、昨日の通りの方へ足が向くのを止めることも出来なかつた。

あの家はすぐわかつた。家の前には昼ま見ると花壇があつて、そこに女の子がゐた。あの子だ。名前は英玉（インユイ）とかいつた。僕は呼んで見た。彼女はおぼえてゐて「先生来了（シンシンライラ）」といつた。この「先生」は、僕の一等きらいな職業である教師のことではなく、英語のマスター、乃至ミスターに当るのである。僕は子供に手をのべて挨拶し、散歩をしよう、母親の許可を得て来いといつた。

（未完）

編輯後記

七月八日中河與一氏が立寄られた。田中氏、福地君と共に果樹園の夕を開いた。ラマンチアの篠田君も参加した。素宴ながら賑やかだつた。椋方志功書伯が昨年に次いで、今度はヴェニス国際美術展でグランプリムを獲得された。鋼粋な日本の文化こそ最も国際的であると云ふ事実を中外に示してうれしかつた。なほ愛嬢の知與恵さんが処女詩集「私の居る風景」を上梓した。素直な詩人だ。まことに慶祝の至りである。（O）

今年の季候は変で、暑かつたり寒かつたりだが、昨日今日は大変な暑さで、喘ぎ喘ぎ編輯をしてゐる。早いものでもう発刊以来半年以上たち、今號は七號である。この間ほとんど反響をきかなかつた。伊東ではないが、「ひそかなる敬愛」で見守られてゐるのだといい氣になつてゐると、「中央公論」八月號の「地下水」で長い紹介を賜はつた。ここでも「コギト」以來の血縁關係を辿つてゐるやうに思はれてゐる。微力ながらこの血縁をできるだけ、とりわけ若い人たちの間にひろげたいものだ。私の家でも「コギト」終刊の時、小学生だつた長男がもう大学生である。これがどんな詩を歌ふか、父親にはわからない。（T）

果樹園　第七号（毎月一回一日発行）
昭和三十一年八月一日発行
布施市西堤町六〇七
編輯兼発行人　田中克己
大阪市東住吉区桑津町五丁目八
印刷所　元市印刷株式会社
布施市西堤町六〇七田中克己方
発行所　果樹園発行所
定価　三十円

果樹園

第八号

書簡から見た伊東静雄　小高根二郎
花の木　服部三樹子
白い水盤　池澤茂
風景　齋田昭吉
中国古詩私抄　森田亮
月に招かれた男　芳野清
露　山根忠雄
岩礁　上村肇
小曲　小山正孝
僕らの時　福地邦樹
陳夫人　田中克己
橋　浅野晃
見捨てられた海岸　クロロフ
編輯後記（O・T・）

書簡から見た伊東静雄（八）

小高根二郎

明けて昭和三年の春休は、大学最後の春休らしく、伊東は久し振りに諫早の家でくつろいでゐる。昨年末には影の濃かつたニヒリスチックな陰影も、南国の春の光の明るさに、吹ッ飛んだかのやうに見受けられる。愛弟壽恵男氏が、無事に佐賀高等学校の入学試験にパスしたことも、陰濕な下宿住ひで蜘蛛の巣が張つた伊東の暗い胸廓に、一縷の光を投げ込んだのは事実である。その蘇つたやうな伊東の姿は、宮本新治氏宛の三通と、安代さん宛の一通の書簡に躍如としてゐる。

「お便侍（マ）つてゐました。あなたの宛名がわからないで。二十二日に佐賀から帰つて来ました。弟は私の見る所では可成りな成績ですけれど何分人が多いので及第は保証出来ない様です。

私は諫早に来て、退くつではあるけれど非常に心安い、神経衰弱のよくなりそうな生活をしてゐます。

私は京都を出発する時、あなたの下宿に行つてお別れをするつもりでしたが（その時あなたの門司の方の宛名もきゝたかつた）丁度留守でした。私はあなたが試験に学校に行つてゐたことを忘れてゐたのでした。

試験の成績はいかが。私の病気や、私の例の心細さを救ふて下さるために、かなり骨折つて下されたので、三学期の試験にさしつかへる様なことはありませんでしたか。…中略…」

伊東は、同じく春休で皈郷してゐる宮本氏の試験の成績を案じてゐる。と云ふのは、昨年の十月伊東は盲腸炎を患つて京大病院に一月ばかり入院したことがあつたが、附添の女が助平だと言ふので、身の廻りの世話のほとんどは、宮本氏を煩はしたからである。いやその入院にしてからが、経済的な負担を慮つて、宮本氏の奔走で、特に施療患者としての入院だつたのである。その間の事情は、宮本氏が同志社高商の校友会誌に「氷雨降る日」と云ふ短篇に書いてゐるので、詳しくは後掲のそれに譲るが、宮本氏の盡瘁は、伊東が試験の結果を心配するほどのものであつたのである。

「弟や妹や母にあなたのことをいろいろと吹調しておきました。早くおいでになる様に言へと母は私に云ひました。あなたは諫早に来て決して失望なさらないでせう。私の家でもかなり愉快な日をすごされること

が出来ると私は確心します。
諌早は毎日〳〵、それはいゝ天気で、多良岳が実にきれいに見へる。あなたが来たら一緒にあの錯野に行きたいと思つてゐます。
諌早は只今は夕方の六時すぎ、父は茶の間でポツネンとしてゐます。母と妹とは台所で下手なオムレツトをこしらへてゐる様子です。シユン〳〵と音をさせてゐます。
弟はこの八畳で私と机をならべて芥川を読んでゐます。カナリヤがさかんにさへずります。
この机のおいてある書院の窓をあけると城趾の森。きつとこの景色はあなたを喜ばせるでせう。あなたが来たらこの八畳をあなたの居間にしていゝ。…中略…
いろんな話したいことがあるけれど、詳しくは会つてから。（なるべく早く、来て下さい。一寸内職の都合で早く京都にかへる様になるかも知れませんから。あなたにあのこと話しましたかね、滋賀県の県庁につとむる様になるかも知れないと言ふこと！）
まあ子（註・平山まさ子さん）さんはどうしてゐることやら。あの人にも幸あれ。
あなたのたつた一人のお妹様にもよろしく御鶴声。
又書きます。手紙は面倒だから、すぐでも諌早においでなさい。
市川の坊ちやん（註・市川一郎氏）もかへつてゐるそふです。毎日玉撞いてゐるそうです。

伊東生

宮本さん

」

これは諌早への招待状である。盲腸炎で世話になつてゐたので、特に伊東の母親ハツさんの謝恩の志が動いたのだらう。清澄な多良岳や城趾の森の景色や、それらを臨み得る生家の、いかにもアト・ホームでコンファタブルな家族の生態が活写されてゐる。
文中、滋賀県庁の内職云々の話が見えてゐるが、それは膳所の遠藤さんの母親の周旋でもあつたのだらう。幸あれ……と祈つてゐる平山まさ子さんとは、百合子さんと同じ同志社女専の英文科生で、短歌上の交友の一人だつたのである。市川一郎氏を坊ちやんとしてゐるが、呉服屋の若檀那だつたからである。
この書簡は例によつて二伸が長く、二伸の方が内容がある。
「私は歌は一つも出来ません。胃が少し工合がほんとうでないのですね。
武者さんと芥川さんとを時々よみます。全集本で。全集本はどうも気がのりませんね。武者氏のも沢山よんでゐると少々うたがはしくなり出した。あの粗雑さは同感出来ませんね。おしいことですね。芥川さんも感心したり、妙に窮くつに感じたりしてゐます。
あなたの歌拝読。有難。私には一つも近頃出来ないから文句はいへないけれど例によつて難を言へば
帰り来て
はいかがでせうか。御一考を乞ふ。実は私にもわからないのです。帰省してといふ意味か、それとも外出からかへつて来てうすぐらい土間に立つた時の感か、どちらです前のだつたら「かへり来て」では不安だしあとのにすると言葉が足らぬし。
私も今しばらくしたら、どん〳〵つくりますよ、待つてゐて下さい。
下で御飯をくへ〳〵と何度も言ひますから、一寸下におりて手製のオムレツトをたべて来ます。一寸閑筆。お待ち遠さま、オムレツトおいしかつた。
大変歌の話がしたくなつて来たので今から大串君のとこに（ほら例の肺でねてる人）に行かうと思つてゐます。

（昭和三年三月二十三日長崎県諌早町這松下伊東生より福岡県山門郡瀬高町上庄野口柴内宮本新治氏宛封書）
「お手紙有難う。
寄りて食すかな　は少々気にかゝりますねいかが。そのゆがきもの　といふ言葉には感心しました。然し外の言葉が、その巧さを殺してしまつてはゐませんか。いかが。もうすこしでひどく感心する歌が出来る様な気がするけど。
マー子（註・平山まさ子さん）、ネロ子（註・岡田ネロ子―仇名）両嬢の話もきゝたし。きいてもつまらぬ気もするけれど、とうとう見なかつたネロ子さん。
あでゆう！

花の木

服部三樹子

ぬぎすてて重き衣裝の身ならねば処女の日とはきのふ別れき
捧ぐとふ殉教者めく言葉をぞ処女の上にまうけしは何時
きらきらと木の葉光りて身の果てをこころかなしさありやうもなき
御佛に数へ乞ふとき無盡意菩薩偏へに右の肩袒ぎましき
きらきらと脱ぐ着物なき処女わがこころ一ひら一ひら脱ぎき
見も知らぬ岸に渡ると舟に乗り波のよるまに身さへ忘れき
むらさきの鉄線蓮の花の濃さきのふは君と処女わが見し
ぎやてい・ぎやてい・はらぎやてい・あけ方のぬくとき胸に誘ひしは我れ
明放ちし窓に朝冷え迫るまで月に肌へをさらして寝ねき
御影石の白衣観音に水かけて裳裾滴るなみだなりけり

いろいろとは、お世話しますまい。丁度京都での様にして暮しませう。その点は御配慮には及びますまい。父母は私のきらひなことはしません。友達のあつかひは私にまかせてゐます。無学な自分達は……と両親はいつも私にはいゝ親です。…中略…
諌早に来る時は、日と時間とを知らせて下され。切符は「諌早駅」まで買つて下され
実に実に諌早はいゝ天気ですぜ！　いゝ所ですぜ！　弟と二人で昨日もゴルフ場の方に散歩して、菜種の花の畠の間をとほりながら二人でさかんに田園極楽と讃美した次第です。
明日（二十九日）が弟の発表日。大分合格ではないかと私だけ心ではおもつてゐますが、どうだか。
合格したら長崎に一家でゆく約束だからなほさら都合がいゝでせう。長崎も素敵ですぜ！（私は愛郷家でせう！）

瀬高にて　諌早の家の二階で

宮本さん　静雄拝

（昭和三年三月二十九日長崎県諌早町這松下伊東生より福岡県山門郡瀬高町上庄野口柴太郎方宮本新治氏宛封書）

これも前便と同じく招待状である。宮本氏の遠慮に対して、伊東家で與へらるべき気軽な客の位置まで示してゐる。切符の買ひ方まで示してゐる。
文中、既述の平山まさ子さんの他に、新たに岡田ネロ子さんと云ふ女性が登場してゐるが、同志社女専家政科に在学の人で、庭球選手であつたとのことである。ネロ王にあやかつて仇名されてゐたほどだから、よほど強引で活潑な女性だつたのだらう。彼女達はもともとハンサムな市川氏を中心とした女友達であつたが、宮本氏を通し、伊東は知り合つたものであるらしい。伊東は宮本氏を誘ひ、ネロ子さんを頼りに、百合子さんが寄宿する同志社女専のプリンプトン寮を訪れたとのことである。百合子さんの好物は板チョコと林檎

だとあつて、蛙を嚥んだ蛇のやうに、それらの土産物で伊東は小倉ガスリのふところをふくらましてゐたさうである。伊東がネロ子さんに「あでゆう」と惜別の言葉を投げてゐるのは、多分この春ネロ子さんが卒業をしたからであらう。

白い水盤

池澤　茂

ぼくは大阪の親の家の二階で暮していたころ、まだ結婚して間がなかったものの、なんだか、他人の家に間借りしているより、もっと、おちつきなく、みじめだったようだ。ぼくが、勤めにも、その他の点にも、かえって、だん〳〵と、八方ふさがりみたいに、なっていったからだ。妻も、たぶんに失望しただろう。家の者になじまず、これといった仕事も責任もなかったから、いっそう、とげ〳〵して、張りあいもなく、あじけなかったにちがいない。ぼくはよく途方にくれたまゝ、妻を連れだして、ちかくの郊外へ、散歩にでかけた。そして、そんなとき、なんば病院の裏にあった池から、棒ぎれで、水草をいくつか、すくいあげてきた。ぼくたちは二階の室内で、金魚を飼っていたからだ。容器はせまい室内に相応して、いけばな用の水盤だった。深さは三センチほどしかない。広さはふつうの洗面器より、いくらか小さいだろう。しかしガラス玉の金魚鉢などよりは、だいぶ大きい。金魚が生きるのには、深さよりも、水面の広さのほうが——むしろ、広さだけが——多く関係するという。そのせいか、この水盤で飼っていた五ひきほどの金魚は、まもなく一ぴき死んだだけで、あとのは、よく生きつづけていた。

ぼくは「すいれん」に似てもっと小型の浮草と「ひし」と「たぬき藻」などを二階へ持ってあがって、水盤へいれてやった。すると、金魚の目のいろが、にわかに、かわった。その体にも、なんだか、電流が、ビリッと、通じたみたいだった。かれらはいっさんに、浮草の根もとへ、おどりこんだ。しばらくぼくらが体をはなしていると、思案するように目をひからせ、あたりのようすをうかゞっていてから、すっと、葉かげから、出てくる。それから、うれしそうに、いそ〳〵と、ぐるりをおよぎまわる。ちょっと人かげが近づくと、あわてて、また、浮草の根もとへ、かけこんでゆく。

それまでは、かれらはどこにも、かくれるところがなかった。いくら人間がちかづいてきても、その視線に、全身をさらしていなければならない。はげしい刺激にたいしても、むりやりに無感覚でいるというふうに、かれらはいつも、ふてくされたように、わずかな、あさい水のなかで、のろ〳〵と、たゞよっていた。水盤がまっしろなせいか、あかい体も、だん〳〵白っぽくなって、ふやけていた。呼吸をするのがようやくで、いかにも、しかたなしに生きている、というふうに、目のいろも活気がなく、とろんとしていた。それが水草がはいっただけで、一時にかわったのだ。ひげ根をたくさん持っている浮草の根もとのあたりを、かれらは家にした。その他のあいているところは、かれらの遊び場、運動場だったのだろう。三十センチ平方ぐらいな面積の、せまい、まるい水盤のなかだけが、そのまゝ、かれらの完全なすみかになった。その小さな世界のなかで、かれらはいき〳〵と、生活していた。ぼくたちはしば〳〵、机のそばの、この水盤に見入って、ぼんやりと、時をすごした。そしてぼくは、そんなとき、たいてい「幸福」ということについて、じっと、おもくるしく、かんがえこんでいた。おたがいの心には暗い風が吹きあれていたけれど、なにかが、ちょっと加えられることによって、やすらかな「幸福」がおとずれてくるような、

風景

齋田昭吉

おわかれするとき
わたしから　手をさしだして
あなたと握手したのは
あれはなんでもなかったのです

誤解なさらないで下さい

あのとき
夕立が　プラットホームに降りこんで
水玉が　美しく　きらきら　光りながら
　流れるのをみてゐるうちに
ふいに　心が　洗はれてゆくやうな
清潔な想ひがしたからなのです

おわかれするとき
電車の硝子窓どしに
手をさしあげて　振ったのは
あれはなんでもない風景の一齣だったのです

そんな期待が、ふと、あわのように、うかびあがってくるのだ。たとえば、ちょっと環境がかわったり、もすこしいゝ転業があたえられたり、なにかあかるい希望がうまれてきたりしたら、家庭も円満になり、ぼくも、妻ももっと、おだやかに、満足して、くらしてゆけるにちがいない。しかし、そのためには、どういう手を打ったらいゝのか。ぼくには、人生や社会があまりに複雑で困難なので、どうしたらいゝのか、すこしもわからなかった。たとえわかったところで、それが成功するまで実行してゆく意力は、もう、ぼくにはなかった。

そして妻は、まもなく家を出て、もう帰らなくなった。ぼくも、勤めさきの出版社が不況になり、とう〳〵クビになった。それから毎日、あちこちと転をさがしてあるいたり、小さな印刷工場の校正係になって、日給で、かよったりした。そこはとき〴〵不時の仕事があって、かえりが、夜半ちかくになる。ある夜、疲れきって帰ってきて、ふと見ると、浮草の葉のあいだに、一ぴき、ちっとも動かぬ金魚の、あかい一部分が、電灯のひかりに、にぶく、浮きあがっている。いつのまにか死んでいたのだ。つまみだすと、水のなかに生きていたときと違って、ふいに、みすぼらしく、小さくなる。腹だけはふくらんでいるけれど、ひどくやせて、あばらや背骨が浮きでて、筋張っている。ながく割れて、ひら〳〵ゆらめいていた尾は、しぼんで、よじれたまま垂れさがって、ぼろぎれみたいに見える。

小さな容器で一ぴきでも死んだら、その水は入れかえるほうがいゝとされている。ぼくはめんどうだけれど、水盤の水をすっかり取りかえることにした。そしてそのとき、浮草の根が全然なくなっているのに気づいた。ひげ根がやはらかく、ぎっしり垂れて、金魚のいゝかくれがになっていたのに、いつのまにか、なくなってしまっている。おもてから見ると、べつに変っているようでもないのに、じつは、葉と茎だけだったのだ。えさのかわりに、金魚が、ひげ根をみんな、たべてしまったのにちがいない。ぼくはもう長いあいだ、なんにも、たべものをやっていないことに、気づいた。それで、その翌朝、勤めにでかけるまえに、ありあわせのパンくずを、すこし多いめに、いれてやった。ところが、その日も、かえりは、夜半ちかくになった。肉体的に苦しく、精神的にみじめで、むくいられるところもとぼしい仕事だから、うめきながら、あえぎながら、みずから駆りたてるようにしなければ、生きてゆけない。はうようにして、

夜ふけの、自分の二階に、ようやくあがってくると、けさまで生きていた三びきの金魚は、もう、全部、死んでしまっていた。パンくずは大きくふやけ、綿くずみたいになって、浮いたり、しずんだりしたまゝ、いちめんに残っている。

金魚を飼うのは、びんぼうな無精者には、もってこいの趣味だという。しかし、その金魚さえ飼えないほどの生活も、たしかに存在する。なにがなし、たのしみや余裕があるのでなかったら、飼われている金魚も、生きてはいないのだろう。水盤はその後ながいあいだ、ぼくが妻のあとを追って家を出るまでの一年半ほどのあいだ、からっぽにされたまゝ、ほかに置き場所もなかったから、ぼくの机のそばの床の間で、ほこりをかぶっていた。

中国古詩私抄

森　亮

豊年

稔りの秋よ　黍も米も　豊かに穫れた
わしらが里の　大倉・小倉
万を万重ねた　億の兆の　米粒詰まる
お酒を仕込み　甘酒つくり
その出來た酒は　むかしの祖の　み魂に供へ
数ある儀式に　欠かさず使はう
それで福が　降りて來れば　めでたやめでた

★

わるい時

梁に魚が入ってゐるなら
魚は跳ねて梁の水をかきみだす。
魚の入ってゐない時は水は黒くてしゅん
としてゐる。
星がそのなかにしづかな姿を幾つもやど
す。
今、梁のなかの水はか黒くて
星たちは音もなくかがやいてゐる。
悪い時はわるいもので、たとへ食べ物に
有りついたにしても
腹一杯たべられる人はけふびはない。

二篇とも詩経からの邦訳であるが、「豊年」は二七九番（周頌、豊年）に據ったもので、別に言ふことはない。「わるい時」は二三三番（小雅、菁之華）のヘレン・ウオデルの極端に自由な英訳を利用した自由訳である。

月に招かれた男（五）

芳野　清

——あれ程、西欧的なエキゾチズムに憧れてゐた都会人的センスを持った詩人が自動車を大へん恐がってゐて、道路横断の時など、青信号になっても、子供のやうに走ってわたった。

——ある詩集賞の銓衡会が銀座の某所で行はれる事になってゐて、先生も審査員になってゐたが、当日他の全員が集まったのに先生だけお見えにならない。どういふ理由かと堀口大学氏が世話役の詩人、某氏に訊ねると、某氏は困った顔をして、「今夜はお見えになりません。昨晩おいでになって下さったんです。これです。」と云ひ、差出した一枚の半紙には、紙一ぱいに、大きな太い鉛筆の走り書きで神経質に、雪の中を出かけて来て見たが、会合は明晩だと判った。明日もう一度出直すのはいやだから、××の詩集を推薦して帰る。」との意味がしたためてあった……

——旅館に滞在してゐた時、先生はいつも足袋のコハゼを嵌めず、見かねてその度に女中さんが嵌めてあげた……

——萩原さんは口付の巻煙草を愛用してゐたが、何時のまにか吸ひ口をぐちやぐちやに噛み切ってしまひ、次々と煙草を取り代へ唇の周り一杯紙屑をこびりつけたまゝさかんに詩論をたゝかはせたものだ……

大垣はそれらの話の中に最も詩人らしい詩人、それは嬰児の傷つき易い肌に似た、を見出してゐた。ぼんやり酔ったやうになってゐた彼の所に、窓から処女の肌の匂ひのやうな木犀のほのかな香が流れてきた。彼はふと、窓越しに見える空の青さに郷愁の瞳を投げた。そこにはニコライの緑のドームがくつきりと重厚なビザンチン様式のエキゾチズムを秋空に劃ってゐた。大塩は先程から、潮さし行方も知らに流るゝものを、と云ふ朔太郎の詩の中で自分の好きな「貝」を心の中で繰り返へしてゐた。やがて会場がざわめいて、若い詩人に案内され、待望の詩人、萩原朔太郎氏が現はれた。和服姿の神経そのものと云った感じの人だった。会場は期せずして熱烈な拍手が湧き上った。

彼はこの時の事を後年、「曼荼羅」（林富士馬氏編輯）誌上の大塩麟太郎追悼（大塩、昭和十九年南方にて戦死）の中で次のやうに書いてゐる。

「……この秋、東都に萩原朔太郎先生の会が開催され、私達は沢山の美くしい人達にお目にかゝる機会を得た。保田与重郎氏や田中、克己氏や芳賀檀氏など、とにかくかうした「コギト」の周辺を見守って私達は成長したのだ。日本の青春がこれまでにない大きな振幅で動き始めたことをこれらの人達の歌声から学んだのだ……。」

彼はふと、真野が此処にゐて、颯爽とした詩人達を見たら、どんなに感激するだらう、そして彼のじめ〳〵した自虐癖など吹き飛んでしまふだらうにと、思った。今頃はmuseumか何かの卒業設計でふう〳〵云ってゐる彼を励ます意味でも横浜から引張り出した方がよかったかも知れないな、せめてこの日の事を手紙で知らせてやらうと考へた。

会が終って一人になると、陶酔の後にひどい憂鬱が来た。女の柔かい肌が恋しくなってきた。そこへ行けば従順に白い体をからませてくる深い馴染みの女がゐた。彼はしかし、その女については一言も友人に話さうとはしなかった。友人の中に交ってゐてさへ癒されることのない彼の孤独をひつそりと抱きしめ甘やかしてくれるのはその女だった。彼の不安は女の暖かい肌に次第に融けてゆくかに思はれた。まして肌寒い秋の夜であってみれば幼児のやうに彼の心が疼き出して永遠の母性を求めて彷徨ひ始めたからと云って、頽廃と責めるのは酷であらう。それに彼はさう云った種類の女とは別にベアトリチエとも云ふべき一人の女性の影像を心の片隅に刻みつけてゐた。彼はそのひそかな恋情さへ自分の心の苦しみに変へて一つの哀歌を作り上げてゐた女は彼にとってはいつも永遠の母であった。と云って彼はまさかさう云った類の女に逢ひに行くのだとは傍らの大塩に云ふ気にもなれなかった。近くに、大塩の知ってゐるNOVAと云ふ文学者や画家の集まる喫茶店があったバロック建築風なフアサードを持つその重々しい扉を押して二階に上ると、堀辰雄の小説に出てくるやうな背高い、首の長いウエートレスが大塩に向ってほゝゑんで会釈した。そこには今までパノンの会で見かけた詩人達の姿が幾つか見られた。ジンフイーズは清楚な少女の唇の味のやうに爽やかだった。「萩原さんはもう全く詩をお書きにならないのかね」大塩は一寸考へ込むやうに口をひらいた。

「うん、もう書かないだらう。最近は評論やアフオリズムばかりのやうだね、青春の限りない憧憬と矛盾と悔恨とを萩原朔太郎の本質とも云ふべきものだから、あのやうな烈しい精神の燃焼に今まで耐へられたと云ふ事すらが僕には一つの奇蹟としか思へない。捩じったやうな髪を額に垂らした今日の先生を見て

露

人言を繁み言繁みおのが世に
いまだ渡らぬ朝川わたる　但馬皇女

山根忠雄

あかときの
いまだ小暗き
浅川を
赤裳かかげて
乙女のわたる
君に逢はんと
一途な心
草も木も
霧にしをれて
露しとど——

あて僕は涙が出てきて仕方なかつた。抒情と云ひ、詩と云ひ、総べてが次第に生き難く束縛されて行く時代に……」

「さうね、萩原さんの詩はイメーヂとリズムだからね。絵で云へば死んだ佐伯祐三のやうな…。そのイメーヂは何時も過、現、未を通じて一つの虚無の世界に繋がつてゐるのだ。そこで始めて詩人のイメーヂは氷島を彩るオーロラや、人知れぬ孤独の砂漠に咲くサボテンの花となつて妖しく開くのだ。その時に非現実が心の現実となつて現はれる。しかし、先生のイメーヂの中核をなしてゐるのは何だらう」

「思想ぢやないか。いや、哲学かな、ショウペンハウエルの厭世哲学やニイチエの超人の思想に深くとらはれた時代があると云ふが……」

「でも、詩人の場合、それは学問体系としての思想や哲学でなくてあくまでイメーヂを通して見たものではないか」

「さうだね、そこに詩人の秘密があると思ふ現実の風景に対しても虚無と云ふプリズムを通して以外に見ることが出来なかつたところに詩人の宿命があり、悲劇がある。詩の中で人生と云ふ言葉にらいふと仮名を振つた時、もうそれは我々の云ふ現実の意味を離れて西欧的なリズムとイメーヂを持つた詩語に変つてしまふんだ。僕は寧ろ、先生の詩に佐伯祐三を感ずるより超現実派の画家、ダリを感ずるね。もつともイメーヂと云ふ奴は何時でもリアリズムを超えてゐなくてはその意味がないと云ふ逆説も成立つがね…。「猫町」と云ふ幻想的な小説知つてる？道に迷つて猫ばかり住んで居る街に彷徨ふ幻覚にとらはれる散文風小説と銘打つた本の扉に、…蝿は叩き潰したところで、蝿、「そのもの」は死にはしない。単に蝿の現象をつぶしたばかりだ…と云ふショウペンハウエルの言葉が入れてあるんだ。現実が常に現実を超えたイメーヂに繋がつてゐると云ふ所に萩原さんの詩の秘密があるんじやないかな。ところが朔太郎の詩には内容を感じないと云つてゐる人がゐる。だが、僕の考へでは詩のリアリテは小説のそれとは違ふし、その差をむしろ意識して詩の本質としたのが萩原朔太郎だと思ふんだ。虚妄とか暗澹とか、寂寥とかの言葉は言葉自体にはつきりした内容を持たない抽象語だ。しかしこれらの言葉はそのまゝ近代の意識につながつてゐる。藤村の詩で有名な一章

　まだあげそめし前髪の林檎の下に見えし
　時、まへにさしたる花櫛の花ある君と思
　ひけり……

と云ふのと、同じ恋情を歌つたもので朔太郎のものに、

　ああ浦　さびしい女！
「あなたはいつも遅いのねえ」
　ぼくらは過去もない　未来もない
　さうして現実のものから消えてしまつた

と云ふのがある。朔太郎の詩にしては会話体の入つた現実感の濃い詩だと思ふけれど、藤村の新体詩に比べたらその発想がどんなに違

ふか分るだらう。藤村は七五調の馴染み易い韻律の中で実にリリカルに一人の少女を描き出してゐる。僕らは林檎の白い花の下に恥らひながら立つてゐる初々しい少女の動作をまざ〳〵と見る思ひがする。それはそれで所謂ロセッチ風な抒情の定型があつて美しい。だが、朔太郎の詩にはさう云ふ意味の現実に根ざす安定感がない。女の会話はすでに現実を超えてしまつて、そこには肉を捨象してしまつた女と云ふイメーヂだけが青い瓦斯体のやうに光つてゐる。一つの寂しい輪廻にも似た不安な恋のイメーヂだけだ。藤村の恋の成就は或ひは女を胸に抱くことで達せられるが、朔太郎のそれは既に悲劇的なペトスにつながつてゐるので永遠に満されることはない。模倣でなく始めて象徴と云ふ近代の苦悩に自ら傷ついた詩人としての萩原朔太郎、彼が受難者として出発しなければならなかつた理由はここにあると思ふのだが。長いこと喋べつちやつたけれど、萩原先生から始めて詩を学んだと云つてもいい僕としてはまだ云ひ足りない。云ひたい事が一杯あるのに、今日の先生の姿やお話を聞いた感激の方が強くて何も云へない。…。」

「それはさうと、最近の先生は点茶とか、マヂシヤン・クラブと云ふのに入つて手品の研究などしてゐるんだつてね、それに覗き目鏡の立体写真…。子供の頃のオルゴールやパノラマへの偏執がそのまゝ老年まで続いてゐると云つた感じだね。先生が詩人には成長がなく、あるのは変化だけだと云つた事はかう云つた面から見て実に意味深いね」

大塩はさう云つて灰皿に長くなつた煙草の灰を落した。傍らのゴムの厚い葉が窓からの風で物惰く揺れた。微かな酔ひにその風は快よかつた。

「先生の詩で君の愛誦歌は何だ？」大垣は頬骨の高い六角形の顔に例の薄笑ひに似た微笑を浮べて（かう云ふ時の彼は上機嫌の証據なのだが）尋ねた。

「あゝ、僕はね、昔からあの夜汽車の詩が好きでね、あの一節を口誦みながら半分は風の中を泣き泣き来たやうなものだが！。……ありあけの薄ら明りは硝子戸に指の痕つめたく、ほのしらみゆく山の端はみづがねのごとくしめやかなれども……、つて云ふ一節…」

「大塩さん、何、お話してるの、また詩の話？」ローランサンの少女がコーヒーの盆を片手に彼等の傍を通りがゝりに声をかけた。

「君、知つてるの？」大垣は話をやめて意外だと云ふ風に友の顔を見た。

「うん。彼女ね、女子美術へ行つてたんだ。新宿で知り合つたグループの一人だがね。父が死んだとかで学校やめて画家の紹介でこの店へ勤めたんだ。やはり、一寸趣味いゝ方だ

岩礁

上村肇

仰臥した顔の上に
音をたてて新聞をひらく。
轟音と共に泡立つ
ビキニ岩礁をとりまく
海域の広大。
私は頭ごしに静に新聞をおとす。
とじる瞼の上に
なだれ落ちていく白日の天。
私は半身おこして
枕元の丸薬を飲む。
約八〇粒ばかりの
名も怪しげな黒い丸薬を。
戸外は一〇〇カウントばかり
含有らしい
放射能の雨がもう夕暮をよんでいる。

らう。こんな所にゐるより彼女の体ならモデルにでもなつたら素晴らしいと思ふんだがねえ。戻つて来たら君にも紹介しよう。津亜子つて名なんだ。血の匂ひのするミリタリズムの波の中で VITA NOVA を待ち望んで漂つてゐるノアの方舟、彼女こそその中の一輪の罷畢粟、でもこの僕らの憩ひの場所もいつまでつゞくことやらね」大塩はさう云つて戻つてきた彼女に大垣を將来有望の新進詩人だと紹介した。彼女はしかし、誰にも見せる転業的な微笑を浮べて文人好みのその長い睫毛をしほらしげに伏せただけだつたが…。

「あちらの窓辺でお話してゐらつしやる方、誰？」

「あゝ、あのダブルの服を着た…日本浪漫派の驍將、芳賀檀氏、有数なリルケアンだ。その隣りが『はぐれたる春の日の歌』の小高根二郎氏、その隣りが堀辰雄風なモダニズム象徴派とも云ふべきN氏…」

彼等は軈てそこを出てネオンの乏しくなつた街を歩いて行つた。夜風が時折、枯れ始めた街路樹の大きな葉を寂しく鳴らして過ぎた長身の大塩の姿が駅の明るい階段の陰に消え去ると、又先程の堪らない孤独感が襲つてきた。何時も彼に綿々たる手紙を寄せてゐるあの女の白い露はな胸が再び彼の瞼にちらつき始めた。彼はその力に抗することが出来なかつた。彼の踵は自ら彼女の住む夜の街の方向へ向いてゐた。

女は期待したやうに彼にやさしく柔順だつた。その女は Ulaと呼ぶ女のやうでもあつた彼はいつもかうして女の部屋にゐる時、思ひ浮べるのは梶井基次郎の小説の一場面だつた。彼はほろ苦く微笑した。俺は何んて云ふ奴なんだらう。現実の世界の中でさへ、何時も文学にお手本を求めようとしてゐる、エピゴーネンと云ふのを一番きらつてゐる僕が…

――女が部屋へ入つてくる、それまではいゝ女が着物を脱ぐ、それまでもまだいゝ、それからそれ以上は何が平常から想つてゐた女だらう。「さ、これが女の腕だ」と自分自身で確める。然し、それはまさしく女の腕であつて、それだけだ。そして女が帰り仕度をはじめた頃、それはまた女の姿をあらはして来るのだ。…

彼はその小説の情景を何度この女の部屋で実感した事だらう。女の肌はいつでも燃えるやうに熱かつた。彼は枕元のノートを開くと今、星屑のやうに慌しく光り始めた詩の想念をもどかしげに女の紅筆で書きしるしていつた。あの酔に似た快い幻量が女の肌に身を寄せてゐる時の感覚の陶酔と代つて、彼の中に目まぐるしく廻転しはじめた。それはいつも見知つた魂の安らぎでありよろこびでもあつた。その詩の中で彼は自分を詩に導いた尊敬する師とも云ふべき人達、梶井基次郎、萩原朔太郎、田中克己氏等を織り交ぜて彼流の美の尺度まで織物を織らずにゐられなかつた。

一つの時代が終らうとしてゐた
美の重量を檸檬に換算した貴方は
それを爆弾にかへて　丸善書店に
仕掛けずには居れなかつた
なべて冬の季節
こんな貴方を
私の敬愛する詩人は大嫌ひだと云つた
も一人の詩人が天才だと論じた
どちらの言も私は信じてゐる
（詩人を護る為には反対の言すら一致する）
そして今日
貴方を天才だと讃へた詩人の
哀切な言を聴くがいゝ
悲しくなつたら泣くがいゝ
思つてみるがいゝ
温い友人達の手になつた「檸檬」を

僕らの時

福地邦樹

僕らが血の追憶のやうにはなやかに愛し
　合へぬからとて
おまへは歎いてはならぬ
僕らは所詮
花の季節の住人ではないのだから
僕らの愛や魂の姿勢が
常につつましく生真面目であるとするな
らば
それは　いはば僕らの時が
まだ寒い時期に動き出す植物の芽生えに
　も似てゐるからなのだ
早春の林の中に立つて
無数の小さな木の芽をみるほど
にぎはしい孤独はない
おまへのいのちを信じるがよい
さうしておまへのその痛ましい放心が
実はさらに深く何に通じるのかを見定め
るがいい

小曲

小山正孝

I　煙は横に

煙は横に流れてゐる
屋根の上をゆつくりと這ふ
邪魔をするものはゐない
猫がゐるのだが　ねそべつてゐるだけだ
しづかな一日もやがて夕暮になるのです
私は街の人どみを歩くことが出来るのです
私を愛してくれる人を私はお前といふことにする
遠くの窓に西日があたつてゐるのが見える
人生では愛することだけがほんたうなのに
どこにゐるのだらうか　お前といふ愛の相手は
煙はゆつくりと横に流れてゐる
私の心はお前の方へ近よる
私の心はお前の心によびかける
煙もお前をさがしてゐるのだらう

II　ガラス戸の外を

ガラス戸の外を音もなくすぎる足を
私はあたたかい室から見つめてゐる
一人のおそい歩みがすぎる
二人のそろつて大股の歩みがすぎる
ある人達はからだをななめにして
男は女の顔をのぞきこむやうにして
私は一人でゐるのにかうしてたくさんの
人の心が私の中を通りすぎて行くやうだ
木枯に吹きちらされた木の葉が
戸の中へ入らうとしてふるへてゐる
茶色の葉脈がゆれてゐる　私にはそれまでが
街の中で迷つた人の姿のやうに感じられる
ふと　あれが　私ではないかとさへ思つた
乱れてゆれてゐる　ガラス戸にすひついて

一冊残して死んで逝つた貴方と
今日の日の萩原朔太郎と
いづれが悲しいか
（「樟蔭」の著者に、と題して）（未完）

陳夫人（三）

田中克己

英玉はまもなく着換をして出て來た。これが母親の許可の証明だつたことは考へるまでもない。僕は窓ごしに母親―陳夫人に挨拶をして、子供の手を引つぱつて大通に出、電車にのると洋食と中華料理と、どちらがいいかとたづねた。子供はだいぶ考へたあと、チャイニーズと答へた。今ではどこにあつたか忘れたが、「皇后飯店」といふ名の大きな料理屋があつた。「皇后」が不敬だといふので、このときもう名が変へられてゐたかとも思ふが、僕はそこへ子供をつれて行つた。メニューをとりよせて註文し、二人で同じ皿の料理をわけあふころ、僕はこの母親に似て青い細い女の子が、十分かあいくなつてゐた。国を出るとき懐胎してゐた僕の子は秋に出来るはずだつたが、僕はその子にしてやれないことをよそでしてゐるのに、このときはなんら矛盾を感じなかつた。「君はよそにはいいんだね」つて、いかにもその通りだ。

食べおへたあと、僕は「映画を見るか」とたづね、彼女は「見てもいい」と答へた。ふたたび洋画かそれとも中国映画かときかけて、僕はとりやめた。中国映画は僕にはさつぱりわからないのだし、その上映場所の有無さへ知らないことに、気がついたからだ。僕はまた電車にのり、これは今でもおぼえてゐるオーチャード路に、このごろ開かれた洋画館に子供をつれて行つた。ここで上映するのは敵産を接收した中から、軍の検閲にパスしたものばかりだが、現地人はほとんど入つてゐないで、客は軍人軍属ばかりだつた。入つてゆくと、「風とともに去りぬ」だつた。僕はこの脚本のもととなつた小説もよんでゐなかつたので、戦火に荒れた場面の描写が、幼い魂にはあまり楽しくなからうと考へて「出ようか」ともいつたが、彼女はかぶりをふつた。これがすんだあとにはミッキー・マウスなどが出て、彼女の笑ふこゑをきくと、僕の父性愛ははなはだしく満足した。敵国人のこさへた作品をただで見せて、といふ反省もないではなかつたが、この時の僕の心中にはいづれ日本の傑作もどしどしやつて來るから、といふ安心感が十分にあつたのだ。

「風とともに去りぬ」はずいぶん長い作品だつた――僕の記憶はちがつてゐるかしら。ともかく見をはつて、すぐ外の喫茶店で、子供にバヤリーズ・オレンジかなんか飲ましし、そこの飾り窓にあつた洋菓子を包ますと、もう夕暮ちかくなつてゐた。子供は疲れた顔をしてゐた。僕は人力車を呼ぶと、子供を膝にのせて家の方角へ走らせた。現地人との交際は禁じられてゐたが、子供を可愛がるのは大目に見られてゐるから、かまはないだらう。僕は甚だ得意さうな顔をしてゐたらうと思ふ――父親を殺し片親にしたものの一味としてあるまじいことなのだが。

家の前まで来ると、僕は子供を抱へておろし、車夫に代を払ひ、土産の菓子をわたすと反対の方向へ歩いて行つた。どこへ行つたつて。なに道の突当りに海が見えたので、なんとなしにそつちへ行つてみたのだ。河の出口で、ちよつとした港のやうに沢山の戎克がそこに浮んでゐた。その波止場にこれまた沢山の人間がゐた。もちろんみな華僑だ。それが一言もいはないで、海を見てゐる。表情はないが、どの顔も顔色がわるく、幸せな人間とは見えない。その沢山の人間が、僕のゐる間ちう一言もいはない。こんな群衆であり得るだらうか。もちろん僕の方をふり向かうともしない。一体、彼らが海をみつめてゐるのは

故国への郷愁からだらうか。それともここの海に沈められた同胞への追懐からだらうか、それに伴ふのは日本軍への憤りだらうか。一体、彼らは何を転業としてゐるのだらうか。いや失業者にちがひない。さういへば戎克もみな空つぽだ。なんとかしなきや困る。それにしても彼らがなんにもいはないのは。僕は気味わるくなつてのみさしの煙草――このごろ一日五十本近く吸ふやうになつてゐた――を棄てるともとの方角へ引き返した。

さつきから待ちぶせてゐたのだらうか、人気のない辻まで来ると、英玉が出て来て、僕の手を引つぱつた。

「ママが夕飯を食べに來てくれつて、ぜひ来てくれつて」

僕は空腹ではないが、「ぜひ」といはれると、ことわれない男である。返礼をするつもりなんだらう、困つたなと思ひながらも、引かれるままについて行つた。

英玉の案内したのは裏口だつた。待ちかまへてゐたやうに、そこの扉があいて、僕は陳夫人に鄭重に導き入れられた。この家には、前日とほされた応援室をいれて、たつた三間しかないことも、おかげでわかつた。その応接室には若い男が一人ゐて、英玉は叔父といひ、陳夫人は弟といつた。この紹介のあとで彼――王といつた――は早口で何かいつた。一向にわからないので、へんな顔をすると、今度はゆつくりとしやべつたが、これまたわからない。

そこへ陳夫人が料理を運んで来ると、彼は

橋

浅野晃

なまの緑を
べたりとなすつた
赤土の道を來て
橋へ出た
したをのぞくと
藤蔓のやうに細い流れだ
向側の道には
またすべての影がある
天山から来た風は
額を吹き
いたづらに
濡れた緑を乾かす
わたくしはこの炎天に
流沙をおもつた
そこには緑地があり
そこでは橋は冷たい
地をへだててそれぞれに
さだめがあるのだ
雁が過ぎ
天山の民は天幕を張る

おなじく

この橋を
樵夫たちが家路へ急いだあと
薄暮は取り残した
風と木の葉はささやき
ふくろふの声は
紺紙の空から來る
川下の方で
いつもの冷たい流れが呼ぶ
それをわたくしはわづかな明りで
はつきりみとめる
安息の場所は
いつも金泥の土なのだ
橋はいま
ひとつの線
そして最後に暮れてゆく

恐ろしく早口で何かいつた。それから英語で僕の方に向いて

「姉から承れば、あなたは中国人で福建籍だとのことですが、アモイ方言を御理解ない御様子なのは、どうしてです。」

はゝあ、姉に嘘ついたと怒つたのだなとわかつたが、僕は困つた。

「そのわけはあとで話します。僕は中国語は北京官話が少々話せるだけです。」

「英語はお達者で？」

「いやこれも、オンリー・ア・リットルです」

実際、英語も王青年の方が旨かつたらう。そんないきさつで、英語で一切の会話をする。ときどき姉に広東語でとりついてくれたが、いらぬお世話だつた。彼は二十歳になつたかならぬかだらうが、みるからに賢こさうな男だつたが、その話が全部不愉快だつた。話といふよりは詰問の連続と聞えた。

「シンガポールの華僑六十万はいま非常に困つてゐるが、ど存じか。」

「僕は着いてまだ二、三ヶ月なのでよく知らない。」

「それぢや話すが、ほとんどすべて失業した。」

「天長節には献金をして協力を約束したが」

「あれは脅迫されてやつたのだ。もつとも金はもつてゐるが、仕事がない。」

ビール工場は再開してゐるし、ごらんの通り料理屋、バー、喫茶店は続々と開かれるぢやないか、といひたいが、黙つてゐると

「僕の通つてゐたハイ・スクールは先生は戦死が半分、のこりもまだ学校が閉ぢたまゝなので困つてゐる。」

「それは近々開かれると思ふ。」

と答へると、

見捨てられた海岸

カアル・クロロフ

帆船と
ひげづらに　金のようにうかぶ哄笑が
吐きだすよごれた息のように
すぎさってしまった

石灰をぼろぼろにしてしまう
壁の上の影のように——
悲しみはきえることなくつづく
黒い蜜からうまれ

匂いながら光の中へぶらさがり
新しい鳥の糞のようにしめっぽく

「僕はもう学問する意思などないので、車夫にならうかと思つたが、あまりに弱すぎる」

これで思ひついた。僕を案内した車夫は誰だ、とたづねると

「マイ・アンクル」

と答へた。いづれこれも二三代まへの先祖をともにする薄い血縁の叔父なのだらう。それにしても義理の姪に売春さすため、客を引つぱるとはと不審に思つてゐると、青年は

「彼は近ごろ南方へ来たので、五十歳だが非常に強い。しかし僕は弱い。姉も弱い。」

と陳夫人を指ざした。南方では五十才は非常な老人なのである。陳夫人の年齢は、実は喫茶店で英玉からもう聞いてあつた。二十二才だといふ。しかし僕には二十七八に見えた。

「米やメリケン粉は配給になつて、その量が少いので、ヤミ値がどん〳〵揚つてゐる。」

「その米のヤミは誰がやるか。」

「天皇のバースデーに金を出した連中だ。悪い奴ばかりだ。それらの家では毎晩、日本軍人の宴会がある。」

「本当か。」

「本当だとも、僕はうそをつかない。」

「少々の不足は戦争中だから仕方があるまいマレーのゴム林を切つて、米田を開いてゐるから、いまに米は澤山出来るよ。」

「それよりシヤムの米、ビルマの米を買ふ方が早いぢやないか。」

「鉄道や船は軍の輸送で一杯だ。もう少し待て。」

「一体いつまで待つのか。」

「僕にはわからない。しかしさう長くはあるまい。五年位だらう。」

「ゴムは五年たつてもいらないのか。」

「それも知らない。しかしマレーのゴムは多すぎるのだ。石油や鉄はいくらあつても、多すぎることはないが。」

「それが日本軍のプランか。マレーはゴムと錫しかないから、だめだといふことになるのか。」

「いや、ゴムや錫以外に、ここには人間がある。勤勉で賢い華僑がゐる。これを適当な方面に用ひれば、昭南といふ名の示す通り、南方の明るい中心となる。」

「そのときまで、僕らは姉妹を売つて待たねばならないのか。」

僕はこの軍政の弱点をぴたりといひあてた詰問にもうたまらなくなつた。食ふに困らせれば女どもはみなパンパンになる。

「お前の働き先は見付けてやる。弱いの、なんのといはないで、働け。姉妹にはそんなことをさすな。」えゝ、序でだ。

そして　熱した煉瓦の側壁に
気楽な死となって　かぶさりながら
カルタ占いする水夫たちは
生身ではひとりだ
ゆるんだ瞼のあいだから
タバコがながれこんでゆく
かれらが青い夜の帳りにむかって
なげつける小刀は
めざめている　永遠の
鋭い風のなかで双こぼれする

註　Karl Krolowは一九一五年生れ、現在ドイツ第一線の前衛的詩人。

「僕は実は洪先生ではない。純粋の日本人だ昨日は生れてはじめて嘘をついた。しかし今日いつたことには責任をもつ。君も陳夫人にもきつと転を見つけてやる。たゞし僕は明日コーランポーへ赴き、しばらく向ふに滞在する。帰つて来るまで、これをやるから、待つてゐろ。」

僕は紙入れを取出して、中にあつた海峡弗の軍票を投げ出した。百弗である。残りは数弗だが、明日だけだから困ることもなからう。

僕が日本人だといふと、王青年はふるへ上つた。軍政批判だけでも、憲兵隊につき出されていたし方がないことはよくわかつてゐたのだ。英玉はもう隣の室へ寝に行つてゐたからよかつた。起きてゐたら、これもやさしい小父さんの真実を知つて、泣き出したことだらう。まづくなつた料理も終りに近くなつてゐた。青年はしばらくすると、僕の投げ出した紙幣はそのまゝにしてどこかへ姿を隠してしまつた。僕も引き揚げる時が来た様だ。通訳を二人とも失つた僕は、陳夫人に一番通じるらしいマレー語で話した。

「今ヤ我ハ家ニ帰ル。弟君ニイツタガ、僕ハ明日コーランポヘ去ル。コノ金ヲヤルカラ、日本人トハモウ会ウナ。ワカツタカ。」

マレー語の敬語法などもとより知らないから、乱暴なやうだが、いひ方は十分やさしくしたつもりである。彼女はうなづいてたづねた。

「汝イツカヘル。」

「シンガポールヘカ。」

「然リ」

困つた。軍命令で帰任を命ぜられるのはいつだらう。それよりも生きてかへれるだらうか。任地バレンバンをコーランポとしたと同

じく、また嘘をつかねばならない。
「二ヶ月後」
「ホントカ」
「ホントダ。」
僕は今度こそはふ〳〵の態で逃げ出したくなつた。時間ももう九時すぎである。僕はただ一つ官給の戦闘帽をとり上げると、出口の方へ向つた。陳夫人はたぶんかけてあつた懸金をはづすつもりだつたのだらう、戸口まで先立つたが、顔色を変へて戻つて来て、僕に抱きついた。ふるへてゐる。僕はすぐ目についたスイッチをひねつて電燈を消した。我ながらすばやかつた。しかし扉の向うをうかがふまでもなく、それをわれるほどひどく叩く音がした。二人とも默つてゐると、扉のよこの窓にはひ上り出した。見ると、長い劍をさしてゐる。將校だな、何たる醜態、僕は出來るだけ感情を殺して、物影に呼びかけた。
「何だ。この時間に何だ」
この日本語が意外だつたのだらう、相手は「ハツ」と答へて、ずる〳〵すべり落ちた。やがて靴音は遠のいて行つた。憲兵ではなかつたらしい。それぢや陳夫人をバンバンと知つての訪問か。僕は甚しく不快になつた。そのあひだ陳夫人は僕の胸もとでふるへつづけてゐた。「君は」だつて。僕がそんなことでふるへるものか。たゞ非常に不快だつたのだ。僕は陳夫人を突きはなすと、ふたたび扉口の方へゆかうとした。彼女は痩せた腕には不思議な位の力を出して僕を引つぱつた。さうして泣きながら「帰ルナ、帰ルナ」と叫びつゞけた。「コワイノカ」と僕が問ふと、うなづいた。「明日カラハ我サヘモ居ナイ、毎夜、日本人ガ来ルゾ」といふと、いよ〳〵激しく泣いた。
僕は身近かにこのやうに泣きつゞける女をもつた経験はない。相談に乗つてやらねばなるまい。あかりのついてゐる次の間へ、ついてゆくと、彼女の居間兼寝室だつた。英玉のものらしい人形や本などがおいてある。あの子のためにも、母親を何とかしなければならない。僕が眺めてゐると、陳夫人は急に笑ひ出した。これはあとにも先にも彼女からたゞ一度聞いた笑ひだつた。ふしんげな僕に彼女は「汝ハ帰レナイ、モウ帰レナイ」といつて、僕の胸を指ざした。よく見ると、僕の胸は彼女が抱きついたときについたと見える頰紅と口紅のあとが方々についてゐた。彼女がこれを拭つてくれてゐる間、僕はシャツ姿で、彼女の救済策を色々考へてゐた。さうして、いつのまにか、バレンバンでは絶対死なない決心をしてゐる自分に気がついてゐた。（了）

編輯後記

戰友がソ聯から返つてくる。シベリア天皇の異名をとつた淺原正基だ。蘇州の部隊で一緒だつた。僕がコギト同人だと云ふので、上等兵殿は今にこれですよと絞首の眞似をした。其後彼はハルビンのロシヤ語教育を志願した。そこで終戰を迎へた彼は、学生時代に特高に尾行されたと云ふ売込みで、一躍冒頭の地位に成上つた。彼は私意によつて戰犯を救いた。僕も一緒だつたら絞首刑だつたらう。が、彼は間もなく失脚して逆に戰犯に指名された。蘇州で中共取調役だつたのがばれたのだ。人間は左右の色分けより複雑だ。（O）

今年は戰後十一年目で、歴史は十年を一期として変轉するさうである。ただし僕たちは絶對復古主義ではない。かがやかしい將來の文学を待望する。その意味で、巷間さはがしい自由の問題には耳をかたむけてゐる。一色のプラカードにぬりつぶされることには絶對反對である。冗談にも自由を統制したらもつといい文学が出る、などいへたものか。しかしこれは石原慎太郎文學に對する賛否とは結びつかないことは承知してもらひたい。

この号の編輯会には炎熱の中を齋田昭吉君が参加してくれて非常に捗つた。クロロフの訳者は匿名でとの申し出であつた。（T）

果樹園　第八号（毎月一回一日発行）
昭和三十一年九月一日発行
編輯兼発行人　田中克己　布施市西堤町六〇七
印刷所　大阪市東住吉区桑津町五丁目八　元市印刷株式会社
発行所　布施市西堤町六〇七田中克己方　果樹園発行所
定価　三十円

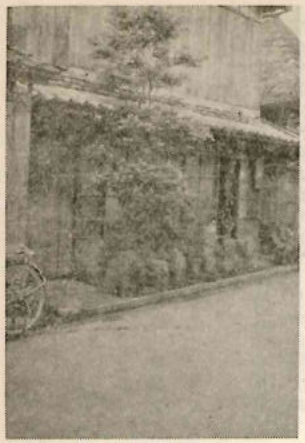
果樹園

第九号

書簡から見た伊東静雄　小高根二郎
遍歴の歌から　浅野晃
想像のお尻　小山正孝
墓碑銘　森亮
夏の朝　福地邦樹
ほりに囲まれた家　池澤茂
赤い提灯　山根忠雄
月に招かれた男　芳野清
深き淵より　トラアクル
船団　岩崎昭彌
唐詩の草木　田中克己
大阪の詩人　西垣脩
編輯後記（O・T・）

書簡から見た伊東静雄（九）

小高根二郎


諫早這松下の伊東の生家

二十九日は佐賀高等学校の入学試験の発表日である。その翌日と推定される安代さん宛の書簡がある。

「安代サン。今日ハ弟ノ合格ノ祝ト、私ガ常々親ノ所ヲハナレテキテ正月モ一緒ニ年トルコトモナイトイフノデ、ソノカハリニ餅ヲツカフト言ツテ、昨日タイバルノ田ン中カラ蓬ヲ摘ンデ来テフツモチヲコシラヘテキマス。狹イ裏庭ニ石ノ臼ヲ出シテ、月ノ世界ノ兎ガ持ツ様ナ□ノ□コンナ形ノキネデツクノデス。私ハマダ身体ガ充分デナクテ、二三度モツヾケテツクト気持ガワルイホドナノデ妹ト二人デマルメ方ニマハサレマシタ。…中略…餅ヲツク石臼ノソバデ何カ美シイ草ガ柔カナ褐色ノ芽ヲ出シテキルノガミエル。鳥カゴノ中デハカナリヤガナク。空ニハ春ノ飛行機ガトブ。

何ト言フ平和ナコトデアリマセウ。イロイロノ悲シイコトヤコマツタコトガ次ギ次ギニ出テクルケレド、コンナコトガアルト又、ホントウニ生キテキルゥレシサガ身ニシミルノデゴザイマス。」

（昭和三年三月三十日―推定―諫早より姫路市五軒邸九〇酒井安代さん宛封書）

詩のやうに美しい書簡である。高等学校生徒になつたと云ふ歓喜に溢れて、力の限り餅をつく壽恵男さんの姿が見えるやうである。その傍で、妹りつさんと一緒にまるめ方に廻つてゐる非力な伊東は、猛ましい弟の反射運動を受けとめる石臼の影に、名も知らぬ雑草が美しい褐色の芽を吹いてゐるのを見逃してゐない。これは伊東の祝福の愛情なのだ。伊東はこの褐色の草木の若芽が好きだつた。後年、彼は八ッ手の若芽と、八ッ手の葉裏に凿つてゐる蟬の抜殻とに、発想を凝らしたことがある。伊東はこの褐色の草の芽に、まだ悲しさと云ふものを知らぬ少年の弟と、すでに悲しさを知つた青年の自分との間の、時間の距離を改めて心で測定すると、その不染の若さを祝福してゐるわけである。

この安代さん宛書簡の次の日、宮本氏にも

同じく合格の通知をし、改めて諌早への来遊を勧誘してゐる。

「宮本さん。

御病気とは知りませんでした。苦しかつたでせう。我慢をしてすつかりよくなるやうにしなければいけません。それでも扁桃腺とかで、私は少しは安心しました。早く床から離れる様になつて下さい。

私は十四五日までは諌早にゐるつもりですからあなたのおからだで、日時が許すかぎり遊びに来て下さい。お願ひします。

先日から色々と御心配かけた弟の件。一昨日やつと発表がありまして無事女科乙類に入学することが出来まして大変喜んでゐます。弟の奴がいゝ気色でゐます。…中略…

弟が及第したのでその祝に私と二人で長崎かどこかに遊びにゆくつもりでゐます。チャンポンを食べ活動を見るのが長崎でのたのしみです。

諌早は桜の盛りになりました。実に、いい時候ですね。然しこんなに風景のいゝ、気候のいゝ田舎に一ヶ月もゐると馬鹿になつてしまひそうです。その証據には私ほどの勉強家がこゝでは毎日ひるねばかりですからね。でもすつかり神経衰弱がなほつて呉れて、うれしいことです。

毎日近所の友人が話しに来ます。私が面白いことばつかり云つてきかせるのでうれしがつてゐます。私は面白い人であり助平だそうです。然しこんな話も諌早でだけしか出来ない。

今日町の書店で国原（註・アララギ派歌人・彫刻家。島木赤彦門、藤沢古実歌集）を注文しておきました。では早くよくなつて、元気にやつて来て下さい。」

（昭和三年三月三十一日長崎県諌早町這松下伊東生より　福岡県山門郡瀬高町上庄野口柴太郎方宮本新治氏宛封書）

この書簡によると、三月下旬にはもう桜が咲き、一ヶ月以上にわたる休息で、伊東はすつかり健康を恢復してゐるやうである。が、もともと伊東の病気とは、神経衰弱と云ふ観念的なそれなのである。今で云ふノイローゼの類であらう。四月に入つてからの宮本氏宛書簡は、心はすでに諌早を離れ、姫路と京都との幻影がちらちらとしてゐる。伊東のノイローゼはまだ治りきつてゐないやうである。

「大牟田よりのお葉書有難う。先日御病気と知つてただちに瀬高の方に手紙書きましたが御落手になりましたるやいかゞ。

弟が十九日から始まりますのでその一寸前佐賀にゆき、それからすぐ京都に上ります。姫路にも二三日は滞在のつもりなれどはつきりしたことわかりません。諌早の桜も散りかけて故郷で暮らすことも月余になつた。いろんな友情関係で面真目に考へたり話し合つたりしてすごしてゐます。

今日親るいの子供達と一緒に御館山といふ郊外の小丘に上つて一日すごしました。

…後略…」

（昭和三年四月八日伊東生より大牟田市一浦町六九田尻方宮本新治氏宛はがき）

郊外の御館山に登るのは、高等学校時代からの、休暇に於る伊東の行事の一つであつたその小丘から、東の方、雲仙が峨々とした山影を投入してゐる群青の有明海と、故郷の町を隈取りながら、海までの一里ばかりの広袤を気随意にうねつてゐる本明川との姿に、伊東は何かを祈つてゐたのであらう。昭和二年十一月二十三日附安代さん宛書簡に、短歌の上の処女作「日に一度御館の山に祈るこそ二十の我の日課にてありき」があつた。伊東は大学最後の春休の別れに御館山に上り、十代の日とは違ふ祈りを禱つたのであらう。

「追ひかけて京都に出します。とうとう諌早には來て呉れませんでしたね。私も十七日頃に家を出て佐賀と姫路によります故二十一二日頃着京のことでせう。私は今度ほどなまけた休暇はなかつたけれど、又こんどほどに気持ちよくおちつけた休暇はなかつた。…中略…京都についたら遠藤さんの下宿を訪問して下さい。」

（昭和三年四月十四日諌早伊東利里生より京都市上京区寺町今出川上ル二丁目塔之段北横丁川合方宮本新治氏宛はがき）

この書簡は、從來のやうに「伊東生」とか「静雄」と署名されてゐずに「伊東利里生」となつてゐる事実に注意せねばならない。「利里」とは「Lily」をもぢつたのだ……と

は宮本氏の解説である。伊東がこのやうな掛言葉に後年意義を認めてゐるが、それはこの体験に基いてゐたわけである。萩原朔太郎師の詩集「氷島」所載の「地下鉄道にて」に、「なに幻影の後尾燈」は「なに幻影の恋人を」の掛ケ詞であると云ふ自註があるが、これに対し三好達治氏は「四季」誌上で論難したが、伊東は軍配を朔太郎側に挙げたことを思ひ出す。

それは兎にかく、伊東が利里生と名乗らずにはをれなかつた事情は、宮本新治氏の小説「氷雨降る日」が解き明かしてくれるのである。

遍歴の歌から

浅野晃

なまじひに多くの落日があつて
記憶のへりを色どつた
古い岩石らもおなじに
認識のなかに人は老いる

人界のもろもろの音が交りあひからみあ
　ひ
どこか大海のほとりで
つぎつぎに揮発する
結晶は苦い
そこにもまた落日がある
わたしの眼は

飛び翔けることを愛した
さまざまな軌道を描がかうとした
そして疲れて帰つてきた

かれらにねぐらを与へる肉体は
一本の樹木なのか
年輪のいくつを辛うじて刻みつけ
幹は自身の空洞に堪へてゐる

遍歴は空間の場所場所で
地を這ふもの水に泳ぐものの
見たところをも集めたのだ
鳥どもが来てついばみ去らなんだことを
眼とねぐらとの幸福としよう

記憶は樹液にとけ
樹液は肉体の葉と花とをやしなつた

秋になるとそれは実をむすぶ
実は熟してそのつど地に墮ちる

わたしの眼はけふも見た
むかふの平原でひろい川幅が光りかがや
　くのを
それは正午の太陽の下で動かず
岸と岸とのあひだに熔鉱炉のごとくかが
　やいた
わたしは熔鉱炉をおもつた
そこでとけてゆく老いた鉄らをおもつた

しかもつひにまた落日がある
その色は岩石とわたしとを色どつた
人語の入りまじる遠い遠いとよみのはて
　で
浪が結晶を捲いて去る

想像のお尻

小山正孝

せつ子がふりむいて君の方に手を振つた時には、全く、僕は、君とせつ子の二人の間に立つてゐる電信柱にすぎないやうな気がしました。渋谷の方に向つて、アスファルトの道はくねくねと、つれ込み旅館の窓の光を縫つて続き、ある場所ではそれが、月光に白く帯のやうに輝いてゐました。両手を高く振りあげたり、つまさきで立つて、急にふりかへつて僕の方を見たりして、妖女のやうにさびしい笑ひをしては、せつ子は僕の心の動揺には知らん顔でした。たのしい事があつた後ではどうしていいかわからない気持になります。言葉で表現しきれない時には、また、充分に表現する事の出來ない情況の時には、うれしさの表現が素直な形をとらないのです。せつ子は僕の方を哀れさうに見つめました。

二人の関係は君も知つてゐるやうに偶然の愛情とでも呼べるやうなものです。僕も、せつ子の十九歳になるまでの数々の恋愛関係を分別ある一人の人間として聞き役に廻つても、かつてねたましい気持を持つた事はありませんでした。栃木県のある所から飛び出してからの、たとへばはじめての相手の人があの方が全く駄目で、それだけに精神的な要求がはげしかつたとか、一人の男と一夜をすごしても男はふとんの中でふるへ続けてゐたとか、酒を飲んだ男が飛びかかつてくるんだものとか、女も口なほしはほしいものだとか。

僕は路地から路地へとせつ子を引きずり廻しました。その度に、せつ子の顔の上に、ネオンの光がそそぎかけたり、白い光がそそぎかけたり、暗くなつてせつ子の顔が美しく見えたりしました。僕の心の中には君が、実に美男子に、しかも、僕の女の心を奪つた男として存在し続けました。どうして君は親切にふるまつたのだらう。紅茶を入れたり、壁の一ヶ所の秘密の場所を教へたりしたのだらう

そこから取り出して君の手の中にあつたたくさんの貝殻。

「これはその人が持つて来てくれたのですもう、今となつては記念品ですね。」

あの時のせつ子の顔は、たしかに感動してゐました。僕は気づかないふりをしてゐましたが、君が計算をして、わざと、あのクリスチナの話をしてゐたのに気づいてゐたのです

「日本の占領してゐたそこの南方の土地の修道院から計画的に、祖国に帰り、やがて日本の修道院にやつて来たのです。君たちにはわからないでせうが、日の光の強さは、色彩のはげしさは、そこの港の風景と僕たちの愛情に大へん似つかはしかつたのです。一つだけ、その事を話せば、修道女としてのクリスチナは、たしかに僕と姦通したがつてゐたのですよ。クリスチナがある時、僕が手を洗つたあとで、タオルをくれました。タオルをねかうやつて、両手の上に白いタオルをのせて僕の目を見つめるのです。北方系の人間特有の肌をして、白目はいくぶん青みをさへ帯びてゐました。それが、情熱をふくめて見るのです。僕には、はじめ、さうした目の中に情熱を感じることなどはないと思つてゐたのに、赤い光よりも、青白い光の方が火花がはげしいもののやうに、クリスチナのそれも、ひどく強いものだと、次第に僕はさとつたのです。タオルの上に何気なく、僕は自分の両手をのせました。次の瞬間には、犯罪者が手錠の中に自分の手首が巻き込まれる時に感じるやうに、もう、駄目なんだ、と、決定的なものを僕は感じました。しつかりと、布のうしろ側から、僕の手の水滴を蒸発させてしまつて、なほ余りある熱情が、僕の両方の手をしつかりとにぎりしめて長い時間放しませんでした。彼女は神に仕へてゐるのに、彼女はなほ神に仕へてゐるのに。僕の肉体は、彼女

をもう少しで押し倒してしまはうとさへしました。いけません。ノー。彼女の声は、つめたく、邪心をおこしたのは僕の方であることをはつきりと示して、言ひました。私は神に仕へてゐる。私は神に仕へるやうに、人にはつくしたいと思つてゐる。人につくすことは神に仕へることと同じことであるからだが、自分の全部は神にまかせてある。貴方のやうな方が、理性を乱されることは、これは私としては、実に意外な事件であるし、もう、お目にかかることも出來ないかもしれない。さんげをして、私は、貴方にわびるより以上に神の前にひざまづかなければならない。さう言ひ終つて、彼女は僕から離れました。その日以後も何回か似た事はありましたが、同じ事のくりかへしにすぎませんでした。僕は、僕の目の前にあつた寝台の白いシーツと、小さい窓から少し斜めにゆがんで見えた海の色とを忘れられないままに、帰国したのです。丁度、それから七年目の一昨日、そのクリスチナが、ほら、今、せつ子さんの坐つてゐるその場所に坐つてゐたのです。尋ねて來たのです。何をしにでせうか。もちろん僕に逢ひにです。」

君のうつむいてゐる姿は、悲劇の主人公のやうに――しかも、日本製のものではなく戦争をはさんでの国際的な愛の悲劇の主人公のやうに、そこだけ、南国の明るい光線がただよつてゐるやうでした。君の手の中の貝は、君の手の中でがたがた音をたててふるへてゐました。

「この貝は、クリスチナが僕にくれるために人の目をぬすんで、別れた後でためたものださうです。この壁の穴の中に、僕も、クリスチナのためにあのタオルをとつておいたのです。愛情は何年たつても、色があせることはない。せつ子さんの場所に坐つたりして、彼女は、何時間かをすごしました。何時間かを、僕と、二人だけですごしました。その時間を得るためには、いつたい、クリスチナはどこをどう辿つて來たといふのでせう。」

ほんたうに、そのクリスチナといふ修道女は、君に逢ふために、計画をたて、人生一代の事業として、日本にやつて來る事が出来たのだなあ、と、僕も思ひました。僕は、君の話を聞いて、それなのに、どうして、現在そこに、その女性が居ないのか、不思議でたまりませんでした。君が拒むこともないやうだ。まして、その女性が、去ることもないではないか。

「女のお尻つて、どうして、あんなに大きいものだらうか。僕は、クリスチナが、この階段を昇るのを見てゐて、途中でつつかへやしないかと思つて、心配しました。修道女のスカートは、かたい布地で出來てゐるので、壁にすれてゴワゴワと音をたてましたよ。さういへば、クリスチナも、もう、おつつけ、四十に近いので、更年期なので、なほさら、大きなお尻をしてゐたのですね。」

僕は、せつ子の上に、変化が起ることを想像したのに、何の変化も起りません。むしろ目を輝かして、君の顔を見上げてゐるではあ

墓碑銘

――西部ニューギニア、ホーランディア附近――

森亮

白き砂。白き貝。濱ゆふに似たる花咲く
南海の異土の岸べにわれこそ眠れ。
九千里青き波路は遠けれど、
ちらちらと飛ぶ影の千鳥めき
鳴き頻りほととぎすめく小さき鳥
訪なひ来れば、わが墓も故里の土に似た
りや
二十年の命のわが世、ほととぎす、時すぎにけり。

夏の朝

福地邦樹

瀕死の野良の子猫を
妹が介抱してやつてゐる
げつそりと痩せたからだが
ときどき痙攣する
妹は筆に水をふくませ
半びらきの唇をしきりに濕してゐる
朝顔の緑の蔭で
葡萄の眼をあけたまま
子猫はさうして午前中生きてゐた

正午に近く
瞳孔がひらきはじめ
やがて小さな舌を出すと
それで心臓がとまつた
妹はすすりあげながら
私にもお祈りせよと言ふ
いま屍体になつたばかりのからだから
胡麻粒を撒いたやうに
蛋が浮き出して来てゐる

りませんか。君も、上手い。いま、せつ子の坐つてゐる場所に、クリスチナが坐つてゐたと言つた暗示に、見事にせつ子はひつかかつてゐるのでした。ですから、お尻のことを話されて、せつ子は、それこそ、せつなかつたにちがひありません。

「僕が、積極的に、タオルの時のやうにしたならば、あるひは、君たちの來た今日も、ここで、毛糸の球でもころがしながら、君たちの相手をしてゐたのかもしれません。寝台の上に寝ころんで、二人は一日中、窓をしめきつてゐました。クリスチナが、何を拒まうとするのでせうか。しかし、僕は、その時、クリスチナに、何を求めたらいいのでせうか僕は、その一日の、結末の時ほど強く愛情の恐ろしさを、感じたことはありません。僕は口の中でくりかへしたものです。何といふことだらう。いつたい全体、何といふことだらう。二人が寝台の上に寝ころんでゐると、ほんたうに、たのしさうに大きい口をあけて、クリスチナは笑ひました。北国人の、その青白い大きい顔には、平凡な、女のたのしみを味はつてゐる時の、もう、姦通の罪さへ感じない、ふつうの女でしかありませんでした。けれども、帰らせる時には、僕は、この女をこのまま帰らせて果していいのだらうか、とそれこそ、真剣な疑問が僕を一瞬毎に、きざみつける強さでおそひました。」

一軒の旅館に、僕はせつ子の手を強く引つぱつて入りました。

「あなたつて、わりに、あれね。ふふ。」

寝床の中で、せつ子は、不意に僕に言ひました。

もちろん、旅館にも、階段はありましたが君の家のより広い。せつ子は、とんとんと、軽く、まだ、更年期には、二十年もあることをはつきり示して、スカートをひるがへして昇つたのです。僕の何が、あれなのか。僕の何があれで、わりに、僕は何なのだらうか。比較級であることを、はつきりと、これ程、くつ辱に感じたことはありません。

君の家の庭に白い梅が咲いてゐた。僕とせつ子が君を尋ねて、まだ玄関に達しない時に小窓から君が顔をのぞかせて、玄関の位置を教へてくれました。僕には、あの時の二人をのぞいてゐた君の位置からの二人の姿が、はつきりと見えるやうです。君は、我々を待つてゐたのではなくて、クリスチナを待つてゐたのではないのですか。それで、僕は、何のために君を訪れたのかわけがわからなくなつたのでした。

僕は、せつ子を抱きしめました。一日中、

寝台にねてゐた君とクリスチナの事を想像しました。

身をひるがへしては、僕をある程度で、とどめようとするせつ子には、修道女の恋に対するあこがれのやうなものがあるのでせうか僕は、君がクリスチナを帰したのは、一つにはお尻のでかいのにへきえきしたか、あるひは、一日中いつしよに寝て、満足してしまつたのではないかと思つたのですが、この考へは、甘いやうです。今になつては、君にとつて、もう、そんなことはどうでもよくなつてゐたのですね。どらんなさい。せつ子は、もう、君のものですよ。僕が、遂にはげしく、せつ子に要求し、そのはげしさにせつ子がおどろいて言ふ通りになつた時には、もう、僕のものではなくなつてゐたのです。うつ伏せになつて、うめきながら、せつ子は、君の名前をよんでゐるではありませんか。

ほりに囲まれた家

池沢茂

オランダシシガシラやランチュウなどの、いわゆる高級の金魚は、ぼくはまだ、一ぴきも飼ったことがない。なるべく安くて、飼うのに手間がかゝらないのをと、こゝろがけるからだ。ヒゴイの子や、和金や、せい〳〵ふつうのリュウキンまでが、だから、ぼくの手て飼はれている。しかし、すなおに観賞するなら、平凡なリュウキンが、かえつて、いちばんすぐれているのではなかろうか。シシガシラやランチュウなどには、人間の邪念が、はいりすぎている気がする。人間どうしの無意味な競争や虚栄や好奇心などの偏執が、あまりに露骨なのだ。ぜいたくで死にやすいのもその残酷な犠牲のあらわれにちがいない。その姿態も、出目金などとともに、むしろグロテスクに近い。魚というより、虫や両棲類を思わせたりする。一般に高級とされているのも、単に、値段が高かったり、飼育法がむずかしかったりする点が、大いにあずかっているにちがいない。

その点リュウキンは、もっと素朴だ。いまはいくらか高くなっているらしいが、ぼくが買った四、五年まえには、小さいのなら、一ぴき二十円か三十円で、どこの店にもあった。からだも丈夫で、えさも、パンのかけらや、ごはんつぶや、うどんの切れはしなど、ふつうの食事の、わずかな残りくずで、たりる。ミミズやアカゴやボウフラはもちろん、カ、ハエ、ミノムシ、イナゴ、いろんな羽虫、その他、夏にふえて困る虫をたいてい、よろこんでたべる。容器が相応な広さを持ち、水がわるくなりさえしなかったら、藻でも水あかでもたべて、よわりもせずに生きのびる。しかも、その色のあかさが、じつに稚純な美しさを持つ。三つにわかれて長く垂れ、およぐにつれて、ゆら〳〵と水にゆれる尾びれも、類がなく美麗だ。でこぼこや、ゆがんだところや、するどい線がなく、まるい体で、すべて、なだらかな曲線から成りたっているのも、その姿勢をいっそう優美にしている。あまりに有りふれているため、かえって目立たないだけなのだ。ためしに、ほかのどんな魚類をさがしてみても、この可憐な優美さに匹敵するものが、なにか見あたるだろうか。清冽とか繊細とか勇壮とか珍奇とかの、べつの種類の美しさは、たしかにある。しかし、くれないの十二ひとえをよそおい、もすそを長くひいているような種類の嫋々として濃艶な美しさは、高価な熱帯魚のうちにも、どうしても見られない。

ぼくは夜ねむれないでいるときなど、よくいろんな土地にいろんな家を建てる空想をして、ねむけが來るのを待つ。そのばあい、どんな土地にどんな家を建てるにしても、きっと、そのまわりに、ほりをめぐらすのをわすれない。そこに、いま防火用水槽で飼ってい

る金魚をはなってやるためだ。ぼくの家は四軒長屋のうちの一軒だけれど、かりに独立した家だとすると、その周囲にめぐらされたほりは、庭に掘られた池などと違って、面積はともかく、長さは十分にある。土地に余裕がなかったら、みぞみたいな、ほそい、あさいほりでも、かまわない。そのほりにそって泳ぎまわっているかぎり、無限の長さにわたって、行動できるわけだ。そうなったら、たゝみ半畳ほどの広さの水槽から解放されて、金魚も、先祖のフナの気分にかえって、大よろこびで、泳ぎまわるにちがいない。そうしてながいあいだ丈夫に生きつゞけて、びっくりするほど大きく成育するにちがいない。そう思うと、ぼくは、なんべんおなじ空想をくりかえしても、すこしもあきないのだ。

しかし、ほんとうにそういうことになったら、どうなるだろうか。ぼくがいま飼っているのは、戦時中に使われていたコンクリート製の防火用水槽だから、はじめに飼っていた浅い小さな、いけ花用の水盤にくらべると、ずいぶん大きい。ところが金魚たちは、その深さと広さのなかに、まぎれこみ、かすみ、ぼやけてしまうのだ。もう金魚そのものの美しさは、あまり見られない。土をもった半箱を底にしずめ、それに植えた藻がうっそうと繁茂し、水があおくよどんでくるようにしてやったら、かれらはいよ／＼見えにくくなった。もはや単なる「生きもの」の感じに近いしかも防火用の水槽は、いけ花用の水盤よりは大きいけれど、ほりや池にくらべたら、こんどは、はるかに小さい。その水槽のなかでさえ、単なる「生きもの」になってしまう。

じっさい金魚は一般に、小さなガラスの鉢で飼われている。そうすると、金魚の可憐な優美さは、たしかに、前後左右、どこからでも、見ることができる。もと／＼観賞用の金魚なのなら、こういう飼いかたが、いちばんふさわしいにちがいない。しかし、ぼくはやがて、なんとなく、むごたらしい気になってくる。その飼い主にたいして、いくらか、にくしみをおぼえてくる。なぜなら、口がせまい容器の、酸素のとぼしい、わずかな水のなかで、金魚は、息をするのも苦しいにちがいないからだ。いくら動作が緩慢でも、じきに鼻がつかえるのでは、運動も不足するだろう水がわずかで、壁がガラスでは、外気の温度に左右されやすいから、じきに、つめたくなったりして、あたゝかくなったり、いくら冷血動物でも、体温の調子がくるってくるだろう。それとも、人間はたえず、なにものかによって、いじめつけられているから、そのなぐさめに、金魚ぐらい苦しめてもいゝと、されるのだろうか。

しかし金魚は、すくなくとも現在のすがたの金魚は、もとは存在しなかったのだそうだ。この世に全然存在しなかったものが存在するようになったのも人間の工夫の結果だろうけれど、もし金魚に、もっと美しくなりたい——尾びれが三つにわれて長く垂れ、はだのくれないが濃く、体がまるく、なよやかな優美な姿態になりたい——という本能や意志がひそんでいなかったら、こんな変化がおこったかどうか。やがて透きとおった小さなガラスの鉢にとじこめられるようになるのも気づかないほどに、他に類のない容姿を誇りとする欲望が根強くなかったかどうか……。ぼくは金魚でないから、そこのところまではわからない。しかし、いくら人間が造物主のまねをおかしたところで、モルモットからウサギをこしらえたり、スズメからウグイスを生みだしたりはできないだろうから、金魚に変ってきた元のフナには、人間の手をかりないでもみずから金魚になってゆきたいという願望がやはり、あったのにちがいない。そして、その変身の結果は、すくなくとも金魚自身にとって、進化であったか、退化であったか、ぼくはときぐ／＼へんな気持になる。

赤い提灯

山根忠雄

ゆうべのお祭りに買つて貰つた
赤い提灯に火を入れて
先頭に立つた姉のあとから
木刀を提げた弟が
「護衛だ」といつてついて行く
庭先から畑（はた）の方へ
草むらの中などを
初めて見るもののやうに
一つ一つ
二人は仔細に點検してゐる
照らし出された野菜畑の
畫間より一層
あざやかな緑色のかげに
見える見える
トマトが二つ……
きうりが三つ……
そして
人生の倦怠に苦しむ父の心を
目覚めさせる「詩」が一つ——

月に招かれた男（五）

芳野清

五、沈みゆく魚の歌

昭和十五年一月、大垣が応召してから一年に近い月日が流れた。戦時の一年は平和な時代の数年の変化にも匹敵するであらう。長い間私達は逢ふこともなかつたが、そののち始めて見た彼は軍服に身を包んで意外にも子供ぽく健康そのものに丸々と肥つてゐた。金筋一本、星一つ、伍長勤務の彼は営外居住になり外地行きの希望も容れられず、経理本部で兵隊の給料計算か何かの経理事務を担当してゐた。はげしい時局の推移にも拘らず、彼は心の裡に絶えず優しい詩人の精神を炎やしつづけ、しかも時局の重責を荷ふ軍人の一人としての誇りをも同時に失はず持つてゐたやうに思はれる。そこには詩人の作為された姿勢がないとは云ひ切れないが、当時の葉書に、——窓の下で沈丁花が小さい花咲きました。一人の詩人が訪問する婦人を待つ間、薔薇を摘んだら、とげに刺されその時の傷が因で亡くなつたと、こんな花であつては困ります。忘れてしまつてそれでも何処かの野末で己れの貧しさを恥らふやうにそつと花咲いてみるやうな花。こんな花でなければ……と書いてゐる。この少女にも似たあえかな抒情がいかつい軍服の胸の中に秘められてゐたと思ふと何か微笑を禁じ得ない。その頃、新らしく社会に出て手痛い幻滅を味はつた私には日曜日など時折昂然とした彼に会ふのがどんなに心の励ましになつてゐたか分らない。そんな時、彼は必ず軍服のポケットから高価な宝でも取出すやうに誰かの新らしい詩集などを出して見せた。その本はある時は、堀さんの「かげろふの日記」や、田中さんの「大陸遠望」や竹村さんの「出羽悲歌」や芳賀さんの「ドイノの悲歌」であつたりする。そしてその時々の詩集などについて語る彼は詩を愛するなどと云ふ生やさしいものではなくて何か近頃の新興宗教にでも取憑かれたやうな熱狂に近いものがあつた。彼は当時の若い詩人達の間で「詩を書く兵隊さん」で通つてゐた。「四季」に始めてのつた「祈禱歌」といふ詩は兵営生活の荒涼たる夜の孤独に耐へてリルケ的静謐への憧れから生れたものであらう。これと同じ系列のものでは次の詩がある。

ある公園で
青い空も暮れていつた
小鳥達も帰つていつた

明るい歌だけをのこして
冬のうす日さす場所にこそ
しばしの憩ひがある筈だと
私は公園の夕暮にゐた

でも　もう風も痛い程になつた
冷たい床の上でリルケに祈らうとして
私のラムプは昏い
私のラムプは昏い

完き忘却と安らかな睡りが
訪れるまで私はどうして待つてゐよう

彼はまた、その頃「大陸遠望」の序詞「偶得」に大変感激してゐて、私達の恋人や友人は七十六年に一度きり現はれないハレー慧星のやうに一生に会へるものかどうかわからない、空間と時間の四次元の世界でたま〳〵会つたひとを恋人と呼び、友とよんでゐるに過ぎず、人は実に孤独であると云ふやうな事を熱心に語つてゐた。それだけに又自分の周囲の知友を思ふことも人一倍あつく、出会と云ふ事の意味深さや儚なさをも深く意識してゐた。それは又当然、戦争と云ふはげしい日常の中で当時の青年が否応なしに身に徹せねばならぬ哀別離苦への詩人的決意を示すものでもあつた。事実、彼はその頃ひそかに一人の少女を戀してゐた。その少女は軍傭員でもあつたらしく、大垣と机を並べてゐた、眸の美しく澄んだ少女だつた。彼は長い間、自分の心一つに秘めて悩んでゐたが、つひに覚悟を決めて最後の攻撃をした。だが、その愛の告白の仕方も至つて古典的で、昔の大宮人が用ゐた間接法を選んだ。ある男がゐて、何年もの長い年月を、ある少女を想ひつゞけて苦しんで来たと云ふ事を、時々その少女の顔を見ながら物語の一齣として聽かせたと云ふわけである。少女はそれを聞くと、急に顔を机の上に伏せてしまひ、そのほつそりとした白いジャケツの肩をはげしくふるはせてゐた…。恐らく羞恥心と不安で胸を一ぱいにして。その日からもと〳〵沈んだやうな彼女の容貌は一層無表情になり、彼に会ふと顔をそむけるやうになつてしまつた。それにしても彼に時折投げる困惑した祈るやうな瞳。彼は思ひ切つてその後、少女に戀文を手渡したが、困り切つた少女はその手紙を彼に返してしまつた。尤も一寸類を見ない達筆で巻紙か何かに書かれた恋文を渡されたとしたら、その少女は王朝の姫君が男から恋歌を届けられたよりも大きな困惑に陥つた事でもあらう、と私には想像されるのである。彼はその日の会話が少女に傷を与へたかも知れぬと悩み、少女の美がそのまゝでは俗化してしまふと、甚だ一人よがりな心配をして、その少女のためなら何んでもしてやりたい気持になつた。彼はまかり間違へばドンキホーテにもなりかねない位置を意識して果敢にもドルネシヤ姫ならぬ

深き淵より

ゲオルグ・トラアクル

それは二番刈だ　そこに黒い雨が降りそ
そぐのは
それは茶褐の木だ　そこにただひとつ生
えているのは
それは突風だ　人気ない小屋をめぐるの
は
なんと悲しいこの夕暮だ

野小屋のそばで　まだ
おとなしい孤児が　僅かな落穂を拾つて
いる
彼女の瞳はまるく　黄昏の中で黄金のよ
うだ
そして　彼女のひざは　天の婚約者を待

明眸の一少女の美の擁護者にならうと決意する。そして堀さんの本などを貸してやる事になる。そのやうな詩人にあり勝ちな一人よがりの好意がその聰明な少女にどう受取られたかは私の知るよしもないが、この方法は案外に効を奏して彼の不幸な発病さへなかつたら結ばれてゐたかも知れぬ程に発展したものになつた。ともかく彼はこのやうな精神の大きな動揺の最中に、再度召され人として発つ大塩に送らうと、自筆限定版の詩集「沈みゆく魚の歌」を編み、深い友誼に報ひる心も忘れなかつた。今この僅か十幾つかの詩から詩論として彼の詩の系譜を論ずることは出来ないが、いづれの詩にも感ずる事は、彼がその若さにも似ず特異な達筆であつたと同じく、その詩に、ある完璧さを具へてゐたと云ふ事である。それが抒情の端正さと云ふ意味で、新らしい詩の発見者の持つ危いばかりの位置が見られないと云ふ不満はある。しかし、反対に、その年で既に古典的な格調を築いてゐたと云ふ事は又並々ならぬ才能ではないかとも云へる。その薄い冊子を繙くと、先づ序詞として一つの和歌がしるされてある。

うつせみの身は塩湖に沈みゆき
深くくぐりて歌となりぬる

この歌は後年の狂気の不幸な予言とも思はれて私には不気味な感じがしてならない。又編中で特に優れたものではないが、彼の傷つき易い精神を表はしてゐるものとして次の詩がある。

みやげ

こは下駄のはな緒ならずや
わが貧しき日の暮れを慰めんとて
帰り道の牧童たちは
茨のしげみに　かくれている
可愛い姿を見つけ出した
ぼくは　遠いくらい村々の影だから
お宮の　泉水で　口すすいだ
神に沈默を誓って
ぼくはひたいに　冷たい鉱(かな)質をおぼえた
ぼくのこころを　蜘蛛がさぐったが
それは　ぼくの口のなかで消える火だ
夜、ぼくは荒野にいた
星屑たちに見つめられながら
はしばみの林の中で　またもや
水晶の天使たちが、ふれあった。
—っているのだ

水晶の天使たちが、ふれあった。

たまたま上京し給へる六十路の父が
持ち来りしみやげ一束
こは下駄のはな緒ならずや
鄙びたる賜はりものの尊さよ愛(かな)しさよ
はてはその儚なさよ
知らずこを古き下駄につけて
陋巷に迷ひ出で
雑閙に躓めき踏まれ躓き倒れ
なほも烈しく傷つかんとするや
もう一つ、混血の友を歌つた「窓」には心が本来の静けさを取戻した時にひそかにさゝやきかける清らかな孤独の調べがある。

窓

窓内で私達の会話は寂かだつた
ゆるやかなテンポで言葉少なに
昨日も便りがありまして……
（クラヴサンが傍で伴奏してゐた）

そのひとがひとり言のやうに語つてゐた
外国に渡つた息子のことを……
……むかし私の友であつた深い空のやうな
瞳を持つた混血児のことを
（クラヴサンが傍で伴奏してゐた）

冬の日のたそがれを少しばかりの
思ひ出がお喋りしてゐた……

船団

岩崎昭彌

門司港外の仮泊で船団の編成終り
航母一隻　駆逐艦三隻　駆潜艇五隻
輸送船十三隻の出撃だ

三井船舶の元貨物船
一万二千噸の摩耶山丸の
俺達に当てがはれた船艙は
芝居小屋の奈落のやうだ
そこは吃水線下ゆゑ
鉄板の向ふは逆巻く潮だ
魚雷を喰ったらどうなるか？
「心配するのは止さう」　それよりも
ゆふべ紙切の回覧があつた

……
私はそつと目をそらした　すると
そこに窓があつた
窓からは青い海がよく見えた
（海は優しくもう凪いでゐた）
そしてこの詩でも分るやうに凡ての詩には
幼年の憶ひ出がやさしくからまつてゐる。詩

わが夫を筑紫へやりてうつくしみ
帯は解かじなあやにかも寝も
そして俺はまたしても想ひ出す
紺絣のモンペが振つた
ひらめきひらめき消えた日の丸を
列車で我が家の前を通過した朝を
「だが戦友達を見よ」
どの顔も船に運命を托しきつてゐる
どんな想ひを抱いてゐるにせよ
勝つか死ぬまでは決して還れぬのだ

個人的なものの一切を鋼鉄に包み
四月一日の美しい六連諸島を後に
祖国の意志をその艦旗になびかせて
船団は南を指して蛇行しはじめた

――インパール――

人の形成に幼年時代と云ふのは実に重大な役割を果たしてゐるものだが、白秋にとつて柳川がさうであつた如くに彼にとつては宇都宮がそのメルヘンランドであつた。彼が長い続き葉書に書き綴つた幼年期への郷愁を写してみよう。

――今はもう捨身してしまつてゐるやうな気でゐる私です。心の羽搏く事の失つた少年が没落してゆく姿がどんなものであつたか、メエルヘンを編んで冬の日の薄陽差す場所で展いてみる。と、今はけむつた思ひ出の一つ二つ。お話にしようと云ふのですが聴いて頂けるかしら。幼年の悪熱については兄から聴いた不思議なランプが暗い地下で青く点つてゐて私は細い路をたつた独りで取りに行かねばならなかつた。こんな晩きつと強い木枯しが吹いた。児とろ、児とろの話や、嘘つき太郎を襲つてくる狼を幻に見た。また雪の夜であつた。「大寒み、小さみ、山から小僧が飛んで来た」こんな歌も教はつた。親類の大人が見えてゐて、父や母と話をしてゐるのを寝床で聞いて、こんな時は安心して眠れた。こんな夜が長い事続いた。幼年の思ひ出は昼よりも夜の中に生きてゐて、今頃になつても夢の中では幼年である事もある。小学校に入ると友達が澤山ゐた。一人の友は今もなほ私に懐しくふだんは便りをせずも会へば手を握り黙つて公園など散歩を共にすることがある。いつか話したH君の事です。オルガンの音を一番印象してゐる。あの音によつて私は静かに運動した、学問の合唱した。教室はいくつもいくつもあつて校庭は広くて、柳の木は高くて、銀杏の木は私達幾人かゝつて廻ること

が出来るでせう。池には恐い蛇が棲んでゐるとかで容易によりつかなかつた。私はよく出来た方だつたから先生からは可愛がられたが仲間の意地悪からはよくこづかれた、何んでもないやうな言葉がその頃の私をずい分苦しめたらしい。画はずい分好きだつた。川のほとりをよく写生に出かけた。栗ひろひやガマ蛙捕りみんな獨りでなく仲間につれて行つてもらつた。それは何処か遠いところ、今でもよくわからない遠い林や山にであつた。犬を飼つてゐたことは私の小さな誇りであつた。大きな犬でキチといふ名であつた。キチはものぐさでよだれをよく垂らした。この事は私を少し恥かしくしたが大きな犬だつた。学校に行く時ついて来てなか〳〵帰らないことがあつた。少女では東京から転校して来た操さんと云ふ子がきれいな児で、私はその髪を美しいなあと思つた。雨降りの教室でその子が聴いてゐると云う事が私の声小さい童話を甲斐あるものにした。運動会は秋晴れの青空の下で、万国旗が風に靡へつてゐる校庭で行はれた。いくら走つてもほかの者はテープを切つてゐるのに私だけが走つてゐる、随分切なくなつた。エクランは暗い部屋で私を誘つた兄はこの愉しみを知つてゐて、幻燈機械を持つてゐた。東京に勤めてからは私を浅草に案内して水族館を見せてくれた。地球儀を買つてくれたのも兄だつた。今思へば愉しい明るい日だつた日が、その頃は何かとても苦しく感じられた。その苦しみの原因や感じの強さは今思ひ出せない。何か私をひどく圧迫するものがあつたと云ふ事は事実である。（未完）

唐詩の草木

田中克己

教師にとつてただ一つの恩恵である永い夏休みは、私の誕生日の八月三十一日が過ぎるとすぐ終りである。今年はその第四十五回目を迎へると、とりわけ早く始業となる申し合せで、ぶう〳〵いひながら出勤した。夏休みはもともと遊びでもなければ、休暇でもなくふだんの生活に追はれ〳〵してゐる我々にとつて、唯一の勉強できる期間なのである。それではその勉強の成果は、と反問されると、恥かしいことだが、今年もだめだつた。

ただ足に出来てゐた魚の目といふのを、何年ぶりかに大東国手にとつてもらひ、その癒着するまでの間、いや応なしに家にしばりつけられたので、手もとの本をやたらにひき出して読み直した。唐詩も、李白、杜甫、岑参李長吉、白楽天と引つぱり出して、ひらひ読みすると同時に、カードをとつて見た。この五人の詩にうたはれた植物の種類と数も、あらましはこのカードのおかげでわかるので、それについて話して見たくなる。ちよつと聞かせた福地君にうまくおだてられて、この文章を書くことになつたので、もとより全唐詩数万首を見てのことではない。

回数からいふと、この五人から、最もよくうたはれてゐるのは、竹、松、柳、蓮、桃、桂、蘭、苔の順序である。竹はなるほど林語堂の随筆に、その利用の範囲が広く、中国人の日常から欠くことができないとあつたと思ひ出させる。圧倒的に多数で、王摩詰の画なども聯想させる。杜詩に一一八回、白楽天に二八五回見えるのを主として、五人で五一七回である。次席の松は李白の一一八、白楽天の一八五、杜甫の七〇、岑参二六、李長吉の一一、合せて四一〇回、割合平均のとれたうたはれ方をしてゐる。

柳は李白三二、杜甫四六、岑参三三、白楽天一四四、李長吉三四、合せて二八九回。なかで岑参、李長吉が現存作数に比して、わりあひ多数である。岑参は塞外詩人として特色ある詩を多く作つたが、内地の城邑をゆくと、至るところで柳を愛しうたつてゐるし、李長吉はその短かつた一生が、この木のなよ

なよした枝ぶりを愛させたのかと、いまはくはしく論じないが思ひつきをしるしておく。つひでながら、詩では楊柳と用ひられること多く、この際、シダレヤナギ（Salix babylonica L）をカハヤナギ（Salix gracilistyla Miq.）とあはせて称してゐるのか、垂楊ともあてられるシダレ柳のみを指してゐるのか、私にはわからない場合が多い。ともあれ楊の字も五人の詩には八二回出て来るが、岑参、李長吉はこちらの方はほとんどうたはず、それぞれ三ヶ所、二ヶ所に見えるのみである。杜甫もカハヤナギの方はきらひと見えて、ただ九回だけその作品にうたふにすぎない。

蓮はまた荷、芙蓉、菡萏と表はされる。韻の関係で、思ひ〳〵に用ひるのであらうが、蓮は一一六回、荷は八八回、芙蓉は五六回、菡萏は九回で、計二六九回。芙蓉の称は李長吉が好んで一二回つかひ、菡萏は杜甫が一ヶ所で用ひたほかはみな白詩にあらはれる。

桃は二一〇回のうち、李白が七六回、白楽天が八一回と、大部分二人で占められる。とりわけ李白の現存作品は白詩三千八百四十首（趙翼の計算による）の数分の一なのであるから、李白の桃花を愛することは、はなはだしいといへよう。

桂以下は回数がずつと下る。桂が一二二、蘭が一一一、苔が一〇〇である。ただし桂の中には月中の桂など想像上のものも出て来てやはり李白がよくうたひ、李長吉も好んでうたつてゐる。蘭も匂ひのいい草といふので、全く同じことがいへる。これに対し、苔はものさびた感じ、荒れた感じをあらはすゆゑ、杜甫の専門かと思ふと、さうでもなく杜甫は一六回、李白は二七回と、李白の方がよくうたふ。

これら唐の巨匠の好んで咏じた草木は、日本の文学にはどう現はれてゐるだらうか。李白、杜甫、岑参とほぼ同じ時代に生れた萬葉集の草木に関しては、「萬葉集大成八」民俗篇（昭和二八、平凡社）に小清水卓二、松田修両氏の研究が出てゐて、ハギ一三七、梅一一七、松七一、藻六九、橘六六、ヌバタマ六二の順で表はれる由である。両者に共通してゐるのは松だけだが、言語からいつても輸入植物にちがひないと思はれるウメが、萬葉びとにかくも愛されたことは、この木が最も中国的だと考へられたからではなからうか。しかるに李白ら五人の詩に梅の表はされることは李白一三、杜甫三一、岑参三、李長吉四、白楽天四五、計九六ヶ所。杜甫が好んだほかは、あまり顕著な数字を見せてゐない。次の平安朝となると、白詩が盛んによまれるが、彼は奈良朝も終りの光仁天皇宝亀三年（七七二年）の生れで、わが平安朝の梅を好む人々からその句を引かれたが、これらの人々は、杜甫の白楽天以上に梅花ごのみであつたことは知らなかつたやうである。以上序論としてこのあとしばらく、李白らの詩に表はれた草木について、書きたいと思ふ。少年の私は植物学専攻を志してゐたのである。

大阪の詩人

西垣脩

ことし五月、わたしは名古屋に用ができたついでに足をのばして久しく訪ねずにいた大阪の土をふんだ。両親兄弟の健在ぶりをしたしく見たうえ、わずか二日間の滞在であつたにかかわらず、三人のなつかしい詩人にお会いするチャンスにめぐまれた。おかげで大阪訪問の収穫は予想をこえたのである。——その感謝と印象を刻印しておくために、この埒もない一文をかこうと思う。あふれる敬意と親情のささやかな吐露として、どうか大目に見てください。

芭蕉の句に「秋十とせ却つて江戸をさす故郷」というのがある。「野ざらし紀行」のはじめにでている。これは唐の詩人賈島の「渡桑乾」と題する詩、「幷州に客舎して已に十霜、帰心日夜咸陽を憶ふ、端無くも更に桑乾の水を渡り、却つて幷州を望めば是れ故郷」というのをふまえた句で、思想の骨があらわなだけに熟していない作品にちがいないが、こんどの帰郷でその実感のほどがよくわかる気がした。東京に住みついて十年にみたないわたしにとって、すでに大阪はたいへん違いところになってしまった。特有のしろい土のせいでぱあっと明るい街路を旅鞄をさげて歩いていると、西も東もわからないような心もとなさなのである。

その心もとなさと急にきた時間の余裕感が家にたどりついてしずかな母とむきあっているうちに、田中克己さん訪問を思いたたせたのであった。田中さんの勤めておられる学校は家のすぐちかくにある。

田中さんの研究室はあたらしい校舎の一角に小ざっぱりとしつらえてあった。いかにもあかるく清潔であった。ちょうど学生たちの会合に出ておられるとかで、愛想のいゝ助手の少女がひとりいるきりだったが、待つほどもなく坐をはずして戻ってこられた。まるで鹿のようにかるい快活な足どりであった。突然のこととて何から話してよいやらわからずとりとめもない二言三言をかわしたが、田中さんは日にやけていかにも健康そうであった。すこしふとられたように思った。

四年ほど前、修学旅行について上京されたとき宿舎へ面会にいったことがある。そのときは心身の疲労のせいか、やつれてみえた。日光で紅葉を見たら興奮してむしょうに詩がかきたくなり、かきだしたらきりがない、いまだにその興奮がつづいているんですよ、といわれた。充電状態の持続が蒼白の面持によみとられ、それがびりびりときた。一種の羨望と切なさでそれを受けとったことを、いまでもありありとおぼえている。

そのときの田中さんとはまたちがった、すこやかさと安らかさが感じられる。わたしがそれを言うと、このごろ葡萄酒の晩酌をはじめましてん、毎日うちへかえるのがたのしみです、といわれた。それから李白のはなしなどへ転じていった。

やがて、田中さんは引出しから原稿用紙をとりだして、ここですぐ詩をかいてくださいといいだされた。わたしは弱って固くなり、はい、はい、というほかなかった。美学の植田壽蔵博士はむかしのお弟子にあうと、きみはいま何を勉強しているのですか、とのっけからあびせられるのをつねとしているよしだが、いますぐここで感想をうたいなさいという田中さんのきびしさもそれである。わたしはその当惑をいまでも忘れない。これはたいへん勉強になった。なるほど考えてみると、行住坐臥いつでも詩人であるのなら、その場でうたえないはずはなかろうからである。そして詩人というものは本来そのようなものでなければならないのであろう。

坐をしばらくはずされた田中さんは、きょうはちょうど「果樹園」の編輯会議の日だから、いっしょに行ってみんなに会ってください、電話でうちあわせをしてきたから、といわれた。その時間までお茶でもということで学校をでた。しばしば降りはじめた道を傘をさしてあるいた。林芙美子の小説「めし」にもでてくるこの道は、わたしにもなつかしい道である。じつは、わたしはこの帝塚山学院の小学部にかよい、戦時中ここの高等部の教師として勤務したからである。しかし、かよいつめたこの道にも年月の変貌によるよそよそしさが感じられなくもなかった。

高野線の帝塚山駅で電車を待ちながら、入院前の伊東静雄先生に最後にお会いしたのがここであったことを思いだした。伊東先生はものを言うことさえうとましいほど疲れておられた。「反響以後」の「夜の停留所にて」という作品の停留所はきっとこの場所だった

のだろう。音楽室の窓あかりをこのくらがりから見上げながら「あゝ無邪気な浄福よ」とつぶやかれたとき、どんなにふかい疲労感が先生をおそっていたことであろうか。そんなことを默ってわたしは考えていた。電車の窓から天神の森の方向をみて、そのころの伊東先生のはなしをすこししした。

難波の雑踏をあるいているとき、わたしはだんだんわたしの大阪をとり戻していた。それは田中さんについて歩いているという実感からくるものであったが、同時にこれはふしぎな勝手ちがいの感慨をもさそっていた。わたしには東京の阿佐ヶ谷の駅前通りをあるいておられる田中さんが、いちばん田中さんらしい気がするからである。学生時分、阿佐ヶ谷のお宅を訪問したことが何度かある。そのころの記憶がいちばん鮮明なのだ。その田中さんと大阪の盛り場をあるいている。田中さんもほとんど変っておられず、まして自分はむかしのままなのに、あのころまだ幼なかった坊っちゃんがもう大学生だそうな。そんな考えごとをしていると、タクシイにぶっかりそうになった。ここで死んでもよろしいな、と田中さんは笑っていわれた。なるほど、そういえばお互いいくつもの死の危機をくぐってきているのにちがいなかった。

案内されたおこのみやき屋のマダムはわたしの教え子であった。おこのみやきというものをよく知らないが、たしかに大阪らしい風情があって、東京ではあまりなさそうな味がした。ビールの酔いがまわると田中さんは口笛をふかれた。モーツアルトかなんかであったが、それがいかにもノヴァリスの「青い花」の訳者にふさわしかった。わたしは酒をのんで口笛をたのしむという人をあまり知らない

そこへかつての同僚のK君が卒業生をふたりつれて到着した。落ちあり約束がしてあったらしい。田中さんは編輯同人の人々をここへつれてくるといって立たれた。わたしはことで編輯はできないし、こちらから伺うのがすじみちだからという理由でそれをとめた。そこで、それではK君に案内してもらってあとから会場へきてください、といって出てゆかれた。思えばそれがいけなかった。K君はそこへ急ごうとするわたしを、案内するといってほかへつれていった。歓待のつもりの道草であったと思うが、結局約束の時間に一時間ほどおくれて会場へかけつけてみると、もういましがた帰られたとのことであった。どうにも仕方なく、K君とわかれて家へいそいだ。家では両親や顔をそろえてくれた兄弟たちがすっかり待ちくたびれていた。（未完）

編輯後記

九月一日編輯打合会を開いた。田中、福地両氏の他に池沢茂氏も来会した。日頃口が重い池沢氏が珍らしく雄辯でうれしかった。同人雑誌の醜態は内輪ぼめに極まると彼は警告した。内輪を書く場合は新發見がある時に限るとの説である。至言なので編輯の志にしたい。果樹園は血縁關係の由だから、血縁としての面はゆさを看板とすべきだらう然し徒黨よりはましの筈である。チエーホフの言葉に、愛情、友情、尊敬も憎悪ほどには人間を団結させない……とあったが、この憎悪の団結が徒黨なのである。しかも今日のそれには、憎悪の他に処世も加味されてゐる。（O）

夏の仕事の一つとして勇氣をふるつて、昭和二十一年以来十年間の私の詩をあつめて見た。それでも百篇ほどあつて、そのうち五十篇をふらび出すと、ちやうどてごろな本になる。今から印刷にまはして一ケ月ぐらゐで出來上るのではないかと思ふ。題は「悲歌」。なにを悲しんでゐるかよんで下さつたらと思ふ。「果樹園叢書」といふのを考へてゐるので、夫子よりはじめることとして、その第一冊の名をも冠する。一五〇頁で、送料とも一五〇円位になるかと思ふ。あらかじめ申しこんでいただければありがたい。以上後記の欄をかりて広告する。（T）

果樹園　第九号（毎月一回一日発行）
昭和三十一年十月一日発行
布施市西堤町六〇七
編輯兼発行人　田中克己
大阪市東住吉区桑津町五丁目八
印刷所　元市印刷株式会社
布施市西堤町六〇七田中克己方
発行所　果樹園発行所
定価　三十円

果樹園

第十号

詩歌特輯号

新詩作法　田中克己
薪の明り　伊東静雄
山河　西垣脩
卵　石口敏郎
死人がうたつた　林富士馬
葉　芳野清
夜の風　池澤茂
崖（ツェーラン）　たかはししげおみ訳
舊詩帖から　森亮
秋の日に　服部三樹子
秋と天秤　浅野晃
銀紙について　齋田昭吉
献辞　山根忠雄
とむらひ歌　福地邦樹
波　岩崎昭彌
ここにも青目のタローが　小高根二郎
秋の傾斜　森房子
大阪の詩人　西垣脩
田中克己詩集「悲歌」　福地邦樹
編輯後記（O・T・）

新詩作法

田中克己

もうそろ〳〵乾燥無味な調子にあきて来た
ちと本色の悪魔でいつてやるかな
詩作の要旨は造作もないことだよ
君はまづ社会学を修めるのだ
そして人類は一定の方向に
進んでゐることを信じるのだ
いくら君が一生けんめいにやらうとも
それは駄目だ　なるやうにしかならない
そこで旨く機会を掴へるのが
それが本当の男といふものだ
君は体格も良く男つぷりもよい
自信もたつぷりありさうだ
まづ仲間をこさへることだ
一緒に酒を飲むんだね
コーヒーは止したまへ　眠れなくなるぜ
なに勘定は割勘にするのだ
君がスッカラカンになれば
誰も飲ましてくれなくなる
それでは元詩人の称号だけで
世間の人から馬鹿にされるぜ
まづ女をつかまへるのだね
女はすぐに有名になれる
君は有名な女の愛人、元愛人、あるひは
未来の愛人の称号をかち得るのだ
なんか他の称号もあつた方がいいね
大学の講師とか労組の書記長とか
詩だけが世界でないやうに見せるのだ
——詩だけが世界なら飢死してしまふ
さて詩を作るとなれば
他人様の作をさまざまにいじるのだ
エリオットやブルーストやマヤコフスキー
なるべく新しい奇くの奴がいい
原語？　語学なぞいらないよ
訳はさがせばどこかにある
初対面のやつをいじくつてやる
女の気をひくのと同じ要領だ
なるべく名詞どめがいい
出来上つたらもう一度ためつすがめつ
行をすつかりいれかへる
五行目が八行目に来るやうにする
あとは仲間の賞讃だ
わからないつまらないとはいはせるな
割勘の酒がこのころ利いて来る
ほめたやつはちよつぴりほめ返せ
悪口いつたやつはあくまでにくみ
何かの機会に徹底的にやつつけろ
熱心らしいずるさうな眼附も忘れるな
眼鏡なぞかけてゐちや疑はれるぞ。

（鷗外訳「ファウスト」の一節にならふ）

薪の明り

伊東静雄

冬になるとよく思い出す詩がある。
誰の作か忘れたが、「捨てられた下女」と題するドイツの詩である。
寒い冬の朝、人も家畜もまだぐつすり睡つているまつ暗な時刻に、はやひとり起出て、かまどの前にうずくまつて、その顔を薪の火に照らされながらかすかにひとり言をいゝ、涙を流す、
それは男に捨てられた下女の悲しみをあわれんだ詩である。
子供の時三里はなれた町の中學校に通學していた私もそういう時刻にふと目ざめて、御飯をたいている母や姉の姿を、かまどの明りの中に度々見た。
そんな時、「もうしばらく寝ていなさい。」と彼らは言つてくれた。
今私は、田舎に罹災疎開したまゝ、まだ都會に歸れずにいるが、曾ての母や姉の代りをしてくれるのは、妻だ。
暗い冬の朝、かまどの前、まきの火の明りの中にうずくまる女の姿ほど、あわれなものはない。

（昭和二十三年十一月号「家庭と料理」）

山河

西垣脩

えぐられた山肌にむいて
枝多く垂れた木々が
ぬれている
四囲紅葉し
実はほとんど取り尽された
一年の三分の一は雪
その雪に埋もれて
古屋根の下
黒光りする板の間に
コトンと坐して生きる
墓石のあわいに
頸のべて佇ち
早い雲を見ている人々
翔べぬ鳥
川は澄んだ帯となり
聚落を縫い
いま黄金（きん）の絨緞を
明るくひろげ
その野面を
どこまでも伸びゆく河
ストイックな山国の河。

卵

石口敏郎

卵が好きだといふ
太陽にかざすと
卵の中には
静かな街燈が灯つてゐる
卵焼には
遠い母の
乳房の感覚がある
噛みしめて
他愛もなく崩れてしまふのだが
呑み込んだ味に
幼い遠足の日の想出がある

辨當に飾られた
ゆで卵の明確さで人を愛さう
白い悲哀の曲線は
舌の上に
ガラスの如く割れ
柔らかい別離がある

卵が好きだといふ
卵は
今でも薄雪のやうに
私の机の上に
白い影を写してゐる

雪

風景を白く塗り潰してゆくのがかすかに聽える　無心にクレヨンを使ふ小學生のやうに　大空がその白い筆を運んでゐるのだ　寒いので小鳥がしやがんでゐる　すべてのものを塗り潰してゆく暴力の美しさ　小さい民家はしつかりと支へてゐる　窓に乾かした洗濯物が修繕してあるので　腕をひろげて何かを抱きしめようとしてゐるので　人々の顔ひは雪よりも白く潔められてゐるのがよくわかる

死人がうたつた

林　富士馬

息子よ　お前も早くこつちにおいで
とにかく　こゝはしづかで
そして久し振りにゆつくり出來るよ
木の枝にとまつて
小鳥が唄を歌つてゐる
春がやつて來たのさ
片隅からは　賑やかに
お前達の笑ひ聲も聞えてくるやうだ

反　歌

毎日毎日　誰れもが　否応なく
出發しなければならぬ

まだ肌寒い風のなかに
チューリップはその盃を捧げなければならぬし

子供達は　親から飛び立たねばならぬ
そして私は　お母さん！
あなたの骨を壺に収めた。

葉

芳野　清

髪ふるふ乙女さながら
茂みは風に身悶える
その度に葉裏は白くちらちらと
孤独な心の裏側はあらはになる

あゝ、私にもそんな時がある
打ち明けぬ愛に疲れて
耐へ得ぬ意志の葉裏に
否定と絶望の葉脈が烈しい陽にさらされる

ふと　触れ合つた肌の冷たさ、
秘密めいた生毛のさゝやき
それは忘れ易い夏にたはむれた
愛しみの記録かと、

結んでやつた襟の細いリボンの影に
はやもひそんでゐた愛の敗北
疲れはてた夕にさまよふは
うすれゆく日のうつろひか、

夜の風

池澤　茂

地震のすさまじい無気味さはない。火事の無残な災害もない。
雨戸をゆさぶっているだけなのだ。
ひゅうと夜をさいて、
木立をざわ〳〵鳴らしているだけなのだ。
そして目をつぶり、耳をふさいでも、
地球に住む人間には安全な場所はどこにも無い。さびしい孤独だけが本當なのだ。
さわがしく、ひそ〳〵と、もみこむように、さゝやきかける。
舌打ちして追いはらっても、なにか、あやしい恐ろしいものが、
目に見えない空から、木立から、ぬっと出てくるのだ。
冷たい墓のなかへ引きこむぞ。暗い空のかなたへ漂流させるぞ。
そいつは刺すように目をひからせて、のぞきこみながら
雨戸をがた〳〵たゝくのだ。

崖

パウル・ツェーラン

ぼくのかたわらで　生きているおまえは
夜の頬のくぼみのなかの
ぼくとおなじ　ひとつの石だ

戀人よ　ぼくたち　石くれが
溪から溪へと　やすみなく
ころがりゆく　おお　この傾斜
ころがるたびにまるくなって　ぼくたちは
だんだん似かよってきたり
まるきり別々なものになったりする

この傾斜をぼくたちのように　さまよい
そして時おり　びっくりしながら
ぼくたちをおなじようにみつめている
おお　この陶酔したひとみ

（たかはし　しげおみ訳）

註　ツェーラン　一九二〇年生　現在パリに住んでいる、孤独なドイツ詩人

舊詩帖から

森　亮

歸航

——隱岐旅行を終へて——

四つの島七つに見えて
淡き濃きそのたたずまひ
海原はみづうみなして
わが船の水脈ひとすぢの
つなぐともなき隱岐の別れか

註　隱岐島は島前（だうぜん）三島、島後（だうご）一島より成る。

小園好日

一

庭に似つかぬ大松の
うへにぴひょろろ鳶の聲
あふぐ空よりふと落ちる
しづくは昨夜の雨のもの

二

小風吹き過ぎ吹きくぐる
これは青木の畫下がり
吹かれながらもかたくなや
とがる葉末に赤蜻蛉

三

木草の庭に夏逝いて
芒のときの來むかへば
若さにも似ぬ謙讓の
赤き穗の垂れふさの艶

蟻

硬きときはの灌木に
新芽のびゐるかみな月
冬のいそぎに疲れてか
葉にうづくまる蟻一つ

秋の日に

服部　三樹子

みほとけに百鬼いどめるのぞき繪を見つらむ人に靡かじと思ふ
目をとぢてたぐひもあらず彼岸花くれなゐ濃きと見しは幾秋
ときにふと隣にゐますごと思ふ夕べの街をあかくそめつつ
一基の黒き位牌となりてます月光包球師月よみのぼる
染物を洗ふ水ゆく橋の上けふはむらさきの水流れゆく
黄金ふす稻穗の風にきらめきてゆきし秋より月日流れぬ
ふみつけて出合がしらに殺したる蜥蜴と我と夏の陽の下
黒蜻蛉もののけはひに草葉より草葉にうつり我が先をゆく
奈落ゆく我のこころを葉末にて桃色ゆるるコスモスの花
甘き夢つくることなき人と知り負けし白旗さらさらかかぐ
夢さめて夢のつづきにゐしならむ時の間過ぎて雨音のせし
我が臥床つつみて夜の雨降ると知ればふたたび寢むと思ひき
夜の道の暗きをゆけばゆくままに一つ塒に歸るごと思ふ
常処女胸のかたへに住めるとて夕べ小窓に蜘蛛の織る糸
我が胸に百鬼遊ぶを襟かきて乳もあらはにて見せむとぞ思ふ
はつきりと彼の日につづく秋の日の陽差の中と思ふ石ぶみ
念佛寺西院の河原の石の群きのふもけふも美しきかな
摘みゆきし野菊の花の一もとの掌に残るごと墓原に來し
念佛寺石となりける人々の遠きむかしに空にゆきけむ
なまなましくこの世經にけむ幾百の跫音もなし西院の石群
さやさやと風になびきて重々とまだ見ぬ人は稻の鳴る音
甘きことば語りつくして黄金ふす稻田の波をゆく日なりけり
梅干の壺のうしろになきゐし虫氣のつけば晝も折々なける

秋と天秤

浅野　晃

私はいつてみたこともないが
いくたりかの友人は招待されたことがある
現代は現代の様式を有つと
拡声器はやかましく叫びつづけてゐる
さうした主張の毒は
権力者の陶酔から發して彼等自身を蝕むのだ
その世界平和の宮殿には
壮麗な水晶の大廣間もある
閨房に似た密室もある
黄金の天秤に
ダイヤをちりばめた目盛
二枚の皿に国々のえらい人の手が
破壊のための新發明を積んでゆく
皿はそのつど上下し
あやふいところで均衡が回復される
しづかな日ざしは時に窓掛をもれ
黄金とダイヤをかがやかせた
秋は脱出の時

少年の日の山河への歸郷の時
村では柿がみのり
松茸のにほひが風にのつてくる
昔なじみの家父長めいた大樹の根方の
夢みがちな日向に
のびのびと手も足ものばして
父や母や姉や兄と
収穫のよろこびを祝ひあふ時
祭の時
大蛇退治の神楽の時
笛や太鼓のにぎやかなはやしが
夜の更けるまできこえ
橋は黒い影となり
むかふで川は燈火を流し
私は眠り
夢はめざめる

宮殿前の廣場では
デモ隊の旗がなびいた
喚聲が入り乱れた
権力者たちはバルコンにあらはれて手をふつた
アジトから指令がとんだ
黄金の秤を奪ひ取れ破り棄てろと
群集はひしめき

鉄製の頑丈な秤が
すでにしてかつぎこまれ
それがいつのまにか黄金となりダイヤと変る
時代の魔神のふしぎな力に私は仰天した
戞々といふ馬蹄の音
粛々と進んでくる足なみの地ひびき
みな新調の制服に身をかため
大股で歩いてくる
そして勇ましいラッパの音が
空間に消えてゆく時

大きな天の秤は
時空の深淵にかかり
難破した船のやうに傾いてゐる
いそぎ引き返して
積荷を片よせるべき時だ
魂の十分な重みを
菩提樹の下に置くべき時だ
夜明けの光が彼の眉間を照らしてから
遊星は遠日点にあつていちばん美しく輝く
あゝあの聲が又してもきこえる
チャンナよカンタカを曳け——
闇のなかに三重の門がひらかれると
人は馬背にまたがり

そこへと遁走する
いまからでもまだ遅すぎなければよいが
カンタカはいまゐない　しかし
いまもヘジラはある

秋は遁走の時
牢獄からの脱出の時
銀杏の葉が魚のやうにむらがつて散つてゆく
大地の黄金の時
これらおびただしい天の果實を
まづしい二つの手にうける時
忘却の彼方に沈んでゐた星が
つぎつぎ光芒を放ちはじめる時
あそこに天の秤が見える
あれは素足の人間だ
私はあしたの朝刊をはこぶトラックの上から
銀河めがけてとび立つた
秋は人間の時
斑鳩の時
夢殿の時
対面の時
一碗の濃い乳の時。

銀紙について

齋田昭吉

手をふれると
まるで　月夜の浜辺で波が砂に　たはむれてゐるかのや
うに
さらさら　澄んだ音をたてる
　まあたらしい銀色の紙
それを　ゆつくり　たたんだり　のばしたり　して
わたしは小さいコップをつくる
硝子の粒をちりばめたやうな
光を反射する　そのコップに
わたしは　そつと　いっぱいの水を注ぎかけてみる
ふしぎに　ゆらぎもしない小さいコップに
みとれてゐるわたしは
　子供のやうに他愛ない心さながら
一片の童話をつくり上げた時のやうに
　新鮮な感動に溢れてゐる

献辞

山根忠雄

詩作十年——
それは別に
母のためではなかつたのだが
それは飽くまでも
自分自身のためではあつたのだが
最初の詩集
「磁石」が完成したとき
日頃忘れてゐた
母なる星辰が
燦然と夜空に光つて
——ふるさとの母に捧ぐ
と息子は恭しく
扉の献辞を書いた

とむらひ歌

福地邦樹

死んだおまへは
朝　まぶしい光となつて
私を起しにやつて來る
庭先にふと眼にする花などから
私はおまへに見守られてゐるのを
感ずることがある
また　夕暮おまへは
そしらぬ風となり
風鈴をチチリと鳴らす
私は　はつとして
おまへが告げに來てゐることを知るのだ
死んだおまへについて
おまへの霊を私が信じてゐるとすれば
それは　今になつてもおまへが
私のことで
おせつかいをやきに來るからなのだ

秋陽

秋の陽は
大空で惑はされずに降りてくるので
すべてのものの内側まで
透けて見せる力がある
それで木の葉は黄色い樹液が見え
水の魚のやさしさが見え
熟れた果實にはたくはへられた時が見え
ひとの眼には記憶のしづもりが見える

波

岩崎昭彌

みつめてゐると波間に風景が写る
ニュース映画で見たジャングル地帯だ
部隊は炎熱と闘ひつゝ行軍する
見なれぬ獣達があはたゞしく逃惑ふ

朝日が鈴鹿山脈を昇る頃には
母が無事を願つて合掌する
今日も出札口で忙しい彼女に
戀人が死んだらどうするかと言つて
隣で友がからかつてゐる

ジャングル内で白兵戦が展開される
門出の誓が脳裏をはなれない

塹壕を蹴つて最初に突撃だ！
だが　硝煙が消去つてしまふと
神になつてゐる

部隊が凱旋するのに俺が還らない
朝夕決つて母が駅頭に立つ
彼女はある日わが家を訪ね
思はず泣崩れるだらう　そして——

海は太古のまゝの蒼さでうねつてゐる
仰げば白い雲が静かに天を流れてゐる

——インパール——

こゝにも青目のタローが

小高根　二郎

石橋に引越してきたが、
こゝにも、青目のタローが、潜(ひそ)んでゐる

土地の名を象徴する、陸橋の
その橋脚の、稜(かど)ッこから、
彼は青い片目で、まじろぎもせず、向ふを窺(うかが)つてゐる。

だぶだぶの、アロハしやつ。
背筋には、掠(かす)れた臙脂の、龍の繪模様……
つい、眼と鼻の先、伊丹基地の落胤なのだ。
　これこそ、まさしく、龍落子(たつのおとしご)。

彼が窺ふ、橋袂では、
慎重に緊迫した圓陣が、起き伏ししながら、じりじり縮
　まつてゐる。
斜光をよぎつた蛇？　と、見たのは
投げられた、捕縄だつた。

コン、チク、ショウ

Save the King

タローの破(や)れ靴は、救援のため、地を蹴つた。
上舵のダグラスの、銀を、浮かべた夕空に
おつとり刀の、棒(ぼ)ッ切れを、振りかざし振りかざし……

秋の傾斜

森　房子

秋の虫地底に鳴けり血縁も数ふるほどになりし貝爪
丈低き見知らぬ犬が曇天に渋面と思ふ相してゆきぬ
いつよりか彈み失ひ忘られて眠れる弦を海に捨てにゆく
浮ぶことまたある日など待ちゐしがわれの聖女も何時か死にたり
汚れなき會話ばかりを好みゐて夫に手渡す白きハンケチ
はてしなく學問をきはめゆく眼にてキラキラと虹をこぼし落せり
雨のサルビア宝石となれる庭ありてやさしき語韻友のひびかす
子より幼く扱はれてゐて薄弱のわが翳を見る風の中なり
水の上歩みゐにけり傍らに血の臭ひする愛を見ながら
血なまぐさき愛からませて命脈のつゞく限りをつゞかしめつゝ
れんめんと生殖つゞく地球にてわれを最後に絶ゆる血族
勞働歌の合唱きこえ盛り上る午後をひよわく散る花体あり
匂ひたつ花遠のけて眠るにも皺多き頭脳夢見勝ちにて
魚焼きも壊れて四散せるまゝに礫となりし厨に苦し
演技たくみにある手の内と知りながら欺されてゐる手品師の前
白蛾ひとつ廊に死にゐて素足冷え何時までも試されてゐるわれらしき
ガラス戸にすりよりて一匹のかげろふが吐息より細きありかしめしぬ
眉間めがけ蹴上げゆきたる足ありて無垢の微笑の殺され果てぬ
細き鼻梁歯ぎしりえてゐたればひるむなくしのぎ削れと燃えて言ひたり
錯覚の椅子に坐ればまはりみなもろき氣泡のたのみがたくて

大阪の詩人（二）

西垣　脩

その晩わたしはくやしさでほとんど眠れなかった。大げさなようだが本当である。あさ学校へ電話をすると、きょうは出講されぬとのこと。するうち、田中さんのほうから電話があって、奈良女子大の講義にゆくが原稿をかいておくようにとの話である。遠距離電話のようですこしききとりにくかった。

わたしは早速小高根二郎さんの会社へ電話をかけた。渋くてよく透る声で小高根さんは応待され、是非お目にかかりたいというわたしの希望を快諾して、時間と場所をてきぱきと指定された。受話器をおいてしばらく、わたしは会社のデスクに落ちついて事務処理をとられる実業人の小高根さんのイメージと、詩人小高根二郎のイメージを胸にかさねあわせて、一種の感嘆をあじわった。

指定された場所はきのうの会場とおなじであったからすぐわかった。正一時にはいってゆくと、すでに小高根さんはきておられた。ゆったりした物腰で挨拶をされた。

はじめて小高根さんにお会いしてからもう二十年ちかくたつ。わたしは伊東先生につれ

られた白線帽であったが、小高根さんも若かった。色白で背が高く、痩身を黒い服につつんでおられた。黒い鍔広帽が詩人の鋭敏をきわだたせていた。それから「郷愁」の出版記念会が新宿の紀之国屋の喫茶室であったときひさしぶりで見た小高根さんは柔和で温厚な和服すがたの中年紳士であった。あの夜の小高根さんのゆきとどいた応対ぶりが東京のわたしたちのあいだで、しばらく話題になったことがある。上方の伝統のにじみでたこわさというような意味で。

ゆうべここの受付の女の子にきいたとき、ああ、あのお年を召した方方ですか、とこたえたが、当然のことながら、わたしにはちょっとこそばゆい感じがあった。樹幹のように堂々としてこられた風貌にむかいあっていると、小高根さんは年月とともに変ってみえる人だとうなずかせられる。しかも樹木のように自然なかわりざまだ。もちろんこれは風貌に関することにすぎないけれども。

そこへ微笑をうかべてはいってきた人がある。齋田昭吉君であった。思いがけないことでうれしかったが、きいてみると小高根さんが連絡をしておいてくださったよしであった齋田君は中学の後輩なので君よばわりをするのだが、詩のほうではむしろ先輩である。わたしが東京に住みついて詩のあつまりに顔をだすようになったころ、齋田君はすでに一家の風格を示していて、いろいろ世話になった。伊東先生の病床訪問を最後にはたさせてくれたのもこの人である。大阪へもどってから「舞踏」という詩冊子を出していて、それにのった「水晶観音」という作品は、口述筆記ながら伊東静雄最後の作品であろう。人なつこい、それでいて芯のつよい齋田君の努力がやらせた仕事であった。

わたしたちは「果樹園」のことや詩のはなしを気儘にはなしあったが、やはり話は小高根さんのしらべておられる「伊東静雄研究」に集中していった。わたしは小高根さんの情熱のほどに舌をまいた。しばらくして、齋田君はつとめに戻らねばならぬからといって、去っていった。ちかくの「そごう」デパートの六階にいるとのことであったが、わたしはいつも蜂のように自在にふるまう齋田君が、このときもいかにもこの人らしく、高いとこ

田中克己詩集「悲歌」

戦ひに敗れてから十一年間、僕らは文学に対してあのさまざまな苦しい体験とは無縁のものを感じてゐた。それは真の意味での戦争文学がなかつたといふ昨今の議論にも関係がある。しかし私はかねがね、戦争文学が目ざめた精神で書かれるより前にまづ敗戦の文学といふものが情的な形で出てしかるべきだと思つてゐた。だのに日本が戦ひに敗れたことはもうあまり見あたらない気がしてゐたのである。ところがさきごろ田中克己さんから戦後の詩作八十篇余をみせていたゞき、この様なつつましい仕事こそが私の考へてゐた敗戦の文学だと思へた。さういつた意味で田中さんが今度僕らのすゝめを聞き入れて、それらの作からおよそ五十篇をまとめ「悲歌」と題して出版されたことは時をえた正確な業績だと私は信ずる。こゝには「悲歌」といふ名にふさはしい思ひの数々がさりげなく述べられてある。悲しいのは決して一民族のあの無慙な事件ではなく、さうした事件を通じてのヒューマニズムの在り処だといふ事がわかる。そこに私は、歴史を誠実に体験して来られた氏の謙虚な、しかも断固とした抒情をみるのである。（布施市西堤町六〇七果樹園発行所刊定価一五〇円）（福地邦樹）

ろからわたしたちのところへ下りてきて、またふいと戻ってゆくさまを手をふるようにして見おくった。

時間がまだすこしあったので、心齋橋筋をふたりであるくことにした。わたしはそのとき、小高根さんがおよそ文学に縁のとおい大会社のデスクで、日々小高根二郎という詩人をまもりつづけておられることへの讃嘆を、ペンネームをもたずに通しておられる覚悟ということに托してしやべった。表現がいかにもまずかったので、真意がつたわるどころかかえって気をわるくさせたかもしれない。ペンネームをもたねば困るのはむしろ教師のほうでしょう、とだけ小高根さんはいわれた。わたしは自分の口がもどかしかった。

戎橋のたもとにあるビヤホールに入った。ふるいビヤホールであるが、わたしはまだ一度も入ったことがなかった。川風のくるバルコニイにすわって、ここは伊東さんがすきでよく來たところですよ、と小高根さんは感慨ぶかげにいわれた。看板のうしろになっているので日が射さなかったが、おそらく様子はむかしもそうちがわないだろう。庶民的な気やすさとわびしさがかすかにただよっている夏の終りなら虫の声でもきこえそうな場所、しかも盛り場の中心の裏なのである。そのがらんとしたテーブルで、小高根さんは黒ビールのコップを優雅にかざされた。コップがみごとにかち合って鳴った。その時ちらりと見せられた小高根さんの中世風なそぶりは、ひどく印象的なものであった。

微醺の発したところで、わたしたちはわかれた。ではおげんきで、そう言われると小高根さんはさっさと大股に雑踏へまぎれてしまわれた。

この一文は、田中さんが原稿をかけといわれたときから草したいと思っていたものだがあわただしさのために、ついに果たさなかった。大した意味もなさそうに考えなおされたからである。たまたま「詩学」に蔵原伸二郎論をかくことになって、またこのことをかいておきたくなった。丸山薫さんの言によればコギト系の詩人といふのは伊東、田中、小高根、蔵原の四人であるが、まったく面識のない蔵原さんをかくことになったのは皮肉であった。

大阪の詩人などというものがあるわけのものではない。だが、この「大阪の詩人」ということばのなかには、わたしにとって何ともいえずなつかしい、しかも貴重なものがひそんでいる気がしてならないのである。

—一九五六・八・一四—

編輯後記

第十号は詩歌特輯号になつた。小山、上村君を除いて全同人の詩歌が集つた。全同人が詩か歌かのいづれかが書けると云ふ意味で、果樹園は確かに稀有な存在であらう。実はその稀有さを我々は唯一の誇としてゐるのである。

今度、田中克己氏が第五詩集「悲歌」を出した。重量のあることでは、戦後の詩集中、数少いもの〻一つである。但し戦後の詩歌集の運命として当然自費出版である。処女詩集「西康省」以来馴染の人士は勿論、広く未知の同好の士にもこれをすすめたい。日本人として戦後に体験した悲痛さを、改めてこの「悲歌」で味はねばならぬ時がきてゐるからである。（O）

生れてはじめて東北地方に旅行した。十和田湖畔に泊つた翌日、八甲田山が初雪をいただいてゐるのを見て、美しいと思ひ、岩木山を遠望して、なんとなしに太宰治のことを思つたりした。旅に出るとセンチメンタルになるのだな詩は作るまいと思つた。仙台でも城跡に登つて行つたが、土井晩翠、土居光知、桑原武夫などの尊敬する人々の生死はともあれ、誰もおいででない市街を見下して多少の感慨があつた。東京で汽車待ちの三時間に、石口敏郎氏と共に新しく同人に加入した林富士馬氏に電話をかけようとして失敗した。田舎者になつたものである。（T）

果樹園 第十号（毎月一回一日発行）
昭和三十一年十一月一日発行
布施市西堤町六〇七
編輯兼発行人 田中克己
大阪市東住吉区桑津町五丁目八
印刷所 元市印刷株式会社
布施市西堤町六〇七田中克己方
発行所 果樹園発行所
定価 三十円

果樹園

第十一号

書簡から見た伊東静雄 小高根二郎
中國古詩私抄 森亮
重い水槽 池澤茂
鶴 浅野晃
嵐のあと 小山正孝
引率外出 岩崎昭彌
月に招かれた男 芳野清
日々 石口敏郎
灰皿 山根忠雄
冬を迎へる日 福地邦樹
夜のうた クロロフ
牡丹 田中克己
「悲歌」読後感 壽岳文章・浅野晃・服部三樹子・森亮
編輯後記 （O・T・）

書簡から見た 伊東静雄（十）

小高根二郎

「氷雨降る日」の奈良行
左から従弟、従姉、ゆり子さん、伊東
——撮影者 安代さん——

伊東が昭和二年の晩秋に罹患した盲腸炎の時の模様は、宮本氏の小説「氷雨降る日」に精細に描写されてゐる。この十四枚の短篇は伊東の「利里生」たるゆゑんを解明する共に拙論の推理が、当らずとも遠からぬゆゑんをも併せて裏附けてくれるやうである。

登場人物中、北村君とは伊東であり、高保君は宮本氏自身であらう。YはYASUYOさんのYであり、Lは百合子さん、つまりLILYのLであらう。

……

氷雨降る日

宮本新治

道々ずつと北村君は憂鬱であつた。電車の中でも黙つて、もうすつかり暗くなつた外の一点を凝視めてゐる様で、吊皮を握つたまゝ、前にかけてゐたおぢさん達が下りてしまつて、席が空いてゐるのにも気付かない風だつた。青白い腕は、ゆるく彼のからだを支へてゐて、電車が止ると彼の体は少しゆれた。

「北村君、乗換へだよ」

「あゝ、そう」

狼狽へた様な眼で、北村君は高保君のあとに從つた。

高保君の下宿は電車を下りてからミルクホールの角を曲つて、一寸入込んだ路次の突當つた東側の家である。よく家内の人が早く寝込むので、閉め出しを心配して來た二人は、格子を洩れる明りに安心してそのまゝ二階に上つた。

取散らされた机の二三冊の本を重ねて

「まあ坐り給へ」

「あゝ」

「ゆつくりしてくれ給へ」

「あゝ、ありがとう」

何時も乍ら北村君の口数の少い言葉ではあるが、高保君には、何だか特別に北村君が煩悶してゐる様で、口のまわりの髯さへ粗く見えた。

北村君がL子さんを想つてゐるのであると云ふ事は、北村君の友達のうちで、高保君が一番よく知つてもゐたし、それに対して相当の理解さへ持つてゐた。勿論L子さんとは二人とも知り合ひの中であつたのである。

北村君とL子さんとの間が、どの程度に進行してゐ、どんな事件が起つたか、些細な事まで高保君は北村君の感激を以て語る話でよく知つてゐた。L子さんと姉さんのYさんと従弟のQさん、それに北村君の四人が一緒に奈良へ行つた話。その時北村君がL子さんと議論したとか。Yさん、L子さん、北村君と三人連れだつて築地の「幽霊」を見に行つた話。それにL子さんが近頃、妙にこだはつて北村君を警戒し始めた事について憤慨した話など、北村君は碌に吸はない煙草をつゞけさまに三本も四本も吹かし乍ら、高保君に語つた。

「そんなにすれば、誰だつておこるよ、ね君だつて、そう思はないかね」

「うむ、それあね、けど、僕が実際其場合にゐなければ、果してL子さんが君を警戒したかどうかと云ふ事は云へないね」

落着いて高保君は煙草に火をつけた。

「いや、ほんとうだ、ほんとにL子さんは僕を警戒してゐるのだ」

北村君は強く首を振つた。

「それは、恋する者の異常な神経の繊細さから来る独断だと、僕は思ふんだがね、それは君の独断だと思ふんだがね」

「いや、決して、独断ぢやないんだよ」

「いや。君が独断ぢやないときめるのさへ僕にはそれが、君のいちじるしい独断癖だと思ふがね、ね、若しL子さんが、事実、君を敬遠したとしてもだね、いゝかね、君があれだけ云つて聞かせた、L子さんが如何に他の女性にすぐれて、物事をよく理解し人の心を判つてゐてくれて品格があると云つた君の言葉や、君のL子さんに対する純情な、彼女の自由意志を少しも傷付けずに……」

「いや」

「いや聞き給へ、彼女の気持を少しも傷づけずに彼女のよかれとする所をよしとする君の持論に対してだけでも、君の独断はなすべからざるものだと思ふがね」

「いや、それはちがう、ちがう、君は知らないんだ」

こんなに云つて、夜おそくまで高保君と北村君は語りあかした事さへもあつたが、其のことがあつて二週間も経つて後、北村君は卒業を前にひかへて、彼の卒業論文である歌論の研究も進まずにゐた。

北村君の吉田の下宿に行つた高保君は煩悶のあまり、狂ひさうだと云つて、静かに火鉢の前に坐つてゐた北村君に

「今夜、僕のところに来給へ、ゆつくりL子さんのことでも話さう」

と云つて誘つたのであつた。

机の横に坐り乍ら

「どうだい、北村君、近頃L子さんのところへ行くかい、どうだいL子さんは」

高保君は、幽霊になつてめつきり顔の憔悴した友の顔を見て慰める様に云つた。

「うむ、僕は苦しくて堪らない、諦め様と思ふんだけど。もうすつかり自己闘争だけで、からだが、たほれ相だ、うん、唯、僕が今願ふのは、どうでもいゝ、L子さんが僕に対する態度を明かにしてくれて、僕の心を安定せしめてくれることだ」

北村君は大変強い否定を蒼白の顔にあらはして眼をそらせた。

「何だい、また、そんな風向かね、おゝ、お、君は又弱いんだな、僕はもつと〳〵そこを押して行かねばならないと思ふが…」

「いや、さうぢやないんだよ、L子さんは僕をうまく敬遠してゐるんだよ、いゝんだよ」

「然し……」

北村は高保君を黙らせた。

「いゝんだ、唯、L子さんが僕をこれ以上煩さずに僕に安定を與へてくれるのをのぞむだけだ」

「ほう、さうかね」

「もう僕は之以上、さゝたる一女性に僕の心を混乱せしめるのは馬鹿らしい」

ほつそりした薪束が忘れられて殘つてゐる。

中國古詩私抄

森　亮

友　垣

雪の先觸れはみぞれの雨、
それは北からの風と一緒にくる。
一瞬のときのきざみが
よき友垣をほどいてしまふ。
それといふのも死がわたしたちの足を捉へて放さないからだ。
わたしたちはこの次にいつ會へるか分つたものではない。
でも幸ひ、未だこの酒は甘くておいしい。
友よ、けふの宴を樂しまう。

荒　廢

畠で働く人はだれもゐない。
森は木を伐られ、裸にされてゐる。
あの人たちは高い地位に就いて
國の富と力とを摩りへらしてゆくのだ。
國人たちは天に向つて叫び、
神の偉大を信じてゐる。
——神さまは偉大の余り憎しみを御存じないのか。

註　二篇ともヘレン・ウオデルの詩經の自由訳に拠つた。英訳者は原詩はどちらも紀元前七八〇年頃に書かれたと断つてゐる。それは周の幽王の頃になるから「友垣」の原作は小雅の谷風（二〇一番）、「荒廢」の原作は小雅の四月（二〇四番）と一応見当をつけてみたが、どちらも英訳と餘りにも相違してゐるので断定しかねる。因みに谷風は東風で、実を言ふとウオデル訳でも「東からの風」となつてゐる。私はそれをわざと北風に變へ、またウオデル訳の「王よ」を「友よ」に變へて、この自由な英訳に輪をかけたやうな自由訳を試みた。

北村君は興奮のあまり、声もをろ〳〵になつて、云ひ捨てた。高保君はいたく興奮した様に

「もう、よさうよその話は、今夜はゆつくり寝る約束だつたな」

高保君は、北村君の彼女に対する誤解をとかうとすることが、益々北村君のたかぶりを煽り、L子さんとの間をよけいにまづくすると思つたのでなだめたのだつた。

高保君には、北村君が何故あんなに捨鉢な事を云ふかといふ事については、その事が決して北村君の本心でなくて、また少しも今後彼の彼女に対する想ひが変るものではないと云ふ事が判つてゐたので、心配はしなかつたが、何故彼をしてあゝ云はしめる様になつたかを高保君は気の毒に思つた。

× ×

十月に入つてから北村君は腹痛が動機で、盲腸炎で熊野の大学病院へ入院した。

北村君が腹痛で苦しんだ時売薬を買ひに走つたり、水を汲んだり、彼が入院するまでの事を始んど高保君一人で世話した。入院するにしても高保君がすゝめたのであつた。一夜呻き苦しんだ北村君に

「ねー君、まだ痛むかい、いけないね。あす夜が明けたらすぐ入院する事にしやう。心配しなくつてもいゝよ」

その日の夕方までに、彼の下宿から病院まで毛布を運んだり、彼の寝乍ら読みたいと云ふ歌集やその他手頃なものを四五冊もつて来たりしてやつた。

× ×

秋も終りに近付いた其頃の朝々はほんとにつめたかつた。病院の庭はすつかりうらぶれて、窓の下には黒ずんだ山茶花の葉に霜どける日暮が來た。

毎日学校の帰りに、たつた一人の附添婦にまもられてゐる北村君のベッドに訪づれる高保君だつた。

「どうだい、気分は」

「いゝよ、しかし附添婦がね、いやだよ」

同じ病室には、ほかに六名も患者がならんでゐた。北村君は一番西の窓側で、明るいところだつた。二人はいろ〳〵学校の事等にもひそ〳〵話し入つた。

北村君の容態は、はつきりしなかつた。そして彼は日に日に高保君の来るのを待つ様になつた。薄暗い電燈の灯のとゞくところ、どゝあが開くと静かに頭を動かして友を待つたのだつた。

入院後北村君は、かゝりの医者に牛乳と薬の外一切絶食を申渡された。

北村君は其頃、子供の様になつて夢中に食べ物を欲しがつた。

「北村君、すつかり東山が、斑らになつてしまつたよ」

「あゝ、そうだらう、こゝの梧桐の葉さへ一枚残らず落ちてしまつたんだからーね」

北村君は上気したやつれた顔で、その儘硝子越しに見える梧桐の枝を見やつた。高保君はL子さんを思ひ出させる様な話には絶対に触れない様にしたが、時々淋しく北村君は云つた。

「L子さんは何故、見舞に来てくれないのだらうね」

「だつて君、L子さんは今女学校の寮にゐるんぢやないかね、滅多に出られあしないんだよ、それに君も知つてゐる様にL子さんは見舞に来なくても、花束を持つて来る以上によく知つてゐてくれる女性だと云ふ事は、君には、よく判つてゐるはずぢやないかね」

「うむ然しね」

北村は何か云はうとした。

「ほんとうだよ」

「けどL子さん見た様な、僕の気持をよく察してくれる人が看てやつてくれたらなあ」

彼は静かに眼をつむつた。

それから彼の容態は一時よくなりかけたがまた悪くなつた。いよ〳〵悪いと聞いて北村君の故郷である四国の親達に電報を打つやら高保君は走り廻つた。

医者の話では、臨終はそんなに早くは来ないが、無理をしてでも血縁の人を呼んだらどうかと云ふ事だつた。

重態の折にも、北村君には附添婦や誰よりも高保君が気に入つた。

「君、枕をなほして」

北村君の声は力弱かつた。

「これで、いいかね、うん、とうだね」

と、高保君はくぼんだ枕の下に静かに綿を押し込んでやつた。

「あゝ、ありがたう」

すやすやと眠る様だつた。

「北村君、水薬だよ、ほれ七時半の」

頷いた彼の口唇に薬呑をあてがつて、薬を與へた。

カラン、カランと鳴り出すスチームの音に高保君は友の身をあはれに思つた。

× ×

まるで夢の様な数日

高保君は友の亡骸を自動車で送り出したのを覚えてゐる。最後まで北村君はL子さんを、憎まうとして憎めなかつたのだ。

四十幾日。可なり長い病院生活も彼を送つたあとの、彼のベッドのまわりの呆気なさはどうだ。新しく買つた洗面器やバケツに細々した小道具を入れてしまへば、あとには紙の塵取りと箒だけだ。

北村君は詩人だつた。そして最後までL子さんを愛しとほしたことは彼の短歌や日記を見れば判る。

三月五日　雨フル。熊野ノ遠藤サンノウチニユク。

L子サンノコトヲ思フ。人ニ要求ヲセズニトモニ喜ビナガラ自分モ高マツテ行ク生キカタガアル。

L子サンノタメニモツト勉強セネバナラヌ。

○肥の国は大和の涯所この思ひになぐさまなくて今朝も茶をすする

○この宿の葉鶏頭いよいよ赤き時にま旅にたえて友つきにけり

十月十三日　母上ヨリ書留来ル。高田ノ叔父カラ菓子箱ガトドイタガ食ベラレナイ

午後L子サンカラト山口ノ大塚カラ見舞状アリ、今日ハ大分気分ガヨイ。

高保君は附添婦をかへして、同室の患者さん達にも別れを告げ、持てるだけ風呂敷包を両手に下げて、病室を出た。廊下の水道栓はちろちろ雫してゐた。「さらば、だな、これにも」下駄を穿いた高保君は、ひとり彼の病室のある第三病棟を振返つて見た。

身に沁みて冷たい氷雨の中を、高保君は默々と病院の門を出た。—一九二八・十二・二—

……

昭和三年十二月同志社高等商業学校学友会誌第六號所載

この短篇に見る北村君のL子さんに対する苦悩は相当長期間にわたるものであらう。即ち伊東が盲腸炎を病んだ昭和二年十月から、宮本氏がこの小説を脱稿した昭和三年十二月までの間の苦悩を濃縮したものと私は見る。学生小説らしく技巧が素朴だから、それだけにまた伊東の真実が伝へられてゐるに相違ない。フイクションは伊東が死ぬことだけだらう。この宮本氏の短篇を読んだ伊東は、よく伊東の苦悩を宮本氏が汲んでくれたと感謝したとのことである。そして宮本氏がフイクションとして描いたうらぶれた病院に於る最後は、恐らくそのまゝ俺の人生の最後にならう……と、その日言明した由である。その日から二十年後、伊東はまさしく北村君の如く、うらぶれた国立大阪病院長野分院で世を過ぎたのである。まことに運命と言はねばなるまい。

それにしても、先の安代さん宛書簡でニヒリスト、バザーロフの臨終を不徹底として難じたことはなほ読者の記憶の片隅にあらうがあの感慨は、言はゞ、花束は届いたが贈り主の現はれぬことを歎く北村君の心境に似て似もつかぬことに気附くであらう。即ち、安代さん宛の心境は一種の強がりにすぎまい。実はバザーロフほどにも割り切れてはゐなかつたのである。その不徹底さを修正するために伊東は二十年後の臨終ではバザーロフの臨終とそのニヒリズムを競つたやうな形跡がある伊東は生の余裕がある間は、肉身以外の誰にも死の予告をしてゐないのである。田中克己が走せつけた時は、すでに葬式もすみ、伊東は晏如として白木の箱に鎮坐して、家族に抱かれて家に着く直前であつた。桑原武夫氏が走せつけたのはさらに遅く、すでに大阪駅頭帰郷の途につく直前であつたのである。

とまれ、この「氷雨降る日」は当時の伊東の心境を知るに貴重な一篇である。末尾の日記は、原文そのまゝでなく、自由に伊東の日記を読むことが許された宮本氏が、その文体と内容を模して書いたものだとのことである但し短歌二首は伊東の作品である。

重い水槽

池澤　茂

妻の父がたずねてきたとき、ぼくは『金魚を飼うのに、もってこいの水槽を見つけたんやけど、おもくて、びくとも動かへん。手伝うてもらえんやろか』と、たのんだ。そしてぜひ金魚を飼いたいこと、その水槽は近くのあき地にあること、持主が不明だから、うちまで持ってきても、とがめられないだろうことなど、付けくわえた。妻もそばから、とりなすように、口をそえた。

『ほお……』と義父は、ぼくを見つめ、笑顔になった。

「あきれた」とか「おかしい」とか、いうような「破顔一笑」に近い笑顔なのだ。いゝとしをして、こどもみたいに、金魚なんか飼いたがっているので、わらったのかもしれないその笑顔に、しかし、ぼくはふいに、大きな安堵をおぼえた。單に自分の頼みがきかれたらしいから、というだけではない。たしかに金魚は飼いたかったし、だから水槽も欲しかったけれど、そのこと自体には、それほど切実な関心があるはずはない。もっと広い、もっと深い、よろこびや覚悟に近い安堵だったのだ。

いったい、ぼくが神戸に住むようになったのには、ちょっと「いきさつ」がある。というのは、それまで長いあいだいっしょに暮していた大阪の父母の家からの「家出」だったからだ。さきに家を出て離縁の手続きまで取ってしまった妻のあとを追って、やがて、ぼくまでが、父母をすて、のがれるように、出てきたのだ。もっとも、ぼくのその行動には義父も、力をかした。かれは、ぼくと別れてしまった娘の、あらたな結婚をもとめる困難さに、不安でならなかったにちがいない。そのころぼくが勤めていた会社に、たずねてきて、そのまゝ、手をとるようにして、ぼくを連れだしたのだ。文字どおり「着のみ着のまま」だった。父母の家においてあるぼくの衣類や、その他のぼくの道具など、すべていらないと、義父は言った。それほど、出もどりになった娘にたいする心労が、大きかったのだろう。ぼくの父母や世間にたいして、うしろめたい意識も、あったのだろう。その反面、ふたゝび娘との結婚がだめになったら、ぼくに、いつでも父母の家に帰ってもらうようにという心づもりも、あったかもしれない。かれはかねぐゝ、その娘をぼくがほんとうに愛し、末ながく暮してゆく気があるのかどうか、第一に心配していたからだ。また、ぼくがすこし耳が遠いために、あらたに就職できてもこれまでがそうだったように、いじけたり、しくじったりして、実社会から落伍してゆくのではないかと、その点にも不安をいだいていたからだ。

しかし義父はまだ、ぼくをかなり信用していた。そして、それまでに、娘のため、神戸の山手に、こじんまりした新築の家を買っておいた。ぼくはそこへ義父に連れられてゆき妻と、あらためて、所帯を持った。ぼくはそれまで、いわゆる「自分の家」は持ったことがない。大学を出て就職してからも下宿生活それから召集されて戦地、そのあとは親の家の二階というふうで、おちついた家庭のたのしみは、ほとんど知らない。結婚してからも、家のものと妻とのあいだで、心をなやまされたことが多い。だから、妻とふたりだけで暮す家は、ぼくの所有ではなくても、いかにも「自分の家」らしかった。石垣と石の階段と応接間のついた、こじんまりした新築の家で戦後の住宅難のおりから、いっそう「新所帯」の感じがあった。

「それなら、おまえは、このまゝこの家に落ちついて、娘といっしょに、ずっと暮していってくれるのだな。もう、大阪の親の家へ、

逃げかえったりしないのだな。なんだ、そうなのか、この家で暮すのが、気にいっているのか……」「それなら、おまえはサラリーマンとして、としよるまで、ずっと長いあいだ勤めていってくれるのだな。やれ／＼、そうだったのか……」

『ほお…』とぼくを見つめた義父の笑顔に、ぼくは、こういうことばをまで、感じていたのだ。義父はさらに、妻のほうを見、ぼくを見、また妻を見、して、しきりに、にこ／＼した。よその家のむすこを無断で連れだすような無法な行動をとったけれど、その計画と決断は、結果において、まちがっていたどころか、こんなに成功しているではないかと、いかにも、うれしそうであった。しかも、そのことは、ぼくにとって、けっして不愉快はもたらさなかった。なぜなら、ぼく自身が、そのように思っていたからだ。あたらしい家に妻と暮す生活が非常に気にいっていたけれど、たとえ気にいらないにしても、もう、やりなおしはきかない。せっかく得たものをご破算にして第一歩から踏みだす、こういう人生の修正をくりかえすだけの余裕や暴勇は、ぼくの年齢や境遇には、どうみても、残されていない。それに就職も、義父が社長や重役たちに贈りものをしたりして、おなじ神戸市内の新聞社の校閲部に、ぶじに、ありついていた。耳はすこし遠くても、校正の仕事は、まがりなりになら、なんとか、やっていけないことはない。とぼしかった月給も、やがて、つゝましくすれば十分暮していけるほどに、あがっていた。

『じゃあ、いちど、見てくるかな』

義父はぼくをうながして、いそ／＼と立ちあがった。『おもいですよ。押しても、突いても、びくとも動かないんやから……』とぼくが言っても『なに、つなでくゝって、ふとい棒をとおして、前とうしろからかつげば、なんとかなるやろ。平吉、あんたも一方を持ってくれるやろな。棒の長いほうを持ったらそんなにおもくはないはずや。松子、おまえは横から、ゆれんように、さゝえとってくれもと／＼だれかがはこんできたもんや。三人でかゝって、動かんという道理はないはずや

鶴

浅野　晃

おのれ鶴とあつて身を臥せば
いたましいかな翅もいたく汚れたり
おのれ豕とあつて餌食に寄れば
わが四肢のあまりに短きがうとまるれ

また蛾の虫とあつて灯にゆけば
群小の仲間らの饒舌に耐へず
蜘蛛とあつてここに巣張れば　また
むなしき天に些のいらへなし

芦とあつて傾くは易し
難いかな思念に徹すること
ただ雑草の花とあつて
ひと知らぬ果を結ばんもよからずや

天よ　おのれに獅子の声をめぐまば
おのれまた一度はかの丘にあつて咆吼す
　べきか
笑止なり　むざと馬脚をあらはして
こだまの嘲りをうくるが落ちぞ

狐狸とあつてたぶらかす
快はすなはち快ならんも——
及かず白樺の樹とあつて雷雨を待たんに
伐られては赤々と炉に燃ゆべし

ないか。な、そうやろ」と義父は、ぼくを見つめ、妻をかえりみして、ひどく興奮し、いさみたっていた。金魚のいれものの水槽をはとぶのだけれど、もっと別の、なにか非常に重大なことを決行し成就しようとするときのような、義父のようすであった。

嵐のあと

小山正孝

彼女は何をしようとしてゐるのだらうか。七才か、八才か。少女はとゝのつた白い顔を輝やかせながら、河の上にせり出してゐる台の上を動いてゐる。その小さい姿は、こまめに、ほんたうにまめ〳〵しく身を動かしてゐる。両方の膝小僧に真白く、十字に絆創膏をはつてゐる。どこで、いつ、ころんだか知らないが、きつと、コンクリートの上にでも両膝をついてしまつたのだらう。短いスカートの下で、そこから血が出た時、両手をあげて彼女は泣いたのだらう。しかし、もう、そんな痛みは全くないのか、彼女はもの影にかくれて行つては、木の四角なしめつた小さい箱に水をくんで、また帰つて来る。私は吾妻橋の上からその姿に見入つた。隅田川はしづかにならうとしながらも、なほ、黒い水は波立つてゐる。家全体がせり出してゐるので、その土台の木の何本かは、はげしく水に洗はれてゐる。嵐はもうすぎ去つた。

やがて、盆栽に水をやつてゐるのだといふことがわかつた。私は、目を下流の方に動かしたが、外の家ではまだ窓をしめきつてゐて河にせり出した台の所には誰も出てゐない。向ふの駒形橋の黒い形が、思つたよりも近く大きく見えるが、少女の色づいたスカートとセーターの外は波ばかりであつた。左側の方に西日を浴びて波が少しきらめいて、感情的と思へるやうなゆれ方をしてゐたが、ほかは灰色にぬりこめられたやうな波の色であつた少女は今すぎ去つた嵐が、必要以上にいつぱい盆栽に水を落して行つたことを知らないのであらうか。盆栽には必要以上に水をやることが、かへつてわるいことを知らないのであらうか。知つてゐるわけがない。だから、私は、私がそれに目をとめてゐる間ずうつと、少女が、どうしてさうしてゐるのか、いろいろと想像するより外はなかつた。

その日の嵐は、二時から三時迄が一番ひどかつた。嵐が来ることは、前夜から、龍巻がやつて来るのを物見台の人間が大声で下に知らせるやうなやり方で、時のきざみに合せて私たちは知らされた。台風には目がいくつあるとか、目の中に入つた時には静かになるがやがて、思つてもみなかつたやうなひどさでこの世は洗はれるといふことも、何年間かの経験で、私たちは知つてゐた。

ガラス戸の中から、対岸の倉庫の壁と、その間に大きく流れる河のうねりを、少女は見てゐたのではないだらうか。南から、黒いすみを流すやうな雲が、大きく目をあけた少女の上を、どんどん、すつ飛んで厚みを増して行き、河の上に、はすに白い矢のやうな雨を射込むのを、どんなにびつくりした表情で見てゐたことだらう。

盆栽の上にも、白い矢は射込まれて、少女は、風が、その枝を大きい木をゆさぶるのと同じやうに力強くゆさぶるのを、胸をどきどきさせながら見てゐたにちがひない。彼女の所から対岸の木々は、丁度、彼女の目の前の盆栽と同じ大きさに見えたのだらう。少くとも、幹の太さと、緑の葉の量とは、同じ位に見えたのだらう。

盆栽は、一つ一つが、ほんたうの木のやうに仕立てられてゐて、ほんたうの木のやうに見えるものが、大へんよいとされてゐる。少女は、少女である自分に気づかないで、大人のやうに、やはり、身もだえながら嵐を見て

ゐたのではないだらうか。その美しい目で。

河の流れは十年前にはどうであつたらうか私は、あの、三月の大空襲の翌日にこの橋を渡つたことをおぼえてゐる。まだうすら寒い水の中に、ふとんが、水をすひこんでふくれあがつてゐた。そのふとんの側に、小さい荷物がついてゐた。荷物ではなくて、人間の死体であつた。しかし、私は、その事が重大であるとは思つてゐなかつた。私は橋の上を火に追はれながら、浅草の方から向ふ岸に逃げた人々の叫びが、つい十数時間前に、ここで発せられた図を、自分なりに、そのまゝ心に描き出してゐることが、せいいつぱいであつた。火をうしろにして、火に追ひかけられながら行つた人々は、プールの中で、身を水にしたしながら死んだ。橋を渡る為に、身を橋の上に置くことの出来なかつた人々は、河の中に身を投げた。それは、すべての人工の火の為にさうした。人がつくり出した火を浴びて、人間は、地獄図を再現した。私は、死骸になつてうつむいてゐる人の姿を見て、その人の生きてゐる姿を考へることは出来なかつた。あるひは、私が、もし、現在のやうに太つて、丈夫であつたなら、私は、その死体を足で、裏返すやうなことをしたかもしれない。

哀れに死体となつた者は、哀れではあるが尊敬する気持を持てるものではなかつた。

ぼろを身にまとひ——火の粉を浴びては如何なる衣類も、ぼろになる——うつむけに橋のたもとや、建物の影に重なりあつてゐる姿は、何といつても、ひどい目にあつた者の姿である。その者がどうであるとしても、死人だといふことは、何といふひどい目をみたことになるのだらう。私は、もし、その時、私自身が、そのからだに手をかけ、ふりむかせてべつとりと肉のはがれた顔を見たら、たとへ肉親であつても、目をそむけたにちがひない。人間が、ぼろのやうになつてころがつてゐた。生き残つた人間は、死んだ同胞を、ぼろのやうに扱つた。私は、私がさうであつたからといふだけではなくて、うまく生き残つた人間が数時間後に、死人たちをそのやうに扱ひ、話してゐたのを知つてゐる。

私は十年前と同じやうに、現在もなほ、死人になつては駄目だなと思つてゐる。そして現在もあの頃の見知らない人々と同じやうな運命がいつも、おそひかからうとしてゐるのを知つてゐる。刻々に嵐は予報をしてくれるのだが、果して、別の、私が今言つてゐる嵐は、誰が予報をしてくれるのであらうか。

「ほんたうに信じてくれるのなら話すわ。四畳半の、窓のない室があるのよ。昼間は、ふすまを細目にあけておくのよ。そこに、待つてゐる人が、私の母さん。私が、夜に、かうやつて、美しい室にねてから、帰つて、待

引率外出

岩崎昭彌

昭南島(シンガポール)で十日目のけふ
予期せぬ映画をみせられた
　結婚の生態！
とゝには戦前の都会があつて
何度も溜息をのみこんだ
喫茶店から
風をきつて異国の二人が出ていつた
——いま
京極で映画をみての帰り
俺は彼女にカルピスをすゝめ
恋愛と結婚と戦争を
人には聽かれぬやうに語りあつてゐる
——インパール——

つてくれるのは、私の母さん。その母さんはどうだかつて言ふと、髪の毛は、ばさ〳〵。手の甲は、ばさ〳〵。ばゝあよ。おばけの、ばゝあよ。でも、私には、母さんだわ。近所の人は言つてるのよ。あいつは、丈夫の頃は人の男をひきずり込んだり、娘をひつぱたいたり、娘に淫売させたりしやがつたから、五十になつて、下の方がきかなくなるといつしよに、腰のバネまではづれやがつて、いゝきびだつて。腰のバネがはづれやがつて、わからないでしよ。ほゝ。あら、笑つて、ごめんなさいね。笑はなくつちや、話せやしないわあら、をかしいわ。私は、涙なんか流さない女なのによ。あなたが、信じてくれなきや、話せないわ。月にいくらつていふ室代を払つてゐる親と娘に、何を悪たいつくんでせうね私だつて、そりや、帰らない日があるけど、母さん、そんなこととしたら、大へんよ。ヒステリーで、叫び出して。私の髪をひつぱつておこるのよ。でも、飛び出せばいゝけど、させくわ。女なんて、地獄の娘は地獄だわ。私の母さんの腰のきかないのは、こゝ三年位なの。犬みたいに、四畳半の室の中を、はひずり廻つて、くん〳〵、私のスカートのにほひをかぐわ。どこかでこのあまあ、やつてきやがつたんだらう。かせぎを出しやあがれつて、わめくの。だから、早く出ておしまいよつて言つてくれる人もあるわ。お前に、決心つくのなら、おいでつて、言つてくれる人もあるわ。でもね。私は、私で、心にきめてることもあるのよ。どんなにしても、母さんには、母さんの苦労もあつたんだから、いまさら、見すてることなんか出来やしない。私つて、臭ひの強い方でしよ。だから、それで、お客もつくのよ。昼間だつて、六区歩いてりやあ、けつかう、つくものよ。ほゝ、あなただつて、どこがよくつて。そりや、お時なんかに逢つたら、あんたなんか、べい〳〵よ。ただで帰してくれやしないわ。あんた、お時の秘密知つてる。知らないでしよ。やけどよあんなのを、かくしておくなんて、大したもんよ。でもね、一時は、金持ちだつたのよ。死人のからだから、とりあげたもん。どこかにかくしといたのね。それが、ばしたになつたとたんに、とられちまつたんの。ね、暗い室の中で、私だつて、いつ、ぱく〳〵するかわかりやしない。いやよ、スカートをはく時位、もう、やめてよ。」

いつか女のこんな獨白を聞いたこともあつた。それからもまた、五、六年たつたわけだ

（未完）

月に招かれた男（七）

芳野　清

――海については殆ど知ることがなかつた。幼年の時、父の背から見た海は風が強くて埃で眼が開けられなかつた。卒業の時、水戸に旅行したが大へん草臥れた事と、貝殻を拾つた位きり思ひ出せない。海のある神戸や、長崎や、横濱に憧れたのはずつと後の事である読み方とか作文、私は大嫌ひであつた。読み方では声を出して読めばどもつてしまつた。仲間に嗤はれ、顔が赫くなつてしまつてその切なさ、算術の方がまだ面白かつた。学科はみな嫌ひで特に体操は恐怖さへした。この時間は死ぬ思ひがした。一学期だけ図画の先生が体操を受持つ事があつて、この先生はよく野原に出掛けた。牛が鳴いてゐる川原に下りて蟹をとつた。丘が公園になつたそこには猿がゐて、ひどく愛嬌者だつた。私は動物よりも獨りで芝生に転げて見たり、写生板によく納まるそんな景物を探がす方が好きだつた。この公園は後、退屈の味を知つてからH君とよく散歩した。H君もこの散歩を一番の思ひ出としてゐる。こんど私が遠い旅行に出る前の外泊の時（戦地行きを意味してゐるが、こ

の希望は容れられなかつた、作者註）貴方を日曜日にお迎へして御案内して、と思ふのですが如何ですか。水に入る事が好きではなかつたが、小川に魚を掬ひにはよく出かけた。

これもH君の手びきだつた。夏の強い陽が入道雲に隠されて、あたりが黒くなつて來たなと思ふと、大粒の雨がぽつん、ぽつんと、こんな時橋の下に身をかくし、魚の大きさを嬉び合ひ、これを池に入れて今にこの位大きくなるよ、いやこの位、あゝ私の純粋の日は…

こゝには豊かな商家の末子に見られる、などやかな、甘やかされた境遇が、幾分のはにかみと憧憬で生々と描かれてゐる。彼はさうして私達が無理に訣別しようとばかりしてゐた幼年時代のよい夢をいつまでも崩さずに持ち続け、素直なやさしい美くしさに溢れた詩をその中から幾つも引き出した。

彼の編んだ詩集「沈みゆく魚の歌」は一部は南海で果てた大塩と恐らくは運命を共にした筈だし、手元の一部は宇都宮の家が戦災で焼けると共に灰になつたであらう。一部だけは私の平凡な運命のやうに辛うじて私の手に残り、徒らに嘆きを深くしてゐるのである。沈みゆく魚と云へばこんな事もあつた。まだ学生の頃、私の邸守の部屋に上つて私を待つてゐた大垣は所在なさから、私の机に置いてあつたコンテとパステルで壁に絵を描き始め私が帰つて来た時は、一間巾の壁一杯に壁画がほゞ完成されかけてゐた。それは頭を逆さ

日々

石口敏郎

ガスに火を点ける
軽い咳をして
鍋の尻から
蒼い花弁がひろがる
ゆらゆらとゆれ
私の一日が
花弁の中心に煮えてゆく
細く
毛細管のやうに
此処まで屈いて來た
都会の透明な指よ
蛾の眉にも似たガスの炎よ
私は火を消す
鍋はその言葉を失ひ
熱した唇を閉ぢ
吹き出る呼吸に耐へてゐた

夕暮の歌

川が白い唇で喋つてゐる　過ぎ去り　また盛り上り　街を二つに切断し　帯になつて大地を締めつけてゐる　私は考へてみる　川を跨いだ巨大なボストン・バッグの把手のやうに　街と街とをしつかりと握つてゐた虹の事を　消えてゆく時　きつと持ち去られたに違ひない貧しい街々の事を　少しばかりの風が　釣針に疲れた鯉のやうな洗濯物をいぢめてゐる　不意に私は射殺される　ピストルをかざした子供達に　子供達は新しい獲物を求めて走り去る　最早亡霊になつた私をそこに置き去りにして

いつの間にか　長かつた私の影法師は消え　西の空で　今日が灼け切れ　夕焼が晝と夜とを熔接しようとしてゐた

にして身をくねらせ、戯れながら海の底へ沈んでゆく人魚が二体、パステルの薄い緑の中に描かれ、海藻の森や、珊瑚の林が人魚を取巻いて、不思議な形と色をした深海魚がその間を泳いでゐると云つた構図であつた。彼は細い目で悪戯を見つけられた子供のやうに笑つて「一寸書き始めたら止められなくなつてしまつてね」と云つた。私は寧ろ、その絵にひどく感心してしまつてゐたから、「いゝよとても素晴らしいと思ふよ、かまはないから完成してくれよ」と答へると、彼はパステルを置いてしまつて「未完成の美を君は信じないのか」と云つて、私がどうすゝめても再び描かうとはしなかつた。あの部屋はまだ残つてゐるだらうか、あの辺は戦災を免れたからまだあるだらう、しかし、あの絵は？特別物好きな芸術家でも住んでゐるのならともかく実直なサラリーマンの部屋には相応しいものではないから、きつと新らしく塗り替へられて、そのあとは平和な柱時計が下がり、映画雑誌の切り抜きか何かが貼られてでもゐるだらう。そしてその絵のイメーヂだけが大垣の脳裡に長く宿つて、あの詩集の名になつたのではなからうかと、私はあの淡青の海中で髪を乱し、沈んでゆく暗鬱な人魚の絵と共に思ひ浮べるのである。

灰皿

山根忠雄

あなたから
頂いた灰皿は
いつも身辺に置いて愛用してゐます

玲瓏たる秋晴の朝空に
突然キキキキ……とひびきわたる
百舌の高鳴きが
ひとり机上に書きものをしてゐる私に
ふとそのことを
あたらしく告知しました

あなたから
頂いた灰皿は
いつも身辺に置いて愛用してゐます

六、風景と別離

若くして逝つた詩人の立原道造は、崩壊の瞬間の為にのみ支へられてゐる美しさこそ建築物の出来上つた時の完璧さ以上の力で私をひきつける、と「建築方法論」の中で云つてゐるが、かう云つた時空を逆に回転させた見方に、若くして死すべき自分の運命を予見してゐた詩人の不吉な眼を感ずるのである。大垣國司も又若くて狂死する運命の星を負つてゐたものの悲劇の特質が、色濃く滲み出てゐた。そして不敏な私は今にしてその事に気附くのである。友人への異常なまでの親切さ、文学や嗜好への底知らぬ自己投入、それに伴ふ浪費癖、凡てが自分の心を刺すためにあると思ふ被害妄想に近い内攻性、など。

こんな事を書いてゐる傍らにも今、丸々とした顔に微笑を浮べ、茶色のコール天のズボンに煙草で真黄色になつた手をつゝこみ、もの惰さうに寄つて来ては「何を書いてゐるのだ、そんな事を書いてはこまるよ」とやさしく抗議して口を噤む彼の寂しさうな姿が目に浮ぶ。風景とか人生に対してもかう云つた内的性格の傾斜の上からしか見る事が出来なかつた彼は、その傾斜が何れは自己崩壊と云ふ深淵に続いてゐた事を知つてゐたかどうか。こゝで始めの詩人立原の言葉がそのまゝ人間崩壊と云ふことの象徴として恐ろしい力で私達に迫つてくるのである。出征前、与へられた僅かな自由を楽しまうと氷雨に濡れて彼は奈良、大和へ旅したが、その際見た如意輪観音像の美しさについてかう説明してゐる——

今にも崩れさうな形で足を組み、指を軽く頬に当て何かの中心が崩れんとするのを支へてゐる。その顔はほゝゑんでゐるかに見えるがときとしては泪した神のやうにさへ見えるではないか……。

冬を迎へる日

福地邦樹

白い陽光の中で人々は冬を迎へに門前に
佇む
このやうな日を私は記憶に持たない
人はこのひと時
堪へてゆく静謐な　庭樹の蔭の立像のやうに見える

私が知つた愛や人
そして私をかくもいざなつた幻影をそこに見る

遺言をする獣のやうに温い眼差をして…
傷つけるものは何処に潜んでゐるのであらう
この光の中には隠すものの有りやうもないものを

崩れ消えてゆくもの、喪はれたものの美しさ、大垣は絶えず現実の風景の中に、その幻影を追つてゐた。次の詩にもその色が深い。

夏草

横濱をむなしく訪ね
異人墓地に憩ふ

瓦斯燈其影を斂めて
開化の夢も又喪ふ

夕暮聽くとなしに聽く
銅鑼の響

俗風巷を蔽つて
旧情夏草に眠る

次第に増えた詩の友人の中で大垣は余り議論を好まなかつたやうである。ふと、議論が声高になると、途中で口を噤んでしまふ彼を見て私ははぐらかされたやうに感じた事があつたが、その時の彼の顔には云ひやうのない実に寂しい表情が浮んでゐて、私はどう解釈してよいか分らなくなつてしまふことがよくあつた。彼はきつとそんな時自分の心を噛んでゐたのであらう。

こんな事もあつた。昭和十六年の三月末、その頃、時折、お邪魔に上つては詩の話など伺つてゐた詩人の田中さんと一緒に、大垣、大塩、それに私で何処か早春の野山に散歩に行かうと云ふことになつたが、約束の日に隊に悪疫発生とかで営内勤務だつた大垣は行けなくなり、三人でまだダムの出来ぬ前の相州の与瀬で愉しい一日を過したことがあつた。（昭和十六年、五月「四季」に先生は「親和力」と題してこの時のことを美しい一文にして居られる）。恐らく先生は私達の植物学についての無智や、北支で死ぬ苦しみを経て来たと云ふ大塩の意外な程の足の弱さにも驚いた事と思はれる。だが、私はそんな事には一向無頓着で、無縫とも云ふべき大膽さで大菩薩峠はどこですかなどと、盲蛇に怖ぢず式の質問を平気でしてゐたのだから、相模川の河成段丘の生成は、などと興味深く観察してゐられた先生はあきれてものが云へなかつたかも知れない。しかし、桃畑は麦の緑の中でピンクの夢をむさぼつてゐたし、遊女屋の傍で山羊はのどかに草を食んでゐたし、早春の陽は柔かだつたし、私にとつても、洋画家の大塩にとつてもそれは忘れ得ぬ一日だつた。大垣はその日一日営内で何を思つてゐた事であ

らう。私はその日の事を次の詩にして彼に書き送つた。大塩も又一句ものして宮内にとぢこもつてゐた彼を慰めた筈である。

桃の里

つゝましやかな雲の白
梅の花散る里を過ぎ
桃の花咲く村に入る
かゝる真昼の丘の上に
言なく君と佇まば
茫々として霞立ち
こゝかしこ鶯啼くや
桃の里
ふと　君の影ゆらめくを
妖しみて眼をやれば
陽炎のなす惑はしぞ
かくて君微笑まば
皓き歯に春の光ぞ散りかゝる

大垣はそれに長い間返事をよこさなかつたがやがて来た葉書には春の日を浴びて散歩など幸福過ぎると、一寸恨みがましい事が書かれてあり、私は何かひどく彼の心を傷つけてしまつたやうに感じた。私はその長い無言の日々の中に彼の心の傷手を思はずにゐられなかつた。しかし、彼はその傷を真珠貝が真珠をつくるやうに、いつか美しい詩に昇華して、或る日の私の机の上に一片の花のやうに置かれてあるのを見た時の私の驚き。私は始めて詩人と云ふものゝ愁しみの本質に触れたやうで自づと涙に誘はれてしまつた。

母に

小さい私に愛することを教へてくれたはじめてのひと、その優しい歌で夜毎の恐い夢から私を護つてくれたひと、お母さん！随分永いこと私は忘れて居りました、誰も貧しい私は享けいれはしないと、私を見捨て或ひは別離し去つた人達の外側で待つてゐてくれたのは貴女でした、でも…私はこんなに大きくなつた。私の悲しみは青く膨らんで風の中にふるへてゐる。お母さん、こんどは私がうたつてあげる番ですね。

名をよべば
悲しく淀んで
歌となり
二度よべば
心いよいよ
切なければ
三度は呼ばず
わが母のみ名

（未完）

夜のうた

カアル・クロロフ

おまえの口もとを流れてゆくのは
無常の歎きではない
星の前に言いわけするのならば
星の下で敢てするがよい

かぐわしい四阿の中で　慰めの
夜を告げる声
暗闇に身を委ねて　信じよ
いっそう感じやすくなると
音もなく流れゆく水

牡丹

田中克己

「牡丹に唐獅子、竹に虎」といふ唄があつて、中国風物の中で、もつとも中国的な花といへば、誰しも牡丹をあげると思ふ。この牡丹が唐詩ではもちろんそれ以前の詩にも、ふんだんに現はれると考へる人があつても、ふしぎではない。しかしこれが盛んにうたはれるやうになつたのは、白楽天以後だといふことを私自身このごろになつて、やつと気がついてびつくりしてゐる。実は私の文章に「楊貴妃傳」といふのがあり（元々社「楊貴妃とクレオパトラ」所載）、玄宗と楊貴妃が「興慶池東の沈香亭前に移し植ゑられた紅紫浅紅通白の牡丹が満開となつたのを」観たとき、李白が召されて作つたのが、かの有名な「雲には衣裳を想ひ花には容を想ふ」といふ句ではじまる「清平調詞」三章だとしるしたが、これは実は宋の楽史の小説「楊太真外傳」の訳であつて、この詩にはもとより、李白の詩には牡丹と明記した箇所は一つもない。

しからば「開元天寶花木記」にいふやうに（この書のことは詳しくは知らない。上海、開華書局版「宋人小説選」の註の孫引きである）、このころはじめて、宮中でこれまで木芍薬と呼ばれた花を牡丹と称するやうになつたのか、といふと、これもさうでないことは石田幹之助教授が「長安の春」（創元社、昭和一六）でくはしく論じてをられる。教授によれば、牡丹といふ名はすでに北斉の楊子華の詩にも見え、謝霊運の詩にも見えるといふのである（同書二二頁）。

しかしこの花が詩に現はれることは、その後たえ、白楽天と同時代の劉禹錫をして「世に謂ふ牡丹花は近代始めて有り、蓋し前朝の文士の集中に牡丹の歌詩無き以なり」といはしめてゐる。貧乏詩人杜甫はもとより、宮中に限らず豪華な趣を好んだ李白の作中にもこの花の名が見えないから、これはやむを得ない誤りといはねばなるまい。ただし私の調査によると李白、杜甫と同時代の詩人なる岑参の作に、牡丹が二ヶ所見えてゐて、一ヶ所は「左僕射相国冀公東斎幽居同黎拾遺所獻」といふ詩の「金印糴牡丹」といふ箇処、もう一ヶ所は「優鉢羅花歌」の序に、この異国の花が中国にないばかりに、牡丹をして価重からしめ、芙蓉をして誉高からしめてゐる、といつてゐる箇処である。牡丹の称がたしかに天宝の頃にあり、芙蓉とともに中国で最も重んじられたことをも示してゐる。従つて玄宗、楊貴妃がこの花を賞し、その有様を李白が歌ひながら、平仄もしくは字数の関係で「清平調詞」にはその名を詩に表さなかつたといふこともいへるわけである。

冷やかに黝んだ潮がさしてくる
まなざしを内にむけ
血液の中のざわめきを聞け
霧は木のなかでわきたつている
影の中から　さらに力をひきだせ
空中の動揺をかぎつけよ
天体の如く動け
額の幽愁をぬぐつて
今こそ星のように軽やかになれ
おまえの夢は頭の中を際限なく
荒れ狂い、地上のものはひそまりゆく

（たかはし・しげおみ訳）

ただこの花が中国の原産であることは、西洋人もみとめ、中井猛之進博士「東亜植物」（岩波書店、昭和一〇）によれば陝西省及び甘粛省に野生があるさうである（七五頁）。それがなぜ盛唐に至つて、にはかに宮中をはじめ都でもてはやされるやうになつたのかが疑問であるが、中井博士によれば、野生はみな紫色單瓣ださうである。これが突然変異でいろさまざまの花を咲かすやうになつたのでもてはやされたのだらうと、出たらめの想像をしるしておく。

なほ村田懋麿氏「土名対照満鮮植物字彙」は「隋唐の高句麗征伐の際、これを渤海より傳へたるものの如く……」といつて牡丹嶺、牡丹江など満洲の山川の名とも結びつけたがつてをられるが（同書二二七―八頁）、恩師池内宏博士より教はつたごとく、牡丹江の名は

隋唐の昔にはなく、怨汗水と呼ばれてゐたのであるから、これは明らかにまちがひである

白楽天に「白牡丹」「牡丹芳」「牡丹叢」「惜牡丹」などさまざまにうたはれ、その友元微之や許渾の詩にも歌はれた様は、前掲石田教授の著や、鈴木虎雄博士「白楽天詩解」（弘文堂）の「買花」の註（三二四頁）などにゆづつておく。

（唐詩の草木(2)）

「悲歌」読後感

一

そのかみの　へらす　をここにつたへたる
えれごす　ぶりのあやにかなしき
さちゅろす　も　ぱあん　も　そつとしのび
より　きみがくだぶえに　ききいるところ
あふろでいて　の　あれたるうみのかひがら
に　こもるかなしみ　きくおもひする

壽岳　文章

二

「悲歌」さつそく拝誦いたして居ります
そしてしきりと杜工部集を想ひ出して居ります　杜詩から慷慨の調を濯ひ去つてしまつたならきつとこの「悲歌」になるにちがひありません　そんなことを考へながら今日も秋雨の叩く窓辺で御作を拝誦して居るところです

浅野　晃

三

忘れた様に遠くなつてゐた終戦前後の生活があの頃とは異つた光彩に包まれて目の前を通つてゆくやうで、私には私なりの程度と範囲とで解し得ますこと、暗さや苦しさとは遠い気持であの頃が回想されます。そしてこんな言ひ方をするのは間違つてゐるかも判りませんけど、愉しく本当に愉しく拝読させていただきました。私には戦争以外に回想すべき青春は知らないのですから、今こんな和んだ悲しさに触れさせて頂きますと、愉しい青春の日の思ひ出に変貌して胸に返つて来る様に思はれます。

服部　三樹子

四

紙質、印刷、製本などすべて良好で私だつたら或る程度満足したと思ひます。もう初めから終りまで一通り読みましたが、楽しく、教へられるところの多い詩集で、これから何日もかゝつて何べんも読み返したいと思つてゐます。

森　亮

編輯後記

十一月十八日大阪中之島の中央公会堂食堂で、田中氏の「悲歌」出版記念会を開催した。今東光先生以下四十名の同好の士が集つて頗る盛会であつた。各氏の意見を要約すると、前號後記で書いたやうに、改めて戦後日本の悲痛さを思ひ知らされ、覚悟を新たにしたとのことであつた。戦後文学の空白を埋めるに足る真の意味の戦後文学として広く同好の士におすすめ願ひたい。東京から芳野氏、岐阜から岩崎氏も走せ参じて、同人の懇親の意味でも有意義であつた。さう言へば十月二十七日には島根大学の森氏が学会のついでに大阪に立寄つてくれて在阪同人が集つて懇談した。

（O）

十一月十三日同人池澤茂氏に長女出生、順子さんと命名した由、編輯會議に來會しての報告である。実は小生このごろ子供、子猫その他小さいものみなが可愛くてたらない老年の一徴候と思ふが、小さいものが可愛いにつけ、いまの平和がうれしくてたまらない。エジプト、ハンガリーの戦乱をきくにつけ、同情とともに、この国土の平和をしみじみと思ふ。ただし平和運動のために叩かれ蹴られるにはこれまた老い過ぎてゐる。小さい者とともに老いたる者に幸あれ。「果樹園」も小さい雑誌である。国家権力とは関係がない。一般の愛顧を乞ひねがふ。

（T）

果樹園　第十一号　（毎月一回一日発行）
昭和三十一年十二月一日発行
編輯兼発行人　布施市西堤町六〇七　田中克己
印刷所　大阪市東住吉区桑津町五丁目八　元市印刷株式会社
発行所　布施市西堤町六〇七田中克己方　果樹園発行所
定価　三十円